HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

①

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

1

葉鍵ロワイアルに関わった全ての人に捧ぐ

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一（あいざわ・ゆういち）
二　　番　藍原　瑞穂（あいはら・みずほ）
三　　番　天沢　郁未（あまさわ・いくみ）
四　　番　天沢　未夜子（あまさわ・みよこ）
五　　番　天野　美汐（あまの・みしお）
六　　番　石原　麗子（いしはら・れいこ）
七　　番　猪名川　由宇（いながわ・ゆう）
八　　番　岩切　花枝（いわきり・はなえ）
九　　番　江藤　結花（えとう・ゆか）
十　　番　太田　香奈子（おおた・かなこ）
十一番　大庭　詠美（おおば・えいみ）
十二番　緒方　英二（おがた・えいじ）
十三番　緒方　理奈（おがた・りな）
十四番　折原　浩平（おりはら・こうへい）
十五番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）
十六番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）
十七番　柏木　梓（かしわぎ・あずさ）
十八番　柏木　楓（かしわぎ・かえで）
十九番　柏木　耕一（かしわぎ・こういち）
二十番　柏木　千鶴（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴（かみお・みすず）
二十五番　神岸　あかり（かみぎし・あかり）
二十六番　河島　はるか（かわしま・はるか）
二十七番　川澄　舞（かわすみ・まい）
二十八番　川名　みさき（かわな・みさき）
二十九番　北川　潤（きたがわ・じゅん）
三十番　砧　夕霧（きぬた・ゆうき）
三十一番　霧島　佳乃（きりしま・かの）
三十二番　霧島　聖（きりしま・ひじり）
三十三番　国崎　往人（くにさき・ゆきと）
三十四番　九品仏　大志（くほんぶつ・たいし）
三十五番　倉田　佐祐理（くらた・さゆり）
三十六番　来栖川　綾香（くるすがわ・あやか）
三十七番　来栖川　芹香（くるすがわ・せりか）
三十八番　桑嶋　高子（くわしま・たかこ）
三十九番　上月　澪（こうづき・みお）
四十番　坂神　蝉丸（さかがみ・せみまる）
四十一番　桜井　あさひ（さくらい・あさひ）
四十二番　佐藤　雅史（さとう・まさし）
四十三番　里村　茜（さとむら・あかね）
四十四番　澤倉　美咲（さわくら・みさき）
四十五番　沢渡　真琴（さわたり・まこと）
四十六番　椎名　繭（しいな・まゆ）
四十七番　篠塚　弥生（しのづか・やよい）
四十八番　少年（しょうねん）
四十九番　新城　沙織（しんじょう・さおり）
五十番　スフィー（すふぃー）
五十一番　住井　護（すみい・まもる）
五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ（せりお）
五十三番　千堂　和樹（せんどう・かずき）
五十四番　高倉　みどり（たかくら・みどり）
五十五番　高瀬　瑞希（たかせ・みずき）
五十六番　立川　郁美（たちかわ・いくみ）
五十七番　橘　敬介（たちばな・けいすけ）
五十八番　塚本　千紗（つかもと・ちさ）
五十九番　月島　拓也（つきしま・たくや）
六十番　月島　瑠璃子（つきしま・るりこ）
六十一番　月宮　あゆ（つきみや・あゆ）
六十二番　遠野　美凪（とおの・みなぎ）
六十三番　長岡　志保（ながおか・しほ）
六十四番　長瀬　祐介（ながせ・ゆうすけ）
六十五番　長森　瑞佳（ながもり・みずか）
六十六番　名倉　由依（なくら・ゆい）
六十七番　名倉　友里（なくら・ゆり）
六十八番　七瀬　彰（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美（ななせ・るみ）
七十番　芳賀　玲子（はが・れいこ）
七十一番　長谷部　彩（はせべ・あや）
七十二番　氷上　シュン（ひかみ・しゅん）
七十三番　雛山　理緒（ひなやま・りお）
七十四番　姫川　琴音（ひめかわ・ことね）
七十五番　広瀬　真希（ひろせ・まき）
七十六番　藤井　冬弥（ふじい・とうや）
七十七番　藤田　浩之（ふじた・ひろゆき）
七十八番　保科　智子（ほしな・ともこ）
七十九番　牧部　なつみ（まきべ・なつみ）
八十番　牧村　南（まきむら・みなみ）
八十一番　松原　葵（まつばら・あおい）
八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ（まるち）
八十三番　三井寺　月代（みいでら・つくよ）
八十四番　御影　すばる（みかげ・すばる）
八十五番　美坂　香里（みさか・かおり）
八十六番　美坂　栞（みさか・しおり）
八十七番　みちる（みちる）
八十八番　観月　マナ（みづき・まな）
八十九番　御堂（みどう）
九十番　水瀬　秋子（みなせ・あきこ）
九十一番　水瀬　名雪（みなせ・なゆき）
九十二番　巳間　晴香（みま・はるか）
九十三番　巳間　良祐（みま・りょうすけ）
九十四番　宮内　レミィ（みやうち・れみぃ）
九十五番　宮田　健太郎（みやた・けんたろう）
九十六番　深山　雪見（みやま・ゆきみ）
九十七番　森川　由綺（もりかわ・ゆき）
九十八番　柳川　祐也（やながわ・ゆうや）
九十九番　柚木　詩子（ゆずき・しいこ）
百　　番　リアン（りあん）

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：秋★枝

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵板 (Leaf&Key) において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するにあたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせていただきました。

000　ゲームスタート

絶海の孤島に建てられた巨大なホール。ここから、史上最悪のサバイバル・ゲームの幕が今、開かれようとしていた。

「ええ、これからお前達には、殺し合いをしてもらう」

マシンガンを持った男二人を横に連れ、ゲームの管理人、高槻は言った。突然発せられたその言葉を殆どの人間が理解できなかった。ただ一人だけ、瞬時に理解し、叫んだ者がいた。御影すばる（八十四番）。

「ちょっと、どういうことですの⁉　ころし……」

パンッ！

軽い音が響く。言葉を続けることなく、すばるはその場に崩れ落ちた。誰よりも理解が早かった結果、誰よりも早くゲームから脱落した。

「どういうことって、こういうことだよ！　わかったかい？」

ホール内を緊張が走り抜けた。

「ルールは簡単。ただこの孤島の中で殺し合いをするだけだ。最後に残った人間だけが、唯一助かることができる。脱出しようなんて考えないほうがいいぞ？　船は用意されてないから無駄だ。これから読み上げた順に、鞄を持ってホールを出てもらう。鞄の中には食料、水、島の地図、それに武器が入ってる。武器には当たり外れがあるから、使えないのに当たったら運の悪さを恨むんだな。我々に刃向かったら即刻殺すので、そのつもりで。戦闘のプロばかりだから、勝とうなんて思わない方がいいぞ。何か質問は？」

静かに手を上げる者がいた。水瀬秋子（九十番）である。

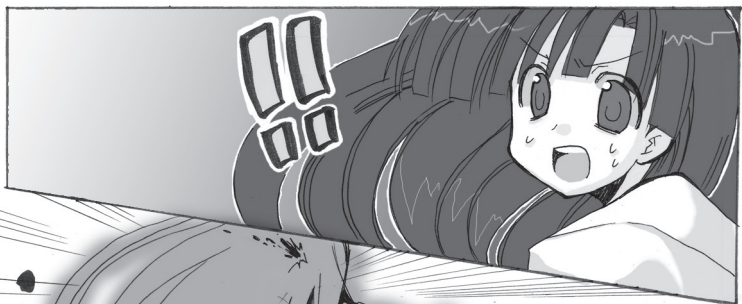
「よろしいですか？」

「なんだい、かわいらしいお嬢さん。いや、奥さん

だったか……クックッ……」
「お母さん！」
水瀬名雪（九十一番）が隣で声を上げる。
秋子は「大丈夫」と目で言い、高槻に訊ねた。
「何の為にこんなことをするんでしょう？　どうして私達が選ばれたのでしょうか？」
「何の為？　金持ちの道楽さ。深い意味はない。選ばれたのも、コンピューターが勝手にはじき出しただけだ」
「そうですか、ありがとうございます」
まだ緊張した面持ちで、席に座る。
「それじゃあ、ゲームスタートだ。せいぜい楽しませてくれよ！」

八十四番　御影すばる　死亡
【残り99人】

001　開戦前夜

ゲーム開始前日の深夜、高槻スタートポイントの藤井冬弥はだれもいない食堂で物思いに耽っていた。
少し前まで同じ場所にいた人が死んだのだ。
現実を直視して生き残るために、戦うしかないのか……。
由綺や美咲さんにまた逢えるのだろうかと、そこへ英二さんが入ってきた。
「ん、冬弥くんか。向かい側、いいか？」
冬弥は、断る理由も無いので快く頷いた。
「大変な事になりましたね」
「大変も無いだろう。そんな暇があったら現実を直視してどうするかを考えた方がよっぽどためになるだろう」
食堂の外から、
「はっはっはっ、この島の露としてあげるわ、温泉

パンダ～」
　と威勢のいい声がする、
「……何なんですか、あれ？　という冬弥の問いに、
あまり間を置かずに英二は、
「向こうは仲の悪い者同士を同じスタート位置に配置しているんだろう。理奈、弥生姉さんと由綺ちゃん、冬弥くんの友達も他の四箇所から、ばらばらにスタートだろうな」
　英二の考えに納得しながら冬弥は、
「英二さん、スタートしたら、由綺を探すんですか？」
　長い沈黙の後、
「ん～まずそうするだろうね。冬弥くんも、そうするつもりだろうが、俺を信用してくれてないなら一緒に行くつもりはないよ。でも、ここを出るまでに声を掛けてくれれば、いつでも一緒に行く気はあるけど」
「……考えさせてください」
　冬弥はそう言って食堂を後にした。

002　冷たい雨の少女（1）

三十九番、上月澪は森の中を走っていた。
わけがわからなかった。
ついこの前までは、通いなれたあの学校で、仲の良い友達に囲まれていた。
笑って、怒って、悲しんで、
そんな平凡な暮らしを送っていたはずなのに。
どうして自分はこんなところで、こんなことに巻き込まれているんだろう。
木の根に足をとられ、転ぶ。
だがすぐに起き上がり、走り出す。
誰かに狙われているかもしれない。足を止めるわけにはいかなかった。
『こわいの。嫌なの……』
瞳に大粒の涙を浮かべながら、走る。

足が遅いのは知っていながら、走る。

「澪」

誰かに呼ばれ、振り返る。

視線の先、そこには見慣れた三つ編みの少女。四十三番、里村茜だった。

『先輩なの！』

彼女は澪にとって、知らない人間ばかりのこの場所では折原浩平と並んで信頼のおける人だった。

冷たい態度に隠された、心の優しい少女。

気付いた時には、茜の胸に飛びこんでいた。

「……怖かった？」

うんっ。

首を縦に振る。

「そう。もう大丈夫……」

先輩の声が聞こえる。

よかった、こんなに早く会えてよかった。

信頼できる人に。

その時だった。

首筋に痛みが走る。

全身から力が抜け、地面に倒れた。

何が起きたのかわからない。

澪が最後に見たものは、

血の滴るナイフを持った茜の姿。

――え？――

「これで、何も考えずにすみます」

その声が澪の耳に届くことは、なかった。

三十九番　上月澪　死亡

【残り98人】

003　冷たい雨の少女（2）

殺した。
可愛い後輩を、あっさりと。
罪悪感は感じなかった。
私は、絶対に帰らないといけないから。
あの空き地で、彼をずっと待ち続けなければいけないから。
私がいなかったら、彼は帰って来ることができなくなるだろうから。
私は彼を奪われた。
この世界から奪われた。
だから、もう……私も、
「私も、奪う側に回ってもいいですよね？」
呟いた。

澪の背負っていた、今や血にまみれている鞄に手をのばした。
武器を探す。だが見つかったのは、多少太い木の棒だけだった。
（外れ……）
はぁ、と溜息をつき木の棒を投げ捨てる。
そして、次の獲物を探しに、走り出した。

自分はこんなに早く走れただろうか。
こんなに体力があるのだろうか。
人間、極限状態まで陥れば、普段は眠っているような力が発揮できるとか。
そんなことはどうでもいい、絶対に、私は生き残る。
澪も殺した、もう迷わない。
ただ……
「私は……詩子まで殺せるの？」
その問いに答える者は、誰もいなかった。

004　閉ざされた教室

隣にあるのは、あかいカタマリ。
見も知らぬ少女。
頭の半分を吹き飛ばされ、きれいだったろう顔がただの歪んだ物体になっている。
「――ッ」
吐き気がした。
目をどんなにそらしても、あのうつろな片眼だけは私を追いかけてくる。
これは夢じゃない。
これは、ゆめじゃない。

「四十九番、新城沙織。行け」
また、知らない子が教室を出ていく。
扉を開ける間際、その怯えた視線がちらりと少年に向けられるのが見えた。

……知り合い、なんだろうか。
だけど、彼と彼女が生きて会える保証なんか何処にもない。
この他人ばかりの群の中で、「次」の機会が来ると無邪気に信じられるはずがない。
ぎらついた眼をした年かさの男。涙をこらえていた緑の髪の小柄な少女。
何度もしゃくりあげ、追い立てられるように教室を飛び出した眼鏡の子。
スタート直後、毅然とした眼で教壇の男を睨んで出ていった、大人びて風変わりなひと。
――誰も彼もが、今日にもあたしを殺すかもしれない。

振り返った先には、秋子さんにしがみついて泣いている名雪の姿があった。
あの娘とイチゴサンデーを食べることは、もうできないんだろうか。

名雪。名雪もあたしを、殺せるんだろうか。
「お姉ちゃん……」

か細い声にはっとさせられて、私は隣に座っていた栞を見た。
「置いて、いかないで」
喉から押し出すように発された言葉。滲み出る恐怖と闘っているのがわかる、必死さの含有された、
「ひとりは、いや…」
今にも泣き出しそうな、頼りない声。

……ああ、そうだ。あたしのできることは。あたしにしかできないことは。

無言でふるえる栞の手を握りしめ、あたしはなんとか笑おうとした。
「大丈夫、よ」
姉妹でよかった、ほんとうに。
苗字が共通ならば、出発するのもほとんど同じ時間だ。
そして栞の姉であれるのは、この島であたし一人きりなんだから。
名雪、北川くん、相沢くん、ごめん。
もう家族を見捨てる後悔は――したくない、から。
それならあたしは、誰よりも先にまず、生まれたときから一緒にいた大切な妹を守りたいと思う。
だからこのちいさな手の体温だけは決して忘れまいと、あたしは密かに誓った。
この、希望の閉ざされた教室の中で。

005　封印

ゲームがスタートして数時間ほど経過した頃、柳川祐也（九十八番）は森の奥に人影を見た。
（誰だ……）

自らの気配を殺して近づく、向こうはこちらにまだ気づいてはいないようだった。だが近づくにつれ柳川は奇妙な違和感を感じていた。
(気配がしない……？)
対象まで数メートルに近づいたところで柳川はようやくその違和感の正体に気づいた。その人物の耳についている奇妙な突起。
(メイドロボ――あの耳の形状はＨＭ―13型セリオか、道理で気配がしないわけだ。だが、いったい何をしているんだ？)
柳川がそう思うのも当然だった。彼が発見したときから彼女は天を仰ぎずっとその場に立っていた。
微動だにしないのはロボットだから当然ともいえたが休んでいるようにも見えない。
その時、不意にセリオの頭が動いた。どうやら活動を再開したらしい。
「やはりサテライトサービスは利用出来ないようですね」
セリオはそんなことをつぶやくと、柳川の方に歩いてくる。
(気づかれた？　いや、まさかな)
そう考える。だが柳川はいつ襲い掛かられても良い様に臨戦体制を整える。セリオは正確にこちらのほうに向かってくる。
彼女の唇が動いた。
「なぜでしょう？　なぜサテライトサービスが利用できないのでしょう？　柳川さん」
(何⁉)
名前を呼ばれ、柳川は一瞬だけ反応が遅れた。その一瞬でセリオは柳川の目の前まで接近する。

衝撃。

腹部に受けた一撃で彼は吹き飛んだ。そして立ちあがった時、彼の目には殺意が宿っていた。
「……もういい、キサマは死ね」

そうつぶやき、柳川は全身に意識を集中させた。自らの血に、遺伝子に組み込まれた力を開放しようとする。だが――
(力が発動しない？)
目の前に迫ったセリオの振り下ろす手刀をとっさに左手でガードする。
(いや、力が発動しないいんじゃない、何かの理由で力が制限されている)
今の自分はせいぜい一般人に毛が生えたレベルだと判断した柳川は空いた右手で腰のナイフを引き抜き、横に凪いだ。セリオはそれをバッグジャンプで回避し、安全圏まで後退する。
だがそれに合わせて柳川も跳躍していた。次々に繰り出されるナイフ、セリオはその攻撃の一つ一つを冷静に、そして確実にかわしていく。
しかし、柳川の攻撃は止まらない。激しい攻防の末、ついに柳川の突きがセリオの眉間を捕らえた。
「！」
眉間まであと数センチのところで柳川のナイフは静止している。彼の右手首はセリオの両手が完全に固定していた。
(どうやら私の力の方が優勢のようですね)
そう考え、セリオは徐々に眉間からナイフを離して行く。
だが次の瞬間、柳川の指が何かのスイッチのようなものに触れた。そして――
「……どうやら鬼の力には何かの制限がかけられているようだな」
そう呟きながら柳川はセリオの頭に刺さったナイフの刃を引き抜いた。
彼に支給された武器、それは旧ソ連軍の使用していた発射式ナイフ「スペッツナズ・ナイフ」だった。
セリオのバッグを拾い、柳川は立ち去る。そしてそこには機械の塊だけが残された。

五十二番　セリオ　死亡
【残り97人】

006　親子

　神尾晴子（二十三番）は、急いでいた。森の中の道なき道を、木の根につまずきながら、葉を顔に受けながら、ただひたすら地図に『Ⅳ』と示されている場所を目指して。
「頼む、無事に、無事にしててや……」
　参加者達はホールでゲームの説明を受けた後、五つのグループに分けられ、それぞれ移動させられた。そのとき、晴子は自分の娘、神尾観鈴（二十四番）と離ればなれになってしまったのである。側面に『Ⅲ』と書かれたトラックに乗せられ、着いた先は小さな小屋だった。壁にも大きく『Ⅲ』の文字。彼女らは一度その小屋に移され、順に荷物を渡されて出発させられたのである。

　晴子は、出発するなり、手近な物陰に隠れて支給された地図を広げた。円で囲まれた『Ⅰ』『Ⅱ』『Ⅲ』『Ⅳ』『Ⅴ』という印が、赤色で目立つように描かれていた。これがそれぞれのスタートポイントなのだろう。『Ⅲ』の印は、島の南東側にあった。
　トラックに乗せられるときに確認した、観鈴の乗せられたトラックの番号。
「『Ⅳ』……」
　晴子は、そこへ向けて一目散に駆けだした。晴子のグループ『Ⅲ』には、彼女の家の居候の国崎往人（三十三番）もいたが、それを待つことはしなかった。
　番号が近いから、ほぼ同時に出発しているはず。居場所のある程度わかる時期に動かないとわからなくなると考えたからだ。
　観鈴は仲間を作ることが出来ない。それが何よりも心配だった。自分が付いていてやらねばならない。『Ⅳ』は島の南西側にあり、比較的『Ⅲ』に近かっ

たが、それでもかなりの距離があるように感じられたのは、島が思いの外大きいのか、それとも焦りのためか。
もうたっぷり十分は走っただろうか。そのとき、
「あっ！」
そのとき、木の陰に見えた人影、それはまさしく彼女の娘、観鈴であった。大急ぎで駆け寄る。
「よかった……もう会えへんかと思ったわ。一緒に……」
「来ないで！」
「え？」
意外な返事に驚く晴子。
「何言ってるんや。一人より二人の方が絶対安全やし……」
「いや、ダメ、ダメ！　お母さんと一緒にいたら、わたし、泣き出しちゃう。目立っちゃうよ！　わたしは誰とも一緒にいちゃいけないの。だからダメ！」
「そんな……そんなんうちはかまわへん！　せっかく会えたんや！　一緒に行こうや！」
「ダメえっ！」
「うわっ！」
晴子が足下に投げられたナイフにひるんでいる間に、観鈴は一目散に駆けだし、見えなくなってしまった。
「ちょ、観鈴、観鈴ー！」

007　別地点での始まり

自分にも聞こえないほど小さく呟いてみる。なんともおかしな状況だ。
折原浩平（十四番）は、頭をぽりぽり掻きながら薄暗い森の中で一人ぽけっとしていた。配られたデイバックの中身も確かめないまま、自分が置かれた状況に首を傾げるばかり。溜息を吐いてみたが、果たしてその溜息が、時期の割には白いという程度し

か判らぬくらい働かない頭。こんなにも動揺したのは、あの時——自分が消えていく事を悟った瞬間のあれ以来であろうか。いや、あの時よりひどいだろう。今度は自分が消えるだけではない。

——煙草、あったっけ、と小さく呟いて持ってきた鞄の中を探ると、幸運にも数本入っている潰れた煙草箱を見つけた。早速しゃぶりつこうと思ったのだが、浩平は少しばかり躊躇する。

——仮に運良く生き残っていったとしたら、まあ、戦いはなかなか終わらんだろう。と思う。その上で、果たしてこんなところで無駄に貴重な煙草を吸うのが懸命な考え方であると言えるか。

生き残る、という言葉を反芻してみて、少しぞっとした。

そういう状況に放り込まれたんだなあ、と、暢気に呟いてみる。呟いても何も変わらない、夜は夜のままだし闇は闇のままだ。

「つーか、長森がうるさいしな、煙草吸うと……」

そうだ、仮にも長森を待ってるわけだから、煙草を吸ってるのはまずいだろう。

浩平は、十年来の友人である長森瑞佳（六十五番）を待っていた。出入り口が見渡せ、且つ森の中で上手く死角に入っている、割と安全な場所で。最初集められたホールからだいぶ離れた場所に、自分たち十数人は移された。その中には長森と七瀬の姿もあったので多少なりは安心したが、後は知らぬ人ばかり。その中で一番最初に名前を呼ばれた「お」の折原浩平は、こうして一人草の上に座っているのである。ちょうど今、小柄な少女——変な羽根のついた鞄を背負った娘が、とことこと駆けていくのが見えた。確か月宮なんとかという娘の筈だ。記憶していたのはたまたまであるが、珍しい名前だからだろう。

うむ。「つ」だから、もうすぐだろう。七瀬も同じ「な」だから近い。

——そう。自分は、長森と、七瀬と、二人のクラ

スメイトを待っている。取り敢えず、三人で行動をする為に。

　茜やみさき先輩、澪や繭などの知り合いみんなで集まって、団体で行動した場合、少数で行動した時にはないメリットは確かに多くあるものの、代わりに与えられる仲間割れなどのデメリットが非常に大きい。自分は皆を信頼しているが、皆が他の女の子を信頼しきれるとは限らない。こんな状況の中で無闇に集まったなら、彼女たちがふとしたことで混乱し、皆で殺し合いに至る、という——そんな可能性だって考えられなくはないのだ。

　しかし、そんな考えは吐き気がした。なんてくそったれな考えだ。浩平の魂がそんなくだらない言葉を否定する。

　そんなの自分のやり方次第でなんとか出来る。自分が上手く彼女達をまとめあげ、護る事が出来るなら、それ以上にいい判断なんてなかった。無理をしてでも、大切な友達と皆で、行動するべきだ。浩平はこうして待っている今だってそう思っている。

　けれど、一番の問題は、別のところにあった。

　——彼女たちと、どうやって合流するのか、という問題だった。そう、自分達と彼女達はばらばらにされてしまったのだ。

　まったく別の場所に送られた彼女達とこの島の中で合流するためには、果たしてどれほどの運が必要とされるのだろう。

　だから、長森、七瀬と、取り敢えずは三人で行動する。それが浩平の至った結論だった。長森と七瀬はそこそこ仲が良かったから、大きな喧嘩も仲間割れもないだろうとも思う。三人で行動して、余裕が持てたら他の皆を捜そう。浩平は、そういう風に考えていた。

　七瀬に背中を預けて行動する事の安心感、それもあった。——いや、半分くらいは冗談であるが。

　長森や七瀬が足手まといになる可能性は高いが、

こんな状況じゃ自分だって似たようなもんである。
運動神経こそ浩平の方が遙かに上だが、長森の方がずっと頭が良いし、七瀬の強い決断力も頼りになる。一人で行動するよりずっと効率が良い。
——本音を言えば、瑞佳を、七瀬を、二人を護ってやらなければいけないという、そんな責任感は、確かにあっただろう。
大体、戦闘に関していえば、武器を持てばハンディなんて無くて、皆同じようなもんだと思う。
「っと」
思いついてデイバックを開けてみた。男女が同じ条件で殺し合いをするというのは、明らかに力に劣る女子にとって不利である。自分と長森が格闘して自分が負ける道理はない。だから、武器には差がある。言っていたじゃないか、あの嫌みったらしい顔をしたおっさんが。ならば、俺に割り当てられた武器は何なのだろう。それを確かめなければならない。女子供にも負けてしまうかもしれないヘボヘボな武器だとしたら、二人を護る事すらもままならない。
ごそごそと音を立てて鞄の中から出てきたものには、重量感があった。
「——拳銃」
心臓の音が少し高くなる。
アタリ武器といえるかも知れない。震える手でその黒い金属を握った。
「割と、軽いんだな」
初めて持った漆黒の鋼は、浩平の手に収まる程度の小さなものだった。そう、手のひらで回せてしまうくらい。小型拳銃を持って、手のひらの上でくるくると回してみた。アホだった。
こんな事してる内に引き金が誤って引かれちゃったら、どきゅううん。どきゅううん、ぶしゃー。
「そんな風に暴発して死んだら面白いかも知れん」
面白くない。
浩平は自覚していなかったのだが——こうやって

武器を手に取る事で、浩平を含めた多くの参加者は、確実に昂ぶっていた。
拳銃を――アタリの武器を手に取った参加者は、これで生き残れる可能性が増えた、と、少なからず思っていたのだ。生き残るというのが相手を殺す事なのだという事を、明瞭には理解しないまま。

「しかし、実際オレに拳銃なんて使えるのかしら」
浩平は銃をベルトに引っかけると、そんな事をつぶやきながら草の上に横たわった。長森はまだだろうか、とのんきに寝転がりながら浩平は独り言をつぶやく。たればんだのように転がる様はアホみたいである。煙草も勿体なくて吸えないから、独り言でも言っている他はないのである。それでも、もう少しまともな格好で待つべきであろう。
「拳銃ねえ……使いこなせなければ打楽器にもならん」
打楽器になって何の意味があるというのかね、ナンデモ折原クン。浩平は自分に突っ込みながら溜息を吐く。
「いや、というか、オレは人を殺せるのかしらねえ」
結構あっさり殺してしまえそうだが、逆に引き金なんか引ける気がしない。知り合いならともかく、面識もない奴なら、こんな状況でも殺してしまえそうではあるのだが、自分は案外臆病である。無理っぽい気がする。
「まあ、出来る限り逃げ回った方が安全だろうしなあ」
拳銃対拳銃とか、拳銃対ナイフならともかく、拳銃対マシンガンとかだったら勝てる見込みはない。それに、
「あの七瀬なら、素手でもオレの拳銃に勝つような気がする」
「んなわけあるかっ、どあほうっ!!」
「うわっ！」

目を瞑って考え事をしていた為、上から声が聞こえた瞬間驚きで心臓が止まりそうになった。聞いた事のある声で本気で良かった。もし誰か知らない人がサブマシンガンを構えていて、その手で容赦無くたればんだスタイルのまま殺されることにでもなったら、それは男として最悪の死に様の一つに数えられるだろう。

しかし、その声にはいつもの張りがなかった。

いつもよりずっと不安そうな、弱そうな、

——か弱い女の子の顔をした七瀬留美（六十九番）が。いつものように黄色の制服を纏いながら、弱々しく身体を震わせていた。

「七瀬か……びっくりさせるな、アホっ」

浩平はだらけた身体を起こし、鞄を抱えて立っている七瀬に文句を言うと、

「ご、ごめん」

本当にらしくない表情をする。いや、七瀬が本当はこういう娘である事くらいは知っているし、本当はか弱いただの女の子である、とは判ってはいるのだが、それでも、

「拳で熊だって殺せると思うんだよな、七瀬は」

「そんなわけあるかっ、どアホっ！」

また口に出してしまった。——まったく、口は災いの元である。勿論わざとやっているんであるけれど、って、

——待て。「ながもり」「ななせ」……が、な。

「長森は？」

「——あれ？　……一緒じゃないの？　あたしのすぐ前に出てったはずだけど」

「——……マジか？」

七瀬は怪訝な顔をして、——瑞佳は？　と呟く。

浩平は答えられない。重い沈黙、浩平は歯軋りしな

がら頬を歪める。
……オレはバカか――？

008　（無題）

「きゃ～～～!?　わわわ！　助けて～！」
「おとなしくしなさい、このアリ女！」
広瀬真希（七十五番）が、倒れた雛山理緒（七十三番）の上にのしかかる。
「私が死んだら良太が～！　ひよこが～！　お母さんが～！　お願い、見逃して～！」
「あきらめなさい。どうせあんたみたいなのじゃ、最後まで生き残れないわ」
真希が、逆手に構えたスタンガンを首筋に当てる。
「やだ～！　えいえい、このっ！」
「ちょ、このっ、暴れないでっ！　きゃっ！」
真希が大きくバランスを崩し、横に倒れる。その隙に理緒が転がり、不器用に立ち上がる。支給品である大口径のマグナムを取り出し、片手で顔をかばう真希に向ける。
「こ、来ないで！　来なければ殺したりしないから！　来ないで！」
がくがくと膝が震え、腰は完全に引けている。真希は鋭い目つきで理緒を睨み据え、威圧するように一歩踏み出した。
「撃ってみなさいよ。バッカみたい。あんたみたいのが撃てるわけないじゃん」
「お、お願いだから……！」
理緒が、左手で銃の腰を押さえる。
「いいわよ。こんなとこで死ぬようじゃ、アタシも最後まで生き残れない。ホラ、撃ちなさいよッ！」
「わ、私、やだっ！　イヤだ！」
理緒の目に、涙が浮かんだ。腰が完全に引けきって、逆に姿勢が安定されている。真希が、さらに一歩踏み出した。スタンガンをこれみよがしに見せつけ、バシッと火花を散らす。

「じゃあ、くたばるしかないわ。そうやって泣いてなさい」
一歩。
「な、何で……」
一歩。
「こんな事になっちゃったの……」
一歩。
「何で！　何で！　何でぇぇぇ!!」
轟音が、深い大空に鳴り響いた。
後に残ったのは、くずおれて号泣する理緒と、原型を留めないほど顔を吹き飛ばされた真希だった。

七十五番　広瀬真希　死亡
【残り96人】

009　母と娘と

森の中で、観鈴は立ち止まる。
「もう、嫌だよ。私がいると、おかあさんや往人さんに迷惑かけちゃう。私なんかといると、死んじゃうよ。もう……ゴールしてもいいよね」
自分の手元には、投げナイフがあと二つ。
だが観鈴には自ら命を断つという選択は出来なかった。
今まで生きてきた人生の中で、どんなことにも耐えきるという『強さ』がついてしまっていた。
このままどこかに行こう、おかあさんにも、往人さんにも見つからないところへ。
そう思い一歩踏み出す。
「何を思っていたんだい？」
声が響いた。
声の主は、今まさに観鈴が歩こうとしていた方からやってきた。
「誰……ですか？」
「大丈夫、危害を加えるつもりはないよ。もっとも、

信用はできないだろうけどね。で、君は今、何を考えていたんだい。よければ教えてくれるかな」
喋ってもいい気がした、この少年の雰囲気がそうさせたのだろうか。
「おかあさんが探してるの。でも、私といたら、私泣いちゃうから。目立っちゃうから、危ないの。だから、一緒にはいられないの」
「そう。だけど君のおかあさんは、それでも君と一緒にいたいんじゃないかな。こんな中で、全てを受け入れて最後まで、君と一緒にいたいんじゃないかな。君のことが好きだったら、そうしたいはずだよ」
「私もおかあさん大好き。だから、一緒にいちゃいけないの……」
泣き出したかった。
本当は一緒にいたかった。
自分の中のどこかが、頑にそれを拒んでいた。
「そう。でも、人にはそれぞれに幸せがある。自分の本当の気持ちと、おかあさんの気持ちが一緒なら、それでいいじゃないか」
少年の言葉が心に染みる。
いいのだろうか。本当にいいのだろうか。
「一度眠るといい。目が覚めたらきっと、君にとっていいことが待っている」
どうしてだろう、眠くなってきた。
力を失い倒れかけた観鈴を、彼は支えた。
そのまま木にもたれかけてやる。
そして自分もその横に座り、その人の到着を待っていた。

「観鈴っ！」
「来たみたいですね。大丈夫、眠っているだけです」
「あんた何者や。観鈴に何かしたんか？　もし何かやってたら、あんたのこと絶対に許さへん！」
言って少年を睨み付ける。
少年は全く動じなかった。

「この子は人との愛情に餓えています。あなたが優しく包み込んで、声をかけてあげて下さい。そうすれば、全てがうまくいくはずです」
そう言い、少年は立ち上がり、歩いて行こうとした。
晴子はぽかんとしながらも、訊ねた。
「あんたは誰や。名前ぐらい、教えんかい」
「――氷上シュンといいます。それでは」
それだけを言い、氷上シュンは姿を消した。
目を覚ます、誰かに抱かれていた。
「おかあさん……」
「もう大丈夫や、観鈴。うちはずっと、あんたと一緒や……」

010 つかのまの、やみ

もう、なにもかもがいやになっていた。
今日はネームを終わらせようと思って、一生懸命かんがえてたのに。
夏こみの当落発表前に入稿をすませて、新刊は当然二冊以上で、それでしたぼくたちをおどろかせてやろうって、そう思ってたのに。
だけどしたぼくはいない。みんないない。
こんな場所、こんなしんきくさくて気味の悪い場所、いたくない。
それに――あの、吹き飛んだ顔。真っ赤なほんものの。ぬるついた、血のにおいをむちゃくちゃに頭を振って追い出す。
「詠美っ……止まり！！」
聞き慣れた叫びも、いまはこわいだけだ。
目を合わせたら、おしまいだ。
ぎゅっと目をつぶって、あたしは夜の住宅街の中を走り抜けた。
絶対に追いつかれないように、せいいっぱい急いで。

そう、あいつは、あたしのことがきらいに決まってるんだから。

いつもわがままいって、困らせてたから。

面倒ばかりかけるおおばかだって思ってるんだ。

だからあたしも、あんたなんてしんようしない。

すこし悲しくなったけど、それはしかたのないことだった。

何よりも、あんたにだけは殺されたくないと思うから。

――すぐそばでひゅおん、と風をきるような、音がした。

「な……っ」

植え込みに突き刺さっていたのは、本物の鏃（やじり）だった。

あんまり突然で呼吸ができない。やだ。やだ。やだよ。

振り返れば、そこには街灯の中に浮かび上がる白衣のひと。眼鏡のおくがつめたくみえた。こっちにくる。

「どうも腕が鈍ってるようね、調子が出ないわ」

きりり、と音がして、その手の中の――たぶんショートボウガンの――照準が合わされた。

やだ。ちょっと、あたし、なにしてるんだろ。

やだ、ほんと、なんで、はしれないんだろう。

なんで足がこんなに、うごいてくれないのよ。

「ごめんなさいね。痛くないようにするから、我慢して」

「う、そっ」

そのひとは笑っていた。きっと楽しんで、いた。

きりきりという音が聞こえそうなほど、ゆっくりと腕を引く。

「や、」

もうだめ、ぜったいにあたしは――――

目をつぶったと同時に、ぱぁん、と、何かが弾けた。

「何さらしてんねん、この人殺しがァッ！！！」

温泉——パンダ。

ぱん、ぱん、ぱん、とまた続けて音がして、植え込みを、街灯を割った。無数のガラスの破片がきらきらひかって、まっくらな中を舞い上がる。

はっと見れば、白衣のひとの腕と腹が、あかかった。

その手には何も持っていない。なにも……え？

ぱぁん。

もう一度その音を聞いた瞬間、あたしは腕をひっつかまれていた。こげくさい。

「早う逃げ！　同人女は夏こみまでは死ねんのや！」

「え、え、」

わけがわからない。手を引かれるままにいくつも角をまがって、足がついていくのもやっとだ。

だけど今走らないと、今は、早く、それだけはまちがいなくって。

「ええか、向うの山まで行くで。うちらの前に出たんはあの女しかおらん、充分撒ける」

「あ——」

何かいわなくちゃって思うのに、声がぜんぜん出てくれない。

だって——こいつは、あたしをきらいなはずで。

だって——

『この島の露としてあげるわ、温泉パンダ！』

平気だって思いこみたくて、なんてこと言ったたんだろう。

誰だってあんなふうに目の前で友達が死んで、こわくないわけないのに。

でも、来てくれた。本物の銃なんか使って、こんなあたしのことをマンガのヒーローみたいに、ほんとに必死で助けてくれた。
なら――あたしは。

「さ、行くで、詠美！」

とんでもなく、ばかだった。

011　やみを追いながら

「またね、お嬢ちゃんたち」
独りごちるなり、ちっ、と舌打ちをして、石原麗子は逃げ行く少女たちを見送った。
わざわざ追うことはしない。まだまだ先は長いのだ。体力は温存しなければ。それにどうも――力が巧く発現してくれない。
「粋な真似してくれるじゃない」
深く溜息を吐きながら、由宇の銃弾が掠めた腕の血をペロリと舐め取る。
由宇の選択はベストでないものの、ベターではあった。
あのような場面ならば、怖気づくことが一番死に近い行動になる。例えば足が完全に竦みきっていた詠美のように。そこで慣れないながらも果敢に牽制を仕掛けてきたのは正しい。勿論それは麗子にとっての誤算ではあったのだが。
「……嫌な空気」
明らかに感じ取れるナニカの強い波動に、麗子はあからさまに表情をしかめた。
おそらく、島全体になんらかの呪術結界式が敷かれている。そしてあの下衆な男に逆らえる万能たり得る仙命樹には、相当強い制限が設定されていると推測できる。でなければあの二人とも、あっという間に殺せていたはずだ。それに加えて、素人の娘が我武者羅に撃った弾を複数受けるなどという失態。

回復力が著しく落ちている今は相当に手痛い。コツを掴みきれば多少の力の行使は出来るかもしれないが……直接仙命樹の効果を利用して死に至らしめるような真似は無理だろう。勿論それは、あの場に居た強化兵を始めとする異能のモノたち全員にも適用されるのだが。

全員の能力は、人としての経験と生来の運だけに平均化されている、というわけか。それならばやはり、人に溶け込みながら本質を違える自分には多少は有利である、のかもしれない。

ならば、まずするべきことは。

……答えは、あっさりと見つかった。

少女たちの強運を嘲笑って、麗子は由宇と詠美が向かった山とは反対方向へと歩き出した。

闇の中を悠然と進む女の纏う白衣には、消えない赤い血がこびりついている。

012　風にさらわれて

川名みさき（二十八番）は絶望していた。

彼女の目は、光を感じることができない。

これではゲームが始まる前から、既に脱落を宣言されているようなものである。

彼女は、ゲームに乗った人間の存在を疑うほど楽観的な考えは持たなかった。

そのような存在の前では自分は無力だということを、彼女は理解していた。

彼女にとってのせめてもの幸いは、連れて来られたこの場所が学校だったということ。

学校の構造なんてどこも似たようなものである。

階段を登っていけば、その先はきっと屋上だ。

最後に屋上の風を感じたい。

それが、ささやかな願い。

武器の支給を辞退し、教室を出る。
壁を伝って、一歩一歩、ゆっくりと歩いた。
階段を見つけ、上がっていく。
これはきっと、人生で最後に上る階段だ。
一段一段、ゆっくりと、踏みしめるように。
そして、彼女には見えないドアが現れた。
カチャ……キィ……。
そこに鍵はかかっていなかった。
（よかった、よ）
みさきはドアを開け、屋上に出る。
（こんな場所じゃなければ、九十五点の風だね）
表情が歪む。瞳の端からは涙が溢れそうだった。
上を向いて歩きながら、涙が零れないように、

ふと、風向きが変わる。
長い黒髪が風に揺れ、頬を掠める。
（あ……）
風が瞳から、雫の欠片をさらっていった。

振り向いても、見ることはできない。
手にすることはできない。
腕を大きく広げて、全身で風を受けてみる。
ただそれだけで、楽しかった日々を想い出せた。
それなのに、
風にさらわれた涙のような、
儚く消えた、日々の欠片を、
振り向いても、帰ることはできない。
手にすることはできない。
だけど、確かにそこに、感じられたから。
そう、全ては自分の中に、しっかりと……、
刻まれていた。
（もう、いいよね）
（ゴメンね、ゴメンね、雪ちゃん……）
（そうだ。ねえ、浩平君？）

（夕焼け、きれい？）

十分後、何かの音が風に運ばれてきた。
そして同時に、みさきの意識も、閉じていった。
「一体何をやってたんだろうな」
藤田浩之（七十七番）は、屋上の縁で手を広げる少女を見つけ、支給武器であるオートボウガンの引き金を引いた。
矢は綺麗に少女の胸を貫き、バランスを崩した少女はまっ逆さまに落ちていった。
人を殺した。だが、何の感情も涌きはしない。
それよりも……、
「かったりぃ、さっさと終わらせて帰るぜ、俺は」

二十八番　川名みさき　死亡
【残り95人】

013　血

長森瑞佳（六十五番）は駆けた。駆けた。駆けた――。
暗い森の中を、建物が見えなくなる位まで走り抜けると、ようやく瑞佳は一息吐いて、柔らかい草の上に座り込んだ。
殺されるのが、あまりに怖かった。何もしないまま、誰かに胸を撃ち抜かれるのが、頭を潰されるのが、首を絞められるのが――ずっと遠くまで離れないと、すぐにでも殺されてしまうような気がしたから。
長森瑞佳は、走った。走った、走った――。
――浩平に逢いたい。浩平。こうへい、こうへいっ……
息が切れて立ち止まる。服の裏側から瑞佳の体温

を奪っていく冷えた汗。身体が凍るように冷たい。
瑞佳は振り向く、ああ、よかった、自分はまだ殺されなかった。
次に思い浮かべたのは勿論、折原浩平の事だった。浩平は何処だろう、世界中で誰よりも信頼できる幼なじみ、自分のことをいつもとぼけた顔をして見ていてくれた幼なじみは。
そう、そうだ。自分は浩平と同じところから出発して、それで、
自分より三十分近く先に出ていってしまった浩平が、自分を待っていてくれるとは思いもしなかった。
この瞬間まで。
ここで、ようやく、その可能性に至る。
「――待っててくれてた、なんてことは……」
もしもそうだとしたら、自分は、浩平と行動できるかも知れない最後の機会を逃した事になるのかもしれない。自分は誰よりも信頼出来る人に会えないまま、殺されてしまうという事になるのかもしれない。顔から熱が奪われていく、全身が凍るように震えているのがわかる。
「――そんなわけ、ないよね。浩平は、いじわるだから、わたしのことなんて、置いていっちゃうもん」
瑞佳は出来る限り楽観的に考える事にした。――正確には、楽観的に考える事しか出来なかった。もし浩平が待っていてくれたのなら、わたしが建物から出てきた時に声を掛けてくれた筈だ。そしてもし声を掛けられていたなら、瑞佳は絶対にそれを聞き逃さない自信はあった。そうに決まっていた。
それなら、まず殺されないために走っていった事はあながち間違いでも無かったと言えるかもしれない。ぺたり、とへたり込む。切れた息を整えながら、瑞佳は乾ききった唇を薄く舐めて、少しでも落ちつこうと考える。
「浩平は、いじわるだよ、わたしや、七瀬さんくらい、待っててくれてても、いいのに」

ああ、しまった。七瀬さんを置いてきてしまった。せめて七瀬さんだけでも待っていれば良かった。ごめんなさい、七瀬さん。そんな事を考えながら、とにかく瑞佳は待つ事にした。誰かが通りかかるのを待つ。知り合いが——浩平が通りかかるのを待つ。それが、一番安全。受け身過ぎるとは判っているが、それでも怖いから——怖いから。瞼を閉じて、顔を膝に埋めた、

——その刹那。

ぱらぱら……という、軽い音が、すぐ自分の裏で聞こえたような気がした。そしてもう一度同じ音が聞こえたとき、瑞佳はそれが空耳でないということを理解する。理解はしてもなかなか身体は反応してくれない。恐怖が震えとなって闇を一層深くする。
振り返ると見えたのは、二人の人間が殺しあっている図、

——いや、正確には、
鰯り殺しの構図だった。

「やめろっ、何処の誰だか知らないけどっ」
七瀬彰（六十八番）は必死で逃げ回りながら、目の前の見知らぬ、眼鏡を掛けた一見大人しそうな少女を説得しようとしていた、死にそうになりながら。だが、まるで聞く様子もなくマシンガンの引き金を引く少女。当然のことだが、扱いに慣れていないためだろう、狙いはまるでバラバラだが、もし偶然に一撃でも食らってしまえば、自分は間違いなく、絶望的な確率で、容赦無く、死ぬ。息切れしてきた
——くそっ、もっと運動しておくべきだった。ミステリーばっか読んでごろごろしてるから体力つかないんだよっ、という、友人である藤井冬弥の言葉が思い出される。
「ほんとだよ、冬弥っ！」
目の前の少女を止める方法は、取り敢えず今の自

分にはない。どう説得しても止むまい。どっかがおかしくなってやがる。
せめてもう少しでもまともな武器を持っていれば、なんとか――なんとか出来たかもしれんのに。彰は思う。

右手に握るフォークがきらり。

闇の中でも銀色は目立つのだと思う、彰の手にある三叉のフォークは勇ましく輝いていた。これが七瀬彰の武器であり、七瀬彰の命綱であり、七瀬彰そのものであった。泣ける。泣いている場合ではなかった。判決が下される瞬間が彰の全身に痛みとなって襲いかかる。
ぱらららっんッ！
そんな派手な音を立て、弾丸が彰の右足、鍛えられていない細い太股に食い込んだ。生半可な痛みではなかった。煙をあげる熱いフライパンを叩きつけられたような痛みで、こんなものに文学少年が耐えられるわけが無かった。断末魔のような叫び声をあげ、彰は土の上に崩れ落ちる。だが動かないと、動かないと今度こそ本当に死ぬわけで、そう考えると痛みなんてなんのそので、
しかし、「なんのその」だったら、もう少しはマシだった。ちょっと「なんのその」どころではない耐えられない苦痛が全身に襲い掛かる。起こした身体が再び地面に崩れ落ちる、土の味がする、口の中のざらついた砂が意識を取り戻させる。
「畜生っ、ちくしょう、ちくしょうっ！」
美咲さんにも逢えないで、こんなところで死ねるかっ！
――こういうとき、人は無駄な抵抗をするものである。彰は力を振り絞り、フォークを女の子に向かって投げた。そう、ちょうどダーツのように。だが、漫画やミステリーで投げられるダーツのように上手く飛ぶはずもなく、ただ女の子の胸に柄の部分がこ

ろんと当たっただけに過ぎなかった。これを人は無駄な抵抗という。銃口にフォークを突き刺すなんてかっこいい真似が素人に出来るわけが無かった。
（駄目だっ、殺されるっ！）
走馬灯を見る暇も無かった。思い浮かぶのは真っ赤な真っ赤な真っ赤な痛みだけであった。取り敢えず目を瞑る。目を瞑ったら痛みがなくなるかもしれないというわけでもないのに。執行を待つ死刑囚の気分だった。
――しかし、執行は行われない。
響くのはカチャン、カチャンという音だけである。
弾丸が切れたのかっ！　しめた、とばかりに彰は足を引きずりながら森の闇に向けて歩き出す、土の匂いが鼻腔を衝く、早く動けと身体を急かす。早く彼女の目の届かないところに行かなければ。予備の弾がある事は充分に考えられるから、早く逃げないと、
混乱する神経が身体の痛みと相まって、彰の心は恐怖に侵されていく。痛み。痛み。痛み。血が――血が――、死ぬ、死ぬ――、眩暈を覚えて、彰は再び土に突っ伏し、そのまま意識を失った。
だが、少女の追撃をかわすには十分な距離を、彰は稼いだようだった。

藍原瑞穂（二番）は、試行錯誤しながら、なんとか弾丸を補充した。ぱらららら、と試し撃ちをしてみて、自分の過程が正しかったことを知る。ちゃんと銃弾が補充できた。これでだいじょうぶ。
生き残るんだ、生き残るんだ――マシンガンが当たったんだ。香奈子ちゃんと一緒に逃げられるかも知れない。みんなころして、わたしたちがいきのこるんだいきのこるんだいきのこるんだ。さっきの男の人は遠くに行ってしまった。殺し損ねた。だがまあ、しかたない。香奈子ちゃんは何処だろう。何処に行っちゃったんだろう。逢いたいよ香奈子ちゃん香奈子ちゃん香奈子ちゃん

がさり、という音。
「誰っ！」
瑞穂はマシンガンを音が聞こえた方向に向け、弾丸を雨のように降らせる、ぱらららららららららららららららららららららららららららららららららら。
カチャン。カチャンカチャン。
弾が切れるまで瑞穂は弾丸を放ち続ける、恐慌状態で撃ち続け、弾丸を撃ち尽くして、ようやく安息を得る。
「死んだよねえ」
確かめるために茂みに近付く。その声と足音に反応するように茂みが震える。茂みを覗く、
——意外な事に、死んでいなかった。
「やめてぇ！　近付かないで！」
けれど、その様子を見て瑞穂は一層安息を増した。何故なら目の前にへたり込んでいるのは、怯えに怯えた少女であったからだ。綺麗な少女。傷一つない綺麗な顔。自分よりずっとずっと綺麗。ぶるぶると震えている。そんなに怖いの？　あはは、そんなに綺麗なのに怖いんだ。あははははははははははははは、殺してあげるよ殺してあげる、香奈子ちゃんと逃げ出すんだからみんなじゃまなのじゃまなのじゃまなのよ
その瞬間、瑞穂の背中に走ったのは、壮絶な違和感だった。
背中に走る鋭い痛み。何度も何度も何度も何度も何度も、痛み。
痛い。　香奈子ちゃん。かなこちゃんいたいかなこちゃんいたいかなこちゃん痛いよう。痛いよう。痛いよう——。
そしてマシンガンを取り落とした。
ああ、だめ、だめだめだめ、だめ、マシンガンがないと、香奈子ちゃんと帰れない。必死でマシンガンを取ろうとして、地面に突っ伏して、立ち上がれ

なくて、背中が痛くて、香奈子ちゃんがそばにいなくて、それじゃあわたしは駄目で、そのまま意識が途切れた。

殺される。わたしは、ここで殺されるんだ。瑞佳は震えながら、死を覚悟して目を閉じた。
死ぬってどんなに痛いんだろう。どんなに苦しいんだろう。怖い、怖いよ浩平。浩平、浩平、浩平、浩平。
——だが、何も起きなかった。
女の子の叫び声が何度も聞こえた。悲鳴、断末魔の叫び、叫び、叫び。
頬に暖かなものがふれた。何だろう。
何が私に降ってきた？
——誰かがどすり、と倒れた音がした。
「長森、さん？」
震える子猫を抱くような、優しい、聞き覚えがある声がした。ああ、自分の事を知っている人、ああ、助けが来てくれたんだ、
助けて、誰、ああ、この声は、
「住井、くん？」
——返事をすると、へたり込んだ自分を上から見下ろして、住井護（五十一番）は、

右手に血染めのバタフライナイフを持って、

「危ないところ、だったね」
と、血塗れの顔で、安堵の表情を見せた。いつもみたいに優しい顔。優しい顔なのに。そして、身体中から血を流して倒れている娘の姿が見えて、そして自分の制服に真っ赤な血が付いているのが見えて。自分の頬にも真っ赤な生命がこびり付いている事を知って、
頬を一撫でして、

瑞佳は卒倒した。

二番　藍原瑞穂　死亡
【残り94人】

014　（無題）

「おお、まいしすたー瑞希ではないか」
「あ、大志じゃない」
高瀬瑞希（五十五番）は、巨木にもたれかかった九品仏大志（三十四番）に声をかけられ、振り返った。
「全く、冗談じゃないわよ。質の悪い悪戯に違いないわ。さっさと和樹を見つけて帰りましょ」
瑞希は、ぶつぶつと洩らしながら辺りを見回した。
「しかし、馬鹿みたいに広いわね。誰か、ここらへんに住んでる人とかいないのかしら」
「さあな」
大志が、ゆったりとした動きで身体を起こす。
「ときにまいしすたー。誰かと会わなかったかね？」
「え？　全然会わなかったわよ？」
「そうか……」
大志が、明後日の方向を眺めながら、ポツリとつぶやいた。
「やれ、先行者」
「え？」
閃光が、瑞希と周囲の下草を灼いた。
「すまんな、まいしすたー。抗議は地獄で聞こう」
わずかに残った燃えカスを睨め下ろしながら、大志はボソリとつぶやいた。右上腕部に、小さな切傷がある。肌がそこを中心に、赤黒く染まっていた。
「あの女……岩切といったか。毒を仕込んだ刃とはな……吾輩の命、永くはあるまい」
大志が、うろん気な目つきで空を眺める。
「わが女神……あさひちゃんだけは守らなくてはいかん。そのためには、吾輩が修羅となるしかない……吾輩に支給された、この先行者……有効活用さ

せてもらおう」

五十五番　高瀬瑞希　死亡
【残り93人】

015　選択

「ふぅ……」
千堂和樹（五十三番）は見つかりにくい場所に着いた安堵感からか溜息をついた。まさかこんなことに巻き込まれるとは。
だが、いつまでも悲観してはいられない。そう考えた彼は自分に出来ることをやろうと考え、支給されたバッグを開いた。
バッグの中から出てきたものはペットボトルに入った水、その辺のコンビニで売ってそうなパン、島の地図、コンパス、そして機関銃だった。
こんなところまで原作と同じ様にしないでもいいだろうにと彼は思った。
そして機関銃に備え付けてあった説明書には目を通さずに、彼は機関銃のセットアップを始めた。
「まさかバトロワ本を描くときに調べた資料が役に立つとはな、なんつー皮肉だよ」
そうつぶやきながらセットアップを完了する。そのころには彼の頭の中にひとつの選択肢が浮かんでいた。
［あなたはこの殺人ゲームに乗りますか？
YES／NO］
（別に俺はどっちだっていいと思っている）
それはあたかもこの殺人ゲームの元ネタである小説の一シーン——原作における殺人鬼役の少年がつぶやいた言葉——のように彼の頭の中に現れた。
ほんの少し悩んだ後、和樹はひとつの結論を出した。ポケットの中から十円玉を取り出す。
「表が出たら奴等と戦う、裏が出たらこのゲームに乗る」

和樹は十円玉を天高く放り上げる。力を加えられた十円玉は次第に勢いを失い、重力にしたがって地面へと落下する。自分の足元に落ちた十円玉に写っていたのは……建物、すなわち表だった。
「そうか」
和樹はそうつぶやくと足元の十円玉を拾い、歩き始めた。
「まずは仲間を集めるか……瑞希や大志あたりだな」

016　出会いと別れの一幕

目の前の光景。
血のついた制服姿で倒れている瑞佳。
血まみれの姿でナイフを持っている住井。
この状況から、浩平が想像したのは、一つの可能性。
「住井ぃ！」
叫ぶと同時に発砲。
「!?」
当たらなかった。さらに続けて叫ぶ。
「お前！　長森を……っ！」
「お、折原!?　違う、オレじゃないぞ、落ち着け！」
そう言って持っていたナイフを投げ捨てる。
だが、浩平は止まらなかった。
「黙れ！　お前は馬鹿な奴だと知ってたけど、そこまで馬鹿だったのかよ！」
「おい、本当に落ち着けって！」
住井の言う事も聞かず、発砲を繰り返す。
そして遂に、銃口が住井を捕らえ……
「死ねやコラぁ！」
「やめんか、どアホッ!!」
七瀬のツッコミを食らい、そのまま地面に倒れ、意識を失った。

「悪い、本当に済まない‼」
「まったく……冗談じゃないぞ……」
落ち着きを取り戻し、一部始終を聞いた浩平は素直に謝った。
「ま、あの状況なら、疑われるのも無理はないけど……それにしてもいきなりか」
「だから、悪かったたって言ってるだろ。お前も心が狭い奴だな」
「態度がでかいわっ！」
七瀬からまたもツッコミが入る。
浩平はこれ以上この件について話すのは止め、真剣な声で住井に訊ねた。
ひょっとしたら、こいつも……という恐れを秘めて。
「で、住井。長森が襲われてることを知らなかったんだろ。お前、このゲームに……」
「違うね。離れた所から見てたが、あの女の子は見境がなくなってた。無抵抗の女の子が助けを求めてるのに、殺そうとしたんだ。気がついたら、体が動いてた。助けの声が長森さんに似てると思ったけど、本当に長森さんだったなんてな。血まみれの俺を見て、気を失ったんだ……」
浩平の言葉を遮り、言った。
「住井君……」
「そうか……悪かった。結果的に長森を助けてくれたんだ、ありがとう。これからどうするんだ？　お前」
「そうだなぁ」
少しの間考え、そして言った。
「とりあえず、従兄弟がいたから、そいつと連絡取りたい。北川潤って言うんだが、オレの従兄弟とは思えないくらい、馬鹿な奴だ」
その北川も同じことを住井に対して思っており、実際は二人とも殆ど同じ性格である。
だからこそ昔から、この二人は仲が良かった。
何かにつけて気が合い、馬鹿な悪さをして、よく

怒られていた。
　高校になってから会ってなかったが、こんな所で再会するとは。
　人生なんてわからないものだ。
「じゃあそろそろ行くよ。そうだ折原。長森さんと七瀬さんを守ってやれよ。二度と目を離すんじゃないぞ」
「あぁ……」
「そうよ、あたしは乙女なんだから」
「そういうことだ、じゃあな、三人とも」
　住井は立ち上がり、まだ気絶している長森の方にも目を向け、歩き出した。
　そしてふと立ち止まり、つぶやく。
「あんなことは言ったが、無意識で人を殺したんだ。折原、オレ、狂ってるか？」
　浩平には答えられなかった。
　自分も勘違いし、逆上し、親友である住井を殺そうとしたのだ。
　普段はわからない心の闇が、姿を覗かせているのかもしれない。
　そしていつか、俺も見境なく――
　浮かんだ馬鹿馬鹿しい考えを否定し、住井に向かい言った。
「またな」
「あぁ」
　住井は、今度は走り出した。

017　（無題）

　宮田健太郎（九十五番）は、走っていた。スタート地点から、出来るだけ遠く離れるために。
「はぁ……はぁ……ふぅ。とりあえず、これだけ離れておけば大丈夫だろ」
　ある程度行ったところで森の中に分け入り身を潜めた。デイパックを地面に下ろし、一息吐く。
「後ろは、いかにもやる気満々って顔の人だからな。

柳川さんだっけ。とても協力しようなんて言い出せないよ。しかし……」
今、自分の置かれている立場を把握しようと考えを巡らす。
「いつも、こんなのだよなぁ。人の意見聞きもせず勝手に何か決められたりさ。デスゲームって……俺一度死んでるのに」
溜め息混じりに、愚痴をこぼした。
「……愚痴を言ってても始まらないか。まず、どうにかみんなと合流しないと……スフィー達が居れば、随分と生き残れる確率も……」
考えは、そこで中断せざるを得なかった。丸い物体が放物線を描き、コロコロと自分の方に向かってきたのだ。
「なんだ？　――クソッ！」
反射的に、デイパックを持ち上げその場を離れた。そのすぐ後、
ドンッ！
木の根本で炸裂し、木が粉々になって砕け散った。
「んふふー。やったかしら？」
長岡志保（六十三番）は、手榴弾片手に爆散した木の根本を伺っていた。
「しかし、いきなり一人見つけちゃうなんて調子良いわね。武器も当たりだし。このまま頑張って、このデスゲームをネタに東○ポに入社してやるんだから！」
ひょんな事から将来設計もバッチリ整った長岡志保。
「もう、誰もわたしを止められないわ！　アハハハッ！」
パンパンパンパンッ！
銃声が鳴り響いた。まるでそれは……
「ぐふぉっ！」
鉛弾を大量に食らい、吹き飛ぶ。
「危なかったな……でも、大声で笑ってくれたお陰で分かりやすかったよ」

「や……やるわね。わたしに土を付けた男はあなたで二人目よ……」
息も絶え絶え、近づいてきた宮田健太郎に言葉を返す。
「しかし、拳銃とか使うのは初めてなんだけど……」
コルトガバメントを右手に携え、話を続ける。
「使いやすいんだよな。まるで、俺の為にあるような……撃つ度に気持ち良くなるし。人を殺したい欲求でもあったのかな……」
「安心して。撃つ度にそう感じるのは、人を殺したい欲求のせいじゃないわ。それはね、椎は……うっ！　ガクッ……」
元気にペラペラ喋っていた筈なのに、突然事切れる長岡志保。
「死んだか……まぁ、人が死ぬ時ってこんなものだろうしな。さて、手榴弾貰っていくか。ん？　なんだこりゃ？『志保ちゃんレーダー』？　ああ、これで俺の事を見つけたのか……これは役に立ちそうだな。他にはと……」

六十三番　長岡志保　死亡

【残り92人】

018　覚醒

深い茂みの中を、かれこれ十分ほど掻き分けながら進んでいた柏木耕一（十九番）は、前方の大きく開けた場所に辿り着くと、殺していた息を慎重に、すべて吐き出した。
そこは一面、湖だった。
「水も比較的、綺麗だな。これなら使えそうだ」
耕一は、辺りに人の気配が無いことをもう一度確認すると、左手に持っていたディパックを足下に降ろし、自分も草むらに腰掛けた。耕一は当初、当然ながら従姉妹の四姉妹と行動を共にするつもりであ

った。
――スタート地点がバラバラになるまでは。
耕一は「Ⅱ」とペイントされたトラックに押し込まれ、他の四姉妹は……わからない。苗字が同じだから合流も簡単だ、というささやかな希望もあっさりと絶たれたわけだ。
「千鶴さん、梓、楓ちゃん、初音ちゃん……」
みんなは大丈夫だろうか。ホールに全員が集められていたとき、近くにいた千鶴さんが耕一に囁いた言葉――
「力が……使えません」
現に、耕一も何度か試していたことだった。もしも力が――鬼の力が封じられていなければ、生理的悪寒しか引き出さない、下卑た笑い声を発する高槻も、周りにいた同じような顔をした連中も、十秒後にはタンパク質の塊になっていただろう。
「きっとみんな、不安で怯えている。俺が……俺が守らなきゃ」
自分を奮い立たせるように、何度も何度も呟く耕一の耳に、ふと、ぽちゃん、という音が微かだが届いた。
「……？」
音は湖からだ。
顔を上げると、水面がゆらゆらと揺れている。魚でもいるのか、そう思った耕一は、それが貴重な食料になることに気付いて水辺に歩み寄った。
まず視界に入ったのは、水底を漂う黒い塊。それが何であるか、を耕一が思考するよりも早く、それは猛然と耕一に襲いかかった。
「っ!?」
声を上げる暇もなく、次の瞬間には耕一は頭から湖に突っ込んでいた。
なんだ……なにが起きた!?
思っていたよりも深い湖の底、周囲の状況も把握しきれていない。だが、それよりもまず第一に優先すべき事があった。

空気だ。
水泳の選手が入念な心構えの元、湖に飛び込んだなら話は別だが、今はあまりに唐突だった。耕一は僅かな、本当に僅かばかりの空気を、肺から逃さぬように口と鼻を手で覆った。
上だ。
上に行かなければ、俺は死ぬ。
生き物の本能に突き動かされ、耕一は必死にもう片方の腕と両足を動かした。しかし、湖面から進入する陽の光を求めるように昇る耕一の眼前に、突如、絶望が立ち塞がった。
黒い塊——違う、それは人だった。
顔面蒼白になって昇ってくる耕一を見下ろす形で、岩切花枝（八番）は腰の短刀をすらりと抜いた。彼女もまた、封印の力によってその戦闘力は著しく落ちていたが、もともと水中は自分にとって庭のようなものだ。呼吸というハンデを背負った相手なら、赤子にデコピンするよりも楽に始末できる。耕一が昇ってくるのを悠然と待ちかまえながら、岩切は射程距離でその短刀を横に払った。瞬間、耕一は身を捻ったものの、所詮、水の中では大した動きもできなかった。短刀は耕一の胸を真一文字に切り裂き、続いて両者の間の水が驚くべき速度で赤く変色した。
それでも耕一は、極めて鈍い速度で岩切に手を伸ばしたが——
どすっ、と左手に握られた二本目の短刀に手の甲を貫かれ、耕一は深い湖の底へと再び沈んでいった。
俺……。
自分の身体が湖の底に着いたのを静かに感じ取りながら、耕一は僅かに残った思考を巡らせた。
俺は死ぬんだな……。
耕一はその事実に恐怖したが、それよりももっと強い感情が耕一を支配した。
千鶴さん、梓、楓ちゃん、初音ちゃん……。
自分は彼女たちを守らなくてはならない。
なのにこの有様は何だ！　不甲斐ない！

柏木耕一っ！　お前も男なら、大切な女ぐらい守って見せろ！
どくん……、身体が脈打った。
力だ、力だ、力だ、力だ、力だ、力だ、力が必要だ。
どくん……、鼓動がリズムを刻み出す。
鬼の血よ、俺はお前が必要だ。
どくん……どくん……
身体の周りの水が、熱で揺らめきだす。
アアアアアアアアァァァァッ!!
一分ほど水底の様子を見ていた岩切は、男が再び昇ってこないのを確認すると、水面へと身を翻した。あと二メートル、という所で、岩切は突如、自分に向かって凄まじい勢いで突っ込んでくる存在を湖底から感じ、振り向いた。
振り向いたときには、それは目の前にあった。圧倒的質量で岩切を飲み込むと、そのままの勢いでそれは湖面から飛び出した。

車にはね飛ばされたような衝撃を受けた岩切は、湖近くの巨木に身体を強く打ち付け、停止した。
「う……はっ……」
折れた肋骨が何本か、内臓に達したようだ。口からは空気と共に、血も吐き出された。それでも懸命に状況を把握しようと見開いたその目が、さらに大きく開かれる。
それは……人ではなかった。
もちろん、岩切が見たのは柏木耕一、その人であった。姿形も、普段のそれと変わらない、あえて言うなら全身びしょ濡れで上着が横一文字切り裂かれているぐらいで、あとは只の人間だ。
しかし、それに対峙した岩切には判ってしまった。それがヒトの皮を被ったバケモノであることを。
「ガあアぁ゛ァ……」
〝それ〟が声を発した、ヒトではない声を。岩切は恐怖した。自分に迫る、絶対的な『死』に。
「くっ、来るなぁぁぁっッ!!」

懐に仕舞っておいた支給品のソーコムピストルを素早く抜き出し、相手の眉間にポインティングする。
間髪入れずに引き金を引――
引いたときには、耕一は岩切の頭上に跳んでいた。岩切の手元から発射された弾丸が、耕一の背後の木に命中するまでの軌跡を視認した後、耕一は岩切がもたれ掛かっている木の側面に〝着地〟した。
岩切は耕一を完全に見失っている。
その岩切めがけて、耕一は自由落下するよりも速く、木の表面を駆けた。岩切が上に気付いて頭を上げることは……最後までなかった。
がくん、と岩切が頭を揺らし、そのまま横に倒れた。
首の骨を折られ……即死だった。
耕一はその作業を終えると、しばらく辺りの気配を探り――
そのまま力尽きたように前のめりに倒れ、深い眠りに落ちた。

八番　岩切花枝　死亡
【残り91人】

019　音

ザクッ。

背中に何かが刺さった。
足音は聞こえなかった、が、誰かいたのか？
健太郎は考えるより早く振り向き、ガバメントを撃つ。

パンパンパンパンパンッ！

気持ちいい。痛みが和らいでゆく。
自分はこの音を聞く為に生まれてきたのではないかと、そんなことを思う。
だが、弾丸は襲撃者に当たらなかった。

襲撃者は撃たれるのを見越し、ナイフを刺した後にすぐ場所を移動していた。
そして、背後からもう一刺。
健太郎にとって、それが致命傷となった。
（はは、あっけないもんだったな。最後にもう一度、あの音が聞きたかった）

パンパンッ！

（そう、パンパ……）
それが最後の思考となった。
「笑い声で場所を特定できたのは、あなただけじゃなかったんですよ」
健太郎の手から奪い取ったガバメントを構え、里村茜は言い捨てた。
ナイフについた血を、鞄の中にあったタオルで拭き取る。
（手榴弾に、この銃、ナイフ……これでかなり有利になった）
二つの死体から武器と水を奪い、茜は早々にその場所を去っていった。

九十五番　宮田健太郎　死亡
【残り90人】

020　黒の交差

静かな森を行く影が一つ。黒を基調とした、どこと無く変な服装の男。いや……少年といったほうがふさわしいだろう。
（やれやれ、高槻もつまらないことをしてくれたな）
少年（四十八番）は心の中で一人ごちる。森を突き抜けて移動している。足取りはいささかも重くない。彼の様子は至って平静で、いつもどおりだった。

支給されたものには手をつけず、袋ごと肩に背負っている。まるで、どこかにピクニックにでも行くかのように……。
がさり。
物音がした。敵かもしれない。
いや、この状態では味方を探すほうが難しい。それなのに、少しも警戒しない。確信でもあるような、余裕で満ちた笑顔。
「僕はまだ死なない」
その言葉に反応したかのごとく、人影が木々の隙間から現れる。長身に銀髪を備えた男――
三十三番、国崎往人。
少年はその男を見据えていた。
往人の表情に変化は無い。
「ほら、死ななかった」
笑顔で言う少年。既に歩みはとまっており、二人は対峙する格好になっていた。
「どうして、そう思う」
往人は問う。少年のセリフを裏打ちする、不気味な確信のようなものをいぶかしんで。
「俺がいまから殺そうとするとは思わないのか？」
「思わないね」
「みんなとりあえず生きる目的で殺すんだけどね。そのうち見失うよ、その目的を」
「……そんな話を」
往人が口を開く。
「そんな話を俺にしてどうなる、殺さなければ殺される。なら殺すしかないだろう？」
「じゃあ君はなぜ僕を殺さなかったの？」
笑顔でたずねる少年。
「……」
沈黙する往人。
「ほら、そういうものさ」
予想していた通りの反応。少年は当たり前だと言わんばかりにそう言った。
「君はほかの人とは違う。むしろ僕よりなんじゃな

いかな？」
「意味が……分からないな」
「じゃあ聞き流してもいいよ、でもここで僕と会ったことを、単なる偶然と思ってもらいたくないいな。殺しあうために殺しあうようになったらもう取り返しがつかなくなるよ」
「お前は違うとでも言うのか？」
往人は静かに問い掛ける。
「この狂った環境で、そんな理想を貫けると思っているのか？」
「思ってないよ」
あっさりとした回答。だが不思議と軽薄な印象を受けない。
「殺すことも否定しない、でもそれをやるべき相手は既に決まっているんだ、君もそうだろ？」
「……」
往人は答えない。変わりに懐から何かを取り出す。薄く黒光りする、見た目に重量がありそうな物体。
デザート・イーグル。
「目的はある……。そして、それをなすために躊躇するつもりも無い」
スチャッっと音を立てて往人はそれを構える。目標は――少年に向かってか。
ドギュウゥウゥン!!
銃声が一発。
そしてそのあとにがさりという物音。
何かが茂みに倒れる。
銃弾を受けたのは……少年ではない。
六十七番名倉友里だった。
一撃で眉間を貫通されている。即死だ。
「ほら、まだ死なないでしょ」
笑顔、崩すことの無い笑顔で彼は言った。往人は少年に近づき、そのまま通り過ぎてその後ろの友里の死骸を調べた。
そして、彼女の体につぶされていた何かを取り出す。それは、安全装置の外されていないピストルだ

った。
「彼女か、僕を追ってきたのかな」
　死人に対する言、死体を目の前にしても彼の口調は変わらない。拾い上げたピストルを、往人は少年に投げ渡す。
「やるならやれ、大方支給された武器が下らんものだったんだろう」
　少年は右手でピストルを受け取る。
「武器を装備している風には見えんからな」
「いいのかい？」
「お前の目的と俺の目的は交差しない。なら、お前の行動は俺の知るところではない」
「そう。なら遠慮なくもらっておくよ」
　少年はピストルを懐にしまう。
「それと人を探しているんだ。もし敵として現れなかったら伝えて欲しいことがある」
　少年は往人に向かっていった。往人は返事をしない、だが少年はかまわずに言い続ける。
「名前は天沢郁未。僕のことは……黒い変な格好をしたやつとでも説明してくれればいい。僕が高槻だけは始末するってさ」
「ゲームの管理人……それが目的か」
「うん、ちょっと私怨もあってね。君たちにとっても利益になることじゃないかな」
　あはは、と少年は無邪気に笑った。
「下らん時間を過ごした、俺はもう行く」
　往人は少年に背を向けた。
「悪かったね、引きとめた形になって」
　既に歩き出していた往人に言った。
「そうだ、君の名前を教えてくれないかな？　せっかくあったことだし」
　馴れ合う趣味は無い、往人はそう思っていた。しかし、なぜだか自分の口は勝手にその名前を発していた。
「国崎、国崎往人だ」
「僕のことは、黒い変な名無しとでも憶えてくれて

いればいいよ。じゃあまたどこかで会えるといいね」
　住人は後ろを振り返ることをしなかった。しかしその言葉はしっかりと耳に刻まれていた。そして少年も、再び自分の進路へと向き直る。
　何事も無かったような軽い足取り。少年が笑顔を崩すことは、とうとう無かった。

六十七番　名倉有里　死亡
【残り89人】

021　残酷　your way

「相沢君！」
　住宅街の路地裏を走っていた相沢祐一（一番）は、聞き覚えのある声に足を止めた。
「香里……栞……」
　振り向いた先には美坂香里（八十五番）、美坂栞（八十六番）姉妹が寄り添うように立っていた。
「祐一さん、会いたかったです」
　涙声で栞が言う。
「二人とも無事だったみたいだな。よかった……」
　祐一は先程既に刃物で刺された死体を見てきたところだった。
　ひょっとしたら、自分の知り合いも既に殺されているかもしれない。
　そんな気がしていたので、二人の姿を見られたことは喜ばしいことだった。
「相沢君、私達、どうなっちゃうのかしらね」
　聞いたことがなかった。
　この少女が、こんなに弱々しい声で喋るところなんか。
　だが、こんな状況で、裏打ちもなしに元気づけることもまたできなかった。
　無力な自分が悔しくて、
「そんなの、わからない……」

それでも、こんなことしか言えなかった。
「そうね。ごめんなさい」
「いや、俺の方こそ、悪い……」
沈黙が支配する。
口を開いたのは栞だった。
「祐一さん、一緒にいてくれますよね？　一人でも味方が多ければ、なんとか逃げ出すことも、出来ますよね？」
栞の頼みに、しかし祐一は、悲痛な顔しか見せなかった。
できるものなら、一緒にいてやりたい。
一緒にいるだけで、二人の気が楽になるなら。
だけど――
「すまない。それは、出来ない。探さないといけない人がいるんだ。探さないといけない人が。だから、一緒にいられない」
栞は何を言われたのかわからなかった。

きっと「あぁ、俺でよければ」なんて、いつもの調子で言ってくれると思っていた。
隣にいる香里も同じように思っていたのだろう。
「そんな……そんなこと言うひと……」
「嫌われてもいい。それでも、一緒に行けない」
「……どうしてですか、誰なんですか、その人って！　あゆさんですか!?　名雪さんですか!?　答えて下さい!!　答えて!!」
「……っ、栞、落ち着きなさい!!」
完全に取り乱していた栞を、なんとかなだめようとする香里。
だが栞は構いもせず、泣きわめくだけだった。
「……昔の知り合いがいたんだ。もう会うこともないと思ってたのに、こんな所で。今度こそ最後になるから。言っておきたいことがあるから」
そうだ、その人に会うためなら、例え誰を哀しませても、止まるわけにはいかない。
いとこの少女も。

身元不明で記憶喪失の少女も。
夜の学校で会った不思議な先輩も。
日溜まりの街で会った子供っぽい女の子も。
哀しませることになっても、止まれなかった。
「そんな……嫌、祐一さんっ！　どうして……どうしてっ!!」
「栞っ！」
パンッ！
香里は栞の頬を叩いた。
今までそんなことをしたのは、一度もなかった。
手も、心も、痛かった。
栞はしばし呆然として、
「う……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
香里の胸に飛びつき、泣きじゃくった。
香里は優しく抱きとめ、そして、まだ突っ立っていた祐一に言った。
「ごめんなさい。辛い思いをさせて……行っていいよ、もう……」
あの少女に会うためなら、どんなことにも耐える。
決意はあったが、実際は、想像よりも辛かった。
目の前の光景に、心が押しつぶされそうだった。
「……ごめん」
早く離れたかった。
それだけ言い、走る。
栞の泣き声と、「……バカ」と呟いた香里の声が、いつまでも耳から離れなかった。

祐一がその少女に出会ったのは、中学校の入学式。
その日は朝から雨が降っていた。
そして、雨の空き地に、少女はいた。

学校で少女が同じクラスであることを知った。
朝の光景も頭にあったので、思わず声をかけていた。
（君、朝、あの空き地で、何をしてたんだ？）
（…………）

（こんな雨の中で、ラジオ体操でもしてたわけじゃないだろ）
（ラジオ体操です）
それが出会いだった。
あゆとの記憶をなくした祐一の、初恋だった。

その後、祐一と少女はある程度は話すようになった。
だが一年後、祐一は親の転勤で遠くへ引っ越すこととなった。
臆病なまま、少女に気持ちを伝えられず。
だから、祐一は走る。
今度こそ、伝えたいから。

手持ちの武器は、見た目は昔遊んだエアーウォーターガン。
だが中に入っているのは水じゃない、濃硫酸だ。
化学反応を起こさないよう、材質も特殊なものを使用しているらしい。
替えのボトルは大量にある。
どこまでこの武器で乗り切れるかわからないが、とにかく、会わなければいけなかった。

茜……どこにいるんだ。

022 （無題）

「浩之ちゃん……たすけ……てっ」
少女の悲痛な叫びが森の中に響く。その少女を組み敷いた少年が、何かうわごとのようにしゃべりながら、少女の体をまさぐっている。
「ひろゆき？　ひろゆきならいないよ、こないよ。ひろゆきはすごいよねもう人殺ししてたよ、無抵抗な女の子を殺してたよぅ」
「いやっ！」

「ぼくみちゃったんだ殺してるのを。だからさぼくもすきにやっていいよね」
「……や、いやぁ……」
まさぐる手をはねのけようともがいても、どうしても少女の力ではとめられない。すでに上着ははだけ、下着に手を掛けられるところだった。
ブチッ！
「やだっ」
まだ未熟な少女の胸を力まかせにもみしだきながら、さらに少年は言う。
「かっこよかったよひろゆき女の子を一発で仕留めて……ねえぼくもああなるのかなあんなふうに殺されるのかな」
……そんな。ひろゆきちゃんがそんな事をするはず……ない。
「知ってるだろひろゆきってどんなやつなのか。こっていうときには他人にできないことでも平気でやれちゃうんだ、すごいよねやっぱりひろゆきは」

すでに少女には抵抗する体力も尽きかけていた。半ばなすがままにされながら、思考の闇に落ちていく。
どうしてこんなことになったんだろう。
どうして浩之ちゃんは助けに来てくれないんだろう……。
待っていたのに。出発地点から程近いこの森で。
でも、出会ったのは雅史ちゃんだけで、その雅史ちゃんは……。
少年は少女の下半身を持ち上げ、自分のモノを彼女にあてがう。
「好きだよあかりちゃんだからいいよね、もう準備はいいよね」
ぐっ！
下半身に走る激痛。
「やだぁぁぁぁっつ！」
ゆらゆらと、ゆらゆらと少女の体が揺すられる。
よだれを垂らしながら、憑かれたかのように少年は

少女を凌辱する。痛みのために時折意識が飛ぶ。しかしまた痛みのために現実に引き戻される。
……いやだ、いやだよ……誰かたすけて……
おねがいっ……
「助けてぇ！」
「そこまでにしなさい！」
そんな声が聞こえた。
次の瞬間
ビシャッツ！
生暖かい液体が少女の体に飛び散る。
微かに開いた瞼の向こう。
その光景が信じられなくて。
「いやぁぁぁぁっつ！」
少女の意識は深い闇の中へと墜ちていった。
片腕を失った少年が「ゆらり」と立ち上がる。
「じゃまをするなよいいところなのに」
……こいつ、狂ってる。
巳間晴香（九十二番）は、彼女の支給武器である日本刀を構えながら、異様な目をした少年と対峙する。
痛みを感じないの？　もしかしたら薬でも使ってるのかもしれない。となれば、説得は無意味……ね。
構えを解き、薄く目を閉じる。自分の中に植え付けられたもう一つの存在を呼び覚ます。ふわり、と彼女の青みがかった長い髪が広がる。体にみなぎる力。痛みと共に、もう一人の自分が覚醒して……そして……
「っつ！」
激しい痛みが全身を駆け抜け、力の収束が途切れる。
「何……今のは」
「どうしたのさ何をしようっていうのさ邪魔しやがって！」
まるで体術の達人のような素早い動作で少年が飛びかかってくる。突然の攻撃だが、晴香はそれと同等の動きでそれをかわす。

「この程度の力しか出せないなんて！」
彼女の力、『不可視の力』は、手をかけずとも容易に人を殺せるだけの能力。だが、いまはその力の数％も出せてはいない。
……まるで、リミッターでも掛かっているみたいだわ。
それでも、鍛え抜かれた者でなければ不可能な動きで、少年のするどい手刀をかわす。片腕を失っているにも関わらず、躊躇ない攻撃を見せる少年、攻防は長引くかに思えた。
「神岸さん！　どないしたんやっ、しっかりしぃ！」
その声に、少年が先ほどの少女の方に視線を泳がす。
「ぼくのあかりちゃんにさわるなよぉ！」
晴香との闘いを放り出し、声のした方へと駆け出す少年。その先には、先ほどの少女と、それを抱き起こそうとしている眼鏡をかけた少女がいた。
「なんや、佐藤くん、どないしたんやあんたっ！」
怯えた目をした少女。
「あかりちゃんを犯していいのはぼくだけなんださわるなようぅ」
このままじゃ危ない。再度力を呼び起こし、己の武器を槍のように構える。強い痛みが走り、力が霧散する。
……やっぱり、『力』はほとんど使えないか……
しかし、構わずに振り抜く。
「いけぇぇぇぇっつ！」
放り投げた刀が、真直ぐに彼の体を捕える。
「ぐあっつ！」
正確に少年を捕えるはずのそれはわずかに逸れ、彼の頬を傷つけたに過ぎなかった。
「きさまよくもこんなめにあわせたな！」
武器を手放した晴香に、憤怒の表情で歩み寄る少年。
パパパパパパパン！

「佐藤君！　あんた、もうどっかに行きぃや！　やないと撃ちぬくでぇ！」
眼鏡の少女が、震えながら銃を構えていた。

023　誰も死にません

さて。未だ目を覚まさぬ長森瑞佳を背負い、折原浩平は七瀬と共に森の中を歩いていた。
流石に始まったばかりだ、まだまだ体力はある筈だし、たかが女一人背負うくらいの負担、大の男たる浩平にとって、大したものであったとは思えない。しかし不思議に息が乱れる、身体が重い。
「ここらへんで良いんじゃない？」
そんな浩平を余所目に七瀬が指さした先には、ちろちろと音を立てて流れる川が見えた。浩平は頷くと、茂みの裏に長森を寝かせる。そして七瀬と顔を見合わせ小さく息を吐いた。
「取り敢えず長森が目覚めるまでここで休むか」
——たかが女一人を背負うくらいでこんなに消耗するわけがなかった。結局はこの雰囲気のせいなのだと思う。長森を捜し回るために体力を消費していたとはいえ、それがここまでに至るとは思わなかった。まだ戦いは始まったばかりだ。休める時に身体を休めておかなければ、生き残れる可能性は、ただでさえやばいのに、さらに低くなろう。
しかし——どうやって最後まで生き残るというのだろう。
浩平は草むらに腰を下ろしながら、ふとそう考える。最後の一人まで殺し合わなければならないのだとしたら、——自分は、目の前で暢気に休んでいる二人をも殺さなければいけないのだから。
——いや、何か方法があるはずだ。浩平は思い直す。その為に二人と行動する事に決めたのだから。二人だけじゃない、自分の友達全てを死なせるわけにはいかないし、そして自分以外の参加者だって皆生き残らなければならないのだ。自分達は殺しあう

ために生まれてきたのではないのだから。
殺しあう気なんてないんだ。噛みしめるように呟いた。きっと他の参加者だってそうに決まっている、――住井の言葉。耳元で友人の声が反芻される。
無意識で人を殺したんだ。
オレは、二人を護るために、人を殺してしまうかも知れない。
その時、浩平は自分の心の底で燻る熱を思う。護るためにならば、殺す。やる気になっている奴がいて、自分の守るべき二人を、守るべき友達を殺そうとしている奴がいたならば、絶対二人を護ってやる。それが浩平のこの戦いに於ける最初の「意志」だったのだと思う。
「ところでさ、折原」
「何だ？」
自分の側方から声。ここは草むらで、物音と言ったら風が草を撫で付ける耳障りな声だけだ。だからその声は無闇矢鱈によく響く。声の主など膝を抱えて座る七瀬に決まっている。何事かと返事をすると、
「その、腰に挿さってるの、ってさ、その、何？」
と、恐る恐る、浩平の腰の辺りに指を指しながら問うのである。何かあったっけ、ああそうだ。
「ん、ああ、拳銃だがそれがどうしたっ」
と言うと、
「な、何でそんな物騒なもの持ってるのよっ！」
と、すごい剣幕で七瀬はツッコミを入れてきた。
「流石だな、七瀬。やはり本場のツッコミは違う」
「本場ってなによ、このばかっ!!」
七瀬は唇を尖らせながら喚く。本場は本場に決まっている。大阪だ。
「あたしは大阪人じゃないわよっ!!」
「って、お前、オレの心の声を読んだのかっ!?」
「あんたの顔みてりゃ大体分かるわよっ」

そいつはすごい。七瀬留美は読心術師だったのか。
ともかく。浩平は小さく伸びをすると拳銃を腰から引き抜く。七瀬にその真っ黒な銃身を見せると、
「オレは拳銃なんぞに詳しくないから名前とかはしらんけど、まあそれなりに立派な拳銃だ。まあ人は殺せるだろうな」
　七瀬は少し脅えたような目でそれを見る。そりゃそうだ、七瀬にとって、いや、誰に取ったって、人殺しの為だけに存在する道具を見ることなど、初めてのことなのだろうから。
「……というかオレさっきお前に見せなかったか？　だからお前オレに突っ込んだんじゃないのか？」
「そんな憶えないわよ、ばかっ。っていうか突っ込むって何の話よ？」
　憶えていないのか。つまり七瀬さんにとってはこう、突っ込みとは日常、日常なのか。
「ほら、お前の拳なら拳銃にだって勝てるって独り言言ってた時だよ」
　子供に教えるようにそう言うと、七瀬は「あー、あー、あの時」と、納得したように手を叩く。
「って、あれはそういう意味だったの！」
「知らずに突っ込んだのか、お前は」
　さすが本場である。日常的に突っ込みのある街出身め。知らんけど。
「で、これがオレの武器らしい。……まあ、七瀬の、その天下一武道会を制した拳には、とっってもかなわないだろうがな」
「そうねえ、ってんなわけあるかどあほうっ！」
　同じネタに三度も突っ込んでくれた。しかもノリツッコミ。いやはやボケ甲斐がある漢だなあ。三村君よりすごいツッコミかも知れないと浩平は思う。いや、それは流石に言いすぎか。
「冗談だよ、半分は」
「半分……」
「……で、お前の支給品は何なんだ？」
　きょとん、とする。ああすっかり忘れてましたー

いっけねー、そんな顔である。全く七瀬さんらしいボケだ。
「まだ見てなかったのかよ。さすが七瀬だ、武器なしでも生き残れますよーだ、という自信で満ち満ちてるな」
　うーっ、といった感じの顔で浩平を睨みながら、七瀬は慌ててバックを引き寄せる。そして変わらず慌ただしい動作でそれを開けた。
「……なんだ、それ」
　銀色。金属。やけに重そうな質感。きっと銃弾だって防げるくらいの大きさである。我慢できるわけがなかった。浩平は呆然とした七瀬を見て、腹の底から爆笑してしまった。そうやって笑うことは、こういう状況ではあまり安全とはいえないのだけど。
「タライ……？」
　七瀬は眉を顰めた。肩をぷるぷるっと震わせて、「タライ」と、もう一度呟いた。
「わはははははははははははははははははははははははははははははは」
「わ、笑うな折原っ！」
「わはははははははははははははははははははははははははははははは」
「くっ……う」
「わはははははははははははははははははははははははひいいいおかしいっ」
「や、やめて、折原っ……あたしが、あたしがっ、み、みじめになってくるのっ、お願い、やめてっ」
「わはははははははははははははははははははははははははははははは」

　七瀬が悔し涙を流している。それに気づいた浩平は、自分の腹もまた痙攣のし過ぎでイカレかかっているのに気づき、ようやく笑うのをやめた。酷い男だ。
「そ、そんなに笑わなくても……あ、あたし、あたしだって、こんな、……」

涙をぽろぽろと零しながら七瀬は呟く。もう悔しさだけで胸が焼けそうな感じである。
「わ、悪かった、悪かったってばわはははは」
いや、確かに笑い事じゃないのかもしれない、と浩平は腹を捩じらせて転げ回りながらそう思う。七瀬は、もし自分と出会うことが出来なかったら、このタライと共に命を削りあうことになっていたのかも知れないのだから。悔し涙の底にはきっと死への恐怖が渦巻いていたに決まっているのだ。ああ七瀬、笑って本当に悪かったわはははははははは。
しかしこれはあまりに笑える。笑えすぎて七瀬が可哀想だ。まったく、これで銃弾なんかを避けろとでもいうのか？　それとも、
ふと浩平は思いつく。呆然とした七瀬からタライを奪い取る、半泣きの七瀬は、目を腫らしたまま怪訝な顔をして、真剣な顔をした浩平の顔を覗き込む。
「七瀬っ」
「え？」
何があったか、という顔である。
七瀬といえども、こんなところにいては頭の回転が良くないのも然るべきだ。浩平はにこりと笑い、川に向けて指を指す。
「ほら、水場が近いだろ。ちょうど良かった」
「あ。……そっか」
慰めにもならないような気がしたが、七瀬はその言葉で少し落ち着いたようである。どんな支給品も可と不可がある。拳銃じゃ水は汲めないだろう。拳銃じゃ銃弾は防げないだろう。多分。
「長森を見ててくれ。ちょっと水汲んでくるわ」
と、タライを手に浩平は駆けだす。
綺麗な水だった。透き通った川面を見て浩平は笑う。
うん、多分飲めるだろう。身体を拭いたりも出来るだろうし、傷口を消毒したり、汚れた衣服を洗濯したり、他にも色々用途は考えられる。支給された

水だけで乗り切れるかは判らないから、こういう水場の位置を憶えておけば結構役立つだろう。ふと誘惑に駆られる。静かな流れの川に足をさらしてみた。
おお、気持ちいい冷たさだなあ。
そうやってしばらく足を浸して、満足した浩平は陸に上がる。
そして顔をじゃばじゃばと音を立てて洗って、そのままごくりと水を飲む。支給されたものよりずっと冷たく、美味しい水だった。しばらくこの辺で待機しとくのも良いかも知れないな。タライいっぱいに水を入れて、浩平が立ち上がった時、

ガァンッ！

川の真ん中辺り、流れがさほど強くないところで、水が激しい音を立てて撥ねた。水しぶきが浩平にかかる。
誰かが対岸にいるっ！

未確認の人物の登場と、その明らかな敵意とを一瞬で浩平は察知する。タライの水を投げ捨てる、軽くなったそれを持って顔を身体を隠す。攻撃が命中したら事だ、本能的に身体を低くし、砂利の転がる地面に身体を投げ出す。
砂が目に入る微かな痛み、皮膚が大地に擦る鋭い痛み。けれど、そんなの知ったことではない。我慢して草むらの中に身体を放り投げる。茂みの中、浩平は腰の銃を手に取ると、弾丸が来た方向に向けて引き金を引いた。
耳に、重、と残る反響の音。まともに耳が働かなくなるかも、そんな恐怖を一瞬感じたが、大丈夫だった。もう一度水が撥ねる音が確かに聞こえた。何だ、銃くらい使えるじゃないか。命中するかはともかく撃てることは撃てる。
しかし、浩平のその僅かな安心など何のその、ただその銃声に呼応するように、また水面が撥ねる。一度、二度、三度。撥ねた水が草むらまで届き飛沫

で頬が濡れる。まずい。襲撃者の姿は確認できないが近くにいる事くらい判る。だがまだ対岸にいる筈だ、敵が川を渡る音は聞こえない。まだ時間は稼げる。
　浩平は拳銃とタライを片手に駆け出す、二人のところに戻らなければ。転がるように浩平は走る。
「どうしたの、折原っ」
　殆ど倒れるように浩平が駆け込んできたので、七瀬は怪訝な顔をして問う。
「七瀬っ、長森はまだ起きないか!?」
「う、うん。ね、ねえどしたの？」
「誰か知らないけど攻撃してくれる人が来たんだ。ここは危ないから逃げなくちゃいけないんだが……しゃあねえ、無理やりにでも起こさないと」
　浩平は眠っている長森に近付くと耳をつかみ大声で、起きろっ！　と叫ぶ。だが、いっこうに目覚める気配がない。なんだこいつは、寝起きの悪さは俺並なのじゃないか。
　ならば……
　むにゅり。むにゅり。
「うわぁ！　……、……浩、平？　七瀬さん？　え、え、えと、ここは……」
　一瞬で目を覚ました。流石女の子である、自分なら乳首舐められたくらいでは死んでも起きないね。
　しかし。女の子の乳を揉むと言うのは男が思う以上に酷いことらしい。
　右から「な、何おっぱい揉んでるのよ、ばかっ！」という七瀬の怒りの声を聞き、左から「おっぱい揉んだの、浩平っ」長森は泣きそうな声を出す。というか、乳揉むだけで目覚めるならもっと早く揉んでおけば良かった。そしたらオレだってそんなに疲れることはなかったのだ。
「今はそれどころじゃないっ！　敵が来た、逃げるぞっ！」

ガァン！　と、もう一度水が撥ねる音が聞こえる。
七瀬も長森も確かにそれを聞いたのだろう、瞬間的に青ざめる。
「浩平、」「折原っ、」
　襲撃者はこちらからの反応がないことに疑問を抱いたのだろう、とうとう川を渡ってくるようだ。じゃぶじゃぶという音を立ててこちらに近づいてくる。
　不安げな二人に叱咤するように、浩平は無理に笑顔を作って二人に言う。
「大丈夫だ！　とにかく逃げるぞ！　早く、荷物持って、走るぞ！」

　ざぶざぶと川を抜けてやってきた長身の美丈夫、月島拓也（五十九番）は、仕留め損なったかとばかりに右手に構えた巨大拳銃――44マグナムを見ながら、「まあ、どうにでもなるだろうな」と、薄く笑う。
　その目には諦めのような、敗北者のような、そんな色が確かにあった。
　瑠璃子……るりこるりこるりこ。るりこ。るりこ
ああ、逢いたい。お前と一緒に帰るためなら全部こわしてやるこわしてやるこわしてやる。

024　奇妙なコンビ

　長瀬祐介（六十四番）は身を隠すように森の中の茂みに座りこんでいた。彼は何事か一心に念じている様子だったが、やがて深いため息を吐きながらゆっくりと目を開ける。
「……だめだ。やっぱり出来ない」
　彼が持つ、普通の人間が持ち得ない能力。
　――毒電波を操る能力。
　その能力を行使することが現在、全く出来なくなっているのだ。
「この島、電波を妨害する何らかの力が働いてるのかな」

事実あのホールで説明を受けているときも、高槻とかいうあの男を『壊して』やろうと悪意ある電波を送りつづけたのだが、まるで手応えが無かった。
「殺し合い……か」
殺し合いをして、最後に勝ち残った者だけが生きて帰れる。それは、自分が妄想の世界で生み出した『全てを破壊し尽くす爆弾』と酷く似ている気がした。自分の意思で好きなように殺戮と破戒を繰り返すあの妄想の爆弾と。
「つまりは、狂ってるってわけだ……アイツも、昔の僕も」
普通であると思っていた自分。その自分がかつて持っていた、そして今も心の奥底に眠っているであろう歪んだ一面を、こんな島に来て再認識させられてしまう。祐介は苦笑いを浮かべて——瞬間、その自虐的な笑みが強張る。
物音が、聞こえた。
明らかに普段聞くことの無い異常な物音に、祐介は思考を一時中断させて素早く身を伏せる。身を隠しながら『こっちへ来ないように』と電波を飛ばすが、やはり効果は無い。一定のリズムを刻みながらそれは近づいてくるそれに、祐介は息を殺して気づかれないように願った。
「ぴこ♪」
果たして物陰から現れたのは、ぴこぴこと奇妙な物音を立てながら呑気に移動している白い毛糸玉のような物体だった。
「……な……？」
「ぴこ？」
思わずうめいた祐介に気付いたのか、毛糸玉はこちらを向いたままぴこぴこと尻尾（らしきもの）を振った。どうやら喜んでいるらしい。
「犬……なのかな？」
「ぴこ！」
元気よく、毛糸玉が吠えた。どうやら肯定の意味らしい。祐介はその毛糸玉が何なのか考えようとし

――思い出した。ホールの中にいた女の子の中に、この白い毛糸玉を持ってた娘がいたような気がする。ぬいぐるみかと思い、さして気にはしていなかったのだが。
「ふぅ……全く、世の中には奇妙な生き物もいるもんだなぁ」
　とりあえず、危険は無さそうだと判断して祐介は警戒を緩めた。毛糸玉の元へ歩み寄って、話しかけてみる。
「君、飼い主とはぐれたの？」
「ぴこ」
「その娘の匂いを、今辿ってるとか？」
「ぴこ！」
　会話が成立してしまうところに若干恐怖を覚えながらも、祐介は毛糸玉との問答を続ける。
「その娘は近くにいるの？」
「……ぴこぴこ～」
　近くにはいない、という意味らしい。尻尾を伏せてしょんぼりしてる毛糸玉を見ながら、ふと祐介は思い付く。
　犬の鼻は瑠璃子さんたちを見付けるのに役に立たないだろうか？
　まずはこの毛糸玉の飼い主を見つけて、その人と一緒にみんなを探す。うん、悪くない考えだ。祐介はそのアイデアを、毛糸玉に提案してみる。
「ねぇ。よかったら、僕と一緒に行かないかい？一緒に君の飼い主を探そうよ」
　毛糸玉はしばし沈黙したが、顔を上げると、
「ぴこ！」
　とつぶらな瞳を潤ませOKしてくれた。その吸い込まれそうな瞳に祐介はひるむ。
「……よ、よし。じゃあ、早速出発しよう」
「ぴこ」
　祐介は支給されたデイパックを背負い直す。運が良い。これなら早くみんなと合流できそうだ。
「ところで、名前はなんて言うの？」

「ぴこ」
「ぴこ、か。僕は祐介。宜しくね、ぴこ」
「ぴこ～」
毛糸玉――ポテトは違うと首を振ったが、もちろん祐介にわかるはずもなかった。

025　刹那

「美凪ぃ、国崎往人も、どこにいるんだろ」
ゲーム開始からずっとこの調子である。
彼女には頼れる人間がこの二人しかいないのだ。
そしてその二人は、今、隣にいない。
自分はひとりぼっちだ。
寂しさで心がいっぱいだった。
だから――
「みちるっ！」

往人に声をかけられ、嬉しさのあまりに、
ガスッ！
往人のみぞおちに頭突きをたたきこんでいた。
「――っ!!」
「にゃはは」
ボコッ！
「ぬにょめりゃ」
「まったくお前は……心配かけやがって」
頭をかきながら言った。
「へへへ。心配してくれたんだ」
「……一応な」
「ん、ありがと」
今度はゆっくりと、往人にしがみつく。
その顔は往人から見えなかったが、小さな肩が震えていた。
何も言わずにその頭を撫でてやる。

次の瞬間――
「……っ！」
しがみついていたみちると共に、その場を飛び退く。
一瞬遅れて二人のいた空間を、包丁を構えた少女が切り裂いていた。
「にょわわっ！」
「みちるっ、目と耳を閉じてろ！　絶対に目を開くな！」
「にょえ!?」
「大丈夫だから、早くしろ」
――大丈夫。国崎往人が守ってくれる。
みちるは素直に目を閉じ、耳を塞いだ。
往人はそれを確認した後デザートイーグルを取り出し。
人影に向けて発砲した。
それで充分だった。
弾丸は相手のこめかみをうちぬき、少女――砧夕霧（三十番）は即死した。
「もういいぞ」
「うに……」
その場を急いで離れ、みちるはようやく目を開いた。
そして問いかける。
「ねぇ、国崎往人？」
「なんだ」
「その……殺しちゃったの？」
「……俺は、お人好しの兄ちゃんじゃないんだぞ」
「うん、わかってるよ……」
そう言ってやった。
できればこの少女の口からは「死ぬ」「殺す」なんて言葉、聞きたくはなかったのに。
黒い少年の言葉が響く――殺しあうために――
だが、自分は違う。
この小さな少女を守るため、そして、どこにいる

かわからない深い母性をたたえた瞳を持つ少女を守るため。
とりあえずはその為に、殺す。
「大丈夫だ。行くぞ、美凪を探しにいかないと」
「うん……」
みちるの顔は、まだ、晴れなかった。
「そういえば、みちる。お前の支給武器って何なんだ？」
「あ、まだ見てない」
「ちょっと見せてみろ」
「うに」
鞄を往人に手渡す。
往人はそれを開け、
「どわっ!!」
思わず鞄を取り落とした。
「……マジか？」
中から、一匹の小さな白い蛇が這い出てきた。
「にょわーっ、蛇だーっ。この程度で驚くなんて、国崎往人もまだまだだねー」
ボコッ！
「にょべりゅ」
「突然でてきたら驚くだろうが！」
「うぅー、やったなー！」
ガスッ！
「ぐわっ」
みちるキックが炸裂する。
うずくまる往人をよそに、みちるは蛇に話し掛けた。
「ねぇねぇ、一緒に行く？——そう、一緒に来るんだ。にゃはは、いいよいいよ。みちるの頭の上に乗っていいよ」

しゅるしゅるしゅる。
「にゃははっ！」
「……マジか」
蛇と意思疎通をするみちるを見て、改めて「こいつは一体？」という思いが込み上げる。
でも、まぁ、何にしろ。
（笑ってくれて、よかった）
そんなことを思い、次の瞬間には自分の考えに照れていた。

三十番　砧夕霧　死亡
【残り88人】

026　交叉

七瀬彰（六十八番）は暗闇の中で目を覚ました。
同時に太股に走る感覚。半端じゃなかった、銃と言うのはかくも恐ろしい力を秘めているものか。目が覚めなければいっそ良かった、不謹慎にも一瞬そう思う。
「痛ぅ……」
しかし本音はやはり安堵。無事目覚めることが出来て本当に良かった。ああ奇跡だ、死んでなかった。そりゃそうさ、足撃たれたくらいで人は死ぬもんじゃないと思う。それに、弾丸自体がそれほど大きくなく、当たった弾の数も多くはなかったから、死ぬほど痛い、という程度で済んだのかも知れない。
しかし、ただの「死ぬほど痛い」は、「死に至る痛い」に繋がることが往々にしてある。未だに流れ続けている血を止めなくば、痛みは死に変わる。失血死の恐れがあるのだ。
ふと気づく。武器がない。武器は何処だ自分の武器は何処だ。ああそうだ、さっきあの女の子に投げつけたんだった。どうせ僕の武器はフォークだけどそれでも今はあれが必要だ。苦痛の息を吐きつつも、彰はなんとか立ち上がる。

ここはさっき女の子が襲いかかってきた場所からそう遠くには離れていない筈だ。足を引きずりながら闇の中を行く。痛い。死ぬほど痛い。ああ、赤が転々と僕の進んできた路に道標のように。ああ、誰かがこの流れ出ている血を見たら後をつけるに決まってる。早く止めないとマジで死ぬ。殺されるし死ぬ。

――あった、僕のフォークだ！　闇の中で銀色を輝かせるそれを見つけて、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ痛みを忘れ、彰はその金属の三叉に飛びつく。

こんなものを、わっざわざ戦闘に使う目的で探しに来たのなら、彰は相当な馬鹿である。馬鹿と言うか駄目な人である。

「弾丸、抜かなくちゃ」

その為にわざわざ血を流して歩いてきたのである。三つ又の先を突き刺すのは無謀なので、柄の部分で摘出を試みる。苦痛とともにある時間は少しだけなのだ。恐ろしいことに、何にも恐れることなく彰は自身の足にその異物を突っ込んだ。

――九発。身体にめり込んだ小さな弾丸をすべて抜き終えて、彰は息を吐いた。こんな気が狂いそうな島の中でなければ、自分の身体の中に、雑菌に汚れているかもしれない金属を突っ込む気にはなれなかっただろう。下着の裾を破り、血が流れている場所をきつく結ぶ。途端に白い生地は赤く染まっていく。気が狂いそうな痛みである、だが取り敢えず一番危険な因子は体内から取り除いたのだ。消毒もしなくちゃいけないな、薬も欲しいな。

――そんな事を考えている内に。

沈黙と暗闇しか自分の周りにはないことに気付く。自分以外に九十九人の人間がいる、いる筈なのに、今ここには誰もいない。

恐怖が襲いかかってきた。

それは、誰かが襲いかかってくる恐怖だとかでは

なくて、むしろ、誰もいない恐怖だったのかも知れない。冬弥、美咲さん、はるか、由綺。友人達もこの島に集められている、きっと自分と同じように震えているに決まっていた。美咲さんを守らなければいけないのだ。なのに今自分にあるのは恐怖の声だ。誰かに会いたいのに誰にも会いたくない、そんなジレンマが彰の心を貘（ばく）のように食い荒らす。

「――僕、死ぬんだろうな」

こんなフォークで、どうやって生き残れっていうんだ。好きな人だって守れない守れるわけがない。この武器で僕は美咲さんに襲い掛かる銃弾を弾き返せっていうのか？　それとも身を呈して彼女の盾に？　馬鹿げてる、馬鹿げてる、馬鹿げてる。

死ぬんだ。……怖い、怖い、怖い。

その彰の恐怖に連動するように、がさり、と震える音がした。

「だ……誰だっ」

恐怖に塗りつぶされていた彰の思考を更に揺さぶる地震が訪れる。風が揺らした音でも、小動物が駆け抜けた音でもない。数メートルの距離があるのに、その心臓の音まで聞こえるような、そんな錯覚を覚える。人がいる、人がいる、人がいる。フォークを構える（フォークだって？　それで人が殺せるのか？　自分の喉を突いて自殺するのが精一杯だろ？）、彰は茂みの中に震えた声を投げた（誰だ？誰だって関係ない、そいつはお前を殺そうと、お前がぽつぽつ流した血の跡を辿ってきた狩人だよ）。

他者。知り合いであるわけがない、知り合いであるなら隠れている意味がないから。

「出て来い……っ」

自分に叱咤を掛けるように、相手に恐怖を悟られてはいけない、精一杯の虚勢を張りながら。一歩、歩みを進める。草むらの奥にいる筈の、自分の命を狙っているに決まっている狩人の姿を、彰は覗き込んだ。

「あ、あのっ」
そこにいたのは。
亜麻色の、長い、癖のある髪。細い肩、低い背、小さな顔。ひどく小柄な、おそらく小学生高学年くらいかと思われる、可愛らしい少女だった。
「ご、ごめんなさい、殺さないでくださいっ！」
その少女は、大きなハリセン（そう、ツッコミ用のハリセンだ）を持ったまま腰を抜かしている。何も見ない、何も聞かない、とばかりに顔を伏せ、耳を塞いで震えている。
彰はふとこうやってがたがた震えている少女の姿が、何かに重なっているように見えた。決まっていた、先ほどまでの自分の姿だ。先程までの自分も、この小学生と似たような感じだったのだろうか。
そう思うと、何だか無性に笑い出したくなる気分だった。卑怯と罵るなら罵るがいい、七瀬彰は自分より明らかに弱そうな少女を見て、ようやく冷静さを取り戻したのである。

「大丈夫、僕だってやる気はないよ……」
努めて明るい声で、無理にでも、笑顔を作って。
彰はにこりとして少女に語りかける。
「え？」
少女は、震えたまま、怯えた表情を消さぬまま、こちらをちらりと見た。小動物のように大きな、ただの子供の瞳だった。
「え、あの」
戸惑いを隠せない少女の為にどうすべきか、一瞬逡巡した挙句、
「ほら、僕だってこんな武器だから」
フォークを見せる。
少女は、明らかに安堵の表情を見せた。
フォークだもんな。
「へえ、初音ちゃんはお姉さん達を捜してるんだ」
「うん」
少女――柏木初音（二十一番）は、先程とはうっ

てかわって明るい表情になって、元気に頷く。笑うとやばいくらいに可愛かった。茂みの裏で二人は並んで座り、彰が初音の声に耳を傾ける形になっている。安堵したのだろう、僅かに頬が上気しているようだった。

闇の遠くで風の音が聞こえる。けれどそこに沈黙はなかった。彰は然程闇を怖いと思わなくなった。

「お姉ちゃんが三人いて、あと、耕一お兄ちゃんっていう人を捜してるの」

話を聞いていて彰は呆れを覚える。――まったく。なんでこんな幼い小学生までが殺し合いをしなければならないのか。彰は胸の底でふつふつと熱を持って暴れ出す何かを思いながら、僅かに顔を顰める。

「でも、みんなばらばらになっちゃったから……」

七瀬のお兄ちゃんの声を聞いた時は、もう、駄目かと思ったんだよ。初音は、そう言って微笑んだ。

僅かなりとも、相手に対して安堵を覚えていなければ見せることが出来ない顔だったと思う。

まあ彰は人を殴ることも出来なさそうな顔をしているし、そのせいであったのだろうとは思う。

「よし、決めたっ」

彰は出来るだけ大きな声で、そう言った。それは勿論、明るさを振舞いながらも震えている筈の初音の心を、僅かなりにも暖めるための声だった。

「え？」

呆、と初音は彰の顔を見る。

「君の捜している人を、一緒に捜してあげる」

多分そう言ったとき、彰は、少しだけ勇気のかけらを持ったのだと思う。自分よりずっと脆弱な少女に彰は恐怖を僅かなりとも拭って貰った。そして彰の底に、このか弱い少女を守らなければならないという、そんな勇気をも与えたのだ。

それは彰が持つ一番の武器だったのかも知れない。フォークよりは余程強い。きっとハリセンよりも。

027　なにがなんだか

柏木梓（十七番）は頭を抱えていた。
いきなり島に連れてこられ、耕一やほかの三姉妹とは別のトラックに乗せられ、そうこうしているうちに自分の出発順になり、わけのわからぬままバッグを渡されて出発した。おまけに姉の言うことにゃ鬼の力は使えないらしい。
この時点で梓の頭は混乱状態だった。どうすればいいんだ。
だがさらにそれに追い討ちをかけたのはバッグの中から出てきた支給品。

某ファミレスの制服

しかも三着

制服にはそれぞれ『メイドタイプ』『アイドルタイプ』『スクールタイプ』と書かれた札がついていた。もう完全に訳がわからない。
ほかに何か入ってないかとバッグの中を調べると一枚の紙が出てきた。それにはこう書かれていた。

『防弾チョッキ（某ファミレス仕様）』

頭が痛かった。
そんな混乱状態の中、気づいたらなぜかメイド服を着ていた。

028　（無題）

「……」
「……」
運命の悪戯――
そんな言葉で片づけてもいいかもしれない。

河島はるか（二十六番）
遠野美凪（六十二番）
「……こんにちは」
「……どうも」
お互いに、何気ない挨拶を交わす。
「えと……殺し合いしなきゃダメかな」
「それは残念です……」
「じゃ、やめよっか」
「それがいいと思います」
あっさり合意し、二人はまた沈黙した。
「……」
「……あの、一緒に行く人、いる？」
「……いえ……残念ながら……」
「じゃ、行こっか」
「そうしましょう」
「良かったね」
「ぱちぱちぱちぱち……」

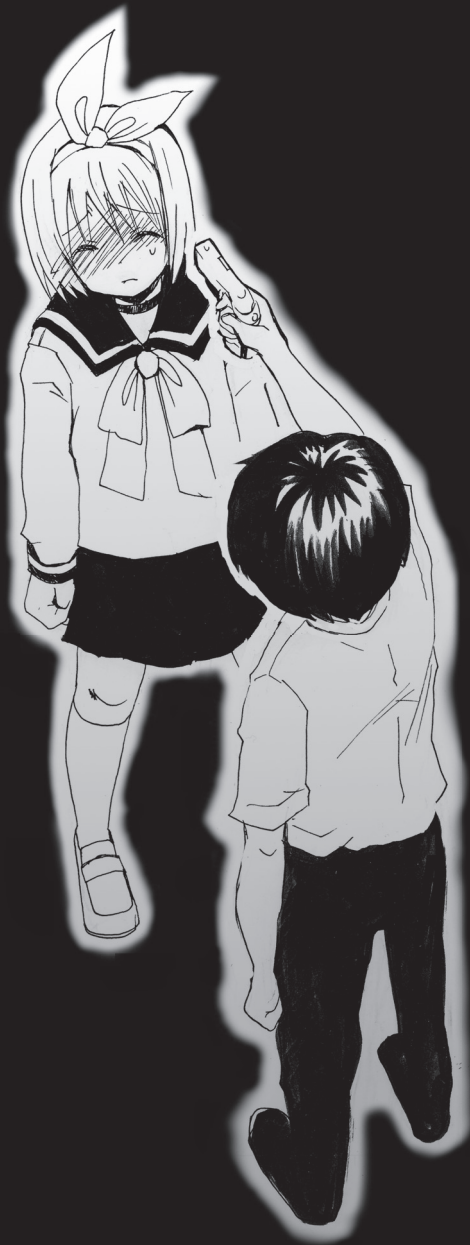
並んで歩くはるか、美凪それぞれのデイパックから は、明らかに業物と見て取れるうりふたつの刀が、その豪奢な柄頭を覗かせていた。

029　（無題）

「巳間晴香。晴香でいいわ」
「私は保科智子、智子でええよ。そしてこの娘は……」
そう言って、彼女は膝の上にのせた少女の頭をなでながらつぶやく。
「神岸……あかり」
私たちはあの後、森の中で見つけた洞窟に避難した。あの少年は、すぐに姿を消した。深手のはずだが、また再び私達を襲う可能性もある。なによりも意識を失ったままの少女……あかりを放ってはおけない。智子と二人で肩を抱え、ここまで運んできた。
「かわいそうになぁ……神岸さん、こんな目に遭お

て」
「……」
　私達がどんなに哀れんでみても、それは同情でしかない。自らの過去を振り返りながら、思う。辛かったあの日々を。そして、その思い出を汚す根源たる、忌むべき名を。
「高槻……」
「え、なんて？」
「このゲームの管理者。そして、私の目的……あいつを殺すことが」
　そう、あいつだ。あいつさえいなければ、あかりもこんな目に……私も、あんな目には遭わなかっただろうに。
「怖いことを考えるんやね」
「殺さなければ、生き残れないわ。違う？」
「……じゃあ、私達も殺すん？」
「いや……私が殺したいのは高槻だけ。他に殺したくはないわ。それじゃあ、あいつの手の上で踊っているようなものだから」
「どちらにしろ物騒やね。でも、それだけでいいん？」
　何が？　……智子の質問がわからなかった。
「私達、このゲームの参加者の中には、来須川財閥の令嬢達もおるんよ。つまり、それと同等もしくはそれ以上の組織が裏で動いとる。人一人殺せば済むもんと違うし、第一、その高槻言うんかて相当な人数に守られとるんとちがうん？」
「……」
　郁未がいれば、心強いのだけど。出発地点には、彼女はいなかった。それと良祐。でも、高槻を追っていれば、いつかは出会えるだろう。そんな気がする。
「私には別に目的はない。ただみんなで生きて帰りたいだけや。せやから、いいよ」
　智子が私を見つめる。眼鏡の向こうにある、意志を持った目で。

「仲間がいるやろ、あいつら倒すんには。私はアンタについて行く。そしてもっと仲間を増やそ。大勢おれば、あいつらに立ち向かえるかもしれん」
……正直、ありがたかった。孤独な戦いを強いられることを覚悟していたから。
「ありがとう」素直に、言うことができた。
「ただ……」そう言って、あかりを見つめる智子。
「この娘には、会わせてやりたい奴がおるんよ。そいつにこの娘を預けんと、安心できへん」
「その人は、信用できるの？」
「私の知ってる中では、一番信用できるし、頼りになる奴や。お調子者やけどな。私達にも協力してくれると思う……なにより、この子にはあいつが必要やから」
「そう……その人の名前は」
「藤田浩之、この子の幼馴染や」
……浩之ちゃん、どうして。

闇の中から、銃を握った浩之が近づいてくる。皮肉そうな笑みを浮かべながら。銃口は、確実にあかりの身体を狙っている。
やだ、いやだよ。なんで、どうして。
カチリ、と撃鉄に指をかける。
「じゃあな、あかり」
パン！
音と共に、意識がはじけ飛ぶ。
「いやぁぁぁぁぁっ！」
双眸に光があふれる。
そして、熱い、涙。
頭が真っ白になる。
そして、今見た光景は意識から消えていく。
かわりに、自分の身に起きたこと……思い出したくない、イヤなことが意識に流れ込んできた。もう、声も出なかった。ただ、涙があふれた。止まらなかった。

「神岸さん……」
　聞き覚えのある声が、側から聞こえた。そして、別のほうから差し出された腕に、私は頭を抱きかかえられた。暖かかった。誰だかわからないその人は、なぜだか、私の悲しみをわかってくれているように感じた。
「辛くても、全てを受け止めなさい。そして自分で整理して、心の奥にしまってしまうの」
「わたしも、そうだったから」
　そんな声が、心の中で響いた。

030　（無題）

「さて、これからどうしたものかしら」
　出発して海岸を歩いていた来栖川綾香（三十六番）はつぶやいた。
「姉さん、魔法が使えないって言ってたから私が守らなくちゃ」
　綾香は事前に姉と海岸で落ち合う事にしていた。魔法の使えない芹香は赤子同然である。芹香を守れるのは綾香だけだった。
「それにしても、妙に重いわね……私のバッグ」
　綾香はまだ開けていなかったバッグの中身を確認した。
「何これ……ミサイルかしら？」
『小型爆導索』と書かれた兵器が綾香のバッグに入っていた。グループ行動をしている相手なら一網打尽に出来る強力な兵器である。しかし兵器に関する知識などない綾香にとってそれは自滅しかねない武器でしかなかった。しかも、説明書らしきものは何処にも見当たらない。
「まいったわね、使い方もわからないのに、邪魔になるだけだわ」
　綾香は武器を置いて行く事に決めた。格闘技者らしい選択である。ミサイルの他には水と食料、そして照準用レーザーポインタだった。

「これは何かの役にたつかもしれないわね。持っていきましょう」
荷物整理が終わった所で姉、来栖川芹香（三十七番）がやってきた。
「来たわね、姉さん」
「……（魔法が使えないから、足手まといになっちゃうけど……）」
「なーに言ってるのよ。全然そんな事無いわ。それより姉さん、バッグはもう見た？」
「……（ふるふる）」
二人で、芹香のバッグの中身を調べた。
「どれどれ……消毒液に包帯、虫除けスプレー、ジッポ——何？　この箱」
開けてみると、注射器と粉が入った小袋が入っていた。
「これは不用意に使わないほうがいいわね」
綾香は箱を閉めるとバッグの底に詰めた。
「さあ、行きましょ、姉さん」
「……（こくり）」
二人は海岸線を歩み始めた。

031　（無題）

「なんだか面倒なことになってきやがったぜ……」
藪の暗がりの中で気だるそうに御堂（八十九番）が呟く。本来強化兵である御堂にとって、こんな企画は問題ではなかった。その気になれば、あの場にいる全員を相手にしても負けない自信もあった。
（といっても、蝉丸ら他の強化兵もいたので一筋縄ではいかなそうだが）
だが、ここに来てから何故か強化兵としての超感覚が上手く働かない。そう、あの最初の犠牲者——御影すばるとかいう女——が殺されるずっと前から。恐らくは他の強化兵にもそれは及んでいるのだろう。
（正義感の強い蝉丸あたりがあの場を黙って見過ごすはずがないからな……）

「正義感……反吐が出る言葉だぜ」
御堂は自分に支給されたバッグを忌々しそうに眺めた。本来、人間であった頃から銃の名手として名を馳せた御堂。いや、銃だけでない。御堂の生きていた大戦中に考えられたであろう武器のすべてに精通し、使いこなしてきたといっても過言ではない。支給された武器が銃に越したことはない。しかし、たとえ鉛筆が武器であったとしても常人には負ける気はしなかった。
そう、強化兵としての力が使えなくてもだ。
御堂に支給された武器……いや、武器であろう物体は人懐っこそうにこちらを窺っては大きなあくびを繰り返していた。
「な～ご～」
猫の声。御堂は再び舌を鳴らした。
口のまわりや耳などは茶毛ではあるが、白い猫。
「俺ぁ黒い猫が好きなんだよ……」
おまけに支給されていた水や簡易食も既に食い散らかされていた。
「武器にもなりゃしねぇ……どこぞでは既にドンパチやらかしてるってのによ……情けねぇにもほどがあるぜ……」
割と遠くない位置で銃声が響いたのはまだ少し前のこと。少なくとも銃火器を手にした参加者がいるということだ。
「にゃあ」
「にゃあじゃねぇよ……殺すぞこのくそ猫」
御堂はこれからのことを考えていた。武器がなくとも白兵戦なら身一つでできる。倒した奴から武器を奪い取って戦う……
これが御堂のシナリオだった。
「このクソ猫はどうするか……」
いつの間にかそのクソ猫は御堂の頭の上へと移動していた。猫を連れては隠密行動もできない。百害あって一利無しだ。
「殺すか……」

御堂の目が殺気を放つ。普通、動物は相手の気に敏感なものだが、この猫は少したりとも動揺しなかった。それどころか頭の上で丸くなってうにゃぁとか鳴いてる始末だ。
「お前飼い猫か？　そんなことじゃどの道長生きはできねぇなぁ……いや、お前にも使い道はあるか」
「それこそ囮や偵察（偵察は無理だろ……）に活躍してもらうとするか。武器にされるぐらいだ、それなりの訓練はされてんだろ？」
脅すような御堂の口調にも猫は間の抜けた声をあげるだけだった。
「ちっ、もう行動するぞ……自分の足で歩けよな」
「なぁ～ご」
「……けっ好きにしやがれ！　コキ使ってやるからな……聞いてんのかおいっ!!」
一人と一匹は緑の生い茂る林道の奥へと消えた。殺戮という名のゲームへと参加するために……。

032　天沢郁未包囲網

島の空に高槻の顔が映し出された。
「この時間までの死者を発表するぞ。

二番　藍原瑞穂
八番　岩切花枝
二十八番　川名みさき
三十番　砧夕霧
三十九番　上月澪
五十二番　セリオ
五十五番　高瀬瑞希
六十三番　長岡志保
六十七番　名倉友里
七十五番　広瀬真希
九十五番　宮田健太郎

以上十一人だ」
「多分能力者の諸君は、気づいているだろうが、この島には能力者の能力を弱める結界を張らせてもらっている」
「付け加えてだが、俺を殺せば全て終わると思う奴らは何時でも俺を殺しに来ればいい。だが、俺を殺せば、ミサイルが発射されて島ごと木っ端微塵だがな。能力を制限している結界装置を壊しても同様だ……だが、そうだな。これから上げる五人を殺せば解除を考えてやってもいい。死にたくなければ、まずこの五人を殺すことだなハッハッハッ――」
高らかな笑い声の後、五人の名前と写真が大空のモニターに映し出された。

三番　天沢郁未
二十二番　鹿沼葉子
九十二番　巳間晴香
九十三番　巳間良祐
六十六番　名倉由依

033　守ることと、殺すこと

放送が切れ、周囲に静けさが戻る。
その内容は、浩平、瑞佳、七瀬の三人に大きな衝撃を与えていた。
「……うそだろ、おい」
死んだ人間の中には、自分の知り合いが既に三人も入っている。
ゲーム開始から、多分まだ、そんなに時間はたっていない。
それなのに、三人。
誰だかわからぬ殺人者に強い怒りが沸き上がる。
先輩は目が見えないんだぞ？　なんで殺されなきゃいけないんだ。
澪だってあんな性格の女の子だ。他人に危害を加えたりするはずないじゃないか。

それなのに……それなのに……っ！
だが次に広瀬のことを思う。
あいつはあの性格だ、多分誰かとやりあったんだろう。
仕方ないかもしれない。
そして、誤解から住井をも殺そうとした、自分。
そうだ、これはデス・ゲームだ。
殺人者のやっていることは、ゲーム内では「正しい」。
結構じゃないか……だったら俺も……やってやる。
先輩や澪を殺した奴をぶっ殺し、障害になる奴全員、ぶっ殺してやる！
強く握った拳からは、爪が肌に食い込み、血が流れていた。
強く噛んだ唇も、歯が食い込んで、やはり血が流れる。
黒い思いに取り憑かれた浩平を、
「ダメだよ、浩平……」
そんな浩平を、瑞佳は後ろから、優しく抱き締めた。

「長森――」
「ダメだよ。確かに、誰かを――殺さないと」
自分の口から出た「殺す」という言葉の大きさに、瑞佳は一瞬言葉を切る。
気持ちをおちつかせ、続けた。
「殺さないといけないかもしれないけど。それでも、怒りにまかせてそんなことしちゃ、だめだよ。浩平には、そんな風になって欲しくないよ。そんな浩平、嫌だよ……」
殺されたくなかった。
それ以上に、殺したくなかった。
どうして簡単に人を殺せるんだろう。
わたしを助けてくれた住井君は、人を殺したのに、笑っていた。
怖かった。

どうして、あんな風に笑えるのだろう。
それがわからなかった。
綺麗事だとわかっていても、人間らしくありたかった。
そんな浩平でいてほしかった。

冷たい空気の中で、浩平は瑞佳の暖かさを背中に感じていた。
瑞佳の思いが伝わってくる。黒い思いが、消え去っていく。
(そうだ。オレがそんなことでどうする。オレが殺すときは、誰かを守るためだ。どうしても殺さざる得ない時だけ、その時だけ、どこまでも冷徹になればいい。そうだ。笑って人を殺すような奴に、なっちゃいけない)
「悪い、ごめんな、長森?」
腕をほどき、振り向く。
「うんっ」
瑞佳は、泣いていた。

034 (無題)

(ちがう、放送は嘘を言っている)
リアン(百番)は放送を聞いてから考え込んでいた。制限はされているけど簡単な魔法なら使えると知った後まず彼女は結界の基盤を探した、魔力の乱れを感知して彼女が知った事は、

・結界はある社に施されているという事
・何か邪悪で大きな力によって結界に傷がついた事
・結界は複数の能力を封じているという事
・ミサイルのような機械的な設備によって結界を保護するようなものはないという事

だった。しかし彼女が知り得たのはそこまでだった、突然大きな意識の塊が彼女を襲ったのだ。無防

備な状態で精神に直接打撃を加えられた彼女は、大きなダメージを受けていた。
（なんだろう、大きいけどとても悲しい力。これが防御装置なの？）
（……翼のある女の子……神……無？）
結界を壊せば元通りに力が使えるようになるはずだ。けど、しばらくは動けそうにない。大好きな姉さんとここから脱出するために、今は少し眠ろう。
起きたらまずは結界に行ってみよう。
濁り行く意識の中でリアンは小さな声で姉の名を呼んだ。

035　決別

「……月……澪、五十二番セリオ、五十五番高瀬瑞希、六十三番長岡志保、六十七番名倉……」
その放送を聞いたとき、千堂和樹（五十三番）は目の前が真っ暗になるのを感じた。
（瑞希が……死んだ……）
一瞬にして全身の力が抜ける、自らの体重を支えきれなくなった足は折れ、地面に膝をつく。
（嘘だ……嘘だ……）
うわごとのように繰り返す。
「嘘だ……嘘だ……嘘だ……」
次第に声は大きくなる、
「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ嘘だァアアアッ！」
絶叫が辺りにこだまする。
「どうしてだよ……なんでだよ……」
いつも一緒にいた存在、
助けようと思ってた仲間、
かけがえのない人、
世界で一番好きだった人、
自分の半身。
「みんな……みんなそろって助かろうと……誰一人欠けることなくまたあのこみパに戻ろうって……そう思ってたのに」

「なんでお前が逝っちまうんだよ！　瑞希ぃッ！」
最初に掲げたみんなで助かろうという決意、もうかなわない願い。
いなくなってはじめてわかる。
最初に無くしたものは、一番大切なもの。
一歩も前に進むことが出来ない。
もうどうでもよくなった。
すべてを投げ出したくなった。
すでに肉体は自らを支えることを放棄し、地面に突っ伏していた。
「みんながいても……瑞希がいないなら……」
そうつぶやくと、和樹はすべてを投げ出し意識を闇に閉した。
だが、その闇から開放されたのはすぐだった。
「こんなところでなにをしておる、まいぶらざー」
聞き覚えのある声、身を起こすとそこには九品仏大志（三十四番）がいた。
「大志か……」
力の無い声で返事をする和樹。
「どうしたのだマイ同志、なにがあった？」
「瑞希が……瑞希が……」
和樹はそう応えるのが精一杯だった、そこから先は言えなかった、涙をこらえるので精一杯だったから。
だが、大志はいともあっさりと返した。
「ああ、知っている。我輩がやったのだからな」
和樹の時が止まる。
大志の言葉はやけにあっさりとしたものだった、それが当然だといわんばかりに。
「おい、大志……いまなんつった」
「我輩が殺したのだよ、まいしすたー瑞希を」
大志がそう言いおわる前に和樹の身体が動いていた。全力で大志を殴りつける。
「大志……てめェ、なぜだ！　なんで殺した！」
「邪魔だったからな」
「き……貴様ぁッ！」

もう一発、和樹は大志の顔面を殴りつける。
「仕方あるまい、ここはそういう世界だ。殺らなければこちらが殺られる。我輩は死ぬわけにはいかんのだ！」
その言葉を聞くと同時に和樹は腹部に鈍い衝撃を受け、崩れ落ちた。
「和樹よ、一時とはいえ貴様と我輩は同じ目的のために戦った同志だ。よって今回は命は助けてやろう」
「ぐっ……待ちやが、れ……」
「もう二度と我輩の前に姿をあらわすな。我輩は貴様を殺したくはない」
先ほどとは違う感覚で意識が闇に包まれていく。
「……すまない、あさひちゃんの為、我輩は修羅に落ちるしかないのだ」
薄れゆく意識の中、和樹はそんな言葉を聞いた気がした。

036 （無題）

先程の放送の内容はさして驚くほどのことでもなかった。高槻だから。その一言で説明がつく。
天沢郁未（三番）は、慎重に辺りを探りながら歩く。割と開けた場所、そこは湖のほとり。そこで人が二人、倒れている。
既に戦闘は終わっている。だが、血の匂いだけが数刻前までの凄惨な光景を物語っていた。
「一人は……絶命してるわね」
首の骨が折れては即死だろう。わずかに目を閉じて心で弔う。そしてもう一人の男、息はあるようだ。この男がやったのかもしれない。だが、常人にあんな骨の折り方ができるだろうか。
どちらにしても先程の放送が事実ならば先ず自分の命が危ない。自分を殺せば生きて帰れる可能性が増えるのだから。

もちろん高槻がそんなことするはずがないのは百も承知だ。高槻のことだ、これも余興のひとつとしか考えてないのだろう。
少なくとも私や晴香は生きて帰すつもりはないだろうから。
先程の放送を聞いた人と行動するのは危ないだろう。いつ殺されるか分かったものじゃない。もしかしたらその中に高槻の刺客がまぎれてるかもしれないのだから。
だが、この男は気絶していた。放送を聞いていない。今は少しでも多く仲間が欲しい。郁未はこの男を助ける決心を固めた。裏切られてもリスクが少ないように、男の武器の入っているであろうデイパックは一時奪っておく。
(もちろんボディチェックも含めてだ)
助かるために他人を利用しようとしている、そんな自分が昔から嫌いだった。
「やだな……お母さん、私イヤな女になっちゃったよ……」
私は少し、泣いた。

037　⅕の脅威

「私をのけものにして、いちゃいちゃしないでくれる？」
冷めた七瀬の声が聞こえ、浩平と瑞佳は我に帰り、間を開けた。
「わぁっ！　なんてこと言うんだよっ！」
「そ、そうだぞ。仲間に入りたかったらお前も抱きついてくれれば……」
「んなことするかいっ！　どアホっ！」
ゴインッ！
タライを使ったツッコミが炸裂する。
「ぐあっ……痛いじゃないか！」
「『浩平が』『あんたが』悪いっ！」
二人そろってさらにツッコミが入る。

「で、バカはこのくらいにして。これからどうするの？」
それでもタライを持ったまま、七瀬が言った。
「そうだな。気になるのは、さっきの放送の五人だ」
「あぁ、まずはこの五人を……ってやつね。それがどうかしたの？」
「わからないか？　だから七瀬なんだ」
真顔で言う浩平に無言でタライを構える。
「わぁ、ダメだよっ！　浩平も変なこと言わないの。で、どうして気になるの？」
「つまりだ——高槻とかいう野郎がわざわざあんな放送で皆を煽ってあの五人を殺すように仕向けただろ。高槻を殺したらこの島にミサイルがっていうのは、実はあまり重要じゃない。嘘かもしれない。あの五人があいつの思惑通りに死んだら、次は自分の命が危ういんだ。それでも皆を煽った。これには何かあると思う。彼等は高槻にとって、絶対な脅威であるはずなんだ」
「へぇ……」
「折原、あんた凄いのね……」
感心する二人。
「わからない。そこまで特別扱いされるということは、逆に彼等がそう簡単に殺されることはないはずだ。返り打ちを狙って一気にゲームの参加者を減らそうとしているのかもしれない。ただの連中の遊びかもしれない。何にせよ、彼等が話せる立場の人間だったら会ってみたいが」
そこまで言ったときだった。
「私に何か御用ですか？」
浩平の背後から声が聞こえた。
驚き、銃をとるのも忘れ、振り返る。
そこには今まさに話題になっていた人物、鹿沼葉子（二十二番）が立っていた。

038　森の出会い

少年は、往人と分かれたあともなお森を闊歩していた。
先ほど流れた放送は、何名かの死を告げていた。
郁未はまだ生き残っているようだ。
それだけを確認して、少年は前に進んだ。
右肩にずっしりとした重み。
まだ一回も開いていないこのバッグだったが、これをあけずにすむならどんなにいいか、そんなことをつい考えてしまった。
北上しているつもりだったが、磁石があるわけでもないので確証はもてない。
しかし、スタート地点の位置を考えれば、おそらくこの方向であっているはずだった。
あたりは静かだった。
静かだが、確実な歩み。
そう思うと、この狂った環境でも不思議とやる気が沸いてくるものだ。
そんなことを考えつつ、十分ほどの時が過ぎる。
先ほどから視界に入るものといえば、鬱蒼と生い茂る木々だけであった。耳に入るものといえば、微風にざわめく葉の摩擦音だけであった。
だが、その中に混じる不和、違和感。
荒い吐息だった。
誰かが近くにいるようだ。
これはどうすべきかな……
少年は少し迷った。
手負いの人間を相手にするのは避けたかった。特に、一般人であればあるほど錯乱しやすいものだ。
そしてそれ以前に、無駄な戦闘は極力避けたかった。
歩みを止めてはいなかったので、とうぜんその声の主へとどんどん接近していた。当然呼吸音もより精密に聞こえてくる。
……おや？

どうも違う。
錯乱状態や極度の緊張から来るものかと思ったが、それにしては呼吸が激しすぎる。あからさまに痛みと苦しみを訴えている。そしてそれに混じったかすかな声……女の子だ。
少年は身を隠すこともせず、自然体で進んでいく。そのうちに、呼吸の主が視界に入ってきた。道端にうずくまっている女の子——立川郁美（五十六番）の姿であった。
その様子を一目見て、少年は彼女が心臓を患っているのが分かった。
「……これはほっとけないね」
郁美に接近する少年。だがよほど苦しいのか、彼女はそれに反応できない。
「大丈夫……じゃないね、とりあえずここにいてもしょうがない。移動させてもらうよ」
そういうと彼は鞄を肩に引っ掛けたまま、器用に郁美を抱き上げた。
「ちょっと揺れるかもしれないけど我慢してね。といってもそんなこと考えている余裕無いか……」
見た目に似合わない腕力だった。郁美のバッグごと抱き上げているというのに、少年はまったく重たそうなそぶりを見せなかった。そして、それまで向かっていた方向ではなく、横道にそれて歩き出した。
ざっざっざっざっ……
それまで聞こえなかった彼の足音が、今は水を打ったような静けさの森の中に響いていた。
郁美の荒すぎた呼吸も、その様子を少しずつ穏やかにしていった。
「少しは収まってきたか……発作だったのかな」
「……ハイ」
か細い声で、郁美は彼の独り言に返事をした。
「……大丈夫なのかい？」
「いつもの……ことですから」
儚げな微笑を浮かべる郁美。少年はいつもの通りの笑顔で返した。

「薬はあるかな？　調合しようかとも思ったけど発作なんでしょ？　だったら常備薬みたいなのがあるよね」
「ハイ……たしか、私のバッグの中に……」
言いかけて郁美ははっとしたような表情をした。
「私、バッグを忘れてきたかもしれません……」
「それならここさ」
少年は腕下に下がるバッグを示して見せた。
「よかった……」
郁美は安堵した表情になった。
「こっちの方に、たしか学校があったはずなんだ」
「そうなんですか？」
「うん。そこに行けば保健室が使えるし、水道も確保できる。ガスが生きていればお湯も沸かせるかもしれない。少なくとも、森の中よりはいいかと思ってね」
まあうろ覚えなんだけどね、と少年は屈託なく笑った。
「ふふっ」
郁美もつられて笑ってしまった。この島にきて、はじめて安心感を感じられる瞬間だった。
「外傷が無かったのは幸いだったけど、何でそんなに走ったんだい？」
少年が問う。
郁美は、分かりますか？　と少し不思議な顔をした。
「心臓を病んでる人がそんなに無理しちゃいけないな。それとも、誰かに追われていたのかな？」
郁美は横に首を振った。
「バッグを渡されて、それで放り出されて……気付いたら一人だったんです。そう思ったら、なんだか怖くなっちゃって。がむしゃらに走り出しちゃったんです。おかしいですよね？　こんな体じゃあそんなに遠くまで行けるわけ無いのに……」
幼い様相に似つかわしくない、ひどく自虐的な笑みだと少年は思った。

「そんなことは無いさ」
えっ、
と驚いた表情で郁美は少年を見た。
「誰にだってできないことはある。確かに傷つけば、前へ進むことが怖くなる。でも、傷ついた翼だって、傷がいえればまた飛べる。今できないからといって投げ出すものじゃない。それは君が一生付き合っていくものなんだから」
終始一貫した笑顔を少年は保ち続ける。
だがその言葉の重みは、郁美にとって彼の表情など忘れさせてしまうほどのものだった。
「そう……ですよね。ダメですよね、そんなこと言ってちゃ」
郁美は吹っ切ったような表情で彼に言った。少年はいつもの笑顔でそれに答えた。だが、そんな一瞬の感傷で癒されるような傷でもなければ、気持ちだけで治るほど郁美の病が軽くないことも少年には分かっていた。

……
…………
………………
無言の時間が続く。
だがそれにも終わりが来る。
「……見えてきたよ」
「……わぁ」
森の終わりは海岸線へと続いていた。今二人の前には、穏やかに波打つ海が広がっている。
「あるね、学校」
気のせいか、彼の口調はいかにもほっとしたような感じだった。彼は海岸からややずれた方向に目を向けていた。そちらの方角には森が広がっておらず、整備された道と学校が隣接しているのが見て取れた。
「あ、私もう大丈夫です。ここからなら歩けると思います」
郁美はそう主張した。しかし、
「無理することはないよ。それにせっかく自分の足

で歩かずにすむんだ。楽はできるときにしておいたほうがいい」
結局少年は、その申し出を却下した。
「特別サービスさ」
そんなことを言って、彼はなんとその状態から走り出した。森の出口から学校の入り口まで、あっという間だった。郁美は、風を切る気持ちよさを久しぶりに感じた。

039 転機

「大体保健室なんていうのは、一階にあると相場が決まっているものだよ」
「そうなんでしょうか……」
どんな根拠で少年がそんなことを断言しているのか、郁美にはよく分からなかった。校舎の中に入って、とりあえず少年はそこらをうろうろし始める。
「お、あった」
幾分もしないうちにそれは見つかった。視線の先には、保健室とかかれた表札がある。
「じゃあここで待っているといい。僕は電気系統とかをちょっと見てくるよ」
部屋の中に入って荷物を置き、郁美をベッドに座らせた少年はそういって立ち上がった。
「あと薬は飲んでおくんだ。多分ここの水道は生きて……ほらほら」
室内に備え付けられた流し台を見つけた少年は、きゅっと蛇口をひねって見せた。
さーーーーっ
水道は無事通っていた。
「それから食料も確保しないといけないからね。このバッグの中身だけではちょっと不安だから」
少年はバッグを肩に背負いなおした。
「じゃあ行ってくるよ」
彼はそう言って保健室を後にしようとした。
「あっ、あの……!?」

郁美は彼に声をかけた。幾ばくか、切羽詰まったような感じで。

「……なんだい？」

「えっと、その……ほ、本当にありがとうございました！」

座りながら郁美はぺこりと頭を下げる。

「いいんだよ、困ったときはお互い様って言うじゃないか」

そういって、少年は出て行こうとする。

「そ、それと……」

郁美はまだ追いすがった。

「えっと、し、死なないで下さい！」

「…………」

さすがの少年も、ちょっと目を丸くした。

「大丈夫、まだ僕は死なないよ」

諭すように、やさしい口調で彼は言った。

「じゃあ、行くよ。大丈夫、すぐ戻ってくるからそんなに心配しなくていいよ」

三度、少年は部屋を出ようとする。

「あ、あの！」

「……なんだい？」

笑顔で振り返る。なんとなくもう一回ぐらい呼ばれるような気がしないでもなかったのだ。

「そ、そのっ、あのっ」

しどろもどろになりながら、それでも何かを郁美は言おうとしていた。

「えと、えと、……なまえ！　そう名前を教えてください‼」

少年は意表を衝かれたような、そんな感じの笑みを浮かべた。

「わ、私は立川郁美って言いますっ」

郁美ちゃんか。

そうつぶやいたあと、少年は嘆息していった。

「……変な格好をした黒尽くめのお人良し。そう、覚えてくれればいいよ」

少年は部屋を出た。

とりあえず屋上から調べてみよう。電気系統なら、屋上に中枢がある可能性が高い。少年はそういう思惑で屋上に向かった。

ここは四階建ての校舎だったので、屋上には四階から上がることになる。少年は一目散に四階を目指す。

しかし、三階に入ったところで立ち止まった。

意味不明の不和感、とでも言えばいいのだろうか？　だが少年は確実にそのようなものを感じていた。言葉に表しにくいが、それでも端的に表現するなら……

ここに人がいたのではないか？

無人のはずの校舎に人がいたかも知れない事実、意味不明の不和感、それらは少年にほんの少し危険を感じさせるのに十分足りるものだった。

少年は急いで屋上を目指した。

階段を一気に駆け上る。

そして屋上と中を隔てるドアの前に立つ。

鍵は……掛かっていない。

ぎぃぃぃぃぃぃぃぃ……

屋上には誰もいなかった。

配電室を調べようと、少年は歩みを進めた。配電室は鍵が掛かっており、簡単には開けられそうに無かった。

「仕方ないな……」

懐から拳銃を取り出す。往人から渡された、ベレッタ92Fを。安全装置をはずして、鍵を銃で破壊しようとしたその時、視線の先に何か引っかかるものがあった。屋上の淵、なのだがそこだけ何かがこすれたような跡が見えた気がしたのだ。

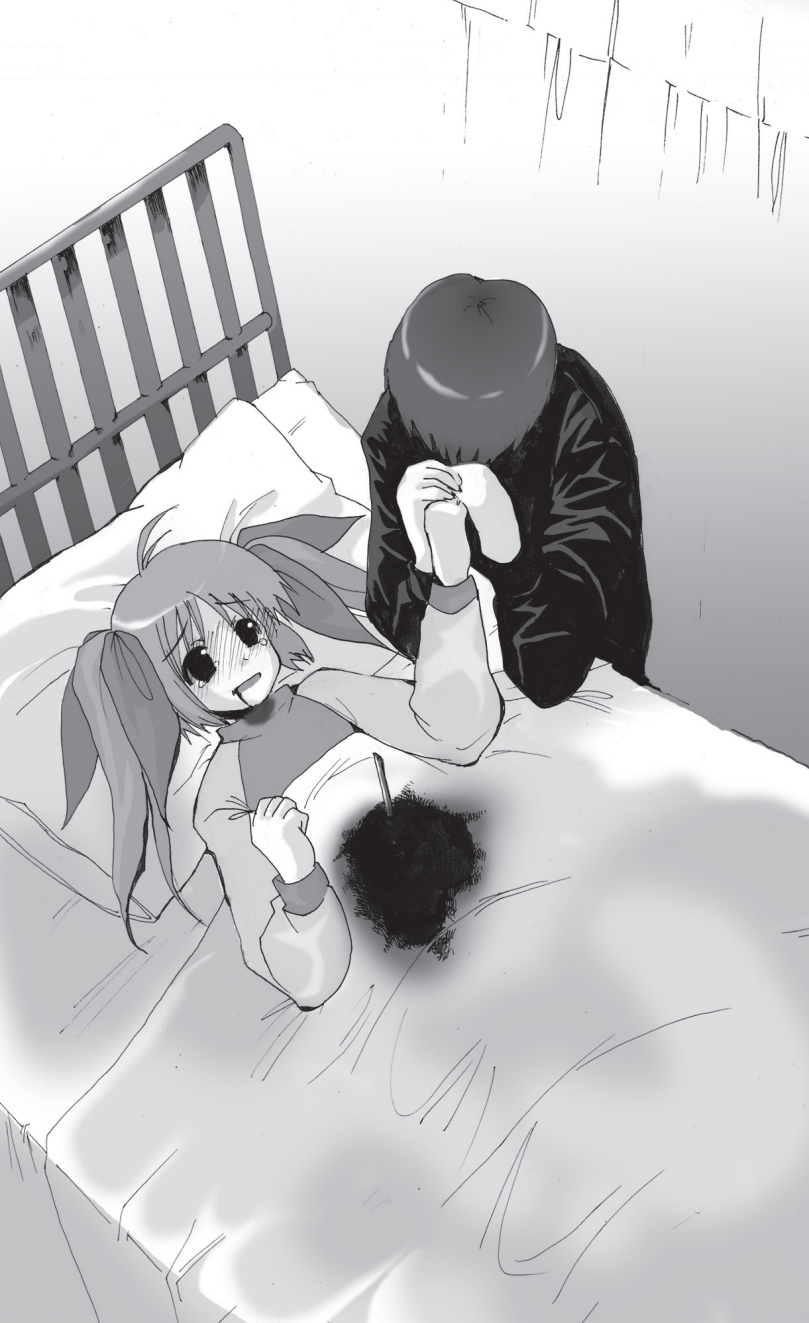
不審に思い、鍵を破壊するのをやめ、そこへ接近してみる。するとそこにあったのは何かの跡などという生ぬるいものではなかった。

血。

血がこすれついた跡だった。

少年はその下を確かめようとする。しかし、

ドクン‼
直感とでも言えるその鼓動は、彼の命を助けた。
彼は一気に体勢を崩して転がった。
そしてその一瞬後、
ひゅっっ！
ボウガンの矢が彼の体の上を通り過ぎていった。
「チッッ！」
舌打ちが聞こえる。撃ったのは……
七十七番、藤田浩之！
「くっ！」
少年はそのまま反対方向へと転がった。安全装置を外していた幸運に感謝しつつ、撃鉄を起こしトリガーに指をかける。
ダンンッッッッ！
一発だけ発砲する。しかしそれは浩之にはあたらない。装填の遅いボウガンでは、拳銃に対抗できない。浩之も、そして少年もその事実に気付いていた。
「ちきしょう！」
捨てゼリフを残し逃げる浩之。少年はそれを見て、一瞬気を吐く。だが次の瞬間、
「まずいっ！」
下には何も知らない郁美が待っているのだ！
もしあいつと鉢合わせにでもなったら……少年は駆けた。疾く速く駆けた。保健室まで全力で駆けた。
そしてそこに辿り着く。
「郁美ちゃんっっ⁉」
沈黙。
郁美はベッドに横たわっていた。
腹部から大量に出血し、白いシーツを赤く染めて。
「い、郁美ちゃん……」
呼びかけると、かすかな反応があった。
「あ……黒い……お兄さん」
「あ……ああ、そうだよ。黒い兄さんだよ」
「……ごめんな……さい、わたしっ……やっぱり、どじです……ね」

「そんなことないっ！　……そんなこと絶対に無いよ！」
「私っ、わた……し」
「もうしゃべらなくていい！　いいんだ……」
「気持ちよかったです……よ。あなたに抱っこしてもらって、風を……感じられて……」
「何度でも抱っこしてあげるよ！　だから……だから……」
ぎりっ。
奥歯を強くかみ締める。
けして泣き出さないように。
けして叫ばないように。
「ごめんなさい……もう……むり……みたい……」
少年は郁美の手を握り締めた。
郁美も、ほんのわずかな力でその手を握り返した。
「和樹さんの新刊……読みたかったな……」
郁美はてへっと、笑うそぶりを見せた。とても小さい、とても小さいものではあったが……
「ありがとう……わたし、最後に……あなたみたいな人に――」
どさっ
かろうじてこちらに傾いていた首が、反対へ倒れた。手を握るわずかな力も消えていた。
少年は、郁美の手――もう握り返してくることの無い――を両手で握り、ほんの少しの時間、震えていた。
高槻の他に、もうひとり殺さなければならない奴が出来てしまったな。
彼は思った。少年は押入れから布団を引っ張り出してきた。そしてそれを郁美を覆うようにかけた。
「……これで、もう寒くない」
置き去りになった郁美の荷物を彼は手にした。
「郁美ちゃん、君の代わりに持っていくよ」
少年は彼女にそう言った。彼は学校を後にした。
あの男はどこへ行ったのだろうか。どこまででも追う、既にその覚悟はできていた。郁美が残した鞄を

持って、再び、少年は歩き出した。
——最後に、あなたみたいな人に会えて、良かった。

五十六番　立川郁美　死亡
【残り87人】

040　（無題）

「ひぃ〜〜〜……千紗、死にたくないです。お父さんとお母さんが悲しむです。お兄さんも助けてあげて欲しいです。神様、どうか千紗をお助け下さいです。お兄さんも助けてあげて欲しいです。大庭さんも、猪名川さんも、長谷部さんも、みんなみんな助けてあげて欲しいです。誰かが痛い思いをするのは嫌です。嫌です。間違ってるです……」
「あの……もしかして千紗ちゃん？」
「にゃ!?」
理緒に声をかけられ、茂みの奥で震えていた塚本千紗（五十八番）が、びくっと身体を硬直させた。
「待って下さいです！　千紗は何もしないです！　殺し合いなんて絶対絶対ダメですぅ！」
「落ち着いて、千紗ちゃん——」
「にゃあ、身体を差し上げて許してもらえるならそうしますです。お金も、うちはとっても貧乏ですけど頑張って払いますです。だから、だから……」
「聞いてッ！　千紗ちゃん！」
理緒が、珍しく凛とした声で怒鳴った。
「は、はいですぅ……」
千紗は怯えるよりもその大声に驚いたらしく、目を丸くして縮こまった。
「あれ？　理緒ちゃんじゃないですか」
「やっと気づいてくれた……」
理緒は、小さく嘆息した。そして、表情を引き締め、
「千紗ちゃん、こんな所に隠れててもきっと見つか

っちゃうよ。私も頼りないと思うけど、一緒に、助けてくれそうな人をさがそ？」
「は、はいです。千紗、とっても不安でしたよ。理緒ちゃんが来てくれて、とっても嬉しいです」
　まるでもう助かったかのように表情を明るくし、千紗がごそごそと茂みから這い出た。
「千紗ちゃん、何か武器持ってる？」
「いいえです。そのかわり、変なCDをもらいましたです」
　そう言って、デイパックから簡素なつくりのケースを取り出す。
「こんなの、何の役にも立ちませんです。きっと、千紗は意地悪されたのですね」
「ちょっと、見ていいかな？」
　理緒はCDケースのフタを開け、真っ白なレーベルのCDをしげしげと眺めた。よく見るとレーベルの一角に『1/4』と書いてある。
「……わけわかんないね」
「ですです。捨てるのはもったいないから持ってましたけど、理緒ちゃんが欲しいならあげますです」
「じゃ、持っておくね。そのかわり……」
　理緒は、ポケットからスタンガンを取り出した。
「これ。千紗ちゃん、もしも何か危ない目に遭った時は、これで身を守って」
「にゃあ〜、ちょっと怖いですけど頂きますです」
　理緒は、内心複雑な心境だった。正当防衛と言えるのかも知れないが、結果的に他人を殺して奪ったようなものだ。それで身を守れというのは、何だかすごく汚れた行為のような気がした。
（私、人を殺しちゃったんだもんね……だから、何かあったら汚れるのは私でいい。何でもいい。償いたいよ……）
「理緒ちゃん？　大丈夫ですか？」
「あ、うん、ごめんね。じゃ、行こう」
「はいですぅ」
　理緒と千紗は、島の道ぞいに歩き出した。

041　（無題）

「晴香、今の」
「ええ」
　高槻の放送。確かに、私の名を告げていた。
「智子。あなたはどうするの」
『ただし、俺を殺せば……』
「なに言うてんの。水臭い。私はあんたに命を預けるって言うたんよ。いまさら、はいサイナラ、って言うわけないやろ」
「……あんた、馬鹿でしょ。馬鹿じゃないと、そんな考え方なんてできないもの」
　あの放送で、明らかに晴香の立場は危うくなった。仲間を集める……智子の言っていたそれは、もしかするともう絶望的なのかもしれない。
「もう、辛気臭い顔せんの。高槻って奴があんたの言う通りの奴やったら、今のが本当のこと言うとるとは思えへんし、それにアンタの名前を出したゆうことは、そんだけアンタを怖がってるってことやろ？　何とかなる、きっとなる。なぁ、神岸さん」
「……うん」
「それに、藤田君がおる。あいつなら、きっと仲間になってくれる！」
「……」
　その名に、なぜか俯くあかり。
「……んー、大丈夫や神岸さん、あいつなら無事やて。さっきの放送でも名前呼ばれんかったやろ？」
「……そう、だね」
「せや、それに他にも晴香の仲間はおる。さっき呼ばれてた四人、そうやろ？」
　……そう。由依、郁未、そして良祐。みんな、生きている。
　由依……あいつは多分大丈夫、貧乳だから。
　郁未……そう、彼女も高槻を狙っているのかもしれない。もうさっさと行動して、もしかしたらもう

高槻に近づいているのかも。
そして、良祐……
「行こう」
そう、行こう。無意味なゲームを終わらせるため。
全てに決着をつけるために。

042　休息

湖から一望できる木陰まで男を運ぶと、郁未は一息つく。
高槻……
郁未が知る限りでは最もゲスな人間。そんな人間がＦＡＲＧＯには大勢いるのかと思うと反吐が出そうだった。あくまで推測でしかないが、不可視の力を持った人間を消すのも一つの目的なのかもしれない。
殺人ゲームが余興で、むしろそれが本当の目的……？
考えられることはいくつかあった。
「でも、由依は……普通の女の子なのよ⁉」
――郁未さん！
――わわっ、酷いですよ郁未さん～！
無邪気な笑顔が郁未の頭をよぎる。
「助けなきゃ。由依を、晴香を……みんなを」
そしてお母さんを。
高槻の意図がどうであれ、郁未にできること、そしてしたいことはそれしかない。
みんなと合流する。
その後は……その時考える！
残酷かもしれないが、横で寝ている男を起こすことにした。時間は、あまりない。
「起きて……ねぇ」
怪我人にあまり乱暴にするのはためらわれたので、軽くゆさゆさと腕を揺する。
「う～ん、むにゃむにゃ……由美子さ～ん、そんなとこだめだって……」

「……」
「俺には既に激ラブな従姉妹の彼女がっ……て、あ
あ、そんな積極的に⁉」
「……」
パーーン‼
湖に肌を鳴らす音が景気良く響いた。

043 「舞と……」

舞はこのゲームが始まった時にこう言った。
「私が絶対佐祐理を守るから」
と。
ここで私を守るということ。
それは、舞が人を殺す、ということになるかもしれない。私は舞に人を殺しては欲しくなかった。人を殺すことによって、舞が昔の舞に戻ってしまうような気がしてならなかった。それに、舞には人を殺すというコトをどうしてもやってほしくなかったから。
ここに来てからの舞は、ここに来る以前の舞とは豹変していた。私と祐一さんの三人で、学校の昼食を食べていたときのような、そんな時の穏やかな舞とは全然違っていた。表情もキリっとして、硬いまま。それになにか体中から殺気が感じられた。
私はこんな舞があまり好きではなかった。
だから私は、
「ねぇ舞？　佐祐理を守ってくれるのは嬉しい。だけど、誰も殺さないで欲しい」
そう舞に懇願した。舞はきょとんとしたけど、すぐに、
「わかった、佐祐理がそう言うなら私は殺さない……」
そう言ってくれた。私は素直に嬉しかった。自然と涙が溢れてきた瞳を右手で私は拭って、
「ありがと、舞」
と私は言った。

私の武器は、デザートイーグル。
もしもの時は、これで舞を守れる。私はそう思った。
もう人を殺しているから。
一人殺したということは二人殺しても同じだから。
だから、舞が危なくなったら……
私が、やる。
私はそう心に決めていた。
舞は、森の中にあった小さな空き地で竹やりを振り回していた。
「これなら、なんとか使える」
舞はそう言って、地面に座り込んでいる私のところに来て、となりに座った。
「ねぇ、舞？　防空頭巾はどうしたの？」
私は舞に聞いた。
「ポケットにはいってる……」
舞はポケットから防空頭巾を取り出し、私に見せた。
「ほら、舞。せっかくもらったんだからつけてみようよ」
私は、舞の手から防空頭巾を取って、舞の後ろに回りこみ舞の頭に防空頭巾をつけ始めた。
「はい、できた」
私は舞の前に回りこんで、舞をみた。
「あははー、舞かわいいー」
ずっと硬い表情をしていた舞が表情を少し崩し、ポケットに手を突っ込んだ。そして、防空頭巾をもう一枚ポケットから取り出し、
「二枚あった。佐祐理にもつける」
舞は立ち上がり私の頭に防空頭巾をつけた。
「あははは一、戦時中みたいですねー」
「……ある意味そうかもしれない」
舞はそういったけど、少しクスリ、と笑ったような気がした。私は舞の表情が少し柔らかくなったのが嬉しくて仕方がなかった。

044　姉妹

「落ち付いた？」
ぐすぐすと泣き続けていた栞が落ち着くのを待ってから、香里はハンカチを差し出した。
「うん。ごめんね、お姉ちゃん」
「じゃあ、急いでこの場を離れるわよ。安全な場所に身を隠さないと」
栞に優しく話しかけながら、香里はふと視線を祐一の去った方向へ向ける。
『それにしても、相沢君の協力を仰げなかったのは痛かったわね……』
こちらは女性二人。しかも、内一人は病み上がりの身体なのだ。もし今襲われたら、恐らく二人とも助からないだろう。
「……お姉ちゃん」
「あ、何？　栞」
そんな香里の心中を察したのか、栞が不安げな顔で尋ねる。
「祐一さん、一緒に来てくれませんでしたね」
「そうね。相沢君にも都合があるんでしょ」
不安にさせないようにと努めて冷静に返答する。
だが、栞はふぅ、と息をついて力無く笑った。
「困ったなぁ。ちょっと疲れてたんで、祐一さんにおんぶしてもらおうと思ってたのに」
「栞……あなた……」
「やっぱり、楽をしようと思うとバチが当たるのかな……」
そう言って、ぺたんと地面に座りこむ栞。抱き起こす香里の手を、ぎゅっ、と栞は握る。火照った栞の手は小刻みに震えていた。
強張る香里の顔を見つめながら、栞は大丈夫、と笑顔を浮かべて言った。
「ねぇお姉ちゃん。お願いがあるんだけど……聞いてくれる、よね？」

『ちょっと動くのがつらいから……私、落ち着くまでここで休んでるね。だから、お姉ちゃんはその間に助けを呼んで来てくれないかな……？』
それが栞のお願い。当然のことながら、香里には賛同しかねるものだった。誰が襲ってくるかわからない場所に無防備な栞を置いて行け、と言ってるのだから。
「嫌よ。さ、少し休みましょう。しばらくすれば歩けるようになるわね？」
そんなこと出来るわけがない。香里はそんな栞のお願いには耳を貸さないことに決めた。引きずってでも連れていく。そう決意すると、栞の横に腰を下ろす。
「わ。ひどい。一生のお願いなんだから、お姉ちゃん、ちゃんと聞いてよ」
「……自己犠牲なんて、流行らないわよ」
おどけて言う栞に対して、香里は彼女の方を見ずに冷たく言い放つ。
「それは私が足手まといだから、って言いたいの？　お姉ちゃんだけでも逃がそうとしてる、って言いたいの？」
「言葉どおりよ。違うとでも言うの？」
「違うよ。私、そんな良い子じゃないよ。やっぱり頼りになる男の人がいないと、これから先大変だから助けを呼んで来て、って言ってるの」
「そうかしら？」
栞の方を向く。目が合った。
「わ。疑い深い人、嫌いです—」
隙を見せぬよう、あくまで無表情な香里に対し、苦しいそぶりを見せぬよう、栞は明るい調子で答えていく。
そのまま訪れる長い沈黙。香里は無言で最善の方法を再検討している。その横には、彼女の決断をじっと見つめて待つ栞がいた。数十秒の後、香里は意を決して口を開いた。
「わかったわ。三十分……いや、二十分待ってて。助けを連れて必ず戻って来るから」

そうだ。
例え栞が足手まといになるのを恐れて自分だけ逃げようとしているとしても。
それが栞の――美坂香里の妹の願いならば、あたしは、それを叶えなければいけない。
あるいはそれは。
拒絶し続けてきた妹を図々しくも姉として迎えた自分に課せられた罰なのかもしれない。
――だったら、甘んじて受けてやろう。だが、栞は守り抜いてやる。栞の身に危険が及ぶ前に、協力者を見つけて帰ってくる。そうすれば全てが上手くいくのだ。いや、上手く行かせる。絶対に、だ。
それが、美坂香里の出した結論だった。
香里は疾走する。協力者を求めて。まずは、祐一の消えた方向へ向かっていた。
「相沢君にも、事情があるかもしれないけど」
香里は走る。出来るだけ早く。栞の元に帰るために。

「こっちにも事情があるんだから、無理にでも来てもらうわ」
しばらく走り続けた後、息を整えるために立ち止まる。まだ祐一の姿は見えない。焦りが、考えまいとした思考を形にする。
『もし、帰ったとき、栞が居なくなっていたら？』
『もし、帰ったとき、栞が物言わぬ骸になっていたら？』
『もし――』
……。
「……そんなの。今は考える必要は無いわ」
香里は制服のポケットに忍ばせていた、支給武器のメリケンサックをきつく握る。その時、島の空には高槻の顔が映し出されていたが、香里の目にはそれは映らなかった。
そう。――上手く行く。絶対に。

045　僕たちの失敗

鬱蒼と茂る森の中で、北川潤（二十九番）は独り、己の幸運を噛みしめていた。彼に支給されたデイバックは他の人間のそれに比べると遥かに巨大で重いものであった。

自発的であってもそうでなくても、この茶番に乗った瞬間から、得物は豊富であるにこしたことはない。当然の事ながら最後まで生き残る事を希望している北川にとって、これが僥倖でなくてなんであろうか。

中にぎっしりと詰め込まれた何かに、あれこれと想像を張り巡らしているうちに、この尋常ならざるゲームに参加して、自分がわずかながらでも興奮しているのがわかった。とはいえ安全な場所を求め、背中に巨大なバッグを担いで森を駆け抜ける彼の様は、端からは躁病の疑いのある富山の薬売りにしか見えなかったのだが。

「まずは護だ。これが先決だな。後はアイツに任せて動いていりゃいいさ」

周りに誰もいないことを確認し、腰を落ち着けると北川はひとりごちた。

住井護。頼もしい従兄弟。いつもシニカルな笑みを浮かべて世渡りしてるあいつ。あいつに任せておけば、どういう状況になっても生き残れる確信はあったし、また北川自身も住井の足を引っ張ることなくサポートしてやれる自負もあった。それに何よりも、彼と一緒に何かやらかす事が北川にとっては楽しくて楽しくてしょうがなかった。

住井と北川は愚仲であり、中学二年の時に北川が家庭の事情で北国に転校するまで、よく一緒に脳を減らしあったものだ。コンビニでパンスト買って頭にかぶらせて『お散歩』と称し、街を練り歩いた。お互いのトランクスをかぶって街を練り歩いたりもした。母親のブラジャーをかぶって街を練り歩いた

りもした。なんだかかぶって練り歩いてばっかりだった。どれもこれも警察に捕まった時にどう説明してよいかわからないので十分位でやめてしまったが楽しかった。
　ともあれ脊髄だけで会話が成り立つ人材は中々いないので、すぐさま人間国宝に認定して月とかに打ち上げていいくらいだった。
「護に会うまで、俺だってヘマできんからね」
　キツキツになったジッパーを、壊さないように慎重に開ける。ぎしっ、ぎしっと少しずつ軋ませながら少しずつバックは開きはじめた。
「そら、ご開帳だ」
　ある程度ジッパーが緩んだのを見て、北川はニヤっと微笑んで一気にバッグを開いた。しかし、中からどさどさどさっと地面に落ちてきた物が何であるか理解したとき、彼の微笑みはそのまま瞬時に凍り付いた。
　もずく。
もずく。もずくもずく。もずくもずくもずくもずく。小さなチューブに詰められた黒いもずくパックの山。彼のバッグの中に納められていた物はマーベラスな武器ではなく、ファンタスティックな防具でもなく、スーパーで投げ売りにされている一パック五十八円のドメスティックな雰囲気漂うもずくであった。
　ディバック一杯に入ってるもずくチューブが地面に力無くこぼれおちる様を見て、北川は未来のルーレットの先は貧乏農場行きでしかないのだという事を薄ぼんやりと予感した。

046　妹のココロ――置き去りの選択――

(まず、あの五人。あんな放送がかけられるということは、全員手強そうです)
　住宅街に入った茜は、そこで放送を聞いた。
　その五人を殺せば、高槻を殺すチャンスが生まれ

るらしい。
　実のところ、茜にとってはどうでもよかった。
　死人は少ないに越したことはない、が、別に全員殺して助かってもいい。
　帰れれば、あの空き地に戻れれば、それでいいのだ。
　異様なほど静かな住宅街を注意深く歩く。
　そして、ある路地裏で、
「見つけた……」
　五人の中の一人だ。
　名前は忘れた、どうでもいい。顔さえ覚えていれば。
　だが様子がおかしかった。
　虚ろな表情でずっと空中を眺めていた。
（隙だらけ……どうしてこんな人が放送で？）
　まぁ考えても仕方がない。
　とりあえず、殺そう。
　懐から銃を出し、発砲。

　それだけで事足りた。
　動かないのを確認して、そっと近付く。
　遠目にはわからなかったが、少女にはかすかに息があった。
　そして、気付く。別人だったということに。
「ごめんなさい。別人だったみたいです」
　声をかける。
「……そんな、勘違いで殺されるなんて……浮かばれませんよ……そ、そんなこと、言う人、嫌いです……」
　少女は笑顔だった
　涙を流して、笑っていた。
「どうして笑っているんですか？」
「……私がいなくなれば、お姉ちゃんの足手纏いにならなくて、すみます」
　悲しい笑顔。ある種の強さを身に付けてしまった者の、そんな笑顔だと思った。

「……そんなのは、ただの自己満足に過ぎません。……置いていかれる人の気持ち、考えたことがありますか？」
この子を撃った自分が何を言ってるのだろう。
だが今も続いている過去の苦い記憶から、どうしても言わずにはいられなかった。
「わかって、ますよ……だけ、ど……しょうがないじゃ、ないですか。私という足枷が……なくなった方が、お姉ちゃんに、有利……だか、ら…………あは、は……お姉ちゃんに、おこられちゃ……くっ、かはっ」
違う。
あの人が自分を置いていったのとは違う。
この少女は、残された姉のことも自分なりに考えて。
「……おいていかれるきもち、も、わかります。……私も、ゆういちさんに、おいていか、れた……ばかり。ふぅ……さいご、に、あ、あいたかったた……ゆういちさん……」
目を閉じ、もう喋らなかった。
(ゆういち……祐一？)
栞が口にした人名が、茜の心を揺さぶった。
中学一年生のころ親しくしていた友達だ。
どことなく浩平に似ている気がする。
一年間だけ過ごし、そして転校してしまったが。
(まさか。「ゆういち」なんて名前の人、いくらでもいます)
思い直し、栞の鞄を手にとる。
中には目覚まし時計が入っていた。
「？」
針を合わせてみる。
『朝〜、朝だよ〜』
「……なんですか、これは？」

多少引きながら、説明書を見る。
『目覚ましの針を六時にセットし作動させると大爆発！　油断大敵だネ！』
「……不用意に触るものじゃないですね」
スイッチを切って、鞄に入れる。
「使わせてもらいます」
物言わぬ栞に向かい声をかけ、何事もなかったように歩き出す。
静寂に包まれた住宅街には、安らかな笑顔を浮かべた栞だけが残された。
笑顔の向こう側に何があったのか、それは誰にもわからなかった。

八十六番　美坂栞　死亡
【残り86人】

047　Only One

ひとつ、肩を叩かれた。
「……諦めたらそこでゲームオーバーだぞ、青年」
不敵に口の端をつり上げて、いつものように彼は言う。
唯一違うのは、彼がレミントンM31RS——ショットガンだ——を脇に抱えていることか。
「……はい。英二さんも……気をつけて」
返した言葉は、震えていなかっただろうか。
振り返らず毅然と去りゆく後ろ姿を見送って、藤井冬弥（七十六番）は緒方英二（十二番）とは逆方向にあたるブロックへと駆けだした。
忘れない。森川由綺（九十七番）が乗せられたトラックの番号は、間違いなくⅢだった。
——要するに、二人は探す人間の分担を決めるこ

とにしたのだ。
英二は理奈と、弥生。冬弥は由綺。出来ることならば、はるかや美咲、マナ、彰も助けたかった。
離れて行動するリスクは高いが、バラバラに彷徨っている彼女たちの生存確率を上げるためにはその方が有効だ、と話し合って判断した。
『十二時間後、B棟三階三号室で落ち合おう』
Vブロックスタート地点近くの住宅街。
初期段階ならば展望台や灯台、山頂ほどには目立たない、五階立てのマンション群。
ある意味盲点とも言えるそこが、彼らの前線基地となる。

何時間走ったか、冬弥は覚えていない。道中、放送が入ったけれど、そんなことは関係なかった。
自分はただの大学生だ。妙な力なんて持ち合わせちゃいないし、見も知らない人間――まして女の子を、殺せるはずがない。
そんなことより大切なのは、まだ自分の友人たちが生きているということだ。
……鬱蒼とした茂みを抜けると、一気に視界が開けた。
大きなキャンプ場だ。少し離れたところにはテニスコートも見える。その緑に、一瞬はるかを思い出した。
だが、それが命取りだったのかも知れない。
「ぁ、はは、あはは、あはははははははは！」
突如瞳にうつったのは、およそ信じ難い光景。
だってそうだろ、まさか血塗れで笑う少年が、自分に向かって飛びかかってくるなんて――
がつっ、と、鈍い音が響いた。
苦悶の呻きを短くあげ、バランスを崩した佐藤雅史（四十二番）は地面へと這いつくばる。
冬弥の支給武器、伸縮式特殊警棒が、間一髪で雅

史の顎を捕らえていた。
なんだ、なんなんだよ、こいつ……⁉
「あはは、いたいな、もう、しょうがないなあ、ひろゆきは、あははは」
「だ、誰だよひろゆきって……！」
後ずさる。
「ひろゆきは、ひろ、ゆきじゃ、ないか……はは、あは」
常軌を逸した目の色に、不可解な言動、千切れた腕。明らかな異常。逃げなければ。でなければ——殺される。
咄嗟に身を翻し、冬弥は元来た山岳の方向へと走った。無我夢中で、振り切ることだけを考えて、ひたすらジグザグに曲がる。
ひとつ、もうひとつ、またひとつ。
足が自分のものじゃあないみたいだ。だけど動かなければ。動かさなければ。

「遅いよ、ひろゆきぃ」
恐ろしく近くで聞こえた、ぞっとする声と共に、ごきり、と。関節が外れたいやな音が耳に届くと同時に、冬弥は大木に叩きつけられた。
いや、違う。むしろ——蹴り飛ばされた。
嘘だ。大の男がこんなに簡単に吹っ飛ぶか……
「やだなひろゆきあかりちゃんをさがしてたの？でもだめだよあかりちゃんはぼくだけのものになったんだきもちよかったよいっぱいないてたからきつかったよすごくかわいかったすごくすごく」
……わからない。何のことなのか、まるで意味がわからない。がっ、がっ、と、続けざまに容赦のない蹴りが浴びせられる。
例えるなら鉄球で全身を殴られているような。まるでボールを足で弄ぶような、だけどそんなものとは比にならないこの痛み。
「かなしかったんだよ、ひろゆきはぼくのたいせつ

なものばかりとるんだ、わかる？　おぼえてる？　なにもしたがらないくせにほしがるんだよねひろゆきは？　たにんのことなんかどうでもよくてじぶんだけかわいいんだよね？　おまえはいつだってかんたんにふみにじるんだそうだあかりちゃんもしほもみんなみんなみんなみんなひろゆきのせいでひろゆきが、ねえ」

ばきっ。ばきっ。ばきっ。規則的なほどに響く不快さ。胃液が零れて、上着を汚す。視界はとうにあやふやだ。草むらがざわめく音がやたら鮮明にきこえる。土と血の匂いだけがたしかなものになる。

あぁもぅ、なに、やってんだ……おれ。苦しい。くるしぃ。

「――や、――………！」

何も見えない。ユキ。ゆき。由綺。

いやだよ。こわい。怖いよ由綺。俺まだ死にたくなんか――

とかかかかかか。

――その軽い音と共に、衝撃は途切れた。

はぁ、はぁ、と。

乱れた呼吸を整える。

震える手を下ろす。

できるだけ静かに、ゆっくり、足を前に動かして、歩く。

そして。

「冬弥君…だい、じょうぶ…？」

声を。

「ぁ……ゆ、ぃ」

最後まで言えずにげほげほ、と咳き込むその姿を見て、私は横たわる死体にもかまわず駆け寄った。
「大丈夫、息できる…？」
「なん、とか」
とても苦しそうだった。傷に響かないよう慎重に背中をさすって、手を貸して立ち上がるのを手伝う。
……目を見開いたまま息絶えた男の子と目があったのは、忘れようと思った。
「ごめん……ひどいもの、見せた」
「ううん、冬弥君のせいじゃないよ」
撃ったのは、私だから。
手の中のニードルガン。高速で針を撃ち出すそれで、私は自分の意志で人を死なせたから。
「本当、ごめん」
何度も何度も、冬弥君は謝る。
そんな彼を見て、優しい人だと今さらながらに思う。

私たちは道を戻り、キャンプ場の外れにあったログハウスでおぼつかないながらも何とか冬弥君の応急処置をした。
幸い、骨までは折れていなかった……はずだ。
「私もね…ずっと冬弥君のこと、探してた。美咲さんは私より前に出ちゃったから追いつけなくて、マナちゃんは、出口で待っててくれたんだけど……」
思い出すのもつらかった。
Ⅲブロック出発地点の建物の周りを囲む広い林の中で、男の人が女の子を撃ち殺す現場を。そしてその男の人が、別の三つ編みの女の子に殺されるところを。私とマナちゃん、二人ともが目の当たりにしてしまったのだ。
「見つからなかっただけ、よかったと思う。だけどマナちゃんは怯え切っちゃって、もう誰ともいたくないのって、私を突き飛ばして一人で」
「……いいよ、言わなくて」
ああ、こんな時も、彼の声は魔法みたいに。

「マナちゃんもはるかも彰も美咲さんも、見つける。必ず英二さんが理奈ちゃんと弥生さんも連れてきてくれるから」
　みんな一緒に生きて帰れるなんて、そんな気休めでもいい。
　柔らかすぎる嘘でもいい。
「大丈夫、だから」
　ぎゅっと慰めるように抱き寄せられて、涙が出そうになった。
　だけど泣かない。
　前と同じに弱いままじゃ、冬弥君の足手まといになる。護られるだけの彼女になんか、なりたくない。
「でも、冬弥君が死ななくて、本当に良かった」
　あと少し遅ければ。この腕の温かさも、感じることが出来なかったなんて。その恐怖に比べたらずっとましだ。

　……こらえるように、目を閉じた。
　降ってきたのは、彼のキスだった。

四十二番　佐藤雅史　死亡

【残り85人】

048　涙

「うわー、なんで俺裸なんだっ……!!」
　耕一は自分の姿を見て赤面する。
「さあ、それは私に言われても——あ、私じゃないわよ？」
　郁未が早口で言いきる。耕一がある衝撃で目を覚ましてから約五分。本当はすぐにでも行動に移したかった郁未だが、状況整理のためにもお互いのことを確認しておく必要があった。自己紹介を済ませ、敵意がないことを伝え、それぞれの経緯を——というところで、耕一はようやく自分の置かれている立場に気がついた、

……体の。
微量とはいえ、鬼の力を解放したのだ。
「ううっ、見たな、俺の赤裸々な部分をっ……」
「見てない、見てないよ、うん」
その前にそれを隠してくれ、という言葉を郁未はなんとか飲みこんだ。
「うう、せめて下着くらいは残ってくれよ……俺の服」
漫画やアニメじゃないんだから仕方ないけどさ……。
お互い背中越しに会話を進める。
「そういえば、支給された武器ってなんだろう？……確認してねえや」
「見てないの？　はい、これ」
すでに気を許してる（というか、許してしまった）郁未は、バッグを背中越しに耕一に放る。
「……をい」
「どったの？」
その反応に思わず覗きこむ。
「い、いや、これは……」
慌ててそれを遠ざけるが、もう遅い。
「ぷっ……あははっ!!」
「バ、バカッ、違うぞ。俺はだな……」
何も違わない。
今日二度目の涙。
それは、そこだけありふれた日常として切り取ったように滑稽で。
「ふふ、よかったじゃない。下着が見つかって……ぷっ」
「わ！　……笑うなよ」
耕一は膝小僧を抱えこむ。その姿はひどく小さく見えた……別のイミで。
「これは……さすがに……武器か、オイ？」
黒い三角形。ブルマともよぶ。割と高性能のようで、局部には鉄板が内側から貼りつけられている。
確かにこれを装備することで急所は守られそうだ。

「しかも、男用……ぷぷっ」
「いや、上半身裸で、下は……コレか…？　イヤすぎ」
郁未はすでに腹部に相当のダメージを負っていた。
幸い外傷はない。
「も、もうダメかも……」
「それよりお前はどうなんだよ！」
郁未の体が固まる。
「え？　……私のは別にいいよ」
「いや、ダメだ。見る」
「ちょっ、待っ……！」
「……」
「……」
「……コレは？」
「……のこ……」
「えっ？」
「キノコよっ！　悪かったわね！　きっと毒入りかなんかだと、思う……かな？」

その声はだんだんとしおれていく。
「そっか、キノコか……」
耕一は遠い目をして空を見上げた。
「ど、どうしたの……？」
「使いようによってはさ……武器になるんだぜ、きっと」
「……？」

「夢を見てたんだ……」
「えっ？」
「湖のほとりで……初めて人を殺した」
震える両手を呆然と眺める。
「……」
「何も聞かないんだな」
「……そうね」
「……」
「……」
静寂が二人を包む。

「俺……うなされてたか？」
「ううん、むしろ……いや、なんでもない。忘れて」
「……そうか」
本当の寝言は違ったけど、この場を茶化すことなんて出来ない。雰囲気がそう言っていた。
「そろそろ行きましょう。みんなを助けに」
「ああ……」
男を信用し、先程の放送の件をありのままに郁未は伝えた。
耕一は護りたい人がいると言った。それだけで充分だったから。出来る限りの人を救って、そして高槻をギャフンと言わせる。
綺麗事かもしれないけど。
「でも、ホントにこの格好でいくのか……」
黒い三角形。
「安心して、もう少しマシな方法があるから」
歩きながら呟く。
「……あのー、下がスースーするんすけど」
「私だって恥ずかしいんだから我慢して」
郁未は従来の制服を上だけ着ていた。下には黒い下着…もとい、貞操帯。
「せめてパンツだけでも……」
「ぜったいにイヤ。スカートだけで我慢してよね！」
「うう、間違ってもハイキックなんてできやしないぞ」
精神的にもダメージを与えられるかもしれないが。
本当はもう一つ選択肢があった。だが、それは二人には考え付いても口には出せなかった。死者への冒涜、こんなときでもそれだけはしたくなかった。
そう思った瞬間、耕一は自分の汚した手の重さを感じ、心で泣いた。

049　姉のキモチ――あやまちの選択――

銃声が聞こえた。
まさか――
栞と別れたのは、今さっきだ。
人の気配なんてなかったはずなのに。
まさか――
まさか……
まさかっ……!?

世界は色を失っていた。
最愛の妹が、笑顔で横たわっていた。

「うそ……でしょ……、ねぇ、しおりぃ、うそだよね？　ねぇ？　ねぇってば？　どうしてへんじをしてくれないの？　ねぇ、しおり……しおりぃ……」
栞の死体に向かって叫ぶ。

反応はない。当然だ、死んでいるのだから。
理解はしていた、こんなことしても無駄だと。
だけど、とてもじゃないが、納得はできそうになかった。
「大声出すと、近所迷惑ですよ？」
「――っ!?」
目の前に三つ編みの女が立っていた。
その女は血のついた制服を着て、右手には銃を持っていて、
「あなたなの？　栞を殺したの……」
「はい」
「……あなたが……あなたがぁっ!!」
ばっと立ち上がり、メリケンサックをはめた右手で殴り掛かる。
女はその動きを読み、無理のない最低限の動きでかわしてみせた。
すれ違いざまに足をかけられる。
「!?」

そしてそのまま、バランスを崩して地面に倒れ伏したあたしの背中に、何度もナイフを突き刺した。
あたしは全身の力を失い、立ち上がることさえできなかった。
立って、栞の仇を……
この女を、殺してやりたいのに。
痛みと悔しさに、涙がこぼれる。
「……どうして……どうして栞が……」
「あなたの妹さんですか。あなたが側にいてやれば、こんなことにはならなかったと思います」
自分が間違っていたのだろうか。
協力者なんか探さずに、ずっとあの子の傍にいてあげるべきだったのか。
そうだ……きっとその方が良かったのだろう。
事実ほら、あたしが目を離した隙に、こうしてあの子は殺された。
結果論ではない。
あたしが栞の為にやらなきゃいけないことは、栞の意図を汲むことじゃなくて、
(栞を確実に守り通すこと……)
こんなことを思い違えていたなんて、取り返しがつかなくなって、はじめて気付く。
どうして『栞が物言わぬ骸になっていた』可能性を、考えることをやめたんだ。
あたしはどこまで、愚かで残酷な姉なんだ。
「妹さんの伝言です。私が死ねば、お姉ちゃんの足手纏いにならなくてすむと。妹さんの思い、無駄になりましたね」
もう痛みすらわからない背中に冷酷な声が降りかかる。
どんなに鋭いナイフよりも、その言葉はあたしの心を、深く深く抉り取った。
言葉で人を殺せるのなら、あたしの致命傷は、きっと「それ」だ。
(馬鹿……栞も、あたしもっ！)

馬鹿、そう、馬鹿な姉妹だ。
どうしてこんなことになったのかな。
相沢君、一緒に来てくれたら、よかったな……。
「相沢君の……バカ……」

茜は、香里に同情するつもりはさらさらなかった。わずかな時間とはいえ、大切な人の側から離れたのだ。
（自業自得……）
本当に大切なら、何があっても一緒にいるべきだ。妹は姉のためにベストの選択をし、姉は選択を間違えた。
それよりも茜は、栞と香里の残した言葉を気にしていた。
（相沢……ゆういち。相沢祐一……まさか、本当に？）
香里の死体からメリケンサックを回収しながら、茜は思う。

このゲームで、絶対に自分には殺せないだろう人がいる。
それは当然、柚木詩子。
もし本当に、相沢祐一がここにいるのなら。
（——殺せる？　私は……）

八十五番　美坂香里　死亡

【残り84人】

050　（無題）

屋根に大きく『Ⅳ』の数字の描かれた建物が、目の前にある。
「○○○公民館」
出発地点の一つだ。
「かなり歩いたけど、ここまで誰にもあわんかったなぁ。ま、しゃあない」
……気楽な物言いね。初めて出会った時は、震え

ながら銃を構えていたくせに……
「さ、行こか」
いつのまにか、私よりも先を歩いている。
……いい仲間ができたものだわ。
そして、もう一人に視線を合わせる。
「あかり」
「……はい」
両肩に手をのせて、言い聞かせる。
「あなたはここに残って。いい、動いちゃだめ」
「だけど……」
「晴香の言うとおりや。後詰も立派な仕事。神岸さんが後ろについてるから、私らも安心して動けるんよ」
そう、彼女の武器は強力だ。私や、智子のものよりも。
小型特殊爆弾……クマ型の。
説明書によれば、目の前の建物くらい簡単に吹き飛ばせる。いや、それ以上の威力の。
だけど、本当はそんな物を期待してなんかいない。智子も同じだろう。
……中に入れば、この手を血で汚すことになる。別にそんなことはどうでもいい。ただ、そんな姿をあかりには見せたくない。
まだ、彼女の心は不安定なんだから。
これ以上の負担は、かけたくない。
安心させるため、出来るだけの笑顔を向ける。
「じゃあ、行って来る」
「……二手に分かれた方がええなぁ」
「私はいいけど、智子、危険じゃない？」
「大丈夫。十分練習はした。うまく使えると思うし、弾もぎょうさんある」
私達は建物の裏に回りこんだ。裏には入り口が一つあったが、そこは使わず、窓から侵入することにした。目的は、高槻の居場所を探ること。たぶんここに高槻はいない。こんな建物でなく、奴ならもっと安全な所にいるだろう。ただ、手がかりはあるは

ずだ。それを見つけるため、あえて危険を冒すことにした。
「先、行くな」
窓に、智子が手をかける。幸い、カギはかかっていない。するり、と中に忍び込む。
……意外と、身軽なのね。
別の窓に駆け寄り、窓を開ける。
……ここもカギがかかっていない。
鞘から刀を抜き、注意しながら中に飛び込んだ。

「なんや……これは」
智子が見たのは、真っ赤に染まったカーペット。
その中に、野戦服の男が一人、倒れていた。
「晴香……やない、なぁ」
そのはずはない。自分の方が先に、中に入ったのだから。
「誰が、こんなん……」
注意を払いながら、廊下へと出る。

ここにも。
やはり、そこにあるのは死体。
周囲に、人気はなかった。
脇の階段を上る。踊り場にも死体が。
「いったい、何人死んでるんや」
「八人だよ、委員長」
聞きなれた声。聞きたかった声。振り向く。
——そこには、気だるそうに銃を構えた、藤田浩之がいた。
「久しぶりだな」
構えを崩さず、声をかけてくる。
「藤田君、無事やったんやね」
「ああ。おかげさまで」
そう言いながら、カチリ、と親指を引く。
「でも、もうお別れだ」
「な、なに言うてんの。冗談はやめとき！」
「冗談なんかじゃないさ……生き残るのは、この俺だけでいい」

……うそや、うそや、そんなん。
一番信頼していた。会えさえすれば、きっと全てうまくいく。そう思てたのに。
こんなん、こんなん嫌や……
「智子おっ！」
銃を構えた男が、階段の上にいる智子を狙っていた。晴香は、わずかながらの力を開放しながら、薙ぐようにして男に切りつける。
キン！
男は、いつのまにかもう一方の手にナイフを持ち、彼女の一撃をかわした。
速い。
「ちっ！」
そう舌打ちすると、男は奥の部屋へと姿を消した。
「智子、大丈夫？」
「……あ、うん」
おぼつかない足どりで、階段を下りる。
「奥の部屋へ入ったわ。さあ、早く」
……行きたくない。現実を直視できない。晴香に手を引かれるようにして、部屋の前へ来る。
「行くわよ」
ドアを開ける。その部屋の中は……
燃えさかる炎につつまれて、
「委員長！」
炎の向こう……多分、窓の外からだろう。声が聞こえる。
「次に会うときには、この決着をつけようぜ」
そういい残して。あのひとは私達のもとから姿を消した。

051　胸中＠柏木耕一

よ、親父……あの世でも元気にやってるか？
俺は元気……と言いたいところだけど、あまり元

気じゃない。
　初めて人をこの手にかけた。
　これも正当防衛っていうのかな？　……でも、そんな考えは偽善でしかないよな。今ここでは理不尽な殺戮ゲームが行われてる。そう、本当に理不尽さ。
　誰も死んで欲しくない。みんな助かって欲しいと心の底から思ってる。それは本音だ。だけど、すでに俺の罪も含めて何人もの犠牲者がでてしまっていた。
　護りたい大切な人達がいる。俺はその人達を護るため、この先また他人に手をかけてしまうかもしれない。そうしていくうちに、いつか俺が俺で無くなってしまうんじゃないか――それが恐かった。
　なあ、こんな俺にも笑いかけてくれるかい？　親父……
　今、一人の女の子と一緒に行動してる。今日、こんなところで初めて会った女性（ひと）だけど、信頼できる娘だ。今回の件では、いろいろワケ有りらしいんだけど、俺は人を見る目はあると思うんだ。その子は自分を犠牲にしてまで俺を救ってくれた。衣服がなかった俺に、服を貸してくれたんだ。おかげで彼女は萌え……いや、痛々しい格好で歩いてる。まあ、俺はもっと痛々しいかもしれないけどな。
　裸に短めのスカート一枚、
……はは、参るぜ。
梓に笑われちまう……次から変態確定だな。
初音ちゃんなんか『お兄ちゃんのH～』とかいいながら手で顔を押さえて逃げちゃいそうだし、当然顔は真っ赤だ。
　楓ちゃんもきっと……いや、あの娘はあの娘で意外性に富んでるから、手で顔を覆い隠しながらも。微妙にその指が開いてて……ゲフンゲフン
　千鶴さんなんかは……
『耕一さん、あなたを……殺します！』
……………………。
まあ、きっとシャレで収まるよ。

うん、ははは……
スカートが風にまくれる事で、こんなにドキドキしたの何年振りだろう。なあ、こんな俺にも笑いかけてくれるかい？　親父……

052　（無題）

薄暗い森の中。
坂神蝉丸（四十番）はそこにいた。
蝉丸は考えていた。
自分がどうするべきかを。
その軍人としての冷静さで。
――考える、きよみの事を、
――考える、月代の事を、
――考える、夕霧の事を、
――考える、高子の事を、
そしてあの診療所の医師、石原麗子や他の強化兵のことを。

……考えに対する答え。
きよみ……何とかして生きて帰したい。
彼女を想う祐二や、命を捨ててまできよみを託した光岡にかけて。それにできれば、複製身のきよみも。
月代――守らねばならない。もう二度と月代の悲しむ顔など見たくは、ない。
夕霧――心の優しい娘。だが、先程の放送が確かなら、夕霧はもういない。俺は夕霧を殺した奴を許しはしない。
高子――聡明で賢い女。彼女を夕霧の二の舞にすることはできない。
石原麗子――いまいちよくわからない。保護したいとは思うが、何か信用できない部分がある。
岩切や御堂――遭遇すればまずこの島の誰よりも強敵になるだろう。仙命樹が働かないとはいえ、戦場に誰よりも慣れているのだ。しかし、その岩切は何者かの手によって殺された。水戦試眺体として水

辺、水中においては敵のいない岩切だ。彼女の得意なフィールドでの戦いに持ち込めなかった、そう考えるのが自然だろう。だが、彼の直感はそうではないと告げていた。そうなると、岩切は水中戦で敗北したことになる。
もしかして油断したのだろうか？
奴の性格から考えて、おおよそ思いつかないわけではないが、この状況では考えづらい。ならば一体どういうことか。
いくらか前、この殺し合いの管理者の高槻とかいう奴が言っていた台詞。
『多分能力者の諸君は、気づいてるだろうが――』
……他にも、いる。
一体どのような力を持つ者がいるかはわからないが、いるのだ。俺達強化兵のような、あるいはそれをも上回る力を持った者が。加えてこれも高槻が言っていたが、能力者の力は弱められているらしい。
それなのに岩切を殺せる者がいる。

とにかくわかった事は、脅威は残る強化兵の御堂だけではないということだ。ならばなおさら、きよみ達を早く探さねばならなかった。
改めて出発するときに手渡された布袋の中身を見る。水や食料、島の地図等に混じって入っているのは、何か四角い物。衝撃吸収の布の中に入れられていたのは薄っぺらい箱のようなものだった。
「……確か『ぱそこん』とかいったか。情報処理が可能な電子計算機らしいが。しかしなにか説明書のようなものでもあればいいが……どうやらそういうものは無いようだな」
蝉丸はパソコンを取り出し、蓋を押し上げて観察する。モニターに入力装置、そして電源らしき物を確認できたが、下手に触って壊してしまってもいけないので、とりあえず袋の中に戻した。
それから蝉丸は辺りを見回し、太い木の枝を折ると、枝をざっと払って構えた。
「今の俺は仙命樹の無い普通の兵士と同じだ、強化

兵としての戦い方はできないだろう。頼りになるのは経験と勘だけだ。不用意な戦いは避け、かつ、もしもの時は容赦しない……待っていろ、きよみ、月代、高子……俺が守ってやる！」
蝉丸はまるで自分に言い聞かせるかのように低く静かに、だが力強くそう呟くと、陰形を保ちつつ走り始めた。

053　拾い物

柳川祐也（九十八番）は海岸にいた。海沿いに歩いて島を詳しく知る為である。左回りに島の北から、南へ六時間ほど歩いてきた。
「南北は八キロ半といった所か。東西は……十四キロ」
柳川は歩行してきた道のりを綿密に計算して大きさを計った。計算しながら海岸を歩いていると、明らかに流れ着いた物とは違う物を発見した。
綾香が放置した小型爆導索である。
「どこかの馬鹿が忘れて置いていったのか？　まあいい、貰っておくか」
柳川は小型爆導索を自分のバッグに詰めた。力が制限されているとはいえ、柳川にとってはたいして苦にならない重量だった。
「あのロボットから奪ったリモコン爆弾といい、本当にツイている」
セリオのバッグの中身はリモコン式Ｃ４プラスチック爆弾（一ダース）であった。
「後は潜伏拠点が必要だな。集落でも探すか」
柳川は再び海岸を歩き出した。周りの空が明るくなり始めていた。

054　叶い

うっわ。
浩平は目の前の、恐ろしく綺麗な少女を前に、あ

んぐりと口を開けたまま、「私が、鹿沼葉子です」
という、落ち着いた声を聞くに至る。綺麗な声で、
それだけで恋に落ちてしまいそうな響きを持ってい
た。
　はぁ、と、浩平が溜息とも返事ともつかぬ声を出
すと、その少女は、ええ、と返事を返す。ええ、と
言われてもオレはなんと反応したら良いのだろう。
　——無言である。長森も七瀬も、口をあんぐりと
したままなのである。少女は仮面のような氷のよう
な茜のような表情を崩さぬまま、そこに突っ立って
いるばかり。いや、というか、何を話せば良いんだ
ろうか？　目の前に件の人物が現れても、自分達に
とってはただ訳の分からない数学の問題に直面した
ようなものであり。
　——というか、この少女の雰囲気は何処か茜に通
じるものがあるなあ。ああそうだ、茜を探し出して
一緒に行動しなくちゃ。浩平はふとそんなことを思
っている。
　そんな場合ではなかった。
「……私を殺せば、取り敢えずミサイルで吹き飛ぶ
という事は無いですよ」
　少女が出し抜けに言った。そして、浩平の腰を指
差す。そこにあるものなど決まっている、真っ黒な
鉄の塊で人を殺すための武器だ。浩平はびくりと身
体を震わせた。この少女は何を、浩平はそこで気付
く。なんて冷たい瞳をする。自分を人間だと思って
いないかのようなロボットのような響きを持った眼
差しだった。かつての茜に、ひどく似ている。
「アホかっ」
　だから思わず浩平は叫んでいた。長森や七瀬に言
うように、ただ二文字、アホ、と。
「アホ——ですか」
　彼女はきょとんとした。生まれて初めてアホと言
われたような顔。なかなか新鮮だった。
「アホだっ。何でオレがあんたを殺さなくちゃいか
んのだっ」

その鹿沼葉子は、首を傾げて言う。
「私は、高槻を殺しにいきます。――そうしたら、あなた達は吹き飛ぶんですよ？　分かってます？」
「……そんな事が嘘だという位オレにだって判る」
鹿沼葉子は、目を丸くして浩平の顔を覗く。その表情もまたなかなか新鮮だった。
「あんなの高槻とかいう奴が抜かしたでたらめに決まっている。あんな鬼畜エロゲの悪役みたいな輩が死んだくらいで、このゲームは終わらないだろう。あの男がそんなに重要な配役を任されているようには思えない。もっと裏に大きな組織や意図が隠されているはずだ。こんな馬鹿げたことをしでかすくらいなんだから」
それが何かはまだ判らないが、それでも戯言を否定できるくらいの知性は浩平に充分あった。
「だからオレにあんたを殺す理由なんてないし、だから、自分を殺せなんてあんたが言う必要もない」
「――あなたはすごく賢い人のようですね」
そうです、多分、あれは嘘です。鹿沼葉子は――柔らかく微笑んで、そう言った。
きちくえろげの悪役、とはまたよくわからない比喩ですね――葉子さんは首を傾げながら、しかしおかしそうな顔をする。
「このゲームが企画された意図は知りませんが、郁未さんや私が巻き込まれている事を考えると、ＦＡＲＧＯがこのゲームの企画者だとは考えにくいです」
「あのっ、ふぁーごって」
長森が訊ねると、やはり葉子さんは微笑って、宗教団体です、と答えた。何の気負いもなく彼女が吐いた言葉は、しかしひどく強い響きを持っていた。
「大体、本当にミサイルが撃ち込まれたとしてもさほど問題ではないですね。私や郁未さんの力が解放されれば、そんなもの大した驚異でもないから」
マジですか。浩平は呟いてみた。

「マジです」
　葉子さんは真顔でVサイン。なかなかノリのいい人だ。
「だから、高槻は私達が怖い。私達が武器を持って攻めてくるのが恐ろしい。あいつが死ねば、きっと私達の力は解放される。そうすればこの殺し合いはすぐに終わります。だから、私はあいつを殺しに行くんですよ」
　七瀬と長森が殆ど同時に唾を飲み込む音が聞こえたし、多分浩平も同じように息を呑んでいた。この人は滅茶苦茶なことを言っている。だが、そのどれもが嘘に思えない。
「ち、力……出てないんですよね今は。力って、その、よく判らないんですけど」
　長森は、恐る恐るそう訊ねる。これにも葉子さんはにこりと笑って返事をする。
「その通り。良く原因はわからないんですけど、何やら力を抑制する結界が働いているんです」
　葉子さんは小さく溜息を吐いたが、
「しかし、あいつを殺すだけならこれで充分です」
と、バッグの中に入っていた——
「槍？」
　七瀬が呟くと、折り畳み式の槍を展開しながら、そうです、と笑った。彼女の身の丈近くの長さがある。
「そ、そんな槍一本で、銃火器に立ち向かうんですかっ」
　長森のその疑問ももっともだ。高槻は多くの護衛に守られているのに決まっているのだから。
「——ええ。でも心配は要りません、これで充分なんです。力が解放されていない、といっても」
　言うと、葉子は跳ねた。驚き、目を丸くする長森や七瀬の、その身長くらいまで飛んだ。
「このくらいの運動神経は、残っています」
　くるくると前方宙返りをしながら、たん、と着地すると、葉子さんはまた笑う。浩平も二人と同様に

その運動神経に驚いたが、それより先に目に入ってしまうものがある、これが男の性である。許して欲しい。
「白、か」
自分のボケに如何に早く反応するか、これが自分の漫才パートナーを選ぶポイントとしよう。今勝手に決めた。しかし見事見事、
「浩平のアホっ！　すけべっ！　へんたいだよっ！」
「折原のアホっ！　死ねっ！　一回地獄に行けっ！」
という、なんとも息のあったツッコミを受ける事になった。これは三人で漫才コンビを作れと言う事なのか。しかし突っ込みが二人もいるお笑いトリオなんて聞いたこともない。
そこでようやく意味を理解したのだろう、ぽっ、と、葉子さんは恥ずかしそうに顔を赤らめる。
「――次の放送が流れたら、私は高槻を殺しにいきます。それまでに、天沢郁未さんという方を見かけたら、鹿沼葉子が、高槻を殺しにいきます――と言っていたと、そう告げてください」
一頻り笑った後、葉子さんは少し肩を竦めてそう言った。
「ああ、判った。伝えておくよ」
浩平が笑いながらそう言うと、葉子さんはにこりと笑う。そして立ち去ろうとして、後ろ髪を引かれたようにもう一度振り返った。
「あなた達のように、希望を持っていてくれる人が居てくれて良かった。――高槻を殺す甲斐があるってものです。おかげで私もだいぶ救われました」
そう微笑い、槍を片手に森の陰に消えていった。
「不思議な人だったたね――あんな綺麗な人、初めて見たよー」
長森はそう呟いた。浩平は頷いて、
「すごくスタイルのいい美人だった……」
「アホっ！　あんたの頭は蛆虫の巣窟かっ」

案の定七瀬のツッコミを再び受けた。
「そういえばっ！」
長森が顔を赤くして声を上げる。何事か。
「浩平、さっきわたしのおっぱい揉んだでしょっ」
「ば、ばかっ、ああしなけりゃお前も俺たちも危なかったんだよっ」
「他に手はなかったのっ？　……もう、顔から火が出るほど恥ずかしぃよおっ」
「っ……。オレだってお前の貧乳なんか揉んだって何にも嬉しくないんだよっ」
「貧乳は関係ないでしょっ」
「大体お前の貧乳なんか小さい頃から何度も揉んできてるわこのばかやろうっ」
「うう……最悪だよ、浩平っ」
「お前の駄乳なんか揉んだオレの気持ちにもなれ！　さっきの葉子さんの乳だったらともかく」
「浩平のばかっ！　ばかばか星人っ！」
「お前の方がばかじゃないか！　駄乳～、駄乳星人っ～！」
……言い過ぎである。自覚はしているものの長森を苛めることは自分の日課なのである。こんな場所でもそれは同じだ。
「ひどいよ、浩平なんて嫌いだよっ」
「おー、嫌えよ嫌えよ、長森の駄乳なんて揉まされたオレの手が可哀想だ～ああ可哀想なオレの手」
「……ばかぁっ」
……どうやら怒らせてしまった。というか、少し泣いているではないか。オレはひどい奴だなあ。わざとだが。
「最低ね、折原。女の子の胸揉むってどーゆーことか解ってんのばかっ」
ちょっと罪悪感。漢・七瀬にそんなこと言われるのもなんだか癪だが、
「ご、ごめん、長森」
無視。
……一人前に拗ねやがってる。むかつく。

「ちょっと折原、漢って何よ!?　聞いてんのあんたっ」
無視。
浩平はとにかく下手に出る。長森を怒らせると後々面倒だ。
「長森、ごめんってば」
「ふんっ、どうせわたしは駄乳だもんっ」
「い、いや、そんなん冗談に決まってるだろっ。お前の乳は町内一、いや日本一、いや世界一だっ」
「そんな事言われても全然全然嬉しくないよっ」
「じゃ、じゃあ長森の乳は宇宙一だっ」
「そういう問題じゃないよっ！」

055　約束

スタート地点からどれだけ歩いたのだろうか。およそ五、六時間は経っているはずだ。海が近いのだろう。潮風が吹きぬける廃工場――というにはあまりにも寂れた――へとたどり着く。
「ここで休憩しよっか。でも、困ったものねぇ……ねぇ、これからどうする？」
不安げに芳賀玲子（七十番）が柏木楓（十八番）を見やる。特に面識があったわけでもない。ただ、スタート直後からなんとなく一緒に行動していた。見も知らぬ他人だけど、一人でいるよりはずっとマシに思える。先の放送――死亡者の名前に知り合いの名前があった。動揺、混乱……だが、それ以上に非現実的な今の状況をリアルと感じられない。
「これから、ですか……生き残ります」
淡々と楓が呟く。
「うーん、それはそうなんだけどね」
玲子は支給された武器――釘バット（特注）で地面をこする。確かに見てくれはよくないが、結構殺傷力がありそうだ。木製なんだろうが、見た目よりずっと軽い。銃には劣るかもしれないが、自分に銃が操れるとは思えないし、自分の身を護るのには割

楓は、自らのウェポンである一冊の本を差し出す。
それは広辞苑やコミケカタログのように厚い。
『民明書房』（角が結構痛い）
「なんか、その釘バットより重いんですけど」
「んー……あっ、それがあればいい解説者にはなれそうかもっ！」
「……額に大往生なんて、嫌です」

056　高槻の電話

はい長瀬さん。
ぇぇ、こっちは順調ですよ。スタート地点『Ⅳ』の管理連中が皆殺しにされたみたいですけどね。
どうせちっぽけな命でしょ、はっはっは。
結託して刃向かわれると面倒なんで、あの五人ははめときましたよ。ゲームに乗った連中に殺されるのもすぐでしょう。
ぇぇ、『黒い悪魔』は除外してありますよ。『殺さ

と、いや、かなり適していた。
「一つ聞いていいですか？」
「……うん？」
「玲子さんは、私が恐くないんですか？」
「へっ？」
「なんでもありません……」
「……」
「……」
「ねぇ、私達、もう友達だよね？」
「え、は、はい」
「だったら、一緒にココを出ようね。約束だよ☆」
「……はい」
玲子さんは、ずっと強い人だ。私の不安や疑念をすっと消してくれる。
（この人でよかった）
本当にそう思う。
「でも、足手まといじゃないですか？　私コレだから」

せるわけにはいかない』でしょう？
え？　はっはっ、わかりますよ。
『あれ』の調子ですか？　快調ですが。『あれ』は解放したくないでしょう？　捕まえるのに金かかってるんだしねぇ。ＦＡＲＧＯも大きな犠牲を払ってるんですから、はい。
奴の動向？　それもばっちりですよ。
——水瀬秋子——前々回のゲームの生存者ね。そんなに危険な奴には見えませんけど、まぁ気をつけるに越したことはないですか？　えぇ、じゃあ、そういうことで。大丈夫ですって、最後の一人まで、ゲームを続行させてやりますよ。——俺を誰だと思ってるんですか、くっくっ。

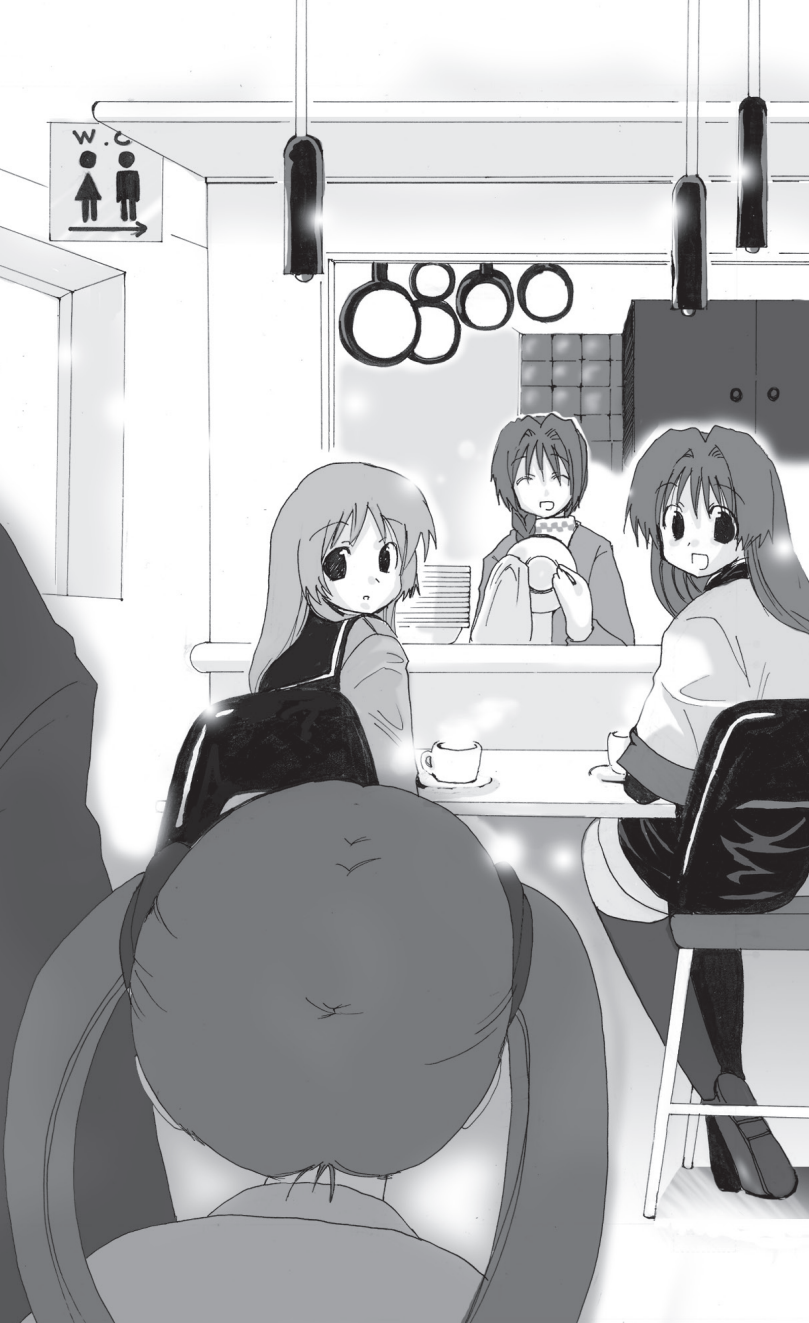
057　（無題）

「ねぇ、国崎往人？」
「……なんだ」
「うに、つまんないね」
「あぁ」
往人とみちるは商店街を歩いていた。商店街とは言っても、あの田舎町とはわけが違う。孤島の割に大きくて、状況が状況じゃなければ、沢山の人で賑わっていただろう。そんなところを、たった二人で歩いている。むなしさも感じるというものだ。
「ねぇ、国崎往人？」
「……なんだ」
「うに、つまんないね」
ボカッ！
「にょめりゅ」
「同じことを繰り返すな」
「うぅー」
こんなやりとりも、あの町で、美凪とみちると三人で過ごした日々なら。こんなにつまらないものではなかったのに。ずっと、変わらないまま、どこまでも暖かく過ごしていたかったのに。自分の使命も

忘れて、三人でいたかったのに。
「みちるチョーップ」
物思いにふけっていた隙をねらい、みちるが攻撃をしかけてきた。
「待て」
普段なら食らってやったところだが、今回は顔を押さえ付けて防ぐ。
「うにゃ、なにすんだー」
「……人がいる。一人じゃない、複数だ」
「え？」
気配がした。あの曲り角にある家の中からだ。
いや、家じゃない、喫茶店？
「様子を見てくる、ここに隠れてろ」
「……うん。国崎往人？」
「……なんだ」
「気をつけてね」
「……あぁ」
みちるの声に後押しされ、店の前へと移動した。

デザート・イーグルを構える。曇りガラスになっていて、中は見えない。
誰がいるのか。
話がわかる奴か、そうでない奴か。
前者の可能性もありうる。外からいきなり銃撃するのも気がひけた。
(正面から、あくまで慎重に)
入口に立つ。そして、思いっきりドアを蹴り開け、その場に伏せて銃を構える。
「あら、いらっしゃい」
なんとも緊張感のない声が聞こえ、往人は唖然とした。
「一休みしていきませんか？」
今だ伏せている往人に向けて、カウンターの奥から声がかかる。
「わ、またお客さんだよー」
「そうみたいですね」
「……」

とりあえず危害を与えるつもりはないらしい。ゆっくり立ち上がって、訊ねた。
「あんたら、こんな所で何やってるんだ？」
「コーヒー飲んでるんだよ」
「飲んでるんです」
沈黙。
「……マジか？」
「マジです」
カウンターの奥の女性が答える。
「あなたも飲んでいきますか？」
「……毒を盛る可能性だってあるだろ」
のほほんとした空気に包まれながらも、とりあえずそう口に出す。すぐに非難の声があがった。
「わ。この人酷いこと言ってるよ～。お母さんのいれたコーヒー美味しいのに～」
お母さん？　テーブルに腰掛けてるカウンターの女性が、この女の子の母親か。そういえば、よく似ている。
「本当にそう思いますか？」
「いや……」
思わずそう答えていた。とても、そんなことをするように思えなかった。雰囲気だけで判断するのは危険だが、もっと深いところで無条件に信用していた。
「おいしいご飯も作れますけど」
きゅぴーん。
「マジか」
「はい」
実はさっきから腹が減っていた。鞄の中の食料でも腹は膨れないこともないが、まずいのだ。
「じゃあ、遠慮なく御馳走になるぞ」
「偉そうだよ～」
また非難の声が上がる。カウンターの女性は「了承」と笑うだけだった。
そして店内に足を踏み入れ、
「みちるを無視するなー！」

背後からみちるキックを食らい、その場にうずくまった。
自己紹介が始まった。カウンターに立っている女性が、水瀬秋子。テーブルについている娘の名は水瀬名雪。もう一人髪の長い女の子は、姫川琴音といった。
「国崎往人だ」
「みちるはみちるだよっ」
これ以上ないくらい簡潔だった。秋子に食事を作ってもらい、食べる。
「うまい……」
「ありがとうございます」
他人の手料理を食べることなど稀にしかなかったが、今まで食べたどの食事よりも美味しかった。みちるは向こうのテーブルで、名雪と琴音と一緒に遊んでいる。
「蛇さんだよー」
「そうですね」
「にゃははは、ぽちって言うのだ」
最近の女の子は、蛇くらいじゃ驚かないらしい。
頭を抱えながら秋子と話す。
「あんた達はこれからどうするんだ。ずっとここにいるわけじゃないだろ。やる気になった連中がここを見つけたら……」
「大丈夫です」
何が大丈夫なのかわからなかった。
「大丈夫って。俺が急に態度を変えて、銃を向けるかもしれないんだぞ」
「そんなことはしないでしょう？」
笑って言う。
「そうかな。俺はこれでも、二人殺してるんだ」
すると秋子は少し真面目な顔になり、
「でも、無闇矢鱈に殺すことはしないでしょう」
と言う。
「どうかな……」

そう言うのが精一杯だった。
「私は、ここで静かに過ごすつもりです。最後には、あの子だけには助かって欲しい」
言って、名雪の方に目を向ける。連られて往人も目を向けた。こんな状況なのに、笑いあっている女の子達。心の奥には恐怖もあるのだろうが、それでも笑っていた。
笑顔は良いものだと思う。
出来る事なら、このゲームに巻き込まれてなお笑顔を失わない人達を助けたかった。以前の自分は、こんなことを思っただろうか。それもこれも、あの町で過ごした影響だと、心底思う。
「俺は探してる人がいるからな。少したったら失礼するよ」
「そうですか、お気をつけて……」
そこで声を切り、一転真剣な表情になる。その理由は往人にもわかった。
「戦闘か？」
「そうですね」
「様子を見てくる。みちるを頼む」
小声で告げる。
「わかりました。私が絶対に守ります」
それだけ聞き、店の出入口へと足を向ける。
「あれ、国崎往人、どこ行くの？」
近くで起きている戦闘に気付いていないみちるが言った。
「散歩だ」
言って、往人は店を出た。

058　少女と医者

「はッ……はッ……はぁッ……！」
観月マナ（八十八番）は森の中を一人、ひた走っていた。
『あの光景』を見た瞬間、マナの中で機能していた理性の箍は外れてしまった。

代わりに湧き上がってきたのは恐怖——どうしようもない恐怖だった。
気がついた時には、せっかく出会えた従姉を突き飛ばし、どこともわからない場所を全力で駆けていた。
(なんで……なんでヒト殺してるのよ！　バカじゃないの……!?)
足がズキズキと痛む。が、彼女の意思で歩を止めることはできなかった。
周囲は薄暗く、道も悪い。鋭く硬い下草や枯れ枝が、マナの腕や足を傷つけていた。
「キャッ！」
落ち葉に隠れるように張っていた太い根につまづき、マナは派手に転倒した。
「痛……いたい……よぉ……」
緊張の糸が切れてしまったのだろうか。涙が後から後から溢れてきた。
擦り傷や切り傷で身体中が痛かったし、何より精神的なショックが大きすぎた。
(あの女の人……なんだって人なんか殺せるのよ……他の人もみんなそうなの？　わかんない……私も人を殺すの？　殺せるの……？　お姉ちゃん……藤井さん)
パキッと、どこかで枝を踏む音がした。
胎児のような姿勢で、木にもたれかかって座り込んでいたマナははっと顔を上げる。
「誰!?　誰かいるの!?」
その言葉に答えるものはいなかった。
どころか、サクサクと足音は徐々に近づいてくる。
「き……来たら」
一瞬言葉に詰まったが、すぐに続ける。
「来たら殺すわよ！　わ、私のレーザーで焼き殺してやるんだから……！」
「そうか。……よっと」
邪魔な枝を手で払いながら、足音の主が姿を現した。

暗い森のなかに浮かび上がる、ともすれば場違いに感じられる白。
白衣に身を包んだ長髪の女――霧島聖（三十二番）だった。
「来ないで！　殺すって言ったでしょ!?」
「ありもしない武器でそう簡単に人は殺せない」
「え……」
ジャカッ！
聖が大きく右腕を振ると、握り締めた指の間に一本ずつ、計四本のメスが現れた。
「ひっ！」
「私は医者だ。しかも腕のいい医者だ。患者の嘘くらい見抜けないようではな」
聖は目を細めて笑うと、マナの方に一歩踏み出した。
「こ、来ない――」
ガカカカッ！
聖の放ったメスはマナの頭を紙一重で外し、正確に頭部を固定する形で後ろの木に刺さった。
「……ッ！」
「診察中は黙って医者の言う通りにするものだ。動くと可愛い顔に傷がつくぞ」
「え……」
問い掛けるようなマナの視線には応えず、聖は目の前で膝をついた。
「おーおー、随分と傷を作ったじゃないか。染みるぞ、これは」
抵抗できないマナの靴と靴下を脱がせ、白衣のポケットから消毒液を取り出すと、その中身を豪快に腕や足の患部に注ぐ。
「〜〜〜！」
「おお、耐えるか。見かけによらず気丈だな、君は」
「あ、当たり前でしょっ……！　動いたらメスで切れちゃうじゃない……！」
「おっと、すっかり忘れていた。それは気の毒なこ

とを」
　聖は悪びれずに言うと、刺さったメスを引っこ抜いた。
　それをポケットに突っ込むと、出した手には今度は救急バンドの箱が握られていた。
（あのポケット、一体どれだけものが入ってるのよ……）
　激痛に耐えながら、マナはずっとそれが気になっていた。

059　かっこつけ

　それで、ちゃっかり藍原瑞穂のマシンガンを拾っていたのは、
「夏といえば海っ、海といえば住井護っ」
　であった。海に特別な思い出がある訳ではないし、水中戦なら無敵という戦闘技能がある訳でもない。なんとなくのフィーリングである。夏の陽気は日が落ちてもなお人を浮つかせるのかもしれない。
　マシンガンはバックの中に放り込んでいた。いつでも取り出せるよう持ち手を手前側にしてある。願わくばそんな危険な武器を使いたくはないものだが。
　安全を守るだけならばこれだけで十分だ、とばかりにバタフライナイフを右手に持ち、住井護は森の中を散策している。闇の中での散策と言うのも相当に危険度が高いように住井自身も思うのだが、それでも日中に目立つ行動をするよりはマシだと思う。住井は心の拠り所たるひとつの目的を胸に、音を立てないように慎重に、しかし、機敏に歩き回る。
　要は、従兄弟である北川潤と逢うためである。

　先程の放送で、聞いた事のある名前が呼ばれた。広瀬真希——クラスの女番長である。しかしまたスケバンとは古い言い方だなあ、と思いながらも。
「始まっちゃってるんだよ、な」
　言うまでもなく、言われるまでもなく、問い詰め

られるまでもなく、その呼ばれた名前の中に、自分が殺した少女の名前もあった筈だった。名前だって知らなかった。あの娘だってただ怖かっただけで、人を殺すつもりなんてなかったのかも知れない。なのに、オレは殺してしまったんだ。住井は腕が微かに震えている事を自覚する。

いや、自分が何もしなければ長森瑞佳が死んでいただろう。自分の判断は決して間違っていた訳ではない筈だ。

違う、違うだろう。

間違っているに決まっている。人を殺した時点で俺はゲームに乗ってしまったことになるのだから。

がさり、というやけに不用心な音がした。

どろどろになっていた思考が停止する。足を止めていつでも動けるように筋肉を緊張させた。踏みしめた落ち葉の音がやたら大きく感じる。早鐘を打つ心臓の鼓動が周りに聞こえているのではないか、気が気じゃない。

前方に感じる気配。相手の息遣いすら聞こえてきそうな程の濃密な質量に引き込まれそうになる。万有引力の法則はあらゆる場所で働く。自分とその草間の影で音を立てたものとの間にも、地球と月が引き合うような引力があるのだ。

住井はナイフを強く握った。汗が掌に滲む感触、焦りが心の湖を掻き立てる。落ち着け。落ち着け落ち着け落ち着け。落ち着かなければ、冷静にだ。

目を閉じて、心の湖の遥か奥深く、穏やかな湖中で思考する。自分が求めている北川潤の訳がない。それは解る。それでは北川潤以外の自分の知り合いか。否。折原浩平でも長森瑞佳でも七瀬留美でも、そのうちのだれの筈もなかった。

鞄の中にゆっくりと手を突っ込む。マシンガンの冷たい黒が湖の揺らめきを次第に和らげていく。

敵か敵じゃないか、実はそんなこと、どちらにしろ関係がない。敵でなければこれで脅して利用する

まで、敵ならばこれで殺すまで。そのような囁き声が確かに住井の耳元でする。
一歩踏み込む。相手がどんなであれ、マシンガンに勝てるような化け物などいるわけがないのだから。その時の住井には、唇の端に僅かに笑みを浮かべる余裕すらあった。

人生は面白いものである、と住井は思う。敵でも敵じゃない奴でもない人がそんな叢の中にいたなんて、誰が想像できるだろう。

「ひぃっ！」
声の主を見て、思わず住井護は感嘆の溜息を吐いた。
そんな、マシンガンに打ち勝つ化け物より余っ程稀有な存在が、そんなところにいるなんて驚きではないか。
草の上に腰を抜かし、割り箸（それが彼女の、見るも無残な支給品なのだろう）を片手に、がくがくと震える女性だった。
自分よりいくらか年上の人のようだが、幼さの残る顔立ち。僅かに色の抜けたショートカットの髪、嘘のように細い身体、清潔な色合いのツナギ、おっとりした目元。がくがくと震える薄桃色の唇。
ああ、なんて綺麗な人だろう。あんぐりと口を開けて、その身体全部を注視する。
住井護はその瞬間、この女性に恋をしまっていた。完全に一目惚れである。
「やめてっ、殺さないで、殺さないでっ」
涙を浮かべ嘆願する女性。その涙までもが美しい。心の海が喜びで大津波を起こす。住井護は無抵抗のまま押し寄せる波に身を委ねる。
ああ、このような場所でこんな出会いが！
この人に抱かれて殺されるならそれは本望も本望、むしろそれこそが人生の目的だ。
「――バカな！　僕はあなたを護るために生まれて

きたんです」
住井は親指をこう、ぐっ！　と立てて言った。
イイ顔だった。
「僕が、この住井護が、必ずあなたを護ります」
その女性――澤倉美咲（四十四番）は、唖然とした顔で、マシンガンを持って笑う住井護の笑顔を見つめた。

060　（無題）

「……はっ！　……ふっ！」
しゅっしゅっと風を切るワンツー。素人には出来ない身のこなし。
「……はぁ……でりゃあっっ！」
そして必殺の回し蹴りを放つ。技のキレは落ちていない。いや、むしろこの島の状況が脳をより集中状態にしていた。
八十一番、松原葵は住宅街の少しはずれ、小高い丘の神社にいた。
「…っふぅ、少し、休もうかな」
そういってつくため息は、決して特訓からくるものではなかった。
『殺し合い』
その事実はあまりにも葵にとって重すぎた。ヒトが実際に殺し合う、非日常的空間。
あきらかに、おかしい。
だからこそ葵は逃げる事も戦う事も考えずに、自分のいた日常、つまり浩之との放課後の特訓を思い出して、似たような神社に行ってシャドーをしていた。
「お水、飲も」
バッグからペットボトルを取り出して、喉を鳴らす。冷たくはなかったものの、ほどよく汗をかいた葵にはそれでもまぁ、満足のいくものだった。ペットボトルを戻そうとバッグの口を開けたとき、意識的に見ないようにしていた、黒い鉄の塊が視界に入

った。
……じわ
にわかに手に汗がにじむ。葵は良く考えてから、それを取り出してみることにした。ずしり、と重たい感触。やはり見るのをやめようとも思ったが、とりあえず見てみることにした。自分の厭な考えが的中しないように願いながら。
意を決して塊を取り上げた葵は奇妙な感覚にとらわれていた。砂漠の鷲の名を持つ大口径銃。ぽっかりと空いた銃口は自分の理性が吸い込まれてしまうかのようだった。
葵は、自分の事はそれなりによくわかっている。試合では相手を倒すことが出来るが、きっと戦いでは相手を殺せないだろうという事を。
それが当たり前。
それが日常。
でも、今ここに非日常への扉を開く鍵がある。葵が一番恐れた事。自分が生き残るために相手を殺めてしまうかもしれないという可能性。だから武器が使い物にならないものだったらどんなに良いかと思っていた。
しかし現実には、葵ほどの力があって撃ち方さえ誤らなければ、人に命中しなくても十分脅威となるモノが自分の手にあった。
いっそ、気狂いにでもなってしまったほうがどんなに楽だったろうか。あたまをくるわせて、ただひたすらにあいてをころすけものになれたら――
そこまで考えて葵はぶるんぶるんと頭を振ると、手の中の銃を地面に叩きつけた。
「……はっ……はあっ……そんなの……そんなの良いわけないですっ」
肩で息をし、奇妙な感覚にとらわれていた脳を正気に戻す。自分の見知った人たちが、自分とほぼ同年代の人たちが、傷つけ、殺しあう。
明らかな歪み。
どう考えても、良い筈が無い。

そう、良い筈が無いんだ。
自分は気狂いになれないんだから、正気な行動をするだけだ。先輩や綾香さんなら、きっと力になってくれる。みんなで、帰るんだ。
「……みんなで、帰るんだ」
そして葵はデザートイーグルを神社の軒下に捨て、丘を降りはじめた。非日常から偽りの日常へ逃げた少女は、彼女のほんとうの日常を取り戻すため、動き出す。

061 矜持

数分後。
「さて、以上をもって治療は完了だ。何か言うことは？」
「……ありがとう」
治療といっても消毒して絆創膏を貼っただけだったが、マナは素直に礼を言った。
「うむ。ところで君、まだ名前を聞いていなかったな。名前は？」
「観月よ。観月マナ」
普段であれば「人に名前を尋ねる時はまず自分から名乗るのが普通じゃない？」くらいのことは言うのだが、なぜだかこの女性に対してはそういう口をきく気になれなかった。
「観月くんか。私は霧島聖、医者だ。『霧島センセイ』と呼んでくれて構わないぞ」
見た目よりもひょうきんな口の利き方をする人だ、とマナは思った。
「さて観月くん、君はどうしてこの島までやって来たんだ？」
「好きで来たわけじゃないわよ。学校の帰りに妙な男の人に話し掛けられて、急に眠くなって……気がついたらこの島だったわ。何が目的か知らないけど、誘拐の手口としちゃ月並みね」
「ふむ、似たようなものか……それで、これからど

うするつもりかな」
「――『ゲーム』に乗って殺している人を見たわ……私が言えたことじゃないけど、迂闊に動くのはもう危険ね。とは言え、死んでも人殺しになんかなれないし……まずはお姉ちゃんや藤井さんに合流して、それから考えるわ」
「探すべき人がいる、というわけか。武器は何を貰った？」
「これよ」
マナは服の胸ポケットから小さなキーホルダーを取り出すと、チャラチャラと揺らした。
一回百円のガシャポンに入っていそうな、いかにも安っぽいレーザーポインターだ。
「なるほど、それでレーザーか」
「バカみたい。こんなんじゃ身を守るのもできないじゃない」
マナは自嘲気味に呟いた。
ふん、と聖は腕を組んで言った。

「わかった。なら私の助手になるといい」
「……どういうこと？」
「さっき、君は『死んでも人殺しにはなれない』と言ったろう。私もそうだ。私は医者だ。先ほどの観月くんのように怪我をして、あるいは戦闘で傷ついた人間を見つけたら治療する義務がある。誰かが私に襲い掛かってきたとしたら、殴り倒してでも説得する。例え、その行動が命取りになっても、だ」
聖は一旦言葉を切って、
「この島で動くにあたって、同行する人間の数は多いに越したことはない。が、人殺しが医者の看板を上げるわけにはいかない。連れにも人を殺してもらうことはできない。だから、君のようなタイプの人間が一緒に来てくれると非常に助かるわけだよ」
「……私に何かメリットは？」
「ここで私と別れて、一人で行動するよりは多分死ににくくなるんじゃないかな。私は意外と強いぞ。その上、怪我をしても即治療可だ。超お得だと言っ

ても過言ではあるまい」
「わかったわよ……」
マナはスカートについた土をパンパンと払って立ち上がった。
確かにそうだ。自分には人は殺せないし、襲ってくる人間に対抗する手段もない。
信頼できる誰かに出会う前に、殺されてしまう可能性は十分にある。
正解の選択肢は全くわからない。ならば、霧島聖という女性に賭けてみてもいい。
そう思わせる何かが、彼女にはあった。
「モタモタしている時間はない。行くぞ」
「はいはい」
マナは、薄闇の中に浮かび上がる白衣の背中を小走りで追いかけて行った。

062 理性

僅かに危機感のようなものは抱いていたものの、結局七瀬彰は柏木初音と共に森を抜けることにした。
僅かに暗闇が薄れかかっているような時間に至っている。空を見上げるとほぼ同時に穏やかな風が吹き付けてきて、夏の熱気を一瞬忘れてしまうような気持ち良さが泥に汚れかかった心を洗濯する。
ううん、と大きく伸びをしてこちらを見ると、小柄な少女——初音は微笑みを漏らした。疲れが節々に見えるものの、自分と繋がった手に多少は安心を覚えているような雰囲気だった。
「ありがとう、七瀬のお兄ちゃん」
愛らしい笑みを見せて微笑む姿に多少なりどきんとする。いやいや、自分には美咲先輩がいるじゃないか、馬鹿野郎だな僕は。というかそれ以前に十は年下と思われる少女だろ相手は。ロリコンかい僕は。

違うやろ、ちゃんとおっぱい大きい娘が好きだろ？
　自分にツッコミを入れる。どうにも空しい。
「まだお礼は良いよ。お姉さんかお兄さんを見つけなくちゃいけないんだろ？　それまでありがとうは言わなくて良いよ」
　お兄さんぶって諭すように言うと、少しだけ初音は迷ったような顔をする。きっと自分の優しい言葉を真っ向から受け止める事に不安を覚えているのだろう、戸惑った表情がどこか痛々しい。少しの間をおき、初音は決心したように言う。
「あ、あのね、七瀬のお兄ちゃん。これ以上迷惑かけられないから、わたし、」
　勿論そんな言葉は遮るに決まっている。彰は優しく、ちょんちょんと初音の頭を撫でるように叩くと、
「バカだなあ、君がそんな事を気に病む必要はないんだよ。どうせ僕も人を捜してるわけだし。ついでだと思ってくれれば良いからさ」
　と、照れ隠しみたいにそう言う。すると、初音は胸のつっかえが少し楽になったのだろう、
「七瀬のお兄ちゃんも？　恋人さん？　そうだよねっ、お兄ちゃんすっごくかっこいいもんね」
　天使のような微笑みを見せて初音は訊ねてくる。
ああ、有難う。二十年生きてきて生まれて初めて女の子にカッコイイって言われたよ。
　だからこそ、その質問に即答できない自分が情けない。なんなんだ畜生。
「いや、その、別に、恋人っていうか、うん、まあ、その、まあ、似たようなもんなんだけどさ、」
　小学生の前で見栄張らんでもいいだろ。心の中のもう一人の自分が冷ややかな目で自身を見つめてくる。言葉を発さない冷酷な自分自身の目に彰は胸を突き刺されるような痛みを覚える。ああ解ってるよ僕と美咲さんが恋人関係なんて戯言もいいとこさ！
「へえ……綺麗な人なんだろうなあ。どんな人？」
　興味津々という感じの笑顔。彰はその笑顔につられて、今まで友人の藤井冬弥以外に暴露した事のな

い、自身の想い人、澤倉美咲への気持ちを吐く。

「うん、僕には本当に勿体ないくらい綺麗な人でさ、頭も良いし、優しいし、脚本書く才能とかもあってさ」

うう、言っててなんかみじめになってきた。自分なんかに勿体無いとか言ってるけど、そもそも自分のものじゃないし、美咲さん。

「でもお兄ちゃんもすごく優しくてかっこいいよ！ほんとうに羨ましいなあ、その人」

彰の自嘲気味な感情を慰めようとしてくれているのだろう、少し顔を赤くしながら、聞き心地の良い優しい声で、すごく一生懸命な感じで初音はそう言う。

思う。本当に天使のようである。

「わたしもその、お兄ちゃんの恋人さんみたいな人になりたいなあ」

天使の笑顔。本物の天使がいるならその娘の名前は柏木初音と言うに決まっている。

――やばい。本気で可愛い。待て、待て七瀬彰。

いくら美咲さんが振り向いてくれないからってそれはないだろう。ちゃんとお前はおっぱいが大きな人が好きだろう、

駄目だった。黒い精神がとぐろを巻いて、自分の胃の中で居を構える。

「そ、そういえばさ、初音ちゃんはボーイフレンドとかいないの？　好きな人とかさ」

胃の中の化け物を誤魔化すように、別に何の気も持たずにそう言ってみたのだが、初音は途端に顔を真っ赤にする。

「い、い、い、いいいいいないよ、別にっ」

いるのか。

その瞬間、少し落胆した自分に愕然とした。

マジか。

「そっか……」

話題がちょいと途切れたのでちょうどいいと思い、

彰は訊かなければならなかった事を尋ねる事にする。
「そういえば初音ちゃん、初音ちゃんのお姉さんってどんな人なの？」
　人を探しているのだという状況だというのに、ちょっと頭が冷静に働いていなかったようだ。彼女の姉たちの外見的な要素を聞いてもいなかった。話題変更の意図も込めてそう訊ねると、初音は赤くなっていた顔を元の真っ白に塗り替え、はしゃいだような声で答える。
「うんとね、千鶴お姉ちゃんはすごく優しくて、」
　上手く伝わらなかったようだった。無闇に嬉しそうな初音を横目に彰は苦笑いしながら、
「いや、そうじゃなくて外見。君のお姉さん捜すのにさ、一応そういうこと知っておいた方がいいかな、って思って」
　自分の勘違いに気づいたのか、初音はまた顔を真っ赤にする。こほん、と小さく咳。
「あ、うん。うんとね、千鶴お姉ちゃんは長い黒髪のすごく綺麗な人で、梓お姉ちゃんはショートカットのすごくスタイルのいい人。それで、楓お姉ちゃんはセーラー服を着たおかっぱのすごく可愛い人なの。で、耕一お兄ちゃんが、髪が短くて背が高くて、すごく優しい人」
　嬉しそうに語る。その様子を見て、本当に、姉たちに逢わせてやらなくちゃ、と彰は心底思った。こんな子供が死んで良い筈がねえだろう。姉に逢わせたところで状況がどう変わるかは判らないが、それでもたかがフォーク持ちの手負いの貧弱とともにいるよりはずっとマシに決まっている。
　ふと気付く。
　耕一、という男の名前を出した時、初音は不自然なほど明るい声になったように思う。
　初音ちゃんが好きなのはその耕一という男なのだろうか。
　多分そうだろう。まあ多分、恋愛感情というには届かない憧れのようなものだとは思う。というか推

定十歳の少女に恋する推定成人男性などいたら彰はきっと愕然とする。
こんな可愛い幼けな小学生に手ぇ出したら、本気でぶっ殺すからな。耕一。誰か知らんけど。
本気の殺意を覚えている自分に愕然とした。
マジかよ。

海が見えてきた。未だに薄暗いままだが、
――遠くに、光のようなものが見えたような気がした。
陸の光か、そうでなければ船の光に決まっていた。粒のような光の点は、ここと日常世界が然程離れていない事を示している。だからこそ、ここと日常は死ぬほど遠いのだと思う。無意識のうちに彰は唇を噛む。
考えなくちゃいけないのだ、なんとかしてここから逃げ出す方法を。そう、なんとかして、道を見つけなければならないのだ。だが、どうやって？

このゲームの企画者。彰の脳裏に、焼くような記憶が甦ろうとして、しかしそれを理性が拒否する。
あれがそうだったとして、自分には何が出来る。
心が震える。このままでは心の震えは身体を伝わり、そしてこうして添えられた初音の手にも伝わってしまう。けれど思ってしまう、あの船の光に、どうして自分は手を伸ばす事が出来ないのだろう。
その震えを身体に出してはいけなかった。それは勇気ではないと思う。彰は自分の横を歩く初音に、出来る限りの明るい声で、
「海だね」
「うん、――すごく気持ちいい風だね」
初音は風を全身で受けながら、明るい声で言う。
「わたし、朝の海って初めてみた。本当に綺麗な海だね。今日は暑いし、泳ぎたいなあ」
笑みをも漏らす。
「こんな状況じゃなければ、きっと、」

――笑みは崩れた。声も涙で途切れた。
涙声が漏れる、静かな海岸にさえも響かない海鳴りのような嗚咽。
当たり前だ。船の光は朝影のように眩しかった。彼女も見たに決まっているのだ、日常の火を。
「どうして殺し合わなくちゃいけないいんだろう。どうしてなんだろう」
初音の震えは、彰の手から伝わってきた。彼女の心は自分なんかよりずっと敏感で、自分なんかのよりずっと脆い。
そこに座り込み、初音は、声をあげて、泣いた。脆弱な海鳴りは脆弱な海鳴りでしかなく、その涙も泣き声も、冷たい海に吸い込まれていく。
こんな少女が、こんな過酷な状況に、真っ向から対峙して、耐えられるはずがないのだ。
もう、一応は大人の身体と、子供を卒業した心を持っている彰だって、絶望の海に沈みかかっていたのだ。たとえ誰かに出会い、それが知り合いで、束の間の喜びを得たとして。
余程の事がない限り、――皆死ぬのだ。
「嫌だよ。助けてよ。何でわたし達が、こんなっ」
叫びは海鳴りのように。涙は雨のように。
彰は、ただ、自分の太腿を襲う痛みが、次第に薄れていくような錯覚を感じている。しかし当たり前だが、痛みがそんな簡単に薄れるわけがない。
だから、自分が強くなっているのだろう。
どうしてこんな事になったんだろうな。彰は確かに初音に出会う前、彼女と同じ疑問を抱いていた。今だって胸の底に、どうしようもない状況への憤りや憂鬱は眠っている。彰も、そこに座り、泣き出せたら良かった。
だが、そんなこと選択するつもりはない。
「大丈夫」
彰はいつも思う、大丈夫という言葉はひどく無責任だと。けれど、無責任なその言葉が、いつだって人を救っている事を彰は知っている。

「――お兄ちゃん」
彰は、背後からその細い肩を抱きしめる、震えていて、けれど、どうしようもなく暖かな身体。生きていたいと願う小さな命。
「僕が護るよ。初音ちゃんは僕が護る」
自分にこの島からの脱出法なんて思いつかない。けれど、彰は確信する。この島には、鮮やかな脱出法を考え付くだけの知能を持った人が確実にいる。ならやるべきことは決まっているのだ。無知で無力な自分が、それでもしなければならないことは、今、目の前で震えている少女を、護る事だけだ。
勇気を出せ、七瀬彰。こんな娘一人守れないで、美咲さんが守れるはずもないだろう。勇気は武器だ、それだけで知恵や力に対抗できるだけの、立派な。心の震えなんて忘れてしまえ。身体の震えなんてくそくらえだ。
柔らかな身体。甘い匂いがする。細い肩から力が抜ける。初音は頭を垂れ、自分の腕の下で、それでもまだ少し泣いたけれど、その震えがだんだん治まっていくのは、彰の手にも判った。
「そろそろ行こう。君のお兄ちゃんたちを捜そう」
「――うん」
顔を赤らめて、初音は立ち上がる。
彰は、当然のようにその手を取る。
彰の力はこの時生まれた。本当の意味での勇気は、得てして誰かのために力を振るおうとした時得られるものだ。右手にはフォーク、右肩には鞄、そして左手には、護るべき少女。
背後で初音が呟く声がする、
「ありがとう、お兄ちゃん」
彰はなんだか照れくさくなったけれど、同時に自分の胸で、暖かな何かが生まれているのを感じる。

それが勿論、勇気だった。

063　修羅

一人の足音と、それに僅かに遅れて機械の駆動音。
先を行く人物の足取りはおぼつかない。眼差しは既に虚ろ、顔面は蒼白だ。恐らく、この男の命、そう長くはないだろう。だが、それでも……九品仏大志は歩みを止めない。
「吾輩の命は……あさひちゃんの物……あさひちゃんを狙う輩は……吾輩が、排除する……」
すでに意識も朦朧としているのだろう、大志は先ほどからこの言葉をうわ言の様にぶつぶつと呟くだけだ。その心に残るのは、あさひへの愛と、それを狙う輩への殺意のみ。
修羅が、歩く。獲物を求めて。
そして、修羅は、修羅を呼んだ。
「…………」
気がつくと、目の前に一人の影。暗がりの中で、それがにやりと口の端を吊り上げたのを見えた。
大志は本能で察知した。
奴は危険な存在だ、と。
「ゆけッ！　先行者」
今の状態での精一杯の声を絞り出し、大志が攻撃を指示する。しかし、聞こえたのは中華キャノンの発射音では無く、爆発音だった。
「なッ……！」
大志は驚愕の表情で先行者だったものを見る。その機体からは火の手が上がり、ばらばらと部品が溶け、崩れ落ちて行く。
相手の男——柳川裕也は余裕の表情を浮かべ、得意げに語り始めた。
「気付かなかったのか？　俺がこれを仕掛けていた事に」
と、掌にプラスチック爆弾をぽん、ぽんと跳ねさせている。
「……くッ」

大志は歯軋りした。柳川は続ける。
「そのロボットには大層な武器がついていたようだが、そうなってはただの鉄屑だな。これで貴様の勝てる見込みは、万に一つも無くなったと言う事だ……ククク」
それを聞き、大志の表情が緩む。
「フン、覚悟を決めたか？」
柳川が一歩一歩、歩み寄ってくる。大志はきっ、と柳川を睨み付け、笑みさえ浮かべ言い放った。
「……ならば、それを覆して見せれば、良いのだろう？」
その刹那、大志は跳んだ。
満身創痍のこの体のどこにそんな力が残っていたのか、本人にも分からなかったが、大志は絶叫する。
「あさひちゃんに牙を向ける不届き者は、吾輩が全員始末してみせぇぇぇぇるッ!!」
しかし。
柳川の読みは、残酷なまでに大志の行動を予測しきっていた。柳川の袖元から覗くスペツナズ・ナイフの存在に大志が気付いたときには、もう遅かった。
「ぐ…………ッ」
密着した状態となった二人。
大志の胸には、ナイフが突き刺さっている。
冷徹な笑みを浮かべる柳川。
「誰を守るのかは知らんが、相手が悪かったようだな……」
柳川の高笑いを聞きながら、闇に落ちて行く大志の意識。
(死ぬのか、吾輩は……愛する者に牙を剥く者一人始末できずに……)
腕に力が入らない。足ががくがくと震える。目が霞む。意識が切れそうになる。
だが……
(…………いや！)
「吾輩はッ！　まだ死ぬわけには……いかんッ!!」
正真正銘、最後の力を両腕にこめる。胸の出血が

一層激しくなる。柳川が一瞬怯む。その一瞬の隙に、大志はプラスチック爆弾のリモコンを柳川から奪い取る。
「グッ……しまった！」
柳川の表情から余裕が消え、見る間に焦りと怯えに変わって行く。
「フッ、プラスチック爆弾をわざわざ見せびらかす為に一個持っていたのが命取りになった様だな」
大志は血を吐き出して、真っ赤になった唇をニヤリ、と吊り上げた。
「……くッ、良いザマだな。何十人も居るであろうあさひとやらに牙を向ける者の一人でしかない俺と心中とはな」
精一杯の虚勢を張って、柳川もまた笑う。が、怯えの色は隠しきれなかった。
大志は顔を上げ、柳川を睨み付ける。
「……違うな、あさひちゃんに牙を向ける内の一人であるお前だからこそ、吾輩の死にも意味がある！」
「ひ……ッ！」
柳川は慌ててプラスチック爆弾を投げ捨てようとするが、もう遅い。カチリ、と渇いた音が響き、そして辺り一帯が閃光に包まれた。
（勝手な頼みかもしれんが……あさひちゃんの事は頼んだぞ、同志和樹よ……）
自分の肉の焦げる匂いを感じつつ、大志は思ったが、それもすぐに出来なくなった。
後に残ったのは二つの消し炭のみだった。
表情など確認出来ようもないが、それでも片方……九品仏大志だったものの顔は笑っている様に見えた。

三十四番　九品仏大志　死亡
九十八番　柳川裕也　死亡
【残り82人】

064　殺害者

歩道を行く影が一つ。
氷上シュンである。
彼は観鈴を晴子に預けたあと、ただあても無く歩いていた。
意味も無く殺し合いに参加することだけはしない、そう、心に誓っていた。
この状況に順応できず、愚かにもゲームのってしまった人間に、わけもわからないうちに殺されていく人間も多いのではないか。
そう思った。
恐い。
確かに恐い。
でもそれ以上に痛い。
心が痛い。
それはつい昨日まで笑いあっていたような友達が、次の瞬間どこにもいなくなってしまう恐怖。
そして、そのような友達と呼べる人間が、殺す側に回ってしまうという恐怖。
違う。
絶対にそんなことは間違っている。
シュンは思った。
みんなで生き残る方法がどこかにあるはずなんだ。
そのためには、みんなで協力しなくてはならない。
殺しあうなんていけない。本当の敵は、このゲームを仕組んだ連中なのだから。
既に幾人もの命が奪われている。本来なら一刻の猶予もならない。
しかしシュンには策が無かった。
一人で首謀者のところに乗り込んでいっても、あっさり殺されるだけだろう。
死にたくない。
いや、もともと余命幾ばくも無かったこの体だ。
もうそれはいい。せめて、無駄死にはしたくない。

おそらく僕はここで死ぬだろう。誰かに殺されるかもしれない、その前に体が限界に来るかもしれない。だけど、僕がそうなっても、まだたくさんの人間が『ここ』に残される。
彼らに何か残しておきたい。
特に、浩平君には。
考える。
何度も頭を悩ませる。
しかし総じてそれは、何もできないという結論に落ち着いてしまう。せむかたもなく、シュンは歩いていた。
「永遠の世界ですら、ここよりは近い場所だったと思うよ」
シュンは一人ごちた。肩にずっしり重い荷物。中身を見ても、シュンには良く分からなかった。
「貧乏くじだったのかな」
苦笑する。
でも逆に拳銃とか、刃物でなくて良かったとも思う。そんなものを扱いたくはないし、扱えるとも思わなかったから。
整備された歩道を歩く。
森の中や、島の中心近く……いわゆる山を行くより、よほど楽に行ける。だがそれに反して足取りはひどく重い。気持ちというのはこういうところに現れるものなんだな。シュンは改めて理解した。
百人という人数——もうその数ではなくなったが——がいたというのに、なかなかほかの人間と会わないものだ、と思う。
「……いや、殺しあうくらいなら顔をあわせないほうがいいか」
彼は立ち止まった。視界に商店街が入ったからだ。
「これは……静かだな」
本来ならもっと活気があってしかるべき場所だった。それだけに、シュンの目にはそこがさびしく映る。
入るべきか？　そうしないべきか？

シュンは迷う。誰かいるのかもしれないが、それが悪意ない人間だとは限らない。
そのとき、
キ――――――ン
辺りに巨大な爆音が響く。その影響で、耳の機能が一時的に麻痺した。
「何だ……一体？」
……近い。
シュンはその音の残滓を便りに、爆発の中心へと向かった。
「これは――」
そこはひどいことになっていた。
整備されていたはずの道が粉々に飛び散り、まるで原型の分からないことになっている。その規模、半径八、九メートルといったところか。中心には黒い消し炭のようなものが残っていた。
……そして、それがかつて人であったものだということに気付くまで、少しの時間を要した。
「こんな……馬鹿な」
絶句するシュン。
こんな、こんなことって無い、
人間の尊厳を完全に無視している……
この人たちにとって、死すらも満足に与えられなかったようなものだ。だって……
この人たちは、人間らしい死ではなく、単なるものとしての最後を迎えさせられてしまったのだから。
同じ死、だけど……こんなにひどい死もない。
「あなたたちは馬鹿だよ……」
「馬鹿はあなたです」
「!?」
ダァン！
一発、響く銃声。
「が……」
銃弾を受け、倒れるシュン。爆発地をまたいだ、ちょうどシュンの反対側から、発砲した者が姿を現した。

――里村茜。
茜は倒れたシュンに近づいて言った。
「しょせん、死んでしまえばただの肉塊に過ぎませんん」
「ふふ……君か……まさか君にやられるとはなぁ……」
倒れたままで、彼は小さくつぶやいた。幸運にも銃弾はシュンの急所を外れていたのだ。
「まだ、息があったんですね。でもここまでです。一人で永遠へ行ってください」
「……永遠は、死が、その入り口足り得るばかりでは……無いよ」
「…………」
顔をしかめる茜。そして彼女は再び、コルト・ガバメントをシュンに向ける。
「そこまでだ」
「!?」
驚愕の表情をあらわにする茜。そのセリフはシュンが言ったものではなかった。
商店街のほうから現れた三人目――国崎往人は、静かにデザート・イーグルを構えていた。

065　すれ違い

橘敬介（五十七番）は、観鈴を探し彷徨っていた。自分の娘が殺戮ゲームに参加して生き残れるはずがない。
(観鈴……お前だけは助けてやるからな)
そう考えながら歩き続けていた。
その時だった。
「！　……何の臭いだ？」
敬介は異臭を感じた。と、同時に腹の中から胃液がこみ上げてきた。
(ウゥ……ウェェ……)
口を押さえながら臭いのする方向に歩いてゆくと、そこには何者かが争った痕があった。

「死体の焼けた臭いか……」
敬介は誰かもわからない二人の死体を見つめていた。体がほとんど原型をとどめていない死体、敬介はこれが現実だと改めて実感した。
「こんな場所には用はないな……」
敬介がその場を立ち去ろうとした瞬間、すぐ近くでで女の悲鳴が聞こえた。
「キャアアアアアア！！！！」
敬介が振り返ると、そこには恐怖で顔をこわばらせた桜井あさひ（四十一番）がいた。
「あ、ああ……あぁぁ……」
「大丈夫かキミ、しっかりしろ」
「イヤァ！　来ないで人殺し!!」
あさひは敬介を人殺しと勘違いしていた。
「違う、私じゃない」
「お願い！　殺さないで!!」
あさひは無惨な現場を目にして混乱していた。
「落ち着くんだ！」
敬介は大声で叫んだ。その声にあさひは我に返った。
「大丈夫だ、何もしない。キミは何の心配もしなくていい」
「……ごめんなさい」
「別に謝らなくてもいいよ。こんな状況じゃ仕方がないさ」
「……殺し合って、死んじゃったんですか。あの人達……」
あさひは誰だかわからない二人の焼死体の方を見ながらそう言った。
「そうらしい。ああいう風にはなりたくないな」
「なんで、こんなことしなきゃいけないんでしょうか……」
「誰もこんなことはしたくないさ。でも、今は……」
敬介は口を濁した。それ以上は口で言いたくはなかった。

（殺らなければ、殺られるんだ）
敬介は辺りを見回した。何か使える物はないか……現場から少し離れた所に二つのバッグが落ちていた。一つは小型爆導索。もう一つはＣ４プラスチック爆弾が十個、しかしリモコンはない。
「接近戦向きじゃないが、何かの役に立つだろう」
敬介はそれらを自分とあさひのバッグに詰め替えた。彼らはハズレのバッグを引いていたのである。
「さあ、行こう。誰かがここにやってくるかもしれない」
「あ、はい……」
敬介達はその場を離れた。
あさひは大志の死を知らずに……。

066　それは、現実……

既に誰もいない、住宅街の中の一つの民家……そのある一室で深山雪見（九十六番）は塞ぎこんでいた。
「みさき……澪ちゃん……」
その声に、二人が笑いかけてくれることはもう二度とない。
……嘘よ……悪い冗談でしょ!?
みさき……澪ちゃん！
雪見はその放送を聞いたとき、狂いそうに取り乱しながら、あてもなく駆け出していた。そのとき、すでに狂気にとり憑かれた人間に会わなかったのは幸い……もしかしたらそれは不幸だったのかもしれない。
（みさきなら、きっとここにいる！）
そんなとき見つけたひとつの学校。母校と比べてもそれほど造りの違いない場所。いい風が吹いていた。みさきの好きそうな風。
「みさ……き……」
そこで目にしたもの、それは……
それからどうなったかは覚えてない。

誰かを殺した……もしかしたらもう私は殺されたのかもしれない。そんな混濁した精神状態のまま手に握られたものを見る。
コルトマシンガン。
予備のマガジンは五つあった。
(私は多分ここで死ぬんだろう)
色を失った瞳でその銃をみやる。
(だけど、みさき、あなたの敵だけは、絶対に許さない……!)
絶望の中で唯一雪見い出せた結論はそれだけだった。
もうすぐ、またみさきに会える。
だけど、やらなきゃならないことがあるから。

067　あぅーっ!

「あうーっ!　おなかすいたーっ!」
声をあげながら歩いていたのは沢渡真琴だった。
なんで私はいつもこう一人なんだろう、そう思いながら食事を探して歩いていた。
支給品の袋に入っていた食料はすでに全部なくなっていた。それは全部、自分のせいだったのだが。
私はスタートしてから、ずっと一人だった。
なにもわからないまま歩いていると、池のほとりについた。ちょっとそこで休憩しよう。そう思って近くにあった切り株に腰をかけ、支給品として渡されていた袋を開いた。そこに入っていたものは、パチンコと、鉛玉がたくさん入った箱、それに食料と水だった。
私は、その中からパンを手にとって口にした。あまり、おいしくなかったけど、少しはおなかの足しにはなった。
立ちあがってふと、池を眺めた。
そこには数匹の、青く光った魚がいた。
きれい、と私は心の底から思った。
そして私は、もう一度支給品の袋を開け、パンを

手にとった。
それを小さく千切って、池に投げる。すると魚たちがたくさんそこに集まってきた。
うれしくなって私はもう一度、パンを千切って投げた。すると魚はもっとたくさん集まってきた。
そんなことを繰り返していると、パンはいつの間にかになくなっていた。
そして、私は食料を探すことを目的として森を歩いていた。なんとなく、動物を狩るのは躊躇われたので、食べられそうなきのこや木の実を探しては、バッグにつめていった。木の実をとるのにはパチンコが役に立った。ちょっと高いところにある木の実もパチンコでパン、と枝を折れば落ちてきた。それをキャッチする。
それを繰り返してる最中だった。
私はおいしそうな赤い木の実を見つけた。そこにめがけて、私はパチンコを打った。
「Ah! What's!?」
そこから落ちてきたのは金色の髪をした女だった。

068 糾弾者

「そんなに殺すのが好きか？」
往人は静かに問う。
「お前、血のにおいが強いな。何人殺してきたんだ？」
本当に匂いがかげるわけが無い、往人は彼女の物腰からそれを判断した。
茜は答えない。
「見境無く殺してきたようだな、やはりいると思ったさ。お前のようにこのゲームにのった殺人者が」
「それは、あなたも同じでしょう」
自嘲だろうか……軽い笑みを浮かべて茜は言った。
「……そうだな。だから、俺にはためらい無くお前が撃てる」
チャキッ、と音が立つ。往人がデザート・イーグ

ルを構えなおした音だ。彼の言葉どおり、既に撃鉄は起こされている。そして茜もそれに気が付いていた。この男は本当に言葉どおりに私を撃つだろう、と。
　膠着状態が出来上がっていた。
　茜は撃てない。
　往人は撃たない。
　撃った瞬間に自分も撃たれるのは必至だったから。
　一発で即死させることができれば問題は無い。
　しかしこの中途半端な距離でそれをやるのは、やや成しがたく思えた。失敗すれば、死ぬのは自分ではなく、そこに傷ついて倒れている少年なのだ。
　だが、この状況は決して往人に有利であるばかりとは限らなかった。膠着が続けば、その間少年はどんどん弱っていく。そうすればいずれにしろ彼に訪れるのは死しかない。
　彼を見殺しにして茜を殺す。それはとても魅力的な選択に思えた。
　だが……
『でも、無闇矢鱈に殺すことはしないでしょう』
『その……殺しちゃったの？』
『じゃあ君はなぜ僕を殺さなかったの？』
　頭によぎる言葉……それが俺を呵責する。
　何で警告した？　気付かれる前に撃てばよかったのに。ひと時の感傷が、俺を甘くさせたというのか……いや違う、あの距離では一撃で当てられない。あの女の発砲を止めるために、あえて姿を現したんだ。
　往人はあえてそう思い込むことにした。
「お前、今は見逃してやる。殺されたくなかったらさっさと消えろ」
　往人は言った。
「……いいんですか、私を生かしておいて」
「お前を殺すより、そっちの奴を助けるほうが大事だ」
　往人はチャキッと銃を鳴らす。

「……別にいいんだぜ、お前を殺しても」
ほんの少し、声のトーンが下がる。往人の瞳が、わずかに曇る。
「…………くっ」
茜は少年に向けた銃を返し、往人を牽制しながら後退する。
「私を生かしておいたことを、後で後悔しても知りませんよ……」
「知るかそんなこと」
往人はそれを見てシュンのそばに近寄った。
「！」
その瞬間を狙って、茜は往人を撃ち殺そうと拳銃を構える。だが、
ギャインッ！
往人は自分の腕ごしに発砲した、
――茜の左肩へと。
「アグッ!?」
肩を劈く痛みに、茜はうめいた。

「警告はしたはずだ……俺がその気にならない内にさっさと消えろ！」
何事も無かったようにシュンを起こす往人。だが、その姿勢はいつでも発砲できるものとなっている。
「……あなたは必ず殺します、この私が」
右手で肩を抑えた状態で、茜はそうつぶやいた。
「そのときは、多分お前が死ぬときになるな」
彼女のつぶやきに、往人はそう応えた。少し息が荒い少年を抱え上げ、大丈夫かとたずねてみる。
「……なんとか、まだ生きていられるみたいです」
「それなら大丈夫だ、町に着けば少しはまともな処置が受けられる。少し、我慢しろ」
シュンはうなずいた。彼に肩を貸して歩き出す往人。そしてその頃には、既に茜の姿は見えなくなっていた。

069　格闘少女

「お姉ちゃん。どこぉ？」
　霧島佳乃（三十一番）は、閑静な住宅街を駆けながら叫ぶ。姉である霧島聖（三十二番）を探しているのだ。
「おかしいなぁ。さっき、白衣を着た人がこっちに走って行くのが見えたのに」
　先程、この住宅街で聞こえた銃声。恐怖よりも好奇心が勝った佳乃は現場へ赴き、そして白衣の女性が遠くへ去るのを見付けたのだ。
『きっとお姉ちゃんは誰かに追われてるんだ。助けてあげないと！』
　佳乃には、姉を助ける手段があった。
　右手のバンダナ。これを外せば、魔法が使える。大人になるまで外してはいけない約束だが、緊急事態だ。きっと大丈夫だろう。
　佳乃は一人頷くと、走るスピードを上げる。
　――純粋な彼女の想いは、他人が見たら、馬鹿げた御伽噺だと笑うだろうか？
　視界の端にちらりと白い服が映る。
「あ、お姉ちゃん？」
　ひゅん。
「!?」
　右腕を何かがかすめた。
　驚いて見やると、黄色いバンダナを突き刺し、ぶらぶらと揺れている――矢。
「な、何？」
「やはり、腕が鈍ってるようね。頭部よりも、その黄色いバンダナの方に狙いが行ってしまったわ」
　冷たい声がした。その声に佳乃が振り向くと、そこには白衣を着た女性がショートボウガンを構えて立っていた。
「……お姉ちゃんじゃ、無い」
「そうね。人違いでごめんなさい」

「そ、そういう危険なものを人に向けて撃っちゃダメなんだよ」
「そうなの？」
白衣の女性、石原麗子（六番）は佳乃に狙いをつけたまま淡々と語る。
「私も、無駄に狩りをするつもりは無かったの。でも、あなたが馬鹿みたいに『お姉ちゃん、お姉ちゃん』とうるさいから黙ってもらうことにしたのよ。……それじゃあね」
ひっ、と佳乃は息を呑んで身をすくめる。それを見た麗子は、満足げに笑みを浮かべた。
その時――宙をメイド服が舞った。
「でえええええいっ!!」
メイド服の少女――柏木梓（十七番）は、麗子に向かって跳びかかる。狩りの現場を見つけて、なりふり構わずの突進だった。だが、麗子は慌てるでなく、すっと梓の方にボウガンを構え直すと笑う。
「まるで猪ね。空中の標的は狙い易いのよ……じゃあね、猪さん」
ひゅん、と風を切る音がして、矢が梓の左胸に突き刺さった。苦痛に顔を歪めながら、梓は麗子との距離をわずかに開けた所にもんどりうって倒れる。
「楽に死ねるように心臓を狙ってあげたわ……さて、ごめんなさいね。待った？」
麗子は佳乃の方に向き直ると、再度ボウガンを構える。佳乃はその場にへたり込んで動けない。逃げようとするが、手はいたずらに地面を掻くだけだった。その様子に麗子は笑う。
と、その表情が凍り付いた。そのまま、ぐらりとバランスを崩す。
「え？」
そのまま視線を落とすと、ニヤリ、と笑みを浮かべている梓と目が合う。梓の足払いが、麗子のバランスを崩したのだ。麗子は察した。こいつ、防弾チョッキを身につけている！
「く……このおっ！」

「遅いっ！」
　梓を殴りつけようと麗子は拳を振り下ろすが、梓はそれを軽々と右手で弾くと、左の拳を麗子のボディーに沈める。
「……‼」
　かは、と麗子が前のめりになったところに、梓は躊躇せず右の拳を麗子の顔面へと叩き込む。鈍い音がして、吹っ飛ぶ麗子。それを見送りながら、梓はふん、と鼻をならす。
「猪とはなんだ。猪とは」
　麗子は地面に倒れたまま、動き出す気配がない。制限されているとはいえ、鬼の全力攻撃を食らったのだ。しばらくは気絶しているだろう。ぽんぽんとメイド服の土埃を払うと、梓は佳乃の方へ向き直り聞いた。
「ふぅ……えっと、あんた、大丈夫？」
「……ゆ」
「ゆ？」
「ゆー、うぃん」
「……ありがと」

「なるほど。お姉ちゃんを探してたのか。あたしも、『お姉ちゃん〜』って声が聞こえたから、初音――あ、妹ね。妹が探してるんじゃないか、って思ったの。そしたら、あんたたちを見つけたわけ」
「なるほどー」
　あんまりわかってない様子で、佳乃は頷いた。一人は危険だから、と一緒に行くことを提案したところ、佳乃はあっさりと承諾した。
　その際、『よし、君はボディーガードメイド一号さんだよぉ』などと不名誉な愛称をつけられたのだが、とりあえず梓は無視しておいた。
「ところで……」
「何？」
　ぴく、と梓の眉が跳ね上がる。佳乃は口に手を当てて、ぼそりと呟く。

「メイド服にネコミミなんて、狙ってるとしか思えないよぉ」
「あんたがくれたんでしょうがっ!!」
佳乃の支給武器、それはネコミミヘアバンドだった。助けてくれたお礼に、と差し出す佳乃も佳乃だが、つける梓も梓である。
『うう……こんな格好、耕一や千鶴姉には見せられないよ……』
はぁ、とため息を吐いて、梓は空を見上げた。
そして。
そんな騒ぎの中で、麗子の姿が忽然と消えていたことに、佳乃は勿論、梓も気付かなかった。

070　割とのんびり

「ちっ……」
御堂は思ったよりもイラついていた。
「勘がにぶったのかもしれねぇな」
戦場でのそれは、死を意味する。強化兵としてのそれに頼りすぎていたのかもしれない。
御堂は神社へと足を運んでいた。もちろん気配は殺してだ。並の人間には御堂の姿は恐らく見つけられないだろう。
「にゃ～ご」
いや、見つけるのはたやすい。
「騒ぐなクソ猫」
ごろごろごろ
「ちっ!!」
御堂のイラつき。それは道具の調達がままならないことにあった。誰との遭遇もない……いくつかの死体は目撃したが、すでに持ち去られた後なのだろう、何もない。手元にある道具は、『げるるん』という名のジュースのみ。
「喉が潤わねぇぞ、ゴルァ(ﾟДﾟ)」
というか、この液体……いや、物体は喉を通らな

い。
「てめぇ、こんなモノだけ器用に残しやがってっ……！」
「にゃー」

「ツイてるぜぇ……」
御堂がこの島にきて、一番の微笑。
「にゃっ!?」
ぴろが猫なりに顔をひきつらせる――可愛くない
――
「みろよ相棒、俺の得意武器だぜぇ……！」
軒下に一丁の拳銃。
「デザートイーグルだな。口径は五十、へぇ、結構でけぇじゃねぇか」
上機嫌でベルトにそれを忍ばせる。
「よぉ、相棒、今から行動を開始するぜぇ」
「にゃあ」

岩切が殺られた。それは当然御堂の耳にも入っていた。相手は蝉丸か、それとも……
「まあ、行動しようぜ、慎重によ……ククク」
そして御堂の気配は山中へと消えていく。ただ猫の気配だけがあたりに漂っていた。

071　狩るものと、狩られるもの。

金色の髪をした女は動かなかった。私は、その場からとりあえず立ち去ろうと思った。生きていても、生きていなくても、この場にいるのはどっちにしろ危険だと思ったからだ。
逃げようとした瞬間、その金髪の髪をした女はこっちを向いて、
「ハンターチャーンスッ！」
と叫んだ。
私は、その声を聞いた瞬間逃げ出していた。
殺される。

そんな気がした。
だから全力で走って逃げた。
どれくらい走っただろう。
もう、大丈夫？　そう思って後ろを振り返った。
そこに、彼女はいた。
手には、銃を持っているようだった。
「Hey You!　覚悟するネーッ！」
彼女は私に向かって引き金を、引いた。
ぴゅー
勢いよく、水が飛び出て、私の体にかかった。
「あうーっ！　水嫌いーー！」
「なんで、ハンティングできないノ？　なんで？」
レミィは、木から落ちたせいもあって、錯乱していた。
発射される水、水、水。
逃げまわる真琴。
森の中で、そんな子供の遊びのような、ほほえましい光景が繰り返されていた。しかし、どっちも真剣だった。
それの終焉の時、それは唐突にやってきた。脚をすべらせたレミィが、崖から転落したのだった。
「な、キャアアアアアアアアッ！」
私、沢渡真琴はなんとか助かったみたいだ。しかし、いままで溜めた食料は逃げていた途中で半分以上落してしまった。また、集めなおそう。そう思って私は再び森の中へ食料を求めて探し回ることにした。

072　思わぬ落とし穴

「何……爆発？」
遠くの方で爆発音がしたのを牧村南（八十番）は聞いていた。
「物騒ね、離れましょう」

そう言うと南は爆発音とは反対方向に歩き出した。
（なるべく戦闘は避けたい、不用意に人と接触するのは避けるべきね）
彼女は平和主義者だった。
「でも、いざとなったら私はこれを使えるのでしょうか」
そう言って彼女がバッグから取り出した物は十字手裏剣だった。しかも、理論上銃弾をもはじく超硬鋼鉄で作られた手裏剣だ。
「……っと、練習してみようかしら」
南は一本の杉の木の前に立った。そして、木の幹目掛けて手裏剣を投げた。
カッ、カッ！
二枚投げて二枚ヒットした。
「あら、以外と簡単ね」
カッ、カッ、カッ！
三枚連続ヒット。
カッ、カッ、カッ、カッ、カッ！
五枚連続ヒット。
「使えるわ、これ。よおし、今度は……」
カッ、カッ、カッ、カッ、カッ！
カッ、カッ、カッ、カッ、カッ！
十枚連続ヒット。
「これでいざという時も安心ね」
そう言うと、幹から手裏剣を引き抜き始めた。
「!?」
南は鼻に感じる香ばしい臭いに気がついた。
「あら、アーモンドの香り……気を付けないと」
南は悟った、手裏剣に青酸カリが塗られている事を。慎重に二十枚すべてを引き抜き終わると、再び人気のない方向に歩きだした。

073　無知

「へえ、美咲さんっていうんだ。あなたのような美しい人に相応しい、すっっごく素敵な名前だなあ」

「あ、の」
「もう、ほら、そんな顔しないで！　僕があなたのナイトになるっていったでしょ、だから安心して」
「あ、あの、」
「僕は見かけよりずっと頼りになる男です！　だからそんな不安そうな顔をしないでくださいよっ！」
……そうじゃなくて。
澤倉美咲は、自分の手を強引に引いて森の中を、ナイトというよりは人攫いが如くに突き進む元気溢るる高校生に逆らえぬまま、心の内で溜息を吐いた。

藤井くんか七瀬くん、由綺ちゃん、はるかちゃん。せめて、そのうちの誰かと行動できたら自分はまだ救われていたに違いない。しかし神様はけちんぼだった。その誰とも違うグループという、残酷な仕打ちを受けてしまっていた。
同じグループに森川由綺のマネージャーであった篠塚弥生さん（四十七番）はいたが、由綺の知り合いとはいえ、流石に殆ど話した事もない人と行動できる勇気は、美咲にはなかった。自分の多分次かそれくらいに彼女は呼ばれる筈であったが、結局美咲は、一人で行動する事を選んだ。
不安に躍らされるように、取り敢えずは見つからない場所にまで駆けてようやく一息つくと、支給品を確認する事にする。
支給品は割り箸とまな板であった。
――割り箸。豆でもつまめというの？　それともお食事をする時に便利ですから、とかそんな用途だったりするんだろうか。馬鹿げた話だ。
そして、黒いまな板。これも調理用？　林檎のマークが描かれている、なかなかお洒落なまな板だ。しかしお洒落だからどうという訳でもない。これが金属の板で、お腹に入れていたら銃弾を防げるとか、そういうことでもなさそうである。
まあ、銃が当たったとして、引き金を引ける自信はなかったし、人を怪我させるなんてとても考えら

れない。殺し合いなんてそもそも自分にはとんでもない話なのだ。
　だから、何であれ、そうは変わらないのだ。
　自分はこの島で殺されるのだ、そういう事なのだ。
　色々やりたい事があった。たくさん、したい事があった。なのに、なんでこんな戦いに巻き込まれてしまったのだろう。死にたくない。けれど、殺せない、殺したくない。誰もが生きているのだ、私には同胞を刺せる勇気も撃ち抜ける冷酷もない。
　だから、美咲は——皆が殺し合って、最後まで誰にも見つからぬまま、生き残れたら、と思った。
　それはきっと死ぬほどずるいことだと思う。
　この殺し合いを止める為に、皆で協力してここから逃げ出す為に、何かをしなければならない筈なのだから。
　そんな折。
　自己嫌悪と恐怖心で震え、森の中で蹲っている時、今自分の手を引く少年——住井護に見つかったのである。殺されると思った。終わりなのだと思った。
自分の考えは甘かったのだ。最後まで見つからないでいられる筈がなかった。何もしないでいようと考えていたのが間違いだったのだ。
　藤井くんに逢えないまま——ここで、終わりなのだと。
　それが、実際には、これである。
　自分の視線に気付いたのだろう、住井護は振り向いて、再び、ぐっ！　と親指を立てた。
　不思議な少年だった。
「僕を信じて付いて来てください」
　なんてことを真顔で笑顔で言う少年の雰囲気は、誰かに似ているような気がする。すぐ気付く、彼の見せる笑顔が、何処となく、後輩の七瀬彰が本当に刹那的に見せる笑顔に似ているのだ。
　結局美咲は観念して、この少年に付いていくことにした。彼が手に持つマシンガンも怖かったし、確かに一人でいることも怖かった。それに、知り合い

に会えるかどうかも判らない状況で、よく理由は判らないが、自分を守ってくれると囁く少年は、何故だか無闇に頼もしく見えた。

「あの、……住井くん？」
「護でいいよっ、美咲さんっ」
なんて明るい笑顔だろう。若いっていうのは素晴らしきかな。
なんていうその言い草が何だか小母さんみたいで、自分も歳をとったなー、などと思う。……割とどうでもいいことを考える余裕があるなあ、私。
男の人のことを名前で呼ぶことには慣れていないが、しかし美咲は、割とあっさりと、
「……うん、じゃ、護くん」
そう呼んだ。もしも七瀬彰が聞いたら嫉妬で怒り狂うかも知れないが、そんなことは今や問題ではない。無事に七瀬彰に会えるかもわからない現状で、そんなことを心配しても野暮というものだ。

それを聞き、ぱあ、っと更に明るくなった顔で、
「何っ？　どしたの、美咲さんっ」
住井は返事をする。ああ、若い。じゃなくて、美咲は気を取りなおし尋ねることにする。
「えと、君は何処へ向かってるの？」
最初に浮かんだ疑問だった。彼が誰であるとかそういうことより、まず、彼が何処に自分を連れて行き、そして何をしようとしているのか、そちらの方が遥かに重要だった。
「ああ、僕の従兄弟の北川って奴を捜してるんだ」
すさまじく頼りになる奴でね。笑いながら住井は言う。美咲は未だ見ぬ北川の姿を想像する。
「後は――ちょいと作戦を考えてなんとかするんだ。今はまだ作戦の見当も付かないけど、なんとかする」
何の作戦を、そんなの聞くまでもなかった。
勿論、脱出作戦だ。
そんなこと出来るの？　多分自分の不安げな色が

そう叫び声をあげていたのだろう、住井は、大丈夫、そんな不安そうな顔をしないで、と、そう言った。
美咲は心から仰天していた。あまり顔に出ないからそうは見えないが、実は心底からびっくりしている。
自分よりもずっと若い子が、こんな強い行動力を持っているということ。若さゆえの暴走と取れなくもない。それでも、自分はこんなところで終わりたくないという確固たる意思を持って走っている、ということに。
それに比べて、自分は高校生のその暴走力に逆らえず、自分では自分を守る事も出来ず、彼のエネルギーについて回るばかり。情けなくなる。
自分はもっと強いと思っていた。物語の中のヒロインのように、切羽詰った状況に追いやられたら、何でも出来てしまうスーパーマンになれると、二十一になった今でも、時折思うことがあった。けれど結局そんなの幻で、何も出来はしなかったのだ。

「そういえば、美咲さんの支給品ってその割り箸だけなん？」
ふと立ち止まり、住井が美咲に尋ねる。
思考の渦潮で溺れていた美咲は、無意識のうちに、自分を渦から助け出したその手を強く握る。その感触に驚いたのか、住井は一瞬びくっと腕を震わせたが、しかし何やら嬉しそうな顔で握り返してきた。
うう。何やってるんだろう私。顔が紅潮しているのが判る。ちょっとぼけっとし過ぎていたようだ。
とにかく返事しなくちゃ、美咲はあわてて住井の問いに答える。
「あ、その、割り箸と、まな板」
「何それ。訳わからんね」
住井は苦笑しながら、まあ、一応見せて、と右手を差し出してきた。美咲はごそごそとジッパーを開け、バッグから黒いまな板を取り出すと、何だか不思議に申し訳ない気分になりながら、それを渡す。
「ごめんね、私の支給品、おかしなので」

「いいって、オレが守ってあげるっていってるじゃん。って、……え？　これ、……まな板か？」
住井は手に取ったその重量感に思わず怪訝な顔をする。真っ黒なまな板の横にはＰＣカードを突き刺すポートがあり、住井が知る限りでは、インターネットに接続できるまな板が存在するということは無いと思う。
だからこれはまな板の訳が無かった。
「あ、もしかしたら防弾チョッキみたいなのかも、お腹にいれて使う、とか」
美咲は訳もわからず、立ち止まった住井にそう言う。それは最早滑稽談にしかならないけれど。
美咲が使っていたノート型のワープロとはまるで勝手が違うのである。今のノーパソは、昔とは違った開き方をするのである。彼女が無知だったのは、彼女が物を大事にする人だから、旧型のワープロを捨てられなかった人だからだ。そういうことなのだから、あまり責めるべきではないと思う。
ぱかり、とまな板が二つに割れた。
「美咲さん、これ、まな板じゃないよ」
「え？」
まな板の中から、キーボードのボタンと液晶の画面が現れる。わ、こんなまな板があるんだ。スーパーまな板。
——そこまで美咲も無知ではない。
「これ——ノートパソコンだよ」
「！」
「——上手くすれば、もしかしたらっ」
住井は心底嬉しそうな顔をする。希望と勇気と生命に満ち溢れた笑顔で、美咲はただ、きょとん、と住井の嬉しそうな拳に胸を高鳴らせるばかりである。
「早く潤を捜そう！　上手くすれば、脱出できるかも知れないっ！」

074　僕たちの失敗―北風と太陽

拝啓おふくろ様、三日とろろ美味しゅうございました。潤です。

護との合流も果たせず、また知人達の安否も杳としてしれない事に、僕自身も苛立ちを覚えるばかりでありますが、武器と思った支給品がもずくパックという悲運に見舞われ、他に手の打ちようもなく、独り森の中、賽の河原で積む石の如くもずくでピラミッドを造っておりました。

ところが。

突然、空からどさりと女の子が振ってきたのであります。一瞬天使か、と見間違えるほどの綺麗な人でありましたが、よくよく見れば外国産のヤンキーでありました。さすがに天使は腫らしきった乳をセーラー服に包むことはありますまい。やんぬるかな、僕の目の前にいる物件は日がな一日スペアリブを貪り、ドクターペッパーを浴びるように飲み干す事に生き甲斐を感じているというあのヤンキーでありました。崖から足を踏み外したのか、ヤンキーは躯をしたたかに打って気絶しておりましたが、無粋を承知で確かめてみると特に骨を折ったような形跡も見られませんでした。おそらくは木の枝に引っかかりながら落ちたことと、下が草地ということが幸いしたのかもしれません。

そうこうしている内に、ヤンキーは軽くうめき声を上げ、目を覚ましました。僕は早速この目覚ましヤンキーに、一体どうしたのか、なにが君に起こったのであるか、と尋ねたところ、ヤンキーは突然くわっと眦を開いて僕の肩をつかんだかと思うと、わっしわっしと僕を揺さぶりながら訳の分からぬ事をわめき散らしてくるのでありました。

「おでん種おでん種おでん種がいたのヨでもねハントできなかったのおでん種シューティングして朕が美味しく召し上がろうとおもったのにできなかった

ノせっかくぶっ殺してぶっ殺して殺して殺し抜いてあげようと思ったのニワタシのガンでチャカでハジキで死に至らしめようとしたノニ見つけ次第ぶっ殺すノなにげにぶっ殺すノ射殺いいよネ素敵よネことほど左様な塩梅にて幽玄かつ趣深い情緒がたまらないよネ」

と、この様にまるで要領をえない答申が返って来るだけで、ただただ面食らうばかりであります。つうか、貴様はハジキ言うてる暇があったらアグネスと一緒に日本語を勉強しろ。

こうしてヤンキーは今、僕の隣でネジの緩んだ白痴の様にもずくをもりもり喰ろうているわけなのですが、おふくろ様はお加減如何でありましょうか？　嗚呼おふくろさま、どうかどうか風邪などひかぬようご自愛下さいませ。

潤はまだまだ死ぬつもりはありませぬ。

075　暗殺〜深山雪見〜

「ひぃぃっ！　殺さないで!!」

恐らくはこのゲームを企てたほうの人間だろう。何故こんなところにいるのかは分からない。進行状況の諜報、あるいは何かのイレギュラー。考えられることはいくつかあった。だが、それは今の彼女には関係ない。どの道下っ端なのだろう。

アホ面かまして歩いてた所を背後から忍び寄り、押さえつける。そして男の腰から、備え付けられたサバイバルナイフを一気に引き抜き、首筋に当てがう。男はどうしようもないほど取り乱していた。無理もない。いきなり背後からナイフをつきつけられては為す術もない。

「答えなさい……参加者に、川名みさき、上月澪の二名がいたはずよ……殺したのは誰!?」

「しししし、し、知らないっ！　ほ、本当だ！　ボ

クは下っ端だからその辺のことは知らないんだ。た、頼む、命だけはっ！」
「そう……」
男を押さえつける腕が若干緩む。男は少し身体を弛緩させた。
「でもね、あなたたちはっ……!!」
プシッ！！！
一閃、ナイフを横に凪ぐ。
「がっ!!」
男はヒューヒューという音を立てながら力無く崩れ落ちる。
「なんでみさきなの……なんで澪ちゃんなの…!?」
かすれた声でそれだけをやっと言い放つ。
(あの娘達は、たとえハンデを背負っていても、誰よりも光ってた。精一杯今を生きてたのにっ！)
ナイフから血を拭い、男の羽織っていた防弾チョッキを剥ぎ取る。探知レーダーがないかと期待もしたが、そこまでは持たされてはいないようだ。あったのは先のナイフと防弾チョッキ、そしてライフルだけであった。
ライフルの弾を肩からタスキのように下げると、丸腰の物言わぬ男を一瞥した。
「悪く思わないでね」
もう後戻りはできない。無論、無差別殺人などする気はなかった。それではみさきを殺った犯人と一緒になってしまう。それが彼女に残された最後の理性。
ターゲットは三種類。
この狂ったゲームを企てた連中。
みさき、澪ちゃんの敵。
そして、それを邪魔する……そう、このゲームに乗った奴らだ。もう私もこのゲームに乗ってしまったのかもしれない……それでもかまわない、親友の、そして可愛い後輩の敵を討つことが今の私のすべてだから。

076　牙

「咄嗟の一言というのは極めて大事だ。特にこういう状況ではそれが生死を左右しかねない」
マナと並んで歩きながら、聖は上機嫌で喋っていた。
「先ほど観月くんが飛ばしたハッタリ、あれはいけない。実際に人を殺せるような規模のレーザー砲となると、とても人ひとりで持ち運べるようなサイズじゃないからな。ハッタリが嘘だとバレてしまうと、相手に無駄な精神的余裕を与えてしまうぞ」
「べーっ、だ。どうせ私は嘘つくのがヘタですよー。……じゃ、あの時はどういうこと言えばよかったのよ」
「そうだなぁ……」
唇を尖らせるマナに、聖はしばし考え込むようにして、
「まぁ、なんにせよ無駄だろうな。多分、何を言われようと私は同じことをしただろうから」
「……何よそれ」
マナはだらしなく両手を首の後ろで組んだ。
（逃げてきちゃったけど、今、お姉ちゃんどこでどうしてるんだろう……藤井さんにはもう会えたのかな、それとも……ううん、まだ生きてる、きっと生きてるよね、お姉ちゃん）
フッと小さく息をつくと、隣を歩く聖に声をかける。
「ねぇ、霧島さん」
「『霧島先生』」
「……霧島センセー」
マナはジト目でひと睨みして、続けた。
「霧島センセーは誰か探してる人、いないの？」
「妹がいる」
即答だった。
聖の表情が、少しだけ硬いものに変わる。

「あの子――佳乃を死なせるわけにはいかない。佳乃は私が必ず守る。そのためにも、一刻も早く見つけなければならない」
聖は様々な感情の入り混じった、複雑な笑みを浮かべた。
「私も医者でなかったら、『この中の誰かが佳乃を殺すかもしれない』とか思って、出会った人間を片っ端から殺していたんだろうな。例えそのことで後で佳乃が私を責めたとしても、だ。やれやれ……職業意識というのは厄介で、なんとも有り難いものだな。私は佳乃を泣かせずに済んだぞ」
どこか遠くの方を見つめながら悟ったように言う聖の横顔を、マナはびっくりしたように見上げた。
「……霧島さんは」
「うん？」
マナの声に潜む真剣な響きに、今度は呼び名を訂正することもしなかった。
「仮に……もしも、そのせいでその、妹さんが――」
「さて、雑談タイムは一時休憩としようか」
聖はいきなりマナの後頭部に手をかけると、グイッと前に押し倒した。
「ちょっ！　ちょっと、何す……！」
ビィーーーン！
つい今までマナの頭があった空間を貫き、ボウガンの矢が側の木に突き刺さった。
「えっ……!?　まさか」
「急患みたいだな。……出て来てもいいぞ」
「チッ……当たっとけよ、めんどくせー」
オートボウガンを片手に、頭をかきながら現れたのは藤田浩之（七十七番）だった。
「最初に一つ聞かせてもらおうか。この場を平和的に解決する気はあるのかな？」
浩之はその問いかけには答えず、黙ってボウガンに次弾を装填している。
「面倒な相手だな……あれはもう何人か殺してると

見た」
「ど、どうするのよ⁉」
「倒すしかないだろう、死にたくなかったら」
「さ、さっきと言ってること違うじゃない！」
「殺すとは言っていない。抵抗できない程度にして後で手当てしておけばよかろう」
「そういう問題じゃ――」
最後まで言わせず、聖は素早く足払いをかけてマナを倒し、自分も地に伏せた。
ヒュン！　ヒュン！
続けざまに矢が頭の上を掠めていく。
（間違いない……あの人、私たちを殺す気だ……）
落ち葉や枯草の濃密な匂いに包まれながら、奇妙に静かな実感が頭の中を通り抜けて行った。
が、次の瞬間には聖の見た目よりはるかに力強い腕によって引き起こされていた。
「観月くん、ボケッとしていると死ぬので注意したまえ」
「そ、そんなこと言ったって……」
「いいか、よく聞け」
聖の瞳がスッと細くなった。
「今からどこでもいい、あの男と反対の方向に三十秒間全力で走るんだ。三十秒走ったら、振り返って来た方向に向かって三十秒間走れ。行け！」
「え、ちょっと、どういう……」
「いいから走れ！」
凄まじい剣幕に押され、ついでに聖の手に背中を押され、マナは浩之に背を向けて走り出した。
「し、死なないでよね！」
「努力しよう」
マナからは見えなかったが、また聖もマナの方は見ていなかったが、聖はヒラヒラと手を振って応えた。
そして手を下ろした時には、聖の手には数本のメスが輝いていた。
改めて浩之と正面から睨み合う。ボウガンの照準

が、聖にピタリと合わせられていた。
「あんた、医者か？　にしちゃ、医者っぽくないな」
「かく言うお主は高校生かな？　それにしては高校生らしくない」
二人は同時に口の端を歪め、笑った。
浩之がトリガーを引いた。

077　定時放送

ハハハハハ、諸君、元気にやっているかな。
この時間までの死者を発表するぞ。

三十四番　九品仏大志
四十二番　佐藤雅史
五十六番　立川郁美
八十五番　美坂香里
八十六番　美坂栞
九十八番　柳川祐也

以上六人だ。
最近あんまり死んでないようだから、ここで一つ面白い話をしてやろう。君たちが眠っている間に、胃の中に爆弾を仕込ませてもらった。カプセル型の小型の奴だがね。そしてそれは遠隔操作で自由に爆発できるようになっている。要するに俺を殺そうとすれば、その瞬間ドカンってわけさ。
ハハハハハ。
それからな、あんまり人が死なないようなら、つまらないからお前ら全員消させてもらう。そうだな……六時間。六時間の間、一人も死ななかったら、そこでゲームオーバー。全員死ね。
もたもたしてる暇があったら、その辺の奴をぶっ殺して時間を稼いだ方がいいぞ。俺様からのささやかな忠告だ。
あ、吐き出そうなんて考えるなよ。吐いたらその

瞬間即ドカンだ。吐き気には注意することだな。
ハハハハハ。
じゃあな。せいぜい楽しませてくれよ。

078　臨時放送

――先の放送から数分後。

ブッ

えー、皆やってるか？
俺様もこんなを放送入れる予定はなかったんだがなぁ。お前らの記録が悪いのがいけないんだぞぉ？
ペースが悪いと思ってたら、なんだぁ、この記録は？　まだ八十人も残ってるじゃないか。
これじゃあ面白くないよなぁ？　それに企画側にも都合があって、いつまでもゲーム続けさせるわけにはいかないんだよなぁ。
そこでだ。
さっきのに加えてもう一つ、ルールを付けて足すことにした。
今から三十六時間以内に、生存者が二十五人以下になってないと、ゲームは終了だ。決定した。
あぁ、といっても、助かるわけじゃないぞ？
核ミサイルがこの島に飛んで来るんだ、面白いだろう？　嘘じゃないぞ。こっちには巨大な権力と財閥がついているんだ、可能なんだよ。
それじゃ、せいぜい頑張ってくれ。
はっはっはっは……

ブツッ

079　メッサー

「ぐぁっ……！」
聖の回避動作は紙一重で間に合わず、放たれた矢

は聖の左腕を貫通した。
　続けて飛んでくる矢は地面を転がって避ける。聖は回転の勢いを殺さず立ち上がった。
「つ……意外と速いものだな、ボウガンの矢というものは」
「ちっ、当たらないもんじゃないだろーがよ」
　矢の補充をしようとした浩之だったが、その瞬間、聖が浩之に向かって行った。
「なに……!?」
　初めに持っていたメスは矢を避ける時に落としたのか既に消えていたが、
　聖が走りつつ右腕を振ると、その手にはまたメスが一本、光っているのだった。
「なんなんだこの女……ドクタージャッカルかよっ」
　今から装填して撃ち出す時間はない。
　そう判断した浩之はオートボウガンを投げ出し、腰に提げていた大ぶりのナイフ――先ほど公民館の職員から奪ったもの――を抜いた。
「はっ！」
　聖がメスを横に振るった。
　が、身体を動かすまでもなく、その刃は浩之に触れることはなかった。抜き身のナイフを意識してか、完全に腰が引けていた。
（なんだよ、この女――ビビってんのか？）
　浩之はナイフを握り締めた。そう、所詮相手は女で、しかも手負いだ。
（さっさと殺して、戻ってきたチビも殺したら他の奴探さないとな……）
　ナイフを逆手に持ち替え、斬りかかる。聖は慌てて身を捻ってかわすが、その動きについ今までのキレはない。
「ケガ、痛ぇんだろ。おとなしくしてな」
　再びナイフを振るう。正面からの突きに聖が思わずのけぞると、バランスを崩して尻餅をついてしまった。

浩之が一歩ずつ近づいていく。聖は必死で後ずさるが、すぐに後ろの木にぶつかってしまった。
「じゃ、死ねよ」
高々と振りかぶった手の先で、ナイフが光る。
と、その時、聖が不意に口を開いた。
「お主、知っているか？」
「あん？　命乞いなら言うだけ無駄だぜ」
「気づいていないか？　敢えてお前がそこに立つように仕向けたのを」
「何を——」
ドドドドッ！
言いかけた浩之に、銀色の光が降り注いだ。
メス。
「赤い雨（ブラッディレイン）とか言ったかな、これは」
「て、テメェ……医者のクセして……マンガなんか読んでんじゃねーよ……」
「佳乃が昔貸してくれてな。一度やってみたかったのだよ」
「ゆ……悪夢（ユメ）は見れたかよ……」
降って来たメスに全身を貫かれた浩之は、ごぶっと嫌な重い音をたてて盛大に吐血し、倒れた。
聖は大きく溜め息をついて、血の流れている自らの左腕を押さえた。
「ケガの度合いから言って、先にこの男の治療をするのが妥当なんだろうな……つくづく医者の鑑だな、私は」
背中の方で、小さな足音が聞こえた。マナが戻ってきたようだ。
「さっそく手伝ってもらうことにするか……手先は器用な方なのかな」
聖は白衣のポケットに手を突っ込んだ。

080　遭遇

「私、これからどうすれば……」
鬱蒼と茂る森の中、周囲よりもひときわ幹の太い

木の根元で、長谷部彩（七十一番）は一人うずくまっていた。彼女の手には、鞄の中に入っていた武器、Ｇペンが握られていた。
（このＧペンは普通の物と違いエッジがナイフのように鋭く研がれているのだが、この時点では気づいていない）
もう何時間こうしているのだろう。早く動かないと誰かに見つかってしまう……
そう思い、そろりと立ち上がろうとしたとき、遠くから銃声が響いた。
「きゃっ……」
その場にへたり込んでしまう。
「早く動かなくちゃ……」
震える足を勇気づけて、ようやく立ち上がったその時、木の陰から何かの気配がした。
「きゃっ！」
咄嗟に、手にしたＧペンを振りかざす。
カチン！
彼女の唯一の武器は、呆気なく弾き飛ばされた。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
かすれるような声で彩がつぶやく。
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
森の中を、一瞬静寂が支配する。
彩が恐る恐る顔を起こすと、しゃがみこんだ女の人が居て、彼女に笑顔を向けていた。その手には凶器である出刃包丁が握られていたが、膝の上で横倒しにされていて、害意は感じられない。
「あ、あの……」
「あ、気にしないで。あなたを見てると、何でだか知らないけど放っとけなくって」
「あ……」
彩は、崩れ落ちるようにその場にしゃがみ込みながら、すすり泣いていた。
「ありがとうございます、ありが……、ひっく……」
「も、もう、何泣いてるのよ。気にしない気にしな

い」
「あ……はい」
ねえ、名前は何ていうの？　あ、私は江藤結花」
女の人――江藤結花（九番）はそう名乗った。
「長谷部……彩です……」
「そう。じゃあ、彩ちゃん、でいいかな？　良かったら一緒に行動しない？」
「あ……はい」
「うん、それじゃあ行きましょ！」
「あ……待ってください。私のペンが……」
彩はおもむろに、地面をまさぐりだす。
「もう、そんなのどうでもいいじゃない」
「いえ……私の大切なペンですから……」
先ほどの位置から二、三メートルほど離れた位置に、ペンは転がっていた。そのペンを拾い上げて、
「ごめんなさい……」
「うん、行こう！」
二人はゆっくりと歩き出した。

081　（無題）

「うっ……あっ……」
新城沙織（四十九番）が、肩口を押さえながら呻く。
「る、瑠璃子ちゃん……どうしてっ……一緒に生き延びようってっ……」
くすくす笑う少女、月島瑠璃子（六十番）。
「私はね、ジョーカーなんだよ」
そう言いながら、肩口に刺しこんだハサミをぐりぐりかき回す。
「いぎぃ！」
「沙織ちゃんみたいに、すぐ他人と仲良くなろうとする人がいるからね。監視者が必要でしょ。それが、私なの」
瑠璃子が、勢いよくハサミを引き抜く。沙織は肩を押さえながら転がり、悶えた。

「ううっ……そんなのないよ……そんなのぉ……」
「そうそう。このハサミはね、毒が塗ってあるんだよ。遅効性のやつだから、すぐには死なないけどね。あと三十分くらいかなぁ。毒って苦しみながらのたうち回って死ぬんだよ……嫌？　嫌かな？　だったら、誰かを殺して？　証拠としてその人に支給された武器を持ってきてくれたら、交換でお薬をあげる」
「そ、そんなの無理……」
　沙織が、すがるように呻く。
「ナメた事言ってちゃダメだよ」
　瑠璃子が、そっと沙織の肩を足で地面に押しつけ、傷口に体重をかける。
「いぎああああああ！　やめて！　やめてぇ！」
「じゃあ、やってくれる？」
「やります！　なんでもやるからぁ！　やめてよぉ！」
　瑠璃子はにこりと笑い、足をどけた。沙織の頭の側にハサミを落とし、告げる。
「沙織ちゃんの支給品、白いＣＤだよね。いい機会だから教えてあげるけど、これは同じものを四枚集めて初めて意味があるんだって。ミサイルを止める事ができるそうだよ。これは秘密なんだけど、どうせ沙織ちゃんはもう生き延びれないから意味ないよね。じゃ、いってらっしゃい」
「ひく、ひっく……は、はい、いってきます……」
　沙織は泣きながらハサミを握り、力無い足取りで歩き出した。
「どうせ、あの毒は一度侵されたら助からないんだけどね。私は苦しまなくなるお薬をあげるだけ。でも仕方ないよね。ゲームなんだから」
　そう一人ごちて、瑠璃子はくすくす笑った。

082　覚悟

　闇。
　深い闇。

高く高く聳え立った木々は空を覆い隠し、今が昼間なのかどうかもわからない。とにかく、ここは暗い。

——まるで、この島に連れて来られた人達の心のよう……

足を止め、天野美汐（五番）は想い耽る。なんで、こんな事になってしまったのか。自分はこれから、どうすればいいのか。

そんな呟きも闇に吸い込まれ、答えが戻ってくることは無かった。美汐は歩きつづける事にした。足を止めたら、後ろから襲われそうで。

怖い。

怖い怖い怖い怖い。

だから、止まらなかった。止まれなかった。

「真琴……相沢さん……」

口を突いて出るのは、懐かしい人達の名前。だけど、その名を口にしたのは間違いだったかもしれない。涙が溢れ出て、止まらない。視界がぼやける。

いけない、こんな時に誰か現れたら……

袖口で目を擦る。

それでも、涙は止まらない。

遂に美汐は、力無く地面にへたり込んでしまった。

恐怖。

孤独。

それから逃げるためなら……

（死んだって……いいのかも）

目を閉じる。

物音。

（これで……楽になれる）

安堵。

「……ぴこ？」

（……？）

だが、聞こえてきたのは変な声。

薄く、目を開ける。

白い……毛玉のような犬（？）が、美汐を見上げていた。

「……どうしたの？　何処から来たの？」
笑みを浮かべ、美汐は優しく語り掛ける。
「ぴこぴこ☆」
如何な美汐と言えども、分かるわけも無かった。
美汐はこの妙な犬の頭を撫でる。犬は気持ちよさそうに、目を細めた。
しかし、そこで美汐の思考は中断される。
物音。
今度は大きい……恐らくは、人。
「……お逃げ」
美汐は犬から手を放し、逃がそうとする。死ぬのは自分だけで、十分。何も、何の罪も無いこの犬を巻き込むわけにはいかない。
「……ぴこ？」
だが、犬はその場を動こうとしない。
「……お逃げったら」
必死で逃がそうとする美汐だったが、犬は一向に動こうとしない。そうこうしているうちに、茂みの奥から一人の人物が姿を現した。
「……どうしたんですか？」
優しい笑みを称えたその少年は、長瀬祐介（六十四番）だった。聞けば、何でもこの犬（ぴこ、と名づけたらしい）は飼い主とはぐれたらしく、犬は飼い主を探すため、そして長瀬さんは知り合いを探すためにこの犬の鼻を利用しているつもり……らしい。
「それで、天野さんも知り合いを探している、と」
「……はい」
それを聞き、祐介は笑顔で言った。
「それなら、僕たちと一緒に行こう。一人より二人、二人より三人の方が安全な筈だ」
三人？　と美汐が聞くと、祐介はぴこを指差した。どうやら数に入っているらしい。
「……でも」
美汐が重く口を開く。
「ん？」
「貴方も……殺すんでしょう？」

美汐のその質問に、祐介の動きが止まる。暫く思案するが、やがて語り出した。
「……そうだね。僕はそんなにお人好しじゃない。生きる為には、殺さなきゃならない。だから僕は、殺さなきゃいけないと思ったときには迷わず、殺すよ。苦しませずに」
淡々と、途切れ途切れながらも祐介は語る。
「それに……殺しつづけていけば、奴らに眼をつけてもらえば、もしかしたら叔父さんに会えるかもしれない……どうやら、このゲームには、僕の叔父さん達が絡んでるみたいなんだ。叔父さん達に会えれば、もしかしたら説得出来るかもしれない。もし出来なくても、叔父さん達に近づけるなら、それは絶好のチャンスになる……殺さなければ、この島じゃ道は開けない……だから僕は、殺すよ」
美汐は、祐介の覚悟に返す言葉を持たなかった。どう答えれば良いのかも分からなかった。なので、
「……なら、どうしてわたしを殺さないのですか？」
こんな言葉ぐらいしか、出てこなかった。
祐介はう～ん、と困った様に頭をぼりぼりと掻いて答える。
「……そう、だね。君が……僕の知っている女の子にちょっとだけ似ていたから……かな？　無口で、ちょっと不思議な雰囲気で……」
そこまで言って、祐介は顔を真っ赤に染める。
「……ふふっ」
思わず、美汐の口からも笑いがこぼれる。それは、この島に来てから、初めての笑み。
「……あ～、笑わないでよ、恥ずかしいな」
そっぽを向いて祐介が言った。
「好きなんですね、その人のこと」
「……」
残念だが、祐介にはそれを否定できなかった。
「……分かりました。なら、わたしも覚悟を……決めることにします」

そう言うと美汐は、バッグの中の配給品をごそごそと漁る。中から出てきたのは、デリンジャー。
「長瀬さん、貴方に協力させてもらいます」
祐介は真剣な目で美汐を見つめる。
「……辛いよ？　いいのかい？」
美汐もまた、祐介を見つめ、言った。
「殺せば……道が開けるのでしょう？　なら、手を汚すのは私達だけでいいでしょう」
決意の篭ったその眼差しに、祐介もそれを了解するしかなかった。
「……それじゃ行こうか」
よっ、と祐介がその場を立つ。
ぴこがその後に続く。
一呼吸置いて、
「……はい」
美汐も続いた。
（真琴や相沢さんが助かるのなら、私が汚れ役になっても……構わない）
強い決意を込め、美汐は一歩を踏み出した。

083　（無題）

「嘘……だろ？」
祐一は、呆然とつぶやく。
香里と栞が……死んだ。死ん……だ!?
せめて、もうしばらく一緒にいてやるべきだったのか。自分が居れば助けることができたかもしれないのに。……俺は。
どれくらいぼぅっとしていたのか。
突然、赤い光が目を焼いた。夕日だ。だいぶ傾いてきている。もうすぐ夜になってしまうだろう。
赤い雲。赤い空。流れる夕焼け。
今の祐一にとってそれは、このゲームの象徴のように写った。
――あの時、白い雪を染めた鮮血よりも、禍々しい。

「……え？」
何だ、今のは？
思い出そうとするが、うまく思いだせない。だが、とても……哀しいことだったたような気がする。もう、二度と味わいたくないような……
そうだ、自失している時間はない。
あゆ。名雪。真琴。美汐。舞。佐祐理さん。
――茜。
もう誰も死なせるわけにはいかない。どこだ？　どこにいる？　焦りが心を支配していた。エアーウォーターガンを構えなおし、祐一は目的地もわからないまま走り出した。

084　茜色の空

油断した。こんなところで撃たれるとは。
幸い、肩の傷はそれほど致命傷にはなっていないようだった。
口ではあんなことを言いつつ、あの男の人は、自分が甘いということに気付いていないようだった。
氷上を助けたいなら、何も言わず私を撃てばよかったのに。
（少し、疲れました）
水を取り出そうと、鞄の中を探る。
――ナイフ……
最初に人を殺したときを思い出す。
上月、澪。
言葉が喋れないハンデを負いつつも、無邪気な笑顔を絶やさなかった。
こんなに冷たい自分にとって、本当に愛すべき後輩だった。
「澪……」
自分を見つけて、あの子は安心していた。
私に泣きついてきた。
だからこそ、私は――殺した。

生き残るには二つの方法があると思った。
言うまでもなく、参加者の皆殺し。
そしてもう一つ、主催者の裏をかく、脱出。
どう考えても、皆殺しのほうが現実的だ。
仲間を集めて、共通の敵を倒す？
綺麗事だ、裏切られたらどうする？
敵を追い詰めて、ヤケになって何らかの手段で私達を皆殺しにするかも。
いや、その手段を敵は持っていたのだ、さっきの放送で。
絶対に生きて帰る。その為には、確実性の高い方を、選ぶ。
皆殺し――こんな言葉が自分の人生に深くかかわるなんて、思いもしなかった。
あそこで澪を殺さなかったら、その後誰も、私は殺せなかっただろう。
だから、選んだ。
たとえそれが、『人間』として最低な行動であってもだ。
「涙もない……我ながら大したものです」
自分の中の譲れないもののために、人を捨てる。
いいことじゃないか？

氷上の言葉を思い出す。
あなた達は馬鹿だ……馬鹿だって？
誰かはわからないが、彼らは彼らで最後まで懸命に生きたはずだ。
彼はそれがわからなかったのか。
気がついたら撃っていた。
自分の行動が全否定されているようで。
あの人のことを諦めず、雨が降るたびに空き地へ足を向ける。
形は違えど、自分の思いに懸命だという点では同じだ。
その――あの人への思いを否定されたようで。

名前も覚えていない姉妹を思い出す。
姉の為に、自らの死も厭わなかった妹。
本当に姉の為になっているのか。
それは誰にもわからないけど、あの子の中では確かだった。
それはそれでいいと思う。
残された者はつらいけど。
あの子もまた、自分の想いに精一杯だった。
そして、姉。
向かってきたから、刺した。
どうして妹が死ななければいけないのか？　と言っていた気がする。
それを言い出したら、人間皆、どうして死ななければいけない？
それにあの人は、自業自得だったと思う。
危険を承知で離れ、その結果が出てしまった。
殺したのは私でも、選んだのは自分だ。
その辺をわかっていたのだろうか？

でも、今にして思う。
(手、繋がせてあげればよかった……)
それは感傷だ。
そんなことはわかっている。

自分の想いに忠実に生きている人がいる。
それがもし自分の道と衝突したら、全力で排除しなければいけない。
私を撃った男は、だからこそ私を撃てると言った。
同じだ、だからこそ、私も戦う。
譲れない、絶対に。
あの人のことを想いながら過ごす、終わりのない日々に帰るために。
ずっとずっと、あの人を待つ為に。

詩子……。
こんな私を見たら、絶対悲しむ。
だから、詩子にだけは会いたくない。

詩子に会ったら、私はどうすればいいのかわからない。
それに——
「祐一……」
彼に会ったら、私はどうすればいいんだろう。
詩子と祐一と私で過ごした一年間。
それは、詩子とあの人とで過ごした時間に似ていた。
祐一が転校しなかったら、私は——
浮かんだ考えを否定する。
「……矛盾だらけですね、私」
頬のあたりに、何か走った。
「……あれ？」
そして私は、あの人を失って以来始めて。
声を上げて、泣いた。
「とにかく……私は生き残って帰ります。絶対に、あの雨の空き地へ」
空を見上げる。
自分と同じ名前の色を持つ空に、そう誓った。
風が吹いてきた。
風は、風の向かう場所へ。
私は、私の向かう場所へ。

085 （無題）

美凪の前を歩いていたはるかが、唐突に足を止めた。
「遠野さん、そっちの刀、貸してくれる？」
「……はい、どうぞ」
ずしりと重い刀を受け取り、さらに自分の刀をもう一方の手で構える。
「よっと」
刀を振り、鞘を適当に落とす。

「……どうしたのですか？　一体」
「ん。何か、良くない事が起きる気がするの」
そう言って、前方の闇を不透明な瞳で見据える。
「遠野さん、退がってた方がいいかも」
「……はい。お気をつけて」
「ん」
少し目を細めて笑い、はるかは向き直った。
果たして、確かに危険はやってきた。

086　（無題）

「人だ……」
沙織は、ハサミを強く握りしめながら呻いた。
「殺さなきゃ死ぬ……殺さなきゃ死ぬ……」
何度も自分に言い聞かせる。人を殺す恐怖よりも、自分が死ぬかもしれない恐怖の方が勝っていた。
暗くて良く見えないが、相手は何か剣のような武器を二本持っているようだ。だが、もう他の人間を捜す時間は無い。躊躇は死に繋がる。沙織は、一気に走り込んだ。
「やあああああっ！」
刀を構えた相手に、一気にハサミを突き出す。
「うわわ」
相手は、緊張感の無い声をあげながら、刀の根本でそれを弾いた。一呼吸後に迫ってきた刀を何とかかわしながら、何とか体勢を整える。
「行くよ」
やる気のない声と共に、白刃が閃く。沙織は持ち前の運動神経でそれをかわしながら、身体を思い切り低くして水面蹴りを放った。
「あっ！」
初めて相手が大声を出した。転ばす事は出来なかったが、確かに大きく体勢が崩れた。
「死んで！　お願い！」
目をつむりながら、沙織はハサミを相手に突き刺した。

「うっ」
くぐもった悲鳴。しかし同時に、自分の肩にも灼けるような痛みを感じた。
「……つっ！」
相手が手放した刀が、自分の肩にぶつかったらしい。深くは無いが、鋭利な痛みだった。沙織は素早く刀を奪い、飛び退いた。相手が倒れた事を確認し、反転した。
「やった、これで助かる……」
暗い喜びを感じながら、沙織は言葉とは逆に泣いていた。
人を、殺した。自分が、助かる。
涙の理由は、考えるまでも無かった。

087　眠り

「指すま、３！　あーくそぅ」
「指すま、２。あ、わたし抜けっ！」
「指すま、１、ああ、もう、あげてよ折原」
「うるさいわ馬鹿野郎、勝負にあげてもあげないでもあるか!!　指すま、０！　よっしゃー、オレも抜けっ！　という訳で、七瀬見張りな」
「……くそう、あたしこーゆうの弱いのよう」
「言い訳は止めたまえ七瀬女史」

まったく、本気で暢気だなあ自分ら、そんなことを思いながら、七瀬は見張りに立つことになった。殆どキャンプみたいなもんじゃん。
指すまなんかで生命のかかった見張りを決めていいものか？　というツッコミをいれたくなったが、「七瀬は漢らしい奴だと思っていたのにああ思っていたのに、勝負に負けたら今のは無効と言い張るのか！　なんて最低な奴なんだ、七瀬の名もそこまで落ちたか、ああ知らなかった、くわばらくわばら」
「へええ七瀬さんってそんな不正行為をするような人だったんだ知らなかったよー。無事に帰ること

が出来たらクラスの皆に七瀬さんはすごく不正な漢です、って宣伝して歩くことにするよそうするよ」
とか落胆されるのが非常に腹立たしかった。いや、瑞佳がそんなことを言う訳ないのは判ってるけど。
「って、あたしは乙女よ！　漢なんて比喩はあまりに似合わないわっ！　そうよあたしは乙女！　あたし　ｉｓ　乙女!!」
——いけない。思わず大声で喚いてしまった。下手をしたら横で眠っている二人が目を覚ましてしまうかもしれない。こんな凄惨な状況かつこんな真夜中だ。折原はともかく、瑞佳は体力を使い果たしているはずだ。あたし？　あたしですか、あたしは無敵よ、徹夜なんて屁でもないわ。なめないでよ、あたし七瀬よ？
誰に言ってるんだろ、あたしは。
独り言は闇の中。七瀬は無闇に哀しくなる。
さて、七瀬は浩平に、一応銃を持たされていた。

モデルガンのように軽いものだと思っていたのに、さすがは鉄の塊だ、女の手には重い。だがしかし、この島にいる参加者の大半は女だった。つまり、確率論的に、銃を持たされている人の大半は女だ。
引き金を引けば、ぱんって音が鳴るのかしら。至極当たり前の事なのだが、七瀬はまだ僅かに信じられない、こんな不恰好な鉄の塊が人を殺せるとは。
音は流石に映画みたいなものだろうと思う。腹の底から重みを感じる、焼けるような音。
連想的に思い出す。大好きなハード・ボイルド・アクション映画、見たいなあ……ニコラス・ケイジは次の映画でどんな刑事を演じるのかしら。
——ギャグよ、しんとしない！　もっと笑いなさいよ！
誰に言ってるんだ、あたしは。
まあ、ともかく。もう一度ハードボイルドな映画が見たいという気持ちは確かであり。
って、あたしは乙女よ！　ローマの休日で感動し

てもレイモンド・チャンドラーの小説で感動しちゃいかんだろう……

いや、大好きよ、大好きなんだけどね、愛すべきフィリップ・マーロウ。

あああもう読みたいなあ、長いお別れ。死ぬまでにもう一回でも……この島の何処かに長いお別れ落ちてないかなー……落ちてる訳がないわよね。あはは。はあ。

また独り言である。

一人で過ごす夜とは果てしなく長い。

疲れが七瀬の思考を襲う。金属の重量感が七瀬の感覚を狂わせる。その僅かな闇が囁く、

もし、この果てしなく暗い銃口を、この馬鹿面して眠ってる二人に向けたら。そして、引き金を引いたらどうだ。

そんな途方も無い考えが、闇にやられた七瀬の思考で暴れ回る。七瀬はぞっとした、――いつかは、この二人も殺さなければならないのかも知れない。今は一緒に行動しているけど、いつかは。そう、あたしは、もしかしたら、レイモンド・チャンドラーの為に人を殺せるような、そんな人間なのかもしれない。そうでない保証が何処にある。

――けれど、所詮は脳髄に巣食った寄生虫だった。七瀬は殺虫剤で脳を焼き払い、闇という闇を駆逐しようと拳銃を握り締める。汗で僅かにぬめっているリボルバーは、人肌と同じ温度を持っていた。くすり、と七瀬は笑った。焼き払った後にある意識はただ一つ。

殺せるわけがない。

自分がもし糞虫のような存在でも、こんな風に、自分に信頼を預けて眠ることのできる友達は、こいつらだけは、殺せるわけが無い。

七瀬は思う。大好きでたまらない長いお別れをもう一度読むために、心底から生き残りたい、と。
こいつらともう一度、いっしょの机でお弁当をつつき合うために、心底から生きて帰りたい、と。
繭のことが思考に現れる。今、自分はあの子を見殺しにしている状況な訳だ。まだあの子の名前は呼ばれていない、あの子はしっかりと生きている。目覚めたら二人に提案しよう。あの子を探しに行こう、って。きっと瑞佳も折原も、同じことを考えているに決まっていた。

――てゆうか。
七瀬の思考は未来から現実へ引き戻される。
「普通は一人が寝て二人で見張りするものじゃ？」
七瀬が不満げに呟く。すると驚くべき事に、
「そりゃあそうさ。いくら七瀬が世界最強の漢でも、一人で見張りはさせられないよ」
と、浩平が片目を開けて笑いやがるではないか。
「ず、ずっと起きてたのっ⁉」
あうあう、独り言聞かれたかも知れないっ、七瀬が焦って言うと、浩平は心底で馬鹿みたいに大笑いしながら、
「当たり前だろ、なめないでよ、あたし折原よ？」
などと抜かしやがった。くそ、くそう、弱み一つ握られたっ。七瀬は悔しさで瞬間紅潮するも、しかし怒るのもなんだかアホらしくなってしまう。怒りを通り過ぎて呆れに変わったところで止まった、そんな感じ。
「まあいいか……折原、お話していいよ」
「おう、暇だしな。また指すまするか？」
「しない」

――こうして、夜は淡々と過ぎていった。

088　ビバ！　眼鏡っ子

　気がつくとリアンは堅い木の床の上に寝かせられていた。どうやらどこか民家の納屋の中らしい、自分の下にはビニールシートが引かれていた。
「ここは？」
「あら、気がついたんですね」
　リアンが声のするほうに振り向くとそこにいたのは眼鏡をかけた女性だった。女性はこんな状況にふさわしくない、のほほんとした感じで納屋の中を物色していた。ほんわかしているがどこか芯の強そうな顔、その顔にちょっとずれた眼鏡が似合っている。
「路地裏なんかで寝ていては風邪を引きますよ」
「運んでくださったんですか、ありがとうございます」
　そうだ、自分は結界の防御装置にやられて動けなくなっていたのだ、放送を聞いていたはずだが内容も所々しか思い出せない。
「よっぽど眠かったんですか？　そういえば私もこの前……」
「あの、よっぽど眠かったとしても路地裏で寝る人はいませんよ（汗）」
　二人は互いに自己紹介をした。こののんきな女性は牧村南（八十番）と名乗った。自分は結界を壊すために社へ行かなければならないという事を告げると彼女は協力すると言ってくれた。それはありがたかったのだが協力する理由を聞いたときに、
「眼鏡っ子に悪い人はいません」
　と言われたときにはちょっと目眩がした。
　彼女が自分を助けてくれた理由も自分が眼鏡をかけていたから？
　リアンはその事についてあまり深く考えない事にした。
「リアンちゃん、協力しましょう、握手」
「あ、はい、こちらこそよろしくお願いします、あ

れ？　この傷は？」
　南の手のひらには一本の切傷があった。
「これはですね、さっき武器の練習をしていたときに自分でやっちゃったんです。ちょっとしびれましたが今は大丈夫ですよ」
　と、彼女は自分の武器だと言う手裏剣とビンに入った液体を見せてくれた。
「!!　これって！」
　ビンの中身は猛毒だった、手裏剣に塗ってあるのと同じで血液から全身に回るタイプのものだ。痺れるなんていうものじゃない、少量が体内に入っただけで即死もありえるほどの強力なものなのに……
「牧村さん、本当に大丈夫なんですか？」
「南でいいですよ。私は昔から結構体は丈夫でしたから」
「ええっと……これは本当に強力な毒なんですよ」
「さあ、そういうことはよくわからないですから」
「……（汗）」
　わからないというだけで、どうこうできるものじゃないと言いかけたがやめた。多分無駄だろう。とにかく協力者が出来たのは心強かった、なにせ自分の武器は、
「リアンちゃんの支給品も面白いわね。これなんか限定非売品のレアカードなのよ」
　武器ではなかった。支給されたのは、桜井あさひトレーディングカード（全一〇八種、バインダー付き）だったのだから。

089　ちりちりと痛む鋭く古い切り傷のように

　第一回目の定時放送を聞いた後、太田香奈子（十番）は幽鬼のごとく彷徨していた。
　枝葉によるものだろうか、顔や手足に無数の擦過傷が出来ていたが、香奈子は何の痛みも感じていなかった。
　ただ、からっぽだった。

瑞穂が死んだ。あんなおとなしい子が。しっかりしていて芯の強い子が。
誰に殺されたかも分からない。
誰を恨めばいいのか分からない。
こんなくだらない企画の主催を憎もうにも、自分はどうせ何にも出来やしない女子高生だ。
月島さんに会えることも……もう、期待していない。
あの人はきっと妹の瑠璃子さんだけを護ろうとすると思う。いや、そうであることを絶対的に知っている。
だから太田香奈子は、邪魔だ。
「もう……終わりにしちゃおっかな……」
無力感に全身を支配されながら、香奈子は独り呟く。

支給された道具は赤旗だった。馬鹿馬鹿しい冗談。銃や毒が当たればすぐにでもゲームを降りられたのに。
こんなものじゃ瑞穂のところへ逝くことも出来ない。
かと言って、殺してもらいに突っ込んでいくほど狂えもしない。
皆が皆銃やナイフを巧く使えるもんか。都合良く急所に当たるはずがない。つまりは苦痛が長引くということだ。首を吊ろうが舌を噛もうが枝で胸を突こうが、上手くできる自信はない。
そんなのはごめんだった。
だって……紙で指を切っただけで、あんなにも痛い。
書類をコピーしていたとき。参考書の上質紙をめくるとき。古本屋で見つけてきた文庫を読むとき。
あれさえも全て月島さんとの想い出。決して帰ってこない想い出。

遠すぎて、今までの自分の十七年が夢だったように
すら感じられる。
まっしろだ。
そして瑞穂のはにかんだ笑顔。
涙も零れない。
ねえ、大事なこころを抉られ過ぎて、とっくに使い物にならないよ。

死にたいのに、死ねない。

どうしようもない矛盾を抱えたまま、香奈子は潮の薫りのする方へ歩いていった。
たぶん崖から飛び降りれば、楽に死ねるかもしれないから。

090 （無題）

美凪が物陰から出てきた時、すでにはるかは胸を押さえて倒れていた。
「河島さん……」
「失敗、しちゃったみたい」
溢れ出す血を手ですくいながら、はるかがにっこり笑った。
「運動神経、自信あったんだけどな」
口の端から零れる血を舌で舐めながら、言う。
「すみません、河島さん……私は、自分だけ……」
「気にすることないよ」
はるかは、温度を失い始めた手で美凪の手をとった。
「私はもうダメみたいだけど、頑張ってね」
「何か……何か、できる事は無いんでしょうか」
「ん」
はるかが、自分の胸元をはだけた。
「傷口、けっこう痛いんだ。舐めてくれたら、痛くなくなるかも」
瞳が、だんだんと透明な黒へと変わっていく。美

凪は、無言で頷いて、はるかの胸元に舌をつけた。そっと、なぞるように舐める。
「ん」
はるかが、静かに目を閉じた。その表情は、眠る赤子のように穏やかだった。
「……痛くなくなってきたよ」
美凪の手を握っていたはるかの手が、力無くほどけ、地に落ちる。
「河島、さん？」
美凪は、そっと手を握り直しながら声をかけた。
だが、その穏やかな寝顔が崩れる事は、もう、無かった。

二十六番　河島はるか　死亡
【残り81人】

091　嘘と真実

二回目の放送が終わって少しの頃。
島の沖七百メートル付近、潜水艦『ＥＬＰＯＤ』の司令室に高槻はいた。乗っている人間は高槻一人のみ、操舵する乗員にはＨＭ—13が配備されている。
今の所は結束している奴らが多いようだが、まあいい。あの爆弾でいつでも殺すことは出来るからな。
とはいっても、いきなり自分に向かってきて爆殺したのでは芸が無い。
確かにあの島に俺はいる、もっとも俺自身のクローンが五人だがな。ミサイルは俺自身の心停止か脳死、もしくは、この艦の沈没とともに発射される手筈になってる。
一部の奴らは、最初の放送をハッタリと思っているようだから、そいつらがクローンの所に来た時には、俺が言ったことを嘘だったことにしてやるか。

そして、それが伝聞した後、一網打尽だ。まあ、さっきの放送を機に殺しあってくれれば何も苦労はしないがな。
と、呟く間に潜水艦は、再び海底へと潜行していった。

その頃、海岸線を歩いていた来栖川姉妹は、
くいっ
「なに、姉さん？」
「……（沖合いに、何かいる）」
「はあっ？　……なにも見えないわよ、イルカでも泳いでいたんじゃないの？　もたもたしていないで行きましょう」

092　（無題）

七十九番、牧部なつみは途方に暮れていた。
一回目の放送で告げられた事実。
「……店長さん」
そう、宮田健太郎は死んだ。
このとてつもなく不条理な島で。
もう五月雨堂に、あの笑顔が戻る事は無い。
いっしょに浜辺で語らう事も無い。
思い出になったことをまた現実の今として感じることはもう、できない。
これで、二度目。
居場所が無くなったのは。
なんで？
わからない。
こんなのはわからない。
いつもみたいに学校帰りに商店街に立ち寄って、おしゃべりする。五月雨堂に行くと元気が出て、それはきっとマナだけじゃなくて店長さんのおかげ。
――――それも、もう、終わった。
「……絶対に、許さない……」
あの高槻っていう厭な感じの人を。

あの人がいなければ、少なくとも魔法が使えるのなら、私はきっと死んだっていいから店長さんを生き返らせてた。
でも、そんな高等な魔法、今はつかえない。それに、店長さんを殺した、私の居場所を奪った人も。他の人も、ぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶぜんぶ……もう、こんな世界、いたってしょうがない。
場所が無いのに、暮らせるわけが無い。
だったら、いなくなろう。
ここから。
だけどすぐにはいなくならない。
みんな、殺してから。
スフィー達はどうしよう。
殺したくはないけど、よく考えられない。
殺したくはないけど、それ以上に殺したい。
本当、よく考えられない。
よく考えられなくて、よくわからないけど、ひとつだけ、わかること。

「……私の居場所を、店長さんを奪った人たちを……私は絶対に許さない！」
そしてなつみは今まで一度もあけていなかったバッグをあける。その中にあったどうやら武器らしいもの。普通の者ならば、どっちかというと『はずれ』の部類に入るそれは、ひどく錆び付き、まるで使い物にならなそうな、全長三十センチほどの短刀だった。それを見てなつみは、きゅうっと唇の端を吊り上げる。
「もし使い方のわからないモノだったりしたらどうしよう、とか思ってたけど」
なつみは健太郎の過ごした日々の、何気ない言葉を思い出す。
「古い物には『魔』が宿る……」
事実、相当量の魔力がなつみに宿っていくのが、なつみ自身よくわかっていた。これなら、あのときの夢とまではいかなくても、それの簡易版。ある程度の自分の支配空間を作れる。

罠を。
罠を張るんだ。
ただひたすらに耐えて獲物が引っかかるのを。
魔力が尽きるまで。
生命が尽きるまで。
「私のココロ……一人でも多く、店長さんを殺したら
人を殺そうね。ココロも協力してくれるよね」

093　わたし。

金色の髪をした女と別れた後、私は木の実をとってそれをたらふく食べた。そして、その後少し眠った。起きると、辺りはもう暗くなっていた。
夜はできるだけ動かないほうがいい。
そう思った。
だけど、何故か私は歩かずにいられなくなってきた。私はすっと立ち上がり、暗闇の中を歩き出す。
一歩、一歩、歩くごとに、心臓がドクン、ドクンと高鳴った。
近づいてる――
何に近づいているかは判らない、だけど、何故かそう思えた。
どんどん近くなっていってる――
ドクン、と大きく心臓が又、高鳴る。
ドクン、ドクン、ドクン。
帰ろう、そう思ったけど、何故か体がいうことをきかなくなっていた。
また一歩、また一歩と脚は前に踏み出す。
――帰りたい。
その気持ちとは裏腹に、私の足はまた一歩、と前に進んだ。
目に映ったのは、相沢祐一の姿。
ドクン――
心臓が大きく高鳴った。
その瞬間、ぐらり、と世界が揺れたような気がした。意識が遠のいていく。気が付いた時、私は祐一

に向かってパチンコを発射していた後だった。

094　闇の中の出逢い

夜の帳が落ちる頃。月宮あゆ（六十一番）は、草むらの中で震えていた。
「うぐぅ……暗いよう怖いよう……」
暗いところが何より苦手なあゆにとって、この緊迫した状況の中、屋外で夜を過ごさなければならないこと、それ自体が拷問そのものだった。
「ううっ、うぐっ……」
彼女に出来るのは、こうして夜が明けるのをただじっと待つこと、それだけだった。
こんなときに、
「にゃ～」
「うぐぅっ!?」
突然、目の前から猫の顔が現れたのだからたまらない。あゆはその場で腰を抜かしてへたり込んでしまった。
「うぐっ……うぐあぅぅあぐあぐあうああぐぅぁあぁぁあ……」
「おい、どうしたんだよ、まったくよ……って」
急に駆けだしたぴろを追ってきた御堂の目に飛び込んできたのは、顔は涙と鼻水にまみれ、うぐぅうぐぅと訳の分からない声をあげ続ける少女の姿だった。
「あぐうあぁ……たすたすたすけたすけたすけうぐあぐうあうあぅ……」
完全に怯えきっている。殺すのは簡単だったが、いくら御堂でもここまで無抵抗に怯えきった子供をあっさりと殺すのはためらわれた。
「ったく……ちょっと落ち着けよ。怖がりにもほどがねえか、お前」
「うぐぅ……だってだって暗かったし、怖かったし、びっくりしたんだもん……」
「はぁ……じゃあ俺は行くぞ。じゃあな」

御堂が立ち去ろうとしたとき、服の裾が引っ張られた。
「何だ、まだなにか用か？」
あゆはぶるぶると首を振る。
「……離せ」
ぶるぶる。
「離せっての」
ぶるぶるぶる。
困った。こんなガキを連れていったら、間違いなく足手まといになるが、離してくれそうにない。無理矢理引き剥がしても、この調子だと強引に後を付けてきそうだ。
「……いい。好きにしろ」
そういって、御堂（とぴろ）は歩き出した。あゆは御堂の背中にピッタリ付いてくる。
「はぁ……強化兵がガキのおもりかよ。情けなさすぎるぜ……」

095　不実

夜が空を覆う。木々にさえぎられて月も見えないところ。一人ぽつんとたたずむ影。柏木千鶴（二十番）は悩んでいた。
いやな男……それがもっともふさわしい呼称だったあの男。確か、高槻と言った。高槻が持ちかけてきた提案は、私を揺らがせるのに十分な内容だった。
「こちら側に回って、平和ボケしている連中を一緒に殺しませんか？」
誰がそんなことを！　もちろん私はそんなことはできない、そう言った。
だが、高槻の話には続きがあった。
あの男の態度は、口調こそ慇懃だったが、あからさまな私たちに対する卑下が伺って取れた。
「鬼の血というやつですねぇ〜。ええ、調べさせてもらいましたよ。ニンゲンの命を欲し、それを達成

するための力を備えている。狩猟者でしたっけ？
いやー、非常にぴったりだ〜。そんなのが動いてると思うとぞくぞくしますよ。それでですねぇ〜、やっていただけるんでしたら、せめてあなたの縁者の方々だけでも命を救って差し上げましょう」
助かる……
なんという魅力的な取引だろう。
しかしそのために私は……
「あ、そうそう。勘違いしてもらっちゃ困るんですがねぇ。別にあなたの鬼の力自体に期待してるんじゃないですよぉ？　むしろその性質のほうですねぇ私が期待してるのは」
「……なぜって？　あなたたちの力は島の中では制限されるんですよ。武器を持った人間を相手にしたら十分脅威でしょう。でもそういう役の人間がいないとゲームが盛り上がりませんからねぇ、われわれのささやかな演出ですよ」
私が……手を汚せばいいの？

「まあ、ありていに言えばそういうことです。妹思いのあなたのことです、まさか断るなんてありませんよねぇ？」
にたっと笑う高槻。
この男……本当の下衆ね……
「もちろんあなただけじゃないですよぉ？　百人もいるんですからねぇ、こちらも、それなりの人数をそろえさせてもらっています」
そんなこと……そうハイハイと返事できるわけ無いじゃない……
「おや、思ったより博愛主義者だ。自分の家族より見ず知らずの人間の命のほうが大事だと？」
…………
「まあいいでしょう。あなたが殺さなくても状況は自然に〝死〟を求めることになるでしょう。まあ結末は一緒になりそうですねぇ。ああ、もちろん途中で気が変わってやる気になったというなら大歓迎ですよ？　きっと派手に殺してくれるでしょうからね

ぇ。もちろん、それでもご家族の命は保障しますよ。でもまあ、あんまり決断が遅いと誰か亡くなっているかも知れませんがねぇ。はっはっはっはっ……」
…………
最低の男だった。
でもあいつは切れる男なのかもしれない。
同じ鬼の血を引く姉妹の中で、私にだけ声をかけたのだから。あの男の嗅覚だろうか。たぶん高槻は分かっていて私に話を持ちかけた。
……私が、躊躇無く人を殺せることに。
あまり思いたくは無いが、まさか、えこひいきでもされているのだろうか？　皮肉にも私に支給された武器は私が最も馴染むもの。何かの金属でできた『爪』だった。
まだ、妹たちや耕一さんの死は放送されていない。だが柳川は死んだ。もっとも戦闘に長けていたはずのあの男でさえ死んだ。
死は、皆に平等にやってくる。
いまなら……今ならまだ間に合うかもしれない。
今からでも、始めれば……
ザワザワザワザワザワ……
急に風が吹いた。
枝がしなり葉がさざめく。
千鶴の意識は一瞬飛んでいた。
「――――え？」
動揺したような声。それは決して千鶴の放ったものでは無い。戻った意識、そしてその視界の真ん中に、さっきまでいなかったはずの女性、高倉みどり（五十四番）が立っていた。
千鶴は黙って彼女を見つめた。大方、わき道からはみだしてきたんだろう。そんなに距離が開いていない。
「え、えーとこんばんわ？」
同じ年くらいの女性だと思って安心したのか、彼女は挨拶をしてきた。
千鶴は応えない。

ただ、まっすぐみどりを見るだけ。
笑うわけでもなく、怒るわけでもなく。
「あのー……」
千鶴が返事をしないことに少しみどりは戸惑っていた。
ほんの刹那の沈黙。そして、
「……こんばんわ」
それを聞いてみどりはほんの少し安堵した。この人は人殺しじゃない、とでも思ったのか。そして千鶴はゆっくりと表情を笑顔に変えた。瞳がかすみ、口元が乾いた、やや危うげな笑みに。
「えっ？」
気付く間もなかった。
その瞬間、一気にみどりに走りよった千鶴は、両手に装備した爪で彼女を十文字に引き裂いていた。
「そん……な」
みどりは懇願するようにつぶやいた。そしてまもなくその命は尽きた。
高槻が鬼畜なら……私も鬼畜ね。
木々の狭間からこぼれる月明かりが、千鶴の両手に装着された爪を照らす。白銀に光る爪の上で、滴る血は鮮やかな紅に映えていた。

五十四番　高倉みどり　死亡

【残り80人】

096　疑心暗鬼

夜。手頃な民家の窓ガラスを割って中へ侵入した柏木梓（十八番）は、がたがたという物音で目を覚ました。寝ぼけながらも辺りを見まわすと、隣で見張りをしているはずの霧島佳乃（三十一番）が見当たらない。
「トイレでも行ってるのかな？　……ったく。順番で見張りやろうって言ったのに」
無断拝借している毛布をかぶりなおしながら、そ

んなことを考える。
　がたん。ぎぃ……。
「え？」
　がば、と起きあがる。今の音は……玄関のドアを開けた音ではないか？
「あの子、何を考えてるんだか……夜は危ないから、ここに身を隠そうと言ったのに」
　眠気を追い払い、梓は立ちあがる。急いで玄関に向かうと、果たしてドアは開いていた。
「……」
　どうしようか、と梓はしばし考える。自分で出ていったんだ。追いかける義理もない。
　無いのだが。
「……ああ、もうっ。あの我侭娘は！」
　梓はメイド服のスカートをひらひらとさせながら夜の住宅街を駆けだす。危険な目に遭いそうな人を放ってはおけない。柏木梓は、そういう女だった。
　数分の捜索で、佳乃はすぐに見つかった。街灯がさすだけの暗い道を、とぼとぼとどこかへ向かっているようだ。
「佳乃っ！」
　梓は叫ぶ。その声はひんやりとした夜気に吸い込まれていった。その声に反応してか、佳乃は立ち止まる。
「……」
「佳乃っ！」
　もう一度、梓は叫ぶと佳乃の元へ駆け寄る。佳乃は何を見据えるでもない、虚ろな瞳を梓に向けた。
「……」
「全く、こんな勝手なことして。さ、戻るよ。ここで別れたいって言うなら、一言あたしに断ってからにしな」
　梓が佳乃の腕を掴んだ瞬間。佳乃の唇が動いた。
「ならばいっそ、わたくしの手で……」
「え？」
　佳乃の両腕が持ちあがり、その指が梓の首に廻さ

れる。
「ちょ……あぐっ⁉」
指に力がこめられた。その瞬間、梓の首筋を灼けるような激痛が襲った。
「……」
首の皮膚が熱い。まるで熱した鉄棒を押し当てられているようだった。梓は振りほどこうともがくが、その細い腕をどうしても振りほどけない。
「く。この……おっ！」
苦し紛れに膝蹴りを放つ。が、びくともしない。呼吸が出来ない、意識が遠くなる。
「……く」
きぃん。
ふいに、手に込められた力が抜けた。梓は渾身の力でその腕を振り払うと、その場に崩れ落ち、貪欲に空気を吸いこむ。
「げほっ、げほっ……はあっ……はぁっ……は」
呼吸を整えながら、梓は殺気を帯びた目を佳乃に向ける。と、そこにはある方向をぼんやりと見つめている佳乃の姿があった。梓も釣られて視線の先を追う。
小高い丘が見えた。
そして、すっ、と音も無く佳乃はまた動き出す。恐らく、その小高い丘を目指して。
「ちょ……ちょっと！　う、げほっ」
呼びとめようとして、梓が咳き込む。首筋を触ってみると、ひりひりと痛む。
その隙に、佳乃の姿は見えなくなった。
梓はその場に座りこむ。そして、再認識する。これは『殺し合い』なのだということを。
「……相手の正体を知りもしないで、ホイホイ招き入れたあたしが馬鹿だってことか」
勿論、佳乃にも何か理由があってあのようなことをしたのかも知れない。だが、実際襲われた身にしてみれば、どんな理由があろうと、簡単には信じれなくなってしまう。

「はは……ははははは」
梓はおかしくなって、笑った。そうだ、これは殺し合いなんだ。相手を信用すれば――、
裏をかかれて殺される。
「……こんなものぉっ！」
梓は頭につけていたネコミミを地面に叩きつけようとして……できなかった。
佳乃の贈り物。それを壊したら、自分はもう誰も信じれなくなりそうで。
「……疲れた。寝る。後の事は起きてから考えよ」
梓は拳で目の辺りを拭うと、力無く民家へと戻っていった。

097　（無題）

ビュッっと音がしたと思えば、右肩を何かが掠めた。
「な、なんだっ!?」
「祐一っ、覚悟っ！」
目の前にいたのは沢渡真琴だった。
「な、真琴っ!?」
真琴に出会えた。それは正直いって嬉しかった。だけど――こんな状況になるなんて思ってもみなかった。
「なぁ、真琴。冗談だろ？」
真琴は有無を言わず、玉をパチンコにセットして、また、撃った。ヒュンと、玉は相沢祐一の顔の横をかすめた。くっ、と相沢祐一は唇をかみ締め思った。
誰も殺させないと思ってた。みんなを守ろうと思ってた。しかし俺が狙われるとは……しくじった。
予想外の展開だ。
「真琴、落ち着け、とりあえず落ち着くんだ！」
「うるさい、祐一っ！」
真琴は話を聞く気などない。しかし、真琴をとめないとどうしようもない。俺が死ぬだけだ。だけど、俺はここで死ぬわけにはいかない――茜に逢うまで

はっ。しかし、真琴を撃つ訳には……
真琴はまた、パチンコに玉をセットした。
「祐一っ！　かくごーーーっ！」

098　背中合わせのさよなら

「もうすぐだ。もうすぐ信頼できる人のいるところに着く」
背中にシュンを背負い走りながら、往人は言った。
「すいません……もう、もたないようです……」
「おい、何を言って」
「僕は……心臓の病気で入院中だったんですよ……もう限界みたいだ……自分のことは、よく、わかります」
「なんだと……」
その内容は、往人の足を止まらせるのに充分だった。
「じゃあ連中は、入院中のお前まで……」
「病院を変わると言われて、車に乗せられ……気付いたら」
「……くそっ」
ここまで強い殺意を抱いたのは始めてかもしれない。
今までは、あの呑気な田舎町の人間と一緒に帰れたらいい。
そう思っていた。
だが……
「このままじゃ、寝覚めが悪い」
「……戦うんですか？」
「……」
「そうですか……僕を撃ったあの女の子、里村茜と言います。彼女を、できれば、助けて欲しい」
思ってもない申し出だった。
「彼女は、誰よりも深い思いに縛られている。だから、彼女には殺すしかないんです。彼女を……」
「……考えておこう……」

嘘だ。許すつもりは、毛頭ない。
強い目的があって動いているのは誰も同じだ。
その目的が衝突し、殺しあうことになるなら、躊躇はしない。
だが、とりあえずこの少年の前では、こう答えておいた。
「……ありがとう、嘘でも嬉しい……僕は、氷上シュンと言います。名前、教えてくれますか？」
「国崎往人」
「……ありがとう……いい名前です」
「礼を言ってばかりだな？」
「はは、そうですね……」
それきり、喋らなくなる。
少し遅れて、背中越しの鼓動が、停止した。

七十二番　氷上シュン　死亡
【残り79人】

099　矛盾の上に咲く花

「佳い夜だ」
北川潤（二十九番）は樹木に体を預けてじっと空の月を眺めていた。今夜は満月であり、月明かりはこんもりと茂る森の中にもわけへだてなく差し込んでくる。冴え冴えとした月光を浴びながら、北川は久々に野外で過ごす夜の雰囲気と気分に浸っていた。
「こんな夜はやっぱりポン酒だな。あとはホッケとたこわさ、蟹ミソもんじゃ」
「ジュン。ほら、モズクだよ」
北川の傍らに座っていた宮内レミィ（九十四番）が彼にもずくのチューブを差し出した。
「ふわふわとりめん鮭茶漬け、砂肝ザーサイマグロの山掛け」
彼女も初めて出会ったときの錯乱状態はすっかり影を潜め、今では普通のレミィに戻っている。

「おいしいよ、サンバイズがよくきいてマスヨ」
「鳥皮を串に刺して炙ったヤツに塩をふったら」
「早く食べないとワタシが全部たべちゃうヨ」
「軽く最後に七味唐辛子をまぶして…」
「なくなっちゃうヨ、いいんデスカ？」
「ふぅ、たまらんねぇ」
「ジュン！」
さすがに腹に据えかねたらしく、レミィが語気を強めて北川ににじり寄った。
「腹が減っては戦はできぬっていうヨ？　なんでもいいからお腹に入れておかなきゃだめダヨ」
「はいはいはいはいはい」
レミィの言うことはいちいちもっともな事だったが、右から左へぞるぞるぞるぞるもずくを啜る彼女を見てるだけで己の食欲がどんどん減退していくのも確かなことだった。
「うむ」
それにしても、本当によく食う。
腹に全米も震撼する超弩級のサナダムシでも飼っているのだろうか。あるいはもずくにそこまでの魅力があるのだろうか。しかしミネラルやカルシウムはありそうだが、思想とか道徳はなさそうだ。
「もずくねぇ」
北川はうんうんと何度も頷いた。
「ジュン、どうしたの？」
じっと考え込んだまま固まってる北川をみかねたのか、レミィがぐいっと、心配そうに彼の顔をのぞき込んだ。
「いや、なんでもない」
再び北川はうんうんとうなづく。
「モズク？　モズクがどーかしたんですカ？　ねぇ、ジュン。モズクがどーしたノ？　モズク食べたくなったの？　教えて欲しいデス」
「あ、いや、うん、なんでもないんだって。何でもないから。まぁ、なんだ、もずくはいいんだ、もずくは」

あわてた北川はしどろもどろになって取り繕う。正直に「君のアニサキスはヨーロッパのシーンを席巻する勢いだね」と陳述してもよかったが、妙齢の女性にもずくやぎょう虫を織り交えたフランクな会話を吹きかける事ができるほど北川は無神経ではない。不謹慎な事を考えながらもレミィの天真爛漫さに触れるにつけ、北川の心に落ち着きや安らぎにも似たものが舞い戻ってくるのも確かだった。

ただ、この場において「やれんのか」と問われたとき、「やれますよ」と答えられる覚悟も欲しかった。ここはキャンプ場ではない。殺戮の場、人殺しや騙し合いが認められたキリングフィールドなのだ。

確かに強制収容所のような極限的な状況下で生き延びることができるかどうか、それはまずもって、体力及び気力で決定されるに違いない。しかし、頑健な身体と強い精神力の持ち主であれば必ず生き残れるというわけではないのだ。生き延びるためには、ある種の狡猾さが必要なのだ。ありったけの「才能」をはたいて、自分が味方にとって何らかの意味で有用な存在であることを必死になって示さなければならない。そしてそのためには、その他人を裏切ることに何ら痛痒を感じないかもしれない。むしろ、裏切られる人間の方を「愚鈍なヤツ」と読んで、何の良心の呵責もなくすましてしまうのかもしれない。

「寝るか」

そういってごろっと横になった。土や砂が体にまとわりついたが彼は気にしなかった。ただ今は少しだけでいいから眠りたい、考えることは彼にとって非常に疲れることなのだ。

特にこういう事は。

「ウン、いいヨ。ジュンが寝てるときはワタシが見張りしてるネ」

グッナイ。微笑みながらレミィが言う。

白いリボンをといたレミィの髪が月明かりに照らされて、金粉を蒔いたかのように夜風にそよそよとなびいていた。

微睡みからゆるやかに夢を結びゆく中で、北川はレミィに薄ぼんやりとマリアの姿を見た気がした。

100　(無題)

「……人が近づいてきます」
姫川琴音（七十四番）は、そう皆に告げた。
「国崎往人が帰ってきたのかな？」
みちる（八十七番）の疑問に琴音は首を振る。
「いえ……彼ではありません」
「分かるのね」
水瀬秋子（九十番）が尋ねる。
「はい。……力が弱まってるので正確には分かりませんが……国崎さんでない事は確かです」
「やっぱりこのゲームじゃ、静かに過ごす事なんて出来ないのかしら……」
水瀬秋子は、椅子から立ち上がり机の上に置いておいた支給武器――木の棒を手に取った。
「あなた達は、カウンターの後ろに隠れていなさい。絶対に出て来ちゃ駄目よ」
「でも、お母さん……」
水瀬名雪（九十一番）は不安そうに声をかける。
「安心して。あなた達は大丈夫。そして、私もこんな所で……」
ドンッ！
低い火薬の爆発音が、辺り一帯に響き渡ると同時に曇りガラスが粉々に砕け散った。
「キャーーー！！」
悲鳴が響き渡る。
(かなり大口径の銃ね……)
すっかり見通しの良くなった窓枠から冷静に外を伺う。
そこには、一人の男。
「瑠璃子は此処には居ない……此処に居るのは、瑠璃子と一緒に帰ることを邪魔するヤツら……邪魔はさせない。瑠璃子と一緒に帰るんだ。邪魔するヤツ

は皆殺す皆殺すミナコロスゥウゥ！」
疾走。
（速い。この付近で戦えばあの子達も巻き込む事になる……）
窓から飛び出し、月島拓也（五十九番）を喫茶店から引き離しにかかる。
「貴様か、貴様が邪魔をするのか。生かしておけない。邪魔をするなぁ！」
（よし……国崎さん。帰ってきたらあの子達をよろしくね）

101　星霜

少年は二人分の荷物を背負って歩いていた。
一つは自分の。
一つはもういない人の。
まだ開始からそんなに大した時間も経っていないが、なんだかどっと疲れた気がする。
「苦労性なのかな……」
自分に向けられた軽口に、少し疲れたような笑顔。見るものが見れば、それが何を示しているか分かったのかもしれない。
森を通るのは避けていた。折角海岸まで出たのに、わざわざまた森に入る気がしなかった。それにもう夜だというのに、見通しの悪い森の中を歩いて、誰かに襲撃されるのはごめんだった。
死ねない、死ぬわけには行かない。
予感のような『死なない』ということではなく、意志をもった、生きようとする思い。
たった一瞬だった出会いが、ずいぶんと自分を変えたものだった。海面を撫でるように吹く風は、なぜだかやさしく自分を包んでいてくれるような気がした。
「……ふぅ」
少し疲れたかな？　少年は座って休むことにした。思えば、日中は歩き通しだった。

……ここはどの辺かな。学校を海岸線に沿って北上していったんだから、スタート地点『Ⅱ』の辺りかな。
ふぅ……
やっと一息ついたって感じだ。こんなに疲れていたのかな、僕は。
星が天上で瞬いているのが見えた。こんな状況だっていうのに、あせることなく、輝きを保っている。
……なんだろう
少し……眠い……や…………
記憶。
少年の記憶。
そこには二人の人間がいる。
一人は無論少年。
そしてもう一人は……
「確かに『これ』を使えば、ほとんどの銃火器を無効化することができる。歩兵を主軸にした高槻の布陣なら、単体でも突き崩せないことは無いかもしれない。だが……」
白衣を着た男――巳間良祐――は苦虫をつぶすような口調で言った。
「お前も入れられてしまっているだろう？　端から僕たちに選択肢は無いのさ」
少年はあっさりと言った。もちろんいつもどおりに笑って。
「爆薬系……手榴弾から単純な炸薬、それからバズーカなどのボムを発射する物についてはまずい。それ以外なら……たとえレーザーが来ても大丈夫だ」
良祐はそれを軽く撫でながら言った。
「逆にいえばそれらがアウトだ。爆風を根こそぎシャットアウトできるほどの面積は確保できない」
「十分強力さ。それにそういうときのために、お前のそれがあるんだろう？」
少年はくいっと首で示した。良祐の持っている『鍵』であった。
「……これは最後の手段だ。これを使えば、たくさ

んの人間が死ぬ。もしかしたら俺も……君も」
よどみない話し方の割に緊張した面持ち。いや、もしかしたらその声はわずかに震えていたのかもしれない。
「そのくらいの前提で無いと逆に困るよ。いかさまをするのに躊躇してどうなる？　絶対勝てる賭けで大きく張らないでいつ張るのさ。どうせ張るなら大きな罠を、ね」
少年は軽くウィンクした。だが、良祐の顔は晴れない。
「そんな顔するなよ？　もしかしたら、死人を最小限に抑えることができるかもしれない。それは、必ずしも僕たちの目的ではないけれど、そうできたらいいだろう？」
少年は良祐を促す。
「……ああ、そうだな」
憂いばかりだった良祐の表情に、ほんの少し笑いが浮かんだ。少年も、それに合わせたかのように、また改めて微笑んだ。少し埃にまみれた、小さな沢山の部屋の、その一室での出来事。
「……ん」
目が覚める。少しだけ眠ったようだ。まだ辺りは暗い……目をそっとこする。
夢を見ていた。僕と、そして巳間良祐の。あいつもおそらく動いていることだろう。僕と同じ、唯一つの目的のために。
さあ、行こう。こうしてる間にも、また一人また一人と人が死んでいるのかもしれないのだから。

102　賽は投げられた

目覚めは最悪だった。
非常灯の明かりだけを頼りに雪見はあたりの様子を探る。あまり寝つけなかった。多分床についてから二時間と経ってはいないんだろう。
誰もいないデパートの三階、玩具売り場。喜ばせ

る主もなく動きつづける兵隊の玩具が実に滑稽だ。
誰もいない建物。なのに出入り自由なこの状況は連中が作り出したものだろうか。
「何から何まで用意周到ね……」
ここの地下一階で盗った食料品を口に含む。そして、一気にミネラルウォーターで流し込んだ。味なんてしなかった。どんなことをしても辿り着きたい。そんな憎悪は、目が覚めても薄れはしない。
「まだ時間は有る……」
正確な時間はわからないが、なんとなくそう思う(ちなみに、デパートの時計はすべて破壊し尽くされていた)。雪見は新たな道具を手にとった。使えそうなものを自分でかき集めたのだ。百円ライター、自分で作成したジッポオイル入り水風船（三個が限界だった）ドラゴン花火三十連発、いずれもココで手に入れたものだった。
武器として使えそうなものはほとんど撤去されていて、彼女は調理用の包丁の一本すら見つけることができなかった。
「絶対に死なないわ。すべてを終えるまで」
悪魔達には死を。それを邪魔するものはすべて排除する。のそりと影が動き出した。復讐という名の殺戮ゲームへ。

103　医師⇔意志

「くっ……！」
「気付いたようだな、少年」
痛みによって目が覚めた。目の前には先程の医者。もう一人の少女はいない。続いて自分の体を見る。
「これは……あんたがやったのか？」
「怪我人を手当てするのは医者の務めだ。どんな者でもな」
「頭悪いんじゃねぇのか？　俺がもう一度あんたらを襲ったらどうする？」
「ぬかりはない。君の武器はマナ君が捨てに行って

いる」
「……」
「どうだ？」
「……ちっ」
言い捨て、目を逸らした。
「君は何故人を殺す？」
「決まってるじゃねーか、生きて帰りたいからだよ」
めんどくさそうに答える。
「後に楽できるんなら、苦労はとっととやっておくもんだぜ。めんどくせーけどな」
「そうか。ならばこのまま野放しにしておくわけにはいかないな」
聖はそう言って、またどこからかメスを取り出した。
「殺すのか？」
「馬鹿を言うな。医者が人を殺しちゃいかん。このメスにはちょっとした薬が塗ってある。速効性だから、すぐ眠くなるはずだ。マナ君が戻ってきたら、眠ってもらう。そうした後に、そこらの木にくくりつけさせてもらうよ。その間に、トンズラだ」
その言葉に浩之は苦笑した。
「おいおい、結局は見殺しじゃねぇか。だったらとっとと殺せよ、めんどくせぇ」
「私は医者だ、人は殺せない。しかし出来ることにも限りがあるのでな。……君が改心するつもりがないなら仕方がないさ。精神科は私の範疇ではないのでな」
その声には、今までのような張りはなかった。見殺しという事実に苦悩しているのだろう。
「けっ……かったりぃこと言ってやがる」
「性分だ。仕方あるまい」
もう浩之は喋らなかった。この医者が自分を殺すつもりがないのはわかった。ならば後は待てばいい。罠にかかる瞬間を。これは賭けでもあるが、実際のところ負けてもよかった。

――かったるいから。
「何か隠しているな？」
「さぁな？」
「患者の嘘を見抜くのは得意だ、何を隠している」
メスを持ち浩之に責めよる。
次の瞬間。
「きゃぁぁっ！」
森に、マナの悲鳴がこだました。
「マナ君!?」
その一瞬だけ、注意が逸れる。
「だから甘いんだよ！」
隙を狙い、浩之は声のした方へ駆け出した。
「くっ、しまった！」
急いで後を追う。だが夜の森の中だ、走り辛いことこの上ない。運動神経のよい浩之に、差は離されていくばかりだ。
（あの少年……何故あんなに早く走れる？　迂闊だった……マナ君が戻ってくるまで眠らせておくべきだった！）
自分の迂闊さを呪うも、既に遅かった。破れかぶれでメスを投げるも、ことごとく当たらない。
（腕も鈍ったものだ……くそっ）
「霧島先生！」
辿り着いた先に見た光景は、倒れているマナに向かい、ナイフを突き付けている浩之の姿だった。マナの足には矢が数本刺さっている。早く手当てしないと、傷口が化膿して大変なことになるのは明白だった。
「わかってるよな、動くなよ。動いたら、即、こいつを殺す」
「先生……」
マナは怯える視線を送るだけだ。『助けて！』と、自分の身だけを考える発言はできなかった。『私のことは構わないで！』と、自分の命を投げ出すこともできなかった。
ただ怯え、震えるだけ。

「陳腐な脅し文句だな……何をした、少年？」
その声は震えている。
「教える必要もないが、いいか。ちょっとした罠さ。糸を張っておき、引っ掛かったら矢が発射される――これを四つだけ森に仕掛けておいた。運がよかったよ、用心するに越したことはない。で――」
落ちていた銃に手を延ばす。
「まだどっかに捨てられてなかったみたいだ。こいつも、運がよかったよ」
銃を構え、聖に向ける。
「……私の命はやる。だが、マナ君は見逃せ」
「先生――」
「あんたの言葉も陳腐だよ。じゃあな――」
そう言ったときだった。
「このっ」
マナが浩之の腕に噛み付いた。
「っ!?」
怯え切ったマナに、こんなことをする度胸はないと踏んでいたが、どうやらこちらも甘かったみたいだ。
「マナ君、逃げろっ」
言いながら、浩之が隙を見せた瞬間、聖はメスを持って間をつめる。
が、遅かった。
ダンッ、ダンッ！
二発。弾丸が聖の体に叩き込まれる。
崩れ落ちる聖の体。
次に浩之はマナへと銃を向け――
足に痛みが走る。
――しくじった、さっきのメスだ。
「……速効性は伊達じゃない」
聖の声が遠くに聞こえる。その時にはもう、浩之の意識は闇に落ちるところだった。
「先生！　先生！」
「……ははっ、油断したよ……」
聖に駆け寄るマナ。聖の体は既に、冷たくなりつ

つあった。
「私が……私が……」
「気に、するな……生きていてくれれば、それでいい。そんなことより、早く逃げろ。私は、もう、ダメだから」
「そんなっ！」
「私は医者だぞ？　医者の言うことは聞け……」
「先生……」
マナの目には涙が浮かんでいる。
「いいから早く……その足じゃ満足に動けないだろうが、私にはもう、治療できない。こいつが目を覚ます前に早く……」
「どうして！　殺せばいいじゃないですか!!」
マナの声が響く。
「……私は医者なんだ。君も医者の助手だ……やはり甘いな、私は……」
「……せんせぇ……」
「早く……行くんだ……元気でな……」

僅かの沈黙の後、涙を拭い、言う。
「はい、先生。ありがとうございます……さようなら……」
静かだ……。
もう、死ぬな……。
佳乃……。
すまないな、こんなお姉ちゃんで……。

三十二番　霧島聖　死亡

【残り78人】

104　面影

――月影。
みあげるとそこに、しろいかげのひかり。
面影。
「瑠璃子さん……」
僕の思いはその一言で、宙に浮かんで消えた。

天

「それが、探している人の名前ですか？」
隣で天野さんが訊ねる。
「うん」
僕は短く答えた。彼女もそれっきり、何も言わない。
……ぼくも、だれかをころすことになるのだろうか。そう仮定してみて、僕の思考は停止寸前になった。
さっきは、天野さんにああは答えたが、まだ、心の整理はつかない。つい、ほんのつい昔までの僕なら、他の選択肢さえ思いつかなかっただろう。
(でも、今の僕の望みは、瑠璃子さんに会うだけで、ただそれだけで)
それだけで、いい。
「手段と目的は」
唐突に天野さんが語りだす。
「……必ずしも、いつもうまい具合に折り合いがつくとは限りません」
「……」
「でも……」
ここで、僕は初めて、天野さんの顔を間近に見ることになった。少し瑠璃子さんに似た、面影。
「私は信じています。貴方ならきっと目的を優先してくれるでしょう」
「少し、疲れました」
そう言うと、彼女はその華奢な頭を、そっと僕の肩に寄せた。
「わ……」
あまりそういうことに慣れていない僕は、少しうろたえてしまう。
「すこし、お喋りが過ぎましたね」
彼女は、ノドの奥でくすくすと笑った。
「ちょっと……あの、天野さん」
「なんでしょう？」
僕に体を預けた姿勢のまま、天野さんは顔だけをこちらに向ける。

「こ……この状況で、寝ちゃうのは、ちょっと都合が悪いと思うんだけど……」
「どうしてですか？」
「僕だってほら……見ず知らずの他人な訳だし」
「大丈夫ですよ」
彼女は眼を閉じた。
「今私たちがいる木の洞というものは、あまり人目につかない場所なんですよ」
「いや、そうじゃなくて……」
「それに、昔、隠れんぼした時、あのこがここに隠れると、私はいつもあのこを探し出せないでいたものです」
「――そういう話じゃなくて、その、僕に裏切られるとか、そういうことは考えないの？」
「考えません」
彼女はきっぱりと答えた。
「そんなこと、別に根拠も何もないよ」
「根拠なら……少しは、あるんです」
彼女の声が少しずつ小さくなっていく。聞いている僕のほうも眠くなっていくような、そんな声だ。
「……あのこの面影が、少しだけ、あなたの中に見えるんです」
「あの子って、もしかして天野さんが探している人のこと？」
「いえ……その子とはまた別のこです。また会いたいとは、ずっと前から思ってましたけど……」
一瞬天野さんの表情が何かをとても懐かしむものに変わり、その名残を惜しむ暇もなく、ひどく切ないものになった。
「では、私は少し仮眠をとります。どこかで、ツインテールの騒がしい女の子が暴れていたら、起こしてくださいね？」
今度は本当に、天野さんは眠ったようだ。穏やかで規則正しい寝息が、洞の中に響き渡る。僕は、その寝顔を見て、半ば安心したような心持ちになった。
そして、ふと、何を思ったか、僕はずっと開けてい

なかったバッグを開いた。中のものを乱暴に取り出す。黒い皮製の手袋と、ピアノ線。
（これで、縊り殺せってことか）
その際、掌が傷つかないようにとの配慮から、手袋があるらしい。
（まったく、これほど不要な思いやりなんて、ないよ）
手袋をつける。レザーの擦れるぎりぎりと言う音が、そこから奏でられるだろうピアノ線の悲鳴を連想させる。
ピアノ線を手にとる。
そして――
伸ばしたピアノ線を再び丸め、取り出しやすいように胸ポケットにしまった。

105 （無題）

「高槻殿」
「なんだ？」
報告に来た兵士に背を向けたまま。不遜な言葉使いで答える高槻。
「……じつは、部隊の一部が我々の指示を離れて、一部の参加者に対して攻撃を行っているという情報が入りました。……申し訳ありません」
「こまるんだよなぁ、勝手なことをされちゃあ」
チャリ……
振り向きざま、兵士に対して何の躊躇もなく銃を向ける。
「た、高槻どのっ！」
「で、誰を攻撃しているんだ？　返答によっては、このまま引き金を引くが」
うすい笑みをたたえながら、回答をせまる。
「はい、あ、あの。保科智子、巳間晴香の二名です」
「そうか」
うれしそうな表情をうかべ、銃をおろす。

……そうか、おもしろい。
さあ、どうする巳間の妹。この難関をくぐりぬけて、俺の元まで辿り着くことができるのかな。
「クッ、クックックッ…」
笑いを押し殺しながら、彼の脳裏に浮かんでいたのは。かつて自らが貫いた、晴香の瑞々しい裸体だった。

「どないなっとんねんー」
隣の木の陰に身を隠した智子が、その手にした「S&W　M586」の引き金を引く。
……私達は公民館が炎に包まれる中、出来る限りの手がかりを探した。だけど見つかったのは、残されていたいくつかの武器だけ。その中から私と智子、そしてあかりの為に三丁の銃を持ち出したのだけど。
燃え落ちる建物を後にしようとしたその時、ジープに乗った四人の兵士がやって来たのだ。
「わたしたちが放火魔だとでも思っているんでしょ」
拳銃――ベレッタ92Ｆに装弾しながら返事を返す。私達を見るなり、彼らは発砲してきた。体勢を立て直す間もないまま、私達は西側の林に逃げ込んだ。
本当は、さっきの出来事について智子に問い直したかった。あの少年は何者なのか、と。
だが、そんな暇さえありはしなかったし、それよりも心配なことがあるのだ。
……あかりを置いてきてしまった。
彼女がいるのはここより北側の林の中だ。敵に見つかることはないと思うけど、彼女には有効な武器がない。あんな爆弾じゃあ、至近距離の敵は倒せない。不安がるあかりの顔が脳裏に浮かんだ。無性に切なくなった。そんなことを考えている間でも、戦闘は続いているのだ……
「ちぃっ！　あーもう面倒や！」
そう言うと智子は、自動小銃（六四式）に持ち替え、木の陰から踊り出た。

「みぃんな、いてまえ！」
タタタタタタタタン！
射撃時の反動に負けないように両足を広げ、脇を締め、銃を両手で持ちながら、ジープの陰に隠れた兵士たちを撃つ。
……かっこいいじゃない。
負けられないわね、これじゃあ。
わたしは意を決して、自分の持つ『力』を発動させながら、もはや使い慣れた日本刀を手に、敵の中に斬り込んでいった。

106　（無題）

喫茶店から飛び出した秋子を見失った月島拓也は小さな藪に足を踏み入れた。
（ここに誰かいる……）
電波使いとしての感覚が敵はここにいると告げている。

さくっ、さくっ、さくっ
膝まで生えた雑草を踏みしめて標的に向かう拓也。所詮相手は棒っ切れを持った女、自分の優位は動かない。
「瑠璃子、瑠璃子……僕等以外は皆殺しにしてやるよ……」
どろりと濁った笑みを浮かべ右手のマグナムに目をやる。弾も充分ある。
（あいつを殺したら喫茶店内の奴らも……ククク）
慢心が足元への注意を怠らせた。
「ガチィィーーーーーーーーン！！」
「っーーーーーーー！！」
骨をも砕く鈍い音と苦悶の声が響きわたる。拓也の右足に食らいつく大きな鉄の爪――それは熊狩り用の罠だった。
「うぁぁぉぉぉ……」
マグナムを捨て両手で懸命に鉄の爪を外そうと試みる拓也。しかし襲いかかる激痛にそれもままなら

ず、くぐもった悲鳴だけが口から漏れる。爪は脛の骨も砕きそうだ。
「痛いんだ、瑠璃子……兄さんを助けて瑠璃子、るりこ、ルリコ……」
ビキッ
脛が爪に砕かれた瞬間、拓也の意識は途絶えた。間もなくしてハンチング帽をかぶった長身の女が失神状態の拓也に近づく。
ズドン！
右手に持った散弾銃で拓也の頭を吹き飛ばした。その女は亡骸から銃と弾を奪い、改めて胸に向け駄目押しの一撃を放った。
外した罠を拓也の服で拭い終わり、バッグに仕舞いながら篠塚弥生は呟いた。
「喫茶店ですか、由綺さんも居るかもしれませんね……道案内を頼みますよ」
その呟きは少し先の藪に身を潜めている秋子に向けたものでもあった。
「聞こえてらっしゃるんでしょ？　喫茶店までの道案内、よろしいですね？」
拓也から奪った銃に安全装置をかけて、ベルトに挿し予備弾丸はポケットへ。熊用の罠、拓也の食料と水は自分のバッグへと全てのアイテムを仕舞い終えた弥生は、改めて秋子の居る空間に言葉をかける。もちろん散弾銃への弾の装填も怠らない。
……幾ら藪の中とはいえこの距離で散弾銃を相手するのは危険だ。また、彼女からは剥き出しの敵意は感じられない。それに、喫茶店に残した名雪達の事を考えると時間は取れない。
数瞬の後、秋子は両手を挙げて姿を見せた。
ぐずぐずしてはいられない。敵対する意思の無い事、また武器もこんな物しかない等最低限の会話を交わした後、喫茶店に残してきた者に殆ど戦闘能力が無い事を告げ、弥生の手を取って秋子は走り出した。

（声に出さなきゃいいってもんでもないでしょ……）

耕一は郁未の姿を確認する。

「少しは寝てろよ……俺が周囲に気を配ってるからさ」

「私は眠くないのよ……あなたこそ寝たら？」

嘘だった。思っていた以上に精神的な衰弱が激しい。そんな郁未を見かねて耕一が休もうと無理やり言い出したのだ。

「俺はさ、ほら、戦闘のあとしばらく寝てたから……」

あれは気絶だ。

「……あなたは不安じゃないの？　こうしてる間にもみんなが、大切な人の命が危険にさらされてるかもしれないのよっ!!」

「……」

郁未は声を潜めながらも、叫ぶ。

「俺はさ……」

五十九番　月島拓也　死亡
【残り77人】

107　謎

街道（といってしまうのもはばかられるような粗末な道）から山へと入ったところにある洞穴。そこで休息をとる二人がいた。柏木耕一（十九番）と天沢郁未（三番）である。

未だ耕一はまるで変態のような（というか変態）格好ですごしている。対する郁未は未だ下半身を露出させたままのえちぃ格好だ。

「寄り添いあって眠る姿は、まったく知らない人がみたら二人は仲のいい恋人（しかも進んでる）に見えなくもない」

ボカッ!!

「誤解されるような解説をしないで」

「あ、わりぃ、つい声に出てたか」

一瞬の静寂。それはすごく長く感じられた。耕一が先にそれを破る。
「確かに心配だ……今すぐにでも行動したいという思いももちろんある」
「だったらっ……！」
「だけど、俺が……俺達が死んだら残されたみんなはなんて思う？」
「えっ……？」
「きっとすごく悲しむと思うんだ。俺や、従姉妹のみんながそうだった」
親父が死んだあの事件、今も忘れられない。耕一も、千鶴達も。
「だから、休むときは休む！　万全な体勢で臨まないとな！」
「……」
（お母さん……）
お母さんの、晴香達みんなの悲しむ顔……見たくない。

「確かにそうね……」
「みんなも、俺達も笑って帰ろうぜ。だから今は休め……」
「うん、ありがと……」
郁未は少し安心した顔を見せ、そのまま意識は闇へと進んでいった。
（だけど……どう行動するべきなんだろう）
移動中、郁未が言った言葉……
「高槻……あいつはバカで高慢ちきだし、髪の毛だってハートチップルよりくさいけど、決して無能じゃない……そんなやつがなにも企んでないと思う？」
最悪の場合、私達の手の届かないところに黒幕が存在してるかもしれない……
「真の……黒幕ね……」
誰に言うでもなく、耕一の声が洞穴に通った。

108　吊り橋の死闘

「ほれ、もう元気だしぃや！」
猪名川由宇（七番）が横にいる少女に声をかける。
「……ん……」
大庭詠美（十一番）は力無くそう答えた。先刻からこの繰り返しだ。
（まあ、無理も無いか。詠美にはちょっと刺激が強すぎたかもなぁ……）
由宇が顔をしかめる。もちろん由宇だって恐くないわけじゃない。白衣の女（石原麗子）との戦いのときは無我夢中だった。今も詠美が横にいなければへたり込んでしまうくらい足が震えそうだ。
（まあウチが弱音吐いたらこのコ、もっとおびえてしまうしなぁ）
おもわず苦笑する。いつもよりはちょっと硬い由宇の笑い。
「どうしたの……？」
普段なら悪態のひとつでもつきそうな詠美だが、素直に由宇を覗き込む。
「ん？　ああ……まあ、いろいろな……」
（いつもこんだけ素直なら可愛いんやけどなぁ）
「ふみゅ……」
「えーい、女々しいわ！　いつまでもグズっとらんと、しゃんとしぃ！」
思わず一喝。詠美は脅えた子猫のように身体を縮こめる。
（あ、しもた……ついいつもみたいに怒鳴ってもうた。いかんなぁ）
だが、いつもみたいな台詞が吐ける分、由宇の緊張は和らいだようで……
「さあ、帰る準備するで」
「えっ……帰れるの……？」
「いや、すぐには無理やろうけどな」
「ふみゅ～」

「まずは和樹達を探そか？　あいつはああ見えて肝が座っとる。あいつはウチが認めた男や。きっと何とかしてくれるはずや」
「ほんとに……？」
（あかん、こいつおとなしいとめっちゃかわいいな……）
女同士なのに――火照っていく顔を隠せない。
「そうや。おっ、見てみぃ！　吊り橋やで！」
由宇の視線の先、大きな谷があった。下には轟々と音を立てる激しい流れの川。
「絶景やなぁ……ていうか、この島なんでもそろっとるな……」
そんな場所だからこそ、敵はこの島を指定したのかもしれない。
「とりあえず渡ってしまおか」
「な、なんか落ちそうなつり橋よね……」
「まあ、落ちても多分死なんやろ。運が良ければ無傷かもしれんで」

川の流れは速いが、深さはそれほどなさそうだ。
「運が良ければばって……パンダぁ～」
「冗談やっての……」
二人は慎重に歩を進める。歩くたびに吊り橋が揺れて、結構スリリングだ。
「ふみゅ～ん！」
「ええい、騒ぐな！　うっとおしぃ！」

「そこまでよ……」
突如聞こえた声。川の流れにかき消されそうではあったが、幻聴じゃない。
「ひっ！」
詠美が息を飲む――
「動かないで。動くと――撃つわよ」
前方から姿を現したのは深山雪見（九十六番）であった。すでに手にはマシンガンが握られている。
（なんや、なんでこんな時に！）
由宇が詠美よりわずかに一歩前で静止した。感覚

で銃の位置を確かめる。
――ある！
お尻に感じる異物感。すぐに取り出せる。問題はすでに臨戦体勢の相手側である。もはや指をクイッとひねるだけで、二人ともタンパク質の塊になってしまうだろう。とても銃なんて抜いている暇はない。
ぎゅっ!!
詠美は由宇の上着の裾をつかんで震えている。
(あかん、絶体絶命や！)
雪見は徐々に間合いを詰めていき、つり橋の上までやってくる。確実に仕留められる、かつ反撃をくらいにくい位置まで間合いを詰める。雪見は銃の扱いに関しては素人だが、マシンガンではずすなんてことはそうそうないだろう。
「……」
そしてちょうど橋の付け根の位置で止まった。
「もう一度言うわ。動いたら……殺す」
なんて殺気や……！　由宇の背筋を冷や汗が伝う。
「聞きたいことがあるのよ……」
そう言いながらも二人を狙うマシンガンはそのまま。
「ひっ!!」
恐怖に耐えきれなかったのか、詠美が後ろへとしりもちをついた。あまり丈夫ではないであろうつり橋が大きく揺れる……!!
「くっ！」
(あかん!!)
雪見はいったんバランスを崩しかけたが、すぐにこちらにマシンガンを向けなおした。そのとき由宇が総毛立つほどの殺気を感じた。イヤな予感といったほうが正しかったのかもしれない。
「スマン……詠美っ！」
由宇は思いっきり詠美を蹴り飛ばした。
「……あうっ！」
詠美が弾き飛ばされ、川へと転落していくのと、マシンガンが火を吹いたのは、ほとんど同時だった。

ドルルルルルルッ!!
由宇の眼前を赤い光が通りすぎる——!!
「……くっ!!」
慣れない重火器、揺れる足場、再度大きくバランスを崩す雪見。
「つぅ!!」
由宇の左腕を弾がかすめる。だがそれだけで済んだ。そして、由宇は拳銃を取り出し雪見へと狙いを定める。
「……!」
ギシギシギシ……
つり橋の揺れる音がやけに耳に響いた。
「形成逆転やな……」
別に逆転はしていない。だが、ほぼ互角の状況まで持ちこめたのは奇跡なものだ。由宇は精神的に優位に立っていた。
「へへ、お姫様を守ってつり橋の上で決闘……漫画の主役になったみたいやな」
自嘲気味に吐き捨てる。——自己犠牲なんてまっぴらだった。詠美も自分も和樹達も、またみんなでこみパで騒ぐんやってそう思っとったのにな……
「……私はまだここで死ねないのよっ!」
雪見がそう叫ぶ。二人の指がトリガーを引くその刹那……
バキバキッ!
つり橋が音を立てて崩れ落ちた。
「なっ!」
すでにもろくなっていたロープに、先程の雪見のマシンガンの弾が当たった、その結果だった。
……ゴボゴボゴボッ!
水の中で由宇がもがく。思った以上に流れがはやい。なんとか体勢をたてなおして岸に……背後に黒い影がよぎった。
ざしゅっ!
背中に挿入される異物感。

ゴボッ！
大量の息が泡となって水面へとのぼっていく。その中に血が混じっていた。
ザバァッ！
気力を振り絞って岸へとあがる。
「ごぼっ！　げぼっ！」
由宇の口から水と、大量の血が溢れ出す。
「なんやこれ？　……なんやこれはっ!!」
ごふっ。叫んだ拍子にまた血が口から溢れる。背中が熱い。やけるように熱い。それなのに、自分の背中の感覚が感じられなかった。
「そっか、ウチ……やられたんか……」
なんとなく自分の置かれている状況を理解する。
「えいみ……アカン、ウチじゃ漫画の主役にはなれんかったわ。主役はこんなところでやられたりせえへんもんな」
（パンダのクセにでしゃばるからよ！）
詠美の幻聴が聞こえる。
（大きなお世話や、大バカ……）
そして由宇の意識は闇の底へと消えていった――
ザパァッ！
ほどなくしてまた水面に顔が上がる。
雪見だった。
「……」
ライフルは肩に下がっていたが、サブマシンガンは捨てていた。今頃は水の底だろう。銃と共に心中するのは当然雪見の本意ではない。由宇の姿を確認してからゆっくりと歩み寄る。そして、彼女の背中のサバイバルナイフを引きぬくと、
「私はまだ……やることが残ってるのよ……！」
ゆっくりと崖上へと歩きはじめた。

七番　猪名川由宇　死亡
【残り76人】

109　（無題）

朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を収拾せむと欲し、茲に忠良なる爾臣民に告ぐ。

――――

朕は時運の趨く所、堪へ難きを堪へ、忍ひ難きを忍ひ、以て万世の為に太平を開かむと欲す。

――――

宜しく挙国。

一家子孫相伝へ、確く神州の不滅を信じ、任重くして道遠きを念ひ、総力を将来の建設に傾け、道義を篤くし志操を鞏くし誓って国体の精華を発揚し、世界の進運に後れざらむことを期すべし。爾臣民其れ克く朕が意を体せよ。

…………。

「これ、もしかして伝説の魔術書!?」

Sphie=rim=Atwaria=Crier ことスフィー（五十番）は、支給品である紙切れと睨めっこしていた。

110　継ぐ者

「つ……」

応急処置――と言っても、傷口を消毒して包帯を見様見真似で巻いただけだが――を終えたマナは、浩之の武器を積めこんで重くなったバッグに聖の応急処置セットをしまい込むと、よろよろと立ちあがる。つま先を地面に二、三度打ちつけて感触を確かめる。

――よし、大丈夫。これなら歩ける。

「じゃ、霧島センセイ、私行くね。もし、妹さんに会えたらここに連れて来るから。約束する」

マナは、冷たくなった聖の方を振り向かずにそう語りかける。聖の姿を再び見たら、また泣いてしまいそうだったから。

「それと、センセイの応急処置セットとメスは借りていくね」
声が震えるのを必死で抑えて、マナはそこまで言うと、未だ意識を取り戻さない浩之の方へ歩み寄った。
「……すっごく憎いけど、私は医者の助手だから、あんたを殺したりはしないわ」
意識を失ってる浩之を見下しながら、マナは冷たく言い放つ。
「その代わり、しばらく大人しくしていてもらうけどね」
ふん、とマナは鼻をならす。見れば浩之は、両手両足を縛り付けられてる。武器没収と身動きを封じること。それが、医者の助手であるマナに出来る、精一杯の報復だった。
「じゃあね。しばらくそこで自分のやったことを反省しなさい。……改心したって、許してあげないけど」
そういうと、マナはまだ痛む足を引きずるように歩き出す。
――さぁ、行こう。
お姉ちゃんや、藤井さんと会うために。霧島センセイの妹さんと会うために。
風が、マナを後押しするかのように優しく吹きぬけた。

111 coda di gemello

「ハァ、ハァ、ハァ…」
沢渡真琴（四十五番）は近くの木に寄りかかった。ほんのつい先ほど相沢祐一と遭遇したのはいいが、パチンコ玉を彼目掛けて撃ち、そのまま全速力で逃げてきたのだった。
「あうー、何であんなことしたんだろぅ？」
そう自問自答する言葉とは裏腹に彼女の心は先ほどの行動の理由を大体理解していた。それはそう、

怖れ。もしも祐一が私に敵意を向けたら？　という怖れ。ただ恐かったのだ。また誰かに裏切られるのが。
「そりゃあ、祐一なんて大嫌いだけど……」
その恐怖に反抗するかのように強がりとも思える言葉を口にした。そして唯一の友人である天野美汐のことを思い浮かべた。こんな気持ちのままじゃ美汐にも会えないな、等と考えていたら泣きそうになってきた。
「ぴろもいっしょにここに来たと思ったけど気付いたらいなくなってるし、これからどうし…って、ぎゃー‼」
突然、真琴の髪の毛がすごい勢いで後ろに引っ張られた。
「イタイイタイ！　なにすんのよー！」
「みゅ〜」
その髪の毛を引っ張った人物は椎名繭（四十六番）であった。
「何⁉　なんなのよあんたはいったい！」
「みゅ〜」
「『みゅ〜』じゃないわよ！　それにしても痛いわねー。髪の毛抜けるかと思ったじゃない！」
半泣きになりながらも真琴は文句を言った。
「みゅ〜みゅ〜」
それに対して、何も悪ぶれずに繭はうれしそうな顔をしていた。知人と似た髪形の人を見つけて、ただいつものようにしてしまっただけなのだった。
「何よ、私とやる気なの？」
「みゅ？」
はたしてこの少女は今回のこのゲームの趣旨を理解しているのだろうか。なんともいえない表情で、真琴を見つめ返していた。
「まぁいいわ。見逃してあげるから、さっさとどっかに行きなさいよ」
「みゅ〜」
まったく移動しようという気配のない繭。

「……いいわよ、私が他のところに行けばいいんだから」
そして振り向き、その少女から離れようと十歩ほど歩き、後ろを振り返ってみると、ぴったりとくっついてきている少女の姿があった。それどころかまた後ろになびく二つの尻尾を捕まえようとしていた。
「なによ、ついてこないでよ」
「みゅ～」
「そ、そんな声出したって知らないんだから」
ふんとそっぽを向いた後、横目でちらりと繭の顔を見ると眼にじわりと涙が溜まりつつあった。
「あ、あうぅ……わかったわよ！　ついてきたければついてくれば！」
「みゅ～！」
とたんに繭がうれしそうに飛び跳ねた。
「その代わり、もう髪の毛引っ張ったら駄目なんだからね」
繭は真琴のツインテールを引っ張ってそれに応えた。

112　（無題）

まさか民間人が、戦闘のプロに向かって白兵戦をうって出るとは思わなかったのだろう。晴香の大胆な行動に、兵士たちが浮き足立つ。
「ぐあっ！」
「ぎゃっ！」
不用意に立ち上がった二人が、まず、智子の銃弾の餌食になる。
「ぐはっ！」
そしてもう一人、晴香の白刃の露となる。
「ちっ！」
残った兵士が、晴香に対して銃で牽制しながら逃げていく。
「待ちなさい！」
……その先には、あかりが身を潜めている防風林

があった。
　あかりは突然の人の気配に、体をすくめる。
「……誰？」
　晴香さんだろうか。それとも保科さんだろうか、それとも……
　ガササッ！
「ひっ！」
　果たして、そこに現れたのは、銃を構えたいかつい『男』だった。
「いやぁぁぁぁぁっ！」
　対峙する、晴香たちと兵士。
　その兵士の腕には、
「ううぅ、いやぁ……やだぁ……」
　言葉にならないうめき声をあげながら、もがいているあかりの姿があった。
「これ以上近づけば、この女を殺す！」
　……最悪の展開だ。これではうかつに手が出せない。それに、いまのあかりの不安定な心に、乱暴な『男』という存在は、とてつもないダメージを与えかねない。
　晴香も、智子も、身動きがとれなかった。
　しかし。その緊張を破るものは突然現れた。
「あかりさんをいじめる人は、ゆるしません！」
　そんな台詞のわりにはノンキな声が、あさっての方から聞こえた。
「とうりゃ〜っ」
　ひでぶりゃ！
　もんどりうって倒れる兵士。晴香と智子は、目の前の出来事にしばし言葉を失った。

113　結界

「たしかこっちです、南さん」
「魔法の力ってすごいわね、私は何も感じないわ」

リアンと牧村南は人目を避けながら結界の拠点である社を目指していた。社さえ壊せば魔力が戻る、そうすればいくらでも脱出方法は考えられる。
「ところでリアンちゃん、あなたのほかに魔法を使える人っているのかしら？」
「えっと、スフィーっていう私の姉さんと、牧部なつみさんは使えます。後、こっちの世界の人でもごくまれに魔法を使える人がいるようです」
「そういえば、最初に全員が集められたときに魔法使いっぽい格好をした子がいたわね、マントに三角帽子の子……コスプレだと思ってたんだけど」
「あの人は魔法が使えるはずです、魔力を感じましたから……あ、そろそろ社に着きますよ」
この強い結界の力は社のすぐ近くにまで来ているという事だろう、もうすぐだ。
「ちょっと待ってください、南さん」
リアンは南を小声で制した。向かう先に人がいたのだ、しかも二人。様子を確認するためリアンは、南を残し先行する。
敵意を持つ人とは出来るだけ接したくない。相手に敵意がなければよいのだが、何しろ一人は竹槍を持っている、危険かもしれない。
リアンはしばらく様子を見ることにした。二人はどうやらリアン達と同じ社に向かっているようだった。
……ところで何で二人とも防空頭巾をかぶっているのだろう？
「舞、こっちでいいの？」
「大丈夫、悲しそうな力を感じる」
「ふえ～、舞はすごいですね～」
二人の声はどうやら友人同士の会話のものだった。防空頭巾を少し脱いでいる女の子は、のんきそうな声をあげているが、それは、もう片方の女の子を信用しているためだろう。
だけど、もう一人はわからない。魔力を感じるので結界を感じているのだと思うが、手作りらしい武

器を持っているという事は、やる気になっているという事かもしれない。感情のない少女の顔からは、それを窺い知ることはできなかった。
　もしかして、のんきそうな声はもう一人の緊張をほぐそうとしてのことなのかもしれない。それにしても場違いなほどのんびりした声だ。
　だけど、のんきな人はもう一人いた。
「リアンちゃん、あの二人は大丈夫と思うわ」
「！　……南さん、どうして!?」
「いいじゃないですか、そんな事。向かうところも一緒みたいだし、協力してくれる人は多い方がいいんじゃないかしら？　あの〜、ちょっとよろしいですか？」
　後ろに待たせていたはずの南は、気付かないうちにリアンを追い越して二人に声をかけていた。
「本物の魔女さんに会えるなんて佐祐理感激です！」
「……まほうつかいさん」
　二人の名前は川澄舞と倉田佐祐理と言った。
　舞が結界の力を感じていたこともあり、二人はリアンが魔法使いであると言う事もあっさり納得してくれた。やはりこの少女は魔法使いの資質があるらしい。
「リアンさんは、ほうきにのってお空を飛べるんですか？」
「……見てみたい」
「私も聞きたかったの、変身用のステッキはどこにあるの？」
「あの、空を飛ぶのはちょっと今は無理ですし、変身は高度な魔法なんで私にはまだ……」
　リアンは夢見る少女（？）たちに質問攻めにあっていた、みんなの目が輝いている。
　ドンッ！！！
　しかし突然の大音響と閃光に質問会は中断させられた。

「きゃっ！」
「どうしたの？」
「向うのほうからです、社のほう！」
「また同じ、悲しい力……」
リアンは慌てて走り出した。何が起こったかわからないが急いだほうが良い、直感がそう告げている。少し走ると開けた場所に出た。目の前には古びた社があった。そしてその前には、
「姉さんしっかりして！」
三角帽子とマントを身に着けてぐったりしている黒髪の少女と、それをかかえる同じ顔の少女がいた。

114　目覚め

「どこなんだよ、ここは……」
目の前に広がるのは果てしない闇。いや、前だけじゃなかった。右も、左も、後ろも、足元や頭上を見てもそこは闇しか広がってなかった。前に……いや、前に進んでいるのかどうかもわからなかったけど、俺は歩いた。
どれくらい歩いただろうか、ふと周りを見渡してみると、そこは見なれたこみパ会場だった。
（そうか……早くスペースにもどらないと…）
急がないと。開場まで時間が無い。サークルの位置は覚えている。間違うはずが無かった。そこにいるのはいつもの赤い髪の売り子。
「悪ぃ、遅れた」
俺は後ろを向いて作業をしている瑞希に向かって声をかける。
「もー、遅い！　何やってたのよ」
こちらには向き直らず、作業を続けながら瑞希は返事をした。
「いや、ちょっと寝坊してさ。まあ、まにあったからいいだろ、手伝うよ」
そう言って俺は瑞希の肩に手を置く。
だが瑞希は何の反応もしない。

「おい、瑞希、怒ってるのか？」
動きを止めた瑞希に問い掛けた。
何の反応も無い。
「おい、瑞希ったら！」
俺は瑞希の肩を揺さぶった。瑞希は抵抗することなく力の流れに身を任せ、あお向けに倒れた。
「瑞希……？」
俺は瑞希の顔を覗き込む、その目には生気が無かった。
「おい！　瑞希！　瑞希！」
やばい、はやく医者に見せないと……
「ふむ、どうしたのだ、まいぶらざー」
「大志か。いいところに来た、医者だ、医者を呼んでくれ！」
俺は大志のほうに向きなおる。
「無駄だ、もう死んでいる。我輩が殺したのだよ」
すでにそこには大志の姿は無く、ただ声だけが響いていた。

「おい、どう言うことだ⁉　何で殺したんだよ、大志！」

目が覚めたとき、俺は一人だった。何かとても嫌な夢を見ていたようだ。気分が悪い。
ほんの少し痛みが残る腹を気にしつつも、時計で現在時刻を確認した。
（かなり眠ってたな……）
俺が眠っていた時間。それはこの殺人ゲームの最中においてどれくらいの意味を持つのだろうか？
多分、俺が寝ている間にたくさんの人が死んだのだろう、俺がその中に加わっていないことはものすごく運の良いことだと思った。
俺はよろよろと体を起こすと、バッグを拾い歩き始めた。とりあえず顔を洗いたかった。
少し歩くとすぐ川についた。顔を洗った俺は、近くに奇妙なものが落ちているのを見つけた。支給品のバッグだ。誰かが川に落としたのだろうか？

「パンダ……待って……」
そのバッグを拾い上げたとき、近くの茂みから声が聞こえた。俺は注意して茂みを覗き込む。
「詠美！」
その中にいたのは大庭詠美（十一番）だった。

「ん……」
詠美が目を覚ましたとき、目の前に広がる光景は屋根だった。
（あれ？　私、橋から落とされて……どうなったんだっけ……）
「気づいたか、よかった……」
横で和樹が安堵の息をついた。詠美は和樹の姿を確認したとたん、和樹に抱きつき、大声で泣き始めた。
「うわぁぁぁぁぁん、和樹、和樹ぃっ！」
いつもの気丈な態度はそこに無く、ただ自分の胸に顔をうずめて泣く詠美を見て和樹は、よほどつらい思いをしたんだろうと思った。
数分後、ようやく泣き止んだ詠美は、自分に起こった出来事を和樹に話していた。
スタートしてすぐの白衣の女に襲われたこと。それを由宇が助けてくれたこと。二人がつり橋で襲われたこと。……そして、由宇が詠美をつり橋から落としたこと。
（そうか、由宇は詠美を守ったんだな）
そう考えたとき、涙が出てきた。自らの身を呈して詠美を助けようとした由宇。それに比べ自分はたいそうな理想を掲げたくせに何も出来なかった。
それどころかすべてを投げ捨てようとしていた。それが悔しかった。
（俺は無力なのか？　誰も助けられないのか？）
そう考えたとき、和樹はふと聞かなければならないことがあるのを思い出した。
「詠美、放送は無かったか？」
「あったよ、パンダがメモってた」

詠美はそう言うと自分のバッグの中から紙を取り出し和樹に渡した。そこにはこう書かれていた。
『胃の中に爆弾』
それを見た和樹は詠美に問い掛ける。
「これ、どういう意味だ？」
「たしか放送でそう言ってた。胃の中に爆弾があって、何時間かの間に誰も死なないと爆発するって」
和樹は内心舌打ちした。言われてみればその通りだ、相手を殺さなくても生きていけるのなら当然大多数の人間が手を組むだろう。最初は小さなグループだろうが、それが大きくなればなるほど管理者側には不利になる。手を組ませない方法、それは強制だ。
だれも死なないと自分が死にます。だからどんどん他人を殺して寿命を延ばしましょう。
十分考えられる事態だった。だが、眠っていた自分は死んでいない、ならば誰かが死んだのだ。
そんな反吐を吐きそうな思いで、和樹は続きを見る。死者の名前だった。その中に見なれた名前があることに気づく。
『三十四番九品仏大志、五十六番立川郁美』
「大志……郁美ちゃん……」
さまざまな思いが和樹の胸を過ぎる。
九品仏大志。悪友だった男。最後の最後であいつは裏切った。だが、今思うとあいつにも何か理由があったのかもしれない。だけど瑞希を殺したことを許せるかというとそうじゃない。そこにあるのは複雑な思いだった。
立川さん、いや郁美ちゃん。彼女は昔から俺を支えてくれた。苦しいときや辛いとき、彼女からの手紙やメールに励まされたことは何度もあった。
心臓病の体を押して俺に会いに来てくれたこともあった。そんな彼女を見たとき、俺は強い人だと感じた。どんなに苦しくても目的を持ち、希望を捨てない人。それは俺の思い過ごしかもしれない。でも俺は彼女にそういうものを感じていた。

――何かを決意した顔。
　顔を上げた和樹を見たとき、詠美はそう感じた。
「もう迷わない」
　その台詞を聞いたとき、詠美は由宇の言葉を思い出した。
『あいつはああ見えて肝の座った男や。ウチが認めた男や。きっと何とかしてくれるはずや』
　その通りだと思った。パンダ、あんたの見る目は正しかったわよ。
「さあ、行くぞ。きっと仲間はいるはずだ」
　和樹はすでに歩き始めていた。
「あ、ちょっと待ちなさいよ！」
　詠美はバッグをつかむと、和樹に追いつくために走り始めた。

115　邂逅、訪れ

「……単独行動は、こういう時に困ります」
　手元にある時計型時限爆弾を見ると、もう十一時を過ぎていて、日付が変わろうとしていた。
　茜の疲労は限界だった。もともと運動は得意な方ではなかったたし、極度の緊張が強いられる殺し合いは、茜から気力も体力も無慈悲に奪っていた。
　睡眠を含む休憩を体が欲している。だが、不用意な場所で眠ることはできない。仲間が居れば交代で休憩できたのだが、今更それを嘆いても仕方ない。
「……仕方のないことです」
　答える者は当然なく、漏らした声は闇にすいこまれるだけ。溜息一つついて、茜は移動を開始した。
「……ここにしましょう」
　辿り着いたのは、この島に唯一あるだろう百貨店。入口も開いており、中は広くそれでいて月や星の明

かりも届かない。
（広い空間。月や星の明かりが届かない。ここにいれば、見つかり辛いはずです。……同じ考えでここにいる人もいるかもしれませんけど、気にしたら負けです）
中に入り、寝場所を探す。ひとしきり歩いて、目も慣れてくる。次第に茜はおかしなことに気付いた。
（……百貨店なのに、人が『使っていた』気配がありません……どういうことなのでしょう？）
食品売り場には食料はなかったが、それ以外のフロア――洋服売り場等――には商品がしっかり置いてある。しかし、どこか綺麗すぎた。かつて人々が賑わっていた名残りが、まったく感じられなかった。
（……まさか）
一つの可能性に気付く。
（全部、このゲームの為だけに作られたのでしょうか？　……そういえば、少しくらい大きくても、ここは孤島です。あんなに広い住宅街や、こんな百貨店があるはずありません）
茜は目眩を覚えた。
（……どれだけの資産が、このゲームのために動いているのでしょうか？）
結局茜は、洋服売り場の一画に陣取ることにした。フロアの中心と思われる場所よりも、わずかにずれた所のカウンター。エスカレーターと階段は、フロアの壁沿いに設置されていた。壁沿いを周回される恐れもあったので、中に入ったこの場所を選んだ。もちろん通路側でもない、歩かれる恐れがある。よくよく考えれば無意味なことのような気もしていたが、言い出せばきりがなかった。
（……シャワーを浴びたいですけど、贅沢は言えませんね……眠いです）
手元には目覚まし時計もあった。いつもの習慣で六時にセットする。
「……おやすみなさい」
そういって、目を閉じる。

かすかに感じた違和感を、無視しながら。
……、………。
――ガバッ！
（……馬鹿ですか、私は）
時限爆弾なのだからセットした時間に爆発して永眠するところだった。そもそも普通の目覚ましでも、鳴ったときに周囲に人が居たら自分の位置をわざわざ教えるようなものだ。自分自身の行動に呆れながら、茜は目覚ましを止めて、今度こそ眠りについた。
目が覚めた時、この悪夢が終わっていることを願いながら、本当の夢の世界に入っていった。

116　邂逅

夜の中を祐一は歩いていた。先程真琴に出くわしたがよほど錯乱してたらしく、祐一に攻撃をしかけ、逃げていった。
（真琴の奴……大丈夫か……？）
あの状態では下手に後を追うと逆効果だと思われたため、こうして一人歩いている。
（疲れたな。どこか寝る所があればいいが……）
祐一もまた、単独行動の問題点に悩まされていた。
（単独行動してる奴は皆、同じ事を思ってるんだろうな）
その場に立ち止まり、夜空を見上げる。
どこまでも広い空には、幾千もの星がきらめいていた。その輝きの一つ一つが美しく、夜空全体でもまた、見ている者を引き込むような勢いがあった。
（あの星達から見たら、俺達はどう写っているんだろうな。生き残る為に、人を殺してる。そんな俺達を見て……）
そこまで考えて「馬鹿馬鹿しい」と首を振った。
とりあえず、祐一のなすべきことは決まっていた。それまでには絶対に死ねない、そう、誓っていた。
（茜……どこにいるんだよ……生きていてくれ……）

放送で聞いた、美坂姉妹の顔が浮かぶ。あそこで一緒にいてやれたなら——何度目にもなる思いがよぎる。目的の為とはいえ、間接的にでも人を殺したという事実は、彼を縛り苦しめていた。

だからせめて、

(茜だけは、死なせない……)

彼は知る由もなかった。その美坂姉妹を殺したのが、他ならぬ茜だという事実を。

一つの建物を通り過ぎようとした瞬間。

———

(……なんだ?)

建物の中から、誰かに呼ばれたような気がした。いや、それは正確ではない。『建物』が、彼を呼んだ気がした。不思議な感覚に捕われつつ、気がつけば祐一は、建物の中へと入っていった。

(暗い。光が届かない……少し目が慣れるまで、動かないほうがいいかもな)

何も見えない闇の中、しばらく祐一は立ち止まっていた。やがて、目が暗闇に慣れてくる。改めて見回してみると、まずエスカレーターが目に入った。

(ここは、百貨店か何かか? こんな孤島に……)

それでも、そこは確かに百貨店だった。何が自分を呼んだのかはわからぬまま、一階を見て回ることもせず、止まったエスカレーターを登っていった。

夜の建物に入るのは、何も初めてじゃない。

(学校の校舎で、魔物と遭遇したこともあるんだからな……)

だがこの建物の空気は、夜の校舎のそれとは全く質が違った。神秘性など欠片も存在しない。そこにあるのは、闇と、不快なだけの非日常の空気。魔物の現れる予兆に似ていた。

(違うな、夜の建物なんてこんなものだ。あの校舎には舞がいたから、こんな不快感はなかったんだ)

背中に汗が滲む。右手に持ったエアーウォーターガンにも自然に力がこもる。引き返そうと思わない

こともなかったが、それを許さない何かがあった。
二階も通り過ぎ、三階へ。
何かは、確実に近付いていている。
そう感じた。
『三階婦人服売り場』
それは、今にして思えば予感だったのかもしれない。建物が祐一を呼んだのではなかった。それも違った。祐一がこの建物に強い何かを感じたのも、必然だったのだ。
(空気が違う？)
三階についた途端、今までの重苦しい空気が一気に消え去った。あるのは、ただ、懐かしい感覚。
(俺はこんな場所は知らない……なのに、なんだ？この感覚は)
ここには何かがある。それだけははっきりとわかった。エアーウォーターガンのトリガーには指をかけたまま、周りを見ながら、一歩一歩、確実に。

ずっと、会いたかった。
一日たりとも、忘れたことはなかった。
初恋だった。
今も、忘れられなかった。
ずっと探していた。
「……あかね？」
床で静かに寝息をたてる少女を見つけ、呆然と呟く。
それは、予感だったのだ。
「……誰っ⁉」
突然の気配と声に茜は飛び起き、近くに置いておいた銃を構える。そして、気付いた。声は、昔に、聞いたことがある。目が慣れない、姿がわからない。だけどこの声は……
「忘れたのか？　元同じクラスの、相沢だ」

「……祐一」
「覚えていてくれたか、久しぶり」
嬉しかった。相手がまだ、自分のことを覚えてくれていたことが、嬉しかった。
「……本当に、祐一もこのゲームに参加してたんですね」
「あぁ、嫌な偶然だな」
「……詩子も、どこかにいるはずです」
「本当、嫌な偶然だ」
詩子。懐かしい名前だった。茜の親友で、祐一とも仲良くなって、三人でよく話していた。憎まれ口も多かったが……詩子までこのゲームに参加していたと聞き、祐一は自分の運命を呪った。
「話したいこと、いっぱいあるんだぜ」
「……私もです。だけど……」
言って、静かに銃を、祐一の方に向けた。
「……私の前から、消えて下さい」

祐一は、何を言われているのかわからなかった。
「茜？」
茜は、こんなことをするような子だったのか？と思う。
「……消えてください、早く」
もう一度言った。
「……どうして？」
祐一には、それが精一杯だった。
「私は、祐一が思っているような人間じゃありません。……もう違います」
静かに……それでも悲痛に言った。普通の人には、ただ淡々と喋っているように聞こえるだろう。だが祐一は違った。その裏にある感情をはっきりと読み取っていた。
「……どういう、ことだ？」
訊いてはいけない、だが、訊かずにはいられない。
「……私は人を殺しました。もう四人も。ある姉妹を殺して、その人達から、祐一のことを知ったんで

す」

闇が、深くなった。

117　闇の中の二人

「……おい」
「うぐ？」
「いい加減、離れろっての」
「……うぐぅ〜〜」
御堂（八十九番）の服の裾をはっしと掴んだまま、月宮あゆ（六十一番）はふるふると首を振る。
「……ちっ」
「にゃぁ〜」
今は夜。自分の能力に制限がかかってしまうと判断した御堂は、身を潜めて夜を明かす事に決めた。
それに、明らかに荷物になっている目の前のガキを連れてうろちょろするのは賢明でない。
勿論、こんなガキは殺してやっても良かったが、うぐぅうぐぅ怯えるあゆを見ていると、手にかけることは何故か躊躇われた。
「うぐぅうぐぅわめくな。いいか、朝までだ。とりあえず朝までは一緒にいてやる」
こくこくとあゆは頷く。
「ちっ。ヤキがまわっちまったぜ……」
悪態を吐きながら、御堂は怯えるあゆの姿を改めて観察する。と、背中に背負っているリュックに目が行った。
「……おい。お前、武器をよこせ」
「うぐぅ？」
「その背負ってる鞄だ。その中に武器が入ってるんだろう？」
「うぐぅ……でも……」
煮え切らないあゆに、痺れを切らした御堂はドスの聞いた声で唸る。
「いいからよこせ。……それとも、ここで死にたいか？」

「うぐっ！　あわわわわ……!?」
あゆは慌ててリュックを下ろすと、ごそごそと中を漁り始めた。
あゆから差し出したものを受け取ると、御堂はしげしげと眺める。武器の類では無いようだ。
「で、こりゃ何だ？」
「うぐぅ……マイク……」
「まいく？」
「こ、こうやって歌うんだよっ」
と、あゆは御堂の手からマイクを奪い返すと、口元に寄せて歌い出す。
「会いたいあいあいあいあいあい……♪」
狂ったように髪を振り乱しながら歌うあゆの姿に、御堂は無言ですっとデザートイーグルの銃口を向けた。
「うぐっ！」
「……もういい。やめろ。そいつはお前が持っていて良い」
「つ、使い方を教えてあげただけなのに……」
「にゃあ～」
うぐうぐと泣き出したあゆを、ぴろが慰める。そんな姿を見つつ、御堂は早く夜が明けることを願うばかりだった。

118　黒い女

マナは途中に何回か小休止を挟みながら歩き続けた。
一所に留まっているわけにもいかないし、眠るわけにもいかない。
矢に貫かれた足が、包帯の下でズキズキと痛んでいたが、それでも止まることはできなかった。
(お姉ちゃん、藤井さん、それに佳乃って子、絶対生きててよねっ……！　死んでたら……蹴り殺してやるんだから)

それでなくても小柄な女子高生である。体力的にはとうに限界を超えていた。
今、マナを動かしているのはただ邂逅への欲求のみだった。会って……それから……
（……会ってから考えればいっか……）
歩いて、歩いて、夜が明ける頃、不意に視界が開けた。森を抜けたのだ。
そこは林道のようなところだった。道を挟んでまた森があり、道は左右に長く続いていて、ここから終わりは見えない。
（また森に入ったんじゃバカよね……取り合えずこの道に沿って……どっちに行こう？）
マナが左右をキョロキョロと見回すと——そこに人がいた。早朝の日差しに美しい黒髪が映える、杜若きよみ〈複製身〉（十六番）。
森から出て来た時から既に見つかっていたのだろう。目が合った。
「……あのー」
「消えなさい」
きよみは忌々しげに吐き捨てた。
「朝っぱらから血の匂いなんて嗅ぎたくないわ。今すぐ視界から消えてくれれば、撃たずに見逃してあげるから」
「……あなた」
「聞こえなかったの？　あたしは消えろ、と言ったの。日本語、わかるでしょ？」
そう言って腰に手を当て、睨みつける。
きよみは背の高い方ではないが、相手がその年頃の平均身長よりかなり低いマナだったため、相対的に見下ろす格好になっていた。
悔しいけど私よりは巧いな、とマナは思った。
「どうせ銃なんて持ってないんでしょ」
「…………」
きよみがその姿勢のままで固まる。
実際よりもいくらか長く感じられる数秒が、その状態で経過した。

「持ってるんなら、ろくに構えもしないでペラペラ喋るなんてこと、しないわよね」
「……今すぐ絞め殺したいわ、あなた」
「好きにすれば」
　もし聖が生きていて、この言葉を聞いていたら間違いなく後で注意されていただろう。
　有効な武器を持っていないとは言え、相手の戦闘能力がはっきりしない以上、このように挑発するのは明らかに得策とは言えなかった。
が、きよみは幸運にも何の能力があるわけでもない一般人の複製身であり、特に戦闘訓練を受けているわけでもない。
　結局、マナに手を出すことはできなかった。できたのは悪態をつくくらいのものである。
「生意気なガキ……」
「そのガキにつまんない嘘、見抜かれたのは誰だったかしらね」
「黙りなさいよ、チビっ子」
「……蹴るわよ」
　二人の女の瞳の間で、目に見えない火花が一瞬、散った。

119　デジャヴ？

「さて、もう暗くなったことだし、この辺で一休みでもしよっか？」
　沢渡真琴はつい先ほど同伴者となったばかりの椎名繭にたずねた。
「みゅ！」
　おそらく肯定しただろうと思われる返事が返ってきた。その言葉を聞き真琴は地面にぺたんと座り込み、それに習い繭も座り込んだ。
「あ、ところでカバンの中には何が入ってたの？　私は見ての通り、このパチンコよ！」
　繭は何の警戒心も抱かずに素直に差し出した。もちろん真琴の方もそれでなにかをしようとは微塵も

考えていない。
「どれどれ、なんかすごいのが入ってたらいいんだけどね」
カバンをごそごそと探りながら一つずつ物を出していく。
「え～と、爆竹、ねずみ花火、ロケット花火、あ、これ音が鳴るタイプのだ！　ん？　なんか大きめのもある。なんだろ？　……バルサン。あう～、どっかで見たことあるようなものばっかり……」
「みゅ～♪」
繭にとっては大当たりだったのであろう、非常に喜んでいるようだった。
「ほかのみんなはどんなの貰ってるんだろう？　変な金髪の人も祐一も水鉄砲みたいなの持ってたから、みんなこんなものなのかなぁ？」
確かに真琴が今まで出会った人間と二人の荷物を見る限りとても殺し合いができるものではなかった。
しかし、この島には強力な武器を持った殺人鬼が確実に潜んでいた。そして夜はふけていった。

120　殺人者

「苦しい……」
御堂は闇の中で苦しそうにうめく。酸素が足りない……俺は首でも絞められてるのか？　相手は蝉丸か岩切か、別の誰かか——？
「やめろっ、いきなりこんなっ……！」
御堂は混乱していた。気がついたらいきなりこの状況だ。
「バカな、俺様がこんな……」
油断だったぜ、情けねぇ……
意識が遠のいていく。
……そういえば俺は今どこにいたんだ？
不鮮明な記憶をたぐりよせる——
「げはっ！」

そこで意識が覚醒する。
「夢か――？」
だが、視界に映るものは何一つ無い。
そして――
「あったけぇぞ、この毛玉！」
頭の上に乗っていた物体を手で払いのける。
「ふぎゃっ！」
猫は一度衝撃に目を覚ますが、再び目を閉じてすやすやと眠りはじめる。
「てめぇのせいかよ……十分くらい、気持ち良く寝かせろよ……」
御堂が猫を睨み付ける。御堂を恐怖に陥れたものに反応は無い。
「くそっ！」
いわゆるひとつのレム睡眠というやつだった。まだ寝ついてから五分と経っていない。御堂の胸中は穏やかではなかった。
（まあ、戦場でぐっすりってワケにはいかねぇがよ……）
このゲームが始まって何故か――御堂にとって非常に不本意ではあったが――同行者に、猫に続いて子供が加わっていた。
「孤独を愛する俺様がまさかパーティーを組むなんてよ……」
しかもただのお荷物だ。横でそのお荷物の少女がぐっすりと寝ていた。頬には未だ涙の筋が残っている。緊張の糸が切れたのだろう。御堂の服の裾をつかんだままだが、どこか安心した表情。
「けっ！」
誰にでもなく悪態をつく。
………ガサッ……
「……!!」
御堂の目に戦闘マシーンとしての殺気が宿る。かすかに……だがはっきりと聞こえたかすかな音を御堂は見逃さなかった。意外に近い位置。
（距離は……およそ三十メートルほどか……？）

まっすぐこちらへと向かっている。遭遇は必至だろう。強化兵としての感覚が薄れた今、それに頼り切っていた自分に腹を立てる。
（ここまで接近を許すとはな……）
得物……デザートイーグルを片手に、立ちあがる。その拍子、ふと引っ張られる感触。あゆの指が服の裾を掴んだままだった。
（……起きるなよ、ただの足手まといなんだからよ……）
起こさないようにあゆの指をほどくと、気配を殺して目標に近づく——
（こっちから出向いてやるよ）
深山雪見は、少し疲れた足取りで歩を進めていた。目標——親友の敵——をとるために。あたりに注意しながら歩く……気配はない。
（女か……血の気配がするぜ……殺戮者だな）
御堂がそっと女の前方へと回りこむ。御堂にとって人の命を手にかけた者＝殺人者である。そこにどんな理由があろうとも関係ない。御堂は敵を撃つ、それだけだった。
（しかも素人だ、歩き方がなっちゃいねぇぜ……）
慎重に気配を殺して歩いているつもりだろうが、御堂にはその行動が筒抜けだった。銃の射程圏内へと迅速に移動する。
「嬢ちゃん、夜道の一人歩きは危険だぜぇ」
「……誰!?」
突如聞こえた声に雪見の足が止まる。
刹那、赤い光！
ズギューン!!
音が聞こえたと思ったときはもう雪見の身体は後方に弾け飛んでいた。
（手応えありだな……）
胸の中心にヒットする。致命傷だ。雪見の身体は後方に倒れ、そのままピクリとも……
「……あああっ！」

雪見の叫びと共にライフルが火を吹く！
「……なんだと!?」
御堂は木の陰に身を潜め銃弾をやり過ごす――
（命中はした……けど、死なねぇってこたぁ防弾具の類い！）
雪見の気配がすっと後方へ遠ざかる。
（賢い判断だ。素人にしてはな……だが……）
雪見は死に物狂いで走った。御堂の銃の射程距離を外れる。
（逃がすかっ！）
御堂が物陰から物陰へ、闇と化して疾走した。
二つの影の疾走劇は続く――
だが、傍目には女が一人道無き道を駆け抜けているようにしか見えなかっただろう。
（死ね！）
御堂の銃が再び火を吹く！
それは障害物の木に当たって消える。
（ちっ！　この位置からじゃ射線が通らねえぜ）
だがそれは相手も同じこと。絶えず移動しつつも膠着状態が続いた。やがて御堂は最初に交戦した場所へと戻ってきていた。最初に雪見が倒れた辺りを調べる。血――ほんの微量だが、土に付着したそれを御堂は確かめた。
「防弾具とはいえ、まともに当たったんだ。肋骨は何本かイってるだろうな……」
あまりすぐれない顔で御堂が呟く。当然だ。素人相手（しかも女）に逃げられたのだから。まあ、最終的には御堂が追跡をあきらめた形で幕をとじたのだが。
「まあ、深追いは禁物だからな……」
功をあせりすぎて命を落としてきた戦友達を自分は何人も知ってる。御堂は再び女と猫の待つねぐらへと戻っていった。
「うぐぅ……」
御堂の顔をみると、あゆがそう口を開く。
「なんだおめぇ、起きてたのか（うぐぅってなん

だ）」
　あゆが再び目に涙を湛えて、
「うぐっ、おじさんがいつのまにかいない気がして……起きてみたらやっぱりいなくて……うぐぅ、恐かったんだよ」
「分かったから泣くなうっとおしい！　（だからうぐぅって言うな）」
「うぐっ、えうっ、あうぅ……!!」
　御堂の腹に顔をうずめ、声を押し殺す。
「ちっ、うっとおしいから離れろ……（いや、マジで）」
　あゆは落ち着いたのか、再び横になる。御堂の服の裾をつかんで。
「だから、触るなって……もう寝てやがるこの野郎……！」
　頬の涙の筋も乾かないうちに再びあゆは眠りにつく。
「だったら最初から起きるんじゃねぇよ……オロすぞ」
　起きると面倒だ、気付かれないようにあゆの手を服から引き剥がそうとする。
「……おじさん……ムニャムニャ……うぐぅ」
「……」
（寝てすぐに寝言言う奴初めてみたぜ……ホントは起きてんじゃねぇのか？）
　御堂はそのままあゆの手の上に自分の手を重ねた。
「けっ、これだからガキのお守りはイヤなんだよ……」
　御堂はそれから一睡もできなかった。

121　邂逅、別れ

「どうして……？　どうして、そんなことを？」
　だが茜は答えない。
「……だから、祐一も早く消えて下さい。……でないと私は、祐一を撃ってしまいます」

それだけ、静かに告げる。
その言葉は嘘だった。
茜は祐一を撃つことはできない。口から出た言葉に秘められた感情を悟り、祐一は一歩踏み出す。
「……例え変わっても、茜は茜じゃないか。なぁ、話したいことがあるんだ、聞いてくれるか？」
茜は一歩下がる。
「……嫌です。お願いだから……」
「俺もいやだ。茜に会うために、ずっと島中走り回ってきたんだ。あの頃言えなかった想いを伝えるために、探してきたんだ。茜……俺は、お前のことが……」
「……嫌……言わないで……」
「……好きだ」
「嫌ぁぁぁっ！」
夜の建物の少女の悲鳴が響く。それは、ゲーム開始以来、最も悲痛な叫びだったかもしれない。
走り出す。

これ以上祐一の側にいたら、今までやってきたこと全てが無駄になりそうな気がしたから。
(どうして私にそんなことが言えるんですか？　もう私は、あの頃の私じゃないのに……どうして、そんなことが言えるんですか？)
「茜！」
追ってくる気配がする。
「来ないで下さいっ！」
手持ちの手榴弾を投げ付けた。
「なっ……！」
反射的に後ろに下がり、避ける。
バァァァアン！
爆発。
そしてそれは、目覚まし時限爆弾を巻き込み。
ドガァァァァアン！
大爆発を引き起こした。
瓦礫の中から、祐一は立ち上がる。体は痛むが、

まだ動くようだ。武器も無事である。しかし……
「茜……」
茜の姿は、もう見えなかった。

夜の町を、ただ走る。
目には大粒の涙をたたえて。
「……どうして、あんなこと言うんですか……」
動揺していた。
相手が例え変わってしまっても、信じる。それは茜が幼馴染みに抱いていた感情と、全く同種のものだった。それに気付いたからこそ、茜は逃げた。そう思った。本当の理由を茜は知らない。
自分でも気付かないうちに、あの一年間で祐一に惹かれていたことに。それは、幼馴染みを想う自分を、正面から崩してしまうことだった。幼馴染みを想う心と、祐一を想う心。それ故、祐一の前から逃げ出したことに。茜は気付いていなかった。
夜の闇はさらに濃くなってゆく。自分は、何処に行こうとしているのか……

122　高槻の電話　2

はい長瀬さん。
えっ、ペースが遅い、もっと早くしろ？　何人かみせしめのために爆発させろ？　長瀬さん、それじゃ面白くないじゃありませんか。やつらが自らすすんで殺し合わせなければ。
具体案？　ありますよ、詳しくはＦＡＲＧＯの機密事項ですから言えませんが、ドッペルとだけ言っておきましょう。えっ、不可視の力は使えないはずだ？　今回の場合は元々の意味なんですよ、これ以上は言えませんがね。俺にまかせてください、では。

……自分達の友人、家族、恋人に殺されかければもう奴ら何も信じられまい。疑心暗鬼に陥って殺し合いを始めるだろうさ、まさにドッペルゲンガーを

見た者はみんな死ぬんだ、くっくっくっ。
さあ、クローン体の出番といこうか、いや待てクローンの事が解れば長瀬達に俺の秘密がばれるかもしれんな。使うべきではないか？　この俺が悩むなんてらしくないなぁ、あまりに変で笑ってしまうな。はっはっはっ。

123　突き動かす力

枯葉のじゅうたんをすりながら、林をとぼとぼと歩いているのは、三井寺月代（八十三番）であった。
彼女は誰も殺したくない……自分も死にたくない。
開始当初、彼女は誰も殺めず、夕霧、蝉丸、高子と我が家へ帰りたいと思っていた。しかし、月代はこの山林に迷い込んでから数々の銃声、悲鳴、爆発音を聞いてきた。その度、木々を縫い、逃げ回った。
（危ないところへ近づかなければ安全なんだ）
走りには自信がある。何度か他の参加者に追われたが、皆撒くことができた。だが、ここは何かが違う……うまく走れない……一昼夜走り回ったためか、彼女の足はおぼつかない。親友の夕霧を殺されたせいもあり、精神的にも追いこまれている。
（夕ちゃん、もうあの岩場で遊べないね……。私も死んじゃうのかな……ううん、そんなことない！
蝉丸が助けてくれる！）
それでも、彼女には希望があった、坂神蝉丸……彼ならきっと何とかしてくれる。その希望が彼女の背中を押していた。
（まずは、蝉丸と高子さんを探さなきゃ！）

124　お姉さん

「……おなかすいた」
「……さっき食べたじゃない」
服のすそを引っ張る繭に真琴は答える。合流してから二人は、たびたびの休憩を取りながら神社のほ

うへ移動していた。本来ならこんな見晴らしのいい場所にいるべきではないが、この状況で暗い森の中にいる度胸は二人にはなかったのだ。
「みゅ〜」
「こ、これは真琴のだからね！」
ものほしそうに見つめる繭から、食べかけの木の実を隠す。
「みゅ〜！　みゅ〜！」
「あぅーっ、いたい、いたいってば！」
髪を引っ張る繭に、真琴は声を荒げてしまう。
「うぐっ、うぅっ、うぅ……」
途端に崩れだす繭の顔。慌てて真琴はなだめようとするがもう遅い。
「うわぁぁぁんっ」
「な、なによぅ。泣かないでよ。これ真琴のなんだから……」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁんっ」
「あぅー……」
次第に大きくなる泣き声に、真琴の顔も崩れていく。目が潤んでくる。
私だってこわいのに、心細いのに……
『泣きたいのはあんただけじゃないんだからぁ！』
そう怒鳴りつけようと思って、思いっきり泣きじゃくろうとして、でも、
『だからお前はガキなんだよ』
そんなからかう声を思い出した。
『私、ガキじゃない！』
真琴はそんな時いつもそいつにそういっていた。
そう、私はガキじゃない。私はお姉さんだ。お姉さんだったら、どんなにこわくたって、どんなに心細かったからって……
『泣かない、泣けない、泣けるかっ！』
「しょうがないなぁ、ほら半分こしよ」
だから、真琴はぐっとこらえて繭に言う。ちょっと涙目なのは愛嬌だ。
「みゅ〜？」

「ほら半分こ！」
そういって木の実を渡すと、繭はうれしそうにもそもそと木の実を食べ始める。
「あはは、ピロみたい」
「ぴろ？」
「うん、真琴の猫だよ」
「猫……」
「うん、猫。繭にもだっこさせてあげる。特別だよ」
「みゅ～、みゅ～」
すっかり泣き止んで嬉しそうな繭に、
「朝になったら探しにいこ！」
真琴も笑顔でこたえた。

125　眠りの森

「彰お兄ちゃん、わたし、少し眠くなってきたよ」
わがまま言ってごめん、と申し訳なさそうに言う柏木初音を、少し前を歩いていた七瀬彰はゆっくり振り返る。確かに見上げれば空が白くなってきている。小学生が起きているにはあまりに遅い時間だった。自分の体力も少々不安があるし、何処か、少しでも安全な場所で身体を休めたい。
「そうだね、少し休もうか」
歩いている方向は、数時間前爆発音が聞こえてきた方だった。何があったかは解らないけれど、何があったかを知るのは無意味ではないだろう、そう思い、爆発があってから何時間か後を見計らって、そちらへ向かう事にしたのである。危険は危険な事件が起こったすぐ傍には、すぐにはないいんじゃないかな、という彰の楽観的な考えである。
森を抜けた。そこには一見すると普通の商店街が広がっていた。民家も節々に見えて、これで人が歩いていれば商店街以外の何に見えただろう。残念な事に、今眼前に広がるこれは、まともな商店街のようには見えなかったけれど。

この民家のうちのいずれかで休ませて貰えばいいだろうと彰は考える。幸い人の気配はまるでない。
「そうだね、あの、赤い屋根の家で少し休ませて貰おっか」
とはいっても、いつ人がやってくるかも判らない。出来る限り目立たない位置にある家を選ぶのがいいだろう。森の中から、商店街の彼方に見える赤い屋根を指差し、彰はそう提案した。
「うん」
二も無く初音は頷いた。眠そうな顔だった。初音の手を引きながら、彰は商店街に足を踏み入れる。
幸いなことに、商店街を歩く間、誰にも遭遇することはなかった。
代わりに、
途中、何かの燃えた後を見つけた。
それが先ほどの爆発音の正体であるなんて彰にも初音にも一秒で解ったし、彰に至ってはそれが、何が爆発したものかまで、よく、解った。

初音だって気づいたかもしれない。肉の焼ける臭いが馬鹿みたいに道の真ん中で暴れ狂っている。彰は早足で初音の手を引く。彼女はそんなものを見てはいけないと思う。ただの傷になるだけだ。
自分だって、今のそれを見て、傷が抉り込んだ。
本当に自分らは殺し合いをしているのだ。

商店街の端にあった小さな家に入り、二人はようやく息を吐けるに至る。小さな静かな家で、生活臭がまったくしないことを除けば充分に快適そうな空間であると思う。
「うん、ベッドもあるな。なかなか良い家だね」
言うと、初音は眠そうな顔で頷いた。もう多分限界だと思う。突いたら破裂するかもしれない。
「僕が見張りしてる、初音ちゃんは眠ればいいよ」
彰は肩を竦めて言う。自分も多少は眠いが、それでも毎晩遅くまでミステリーを読んでいたおかげだろう、初音が感じているそれよりは余程軽いものだ

った。
「彰お兄ちゃんは？」
「僕は大丈夫。さっき、初音ちゃんに会う前に少し寝てたし、徹夜するくらい慣れてるよ」
「……でも、大変だよ。わたし、少し寝たら見張り替わるよ」
「気にしなくて良いよ。今の内にたっぷり寝ておかないと、あとからつらいからね」
言うと、少しだけ気まずい顔をして、初音は少し俯いたが、ありがとう、と言って、ベッドの中に潜り込む。素直でよろしい。子供はしっかり大人に甘えておくのが吉なのだ。
――取り敢えず少し前の放送では、美咲さんの名前も、冬弥や由綺、はるかの名前も、初音ちゃんの姉たちの名前も呼ばれなかった。それはまあ、幸運といえるだろうか。その一方で他の誰かが死んでいるのが胸に痛かった。
何故彼らは殺すのだろう。彰はぼんやりと人を殺すことを考えて身体を震わせる。
例え生き残れても、人を殺したことは一生忘れられない傷になるだろうに。
横で寝息を立てる可愛らしい少女。必ず姉たちに会わせてやらなければいけないと思う。
――しかし、護るとは誓ったものの。
こんなフォーク一本じゃ自分の身だって守れる筈がないと思う。これで拳銃に勝てるのはジャッキーチェンだけで充分だ。
「何かないか捜してみようかな」
決めたらすぐ行動に移すが吉だ。彰は立ち上がって、その小さな家の中を調べることにした。
本棚には割と色々な本があった。ハードカバーならその角が武器になるかも知れないのだが、そこにあるのは大体が薄い文庫ばかりで、武器になりそう

なものはない。まあ、たとえハードカバーの本があっても、そんなの武器にしたくはない。読書家としての誇りである。

――ああ、あんまりミステリーは無いか。残念だ。本棚にはチャンドラーの「長いお別れ」があったが、もう何十回も読み返して、原書でも読んで、科白を暗誦出来るまでにオタクぶりを発揮している彰は、もう一度それを読もうとは思わなかった。というか、先週読み返したばかりだったのである。

だが、そこに一冊の、無駄に分厚い新書サイズのミステリーを見つけた。彰は顔をしかめてそれを手に取る。

「……清涼院流水かよ」

チャンドラーと並べて置くなよ、と思う。

流水。解説しよう、その本は、彰が、生涯、何があっても、金を積まれても、二度と手を出さないでおこうと思った作者の本であった。第一作を読了後、壁に投げつけて壁に穴を開けた事が微笑ましくない思い出として残っている。

しかし、彰はそれを手に取った。勿論読む為ではない。

異常に分厚いその本は、人を撲殺できるほどの重さなのである。彰の唇の端に笑みが浮かぶ。かつて自分の家の壁に穴を開けた重量がこんなところで役に立つとは。また、これを胸に入れておけば弾丸だって貫通しない。一〇〇〇ページは伊達ではない。

「良いじゃん、使えるじゃん」

彰は喜んでそれを鞄にしまう。先の言葉を借りるなら、本を武器にするなんて読書家としての誇りがあるのか、七瀬彰。

その自問に対する自答はこれだ。清涼院だぞ。

さて、台所にも何か無いかと思って捜すが、包丁やなんやの類はない。不自然なほどにそれらは抜き取られていた。生活臭の薄さは彰の心を喰らおうとする闇を僅かに大きくしたような気がする。彰は無理に声を出し、静かな空間をせめて破壊する。

「結局、収穫はこの本一冊か」
　残念な結果だった。

　彰は微妙に重くなった鞄を肩に寝室に戻る。部屋の隅のベッドに寄り、初音の寝顔を眺める。眺めているだけでは飽きたらず、真っ白な綺麗な頬を撫でまでする。
　本当に天使のようだ、と彰は思う。
　眠りの底にありながらも疲れ切った顔で、多分心の底から眠れているわけではないのだろう。それでも、きっと、自分が傍に居るということだけで眠れてしまう、そんな無邪気さも備えている。彼女を作るすべての要素が、あまりにも愛らしいと思う。
　その柔らかな頬を無意識のうちに撫でている自分に気づくと、どうしようもなく泣きそうになる。自分はもう駄目なのじゃないかと思う。いやいやロリコンちゃうねん自分、自分はきっと真っ当な筈で。
　そんな彰の様子に気づいたのだろうか、

「彰、お兄ちゃん？」
　という、初音の掠れ声が聞こえる。しまった、起こしてしまった。
　というか自分の指は未だ初音の頬にある。しどろもどろな様子を隠すように、彰はわざとゆっくりと指を頬から離し、わざと気障ったらしい声で、
「……ごめん。起こしちゃったね」
　などと言う。初音は申し訳なさそうな顔。
　可愛かった。
　な、何で僕は小学生の顔見て赤くなってんだよマジで。無意識のうちに頬撫でたりしてるしさ。僕には美咲さんがいるんだぞばか。
「……やっぱり、彰お兄ちゃんも眠そうだよ。大丈夫、多分誰も来ないよ、お兄ちゃんも寝よ？」
「大丈夫だよ、僕は」
　笑いかけると、初音はそれでもやはり心配そうな顔でこちらを見る。なんとも優しい子であることよ。ああ僕はその優しさだけで充分癒されるのだ。

小さくあくびを噛み殺す。あくびしてるところなど見られたら初音はきっと気に病んでしまう。
「ほら、彰お兄ちゃんだって眠そうじゃない！」
見られた。不覚である。
「いや、大丈夫だって、」
しかし初音はしつこかった。
「ほら、ベッドだって、わたし一人じゃ大きすぎるよ。……毛布、半分ずつ使って一緒に寝ようよ」
少し恥ずかしそうな顔で初音は言う。
残念な事に彰の脳みそは、その言葉の意味を一秒で理解出来るだけの働きを持っていなかった。きっと十二時間眠った後の、すっきりした脳みそに同じことを言われても、理解出来なかったに違いない。
……え？　何、ねえ、それって何？　僕は、え、あれ？　あれ？　え？　な、ど、どゆ
「え？」
疑問は息のように口から漏れる。
「一緒に寝よう、彰お兄ちゃん。でも、変なことはしないでね」
柔らかく微笑みながら初音は繰り返す。
彰の脳は働かない。

……おかしい。
何で僕は女の子と、しかもすごく可愛いからとはいえ、小学生と同じベッドで眠っているんだ。初音はまたすぐに寝息を立てて眠り始めた。愛らしい寝息が、耳の裏にまで届く。
おかしいよ、おかしいですよ、何で？　彰は心底混乱している。無理もない。女の子と同じ布団で寝るなど、小学校四年生のとき、テレビの怪談特集が怖くて、姉と一緒な布団で震えた、あの日以来なのだから。血の繋がりのない相手だと生まれて初めてなのだ。
マジ？　何で？　何で？　何が起こってるんですか誰か教えて誰でもいいから誰でも！
ちらりと横を見る。幻ではない、背中を向けて初

音は眠っている。この距離からでも甘い匂いがする。レモンのような匂いだと思う。爽やかな匂いは彰の鼻腔に鮮明に届く。微かに息が漏れる。天使の歌声のように彰の耳に届く初音の呼吸は、今まで聞いてきたどんな歌より迫力があった。

彰お兄ちゃんだけに無理はさせられないよ。

初音は笑顔でそういって、自分に毛布をかぶせた。その笑顔が本気で可愛かった。

どうしよう、どうしよう、どうしよう？　ねえ、冬弥、はるか、美咲さん、僕、なんだかおかしいよおかしいよおかしいよおかしいんですよ、おかしい。

「うう、ん」

初音が小さく寝返りを打って、彰の側を向いた。

可愛らしい寝顔が手を伸ばさなくても届く位置にある。天使の寝息が頬にかかる、天使の呼吸は一層明瞭に響き、彰の耳と心臓を支配する。

ま、まままま、マジ？　僕は真性なのか？　む、胸がどきどきする！　この高鳴りはなに？　ち、違う！　これはただ、女の子と一緒なベッドで眠るなんて初めてだから、そうだ、そうに決まってる。小学生に欲情しているわけじゃないんです！　駄目だ、指一本動かせない、少しでも動いたら自分の心臓は破裂する、そうに決まっている。こういう時は目を閉じろ、耳には何も聞こえないと思え、頬に届く息はただの風だ、布団越しに伝わる熱は自分自身の熱に決まっている。

すぅすぅ。すぅすぅ。寝息を立てるフリ。無様。

……眠れん、眠れませんって、た、頼むよ……

こうなると彰はドツボにはまってしまったようなものである。関係のないことに思考がやられだす。考えていないと壊れそうになる。

そ、そういえば、初音ちゃん、最初は「七瀬のお兄ちゃん」って僕のこと呼んでたのに、なんか気付くと「彰お兄ちゃん」て呼んでたよな？　どういうことだろう僕に対して初音ちゃんは何かこう思うところがあるのか、い、いや、それは、初音ちゃんが

僕に親しみを抱いてくれた証拠で、僕に、頼れるお兄さんとしての信頼を抱いたってだけのことで、他に意味はない筈だ！　……だが、思い返してみろよ七瀬彰。初音ちゃんが自分を見る目を思い返せ！　は、なあ、ほのかに赤らんだ顔じゃなかったか？　そ、そうさ、好いていない人と一緒なベッドにはいるなんて女の子は嫌に決まってる、嫌の筈だ、つまり初音ちゃんは僕のことがちょっと好きなわけで、僕も初音ちゃんが好きで、違う、僕は初音ちゃんの事を護ってあげなくちゃ、って思ってるだけで、ああもう、訳わからん！　つまり僕は初音ちゃんを抱きしめても良いのか？　この柔らかそうな唇にキスしても良いのか？　ああ、そんな事していいわけないだろ、ああ、もう、訳わかんねえよ！

　どうでもいいことから始まった妄想は、彰の不安を黒焦げにするまで焼き尽くした代わりに、残酷なまでに睡眠時間を奪っていきやがった。

さて。

結局、彰は一睡も出来なかったのだが、二時間後目覚めた時、

「お早う、彰お兄ちゃん！」

と言う初音の爽やかな声に、

「お早う、初音ちゃん」

と、微塵もそんな様子も見せず笑いかけたのは、まあ、ある意味、称賛に値すると思う。

126　面影

――どうして助かったんだろう

雪見が苦しそうに呻く。銃弾がヒットした所が熱い。さらには身体中に高熱を帯び始めていた。

「骨でも折れたのかな……？」

医術的知識はなかったが、漠然とそんな気がした。

「でも、ヘコんでなんていられないわ……」

夢遊病者のように。だけど、目だけはしっかりと

前を見据えて歩く。みさきや澪ちゃんはもういない。
でも、私はまだ生きている。運がいいといってしまえばそれまでなのだろう。だけど……
「見ててね、みさき……絶対に拾ったこの命、無駄にしないからね」
『雪ちゃん……』
傍らでみさきがそう言った気がした。熱のせいかもしれないが。そこへゆっくり微笑みかける。もう思い出したくもない、みさきの最後の姿。矢が刺さっていた。これがひとつの手がかり。
ワサワサッ
近くの草が生き物のように蠢いた。
(また誰かいるっ……!!)
緊張が辺りを包みこむ。今度しくじったら……命がない！
バサッ！
ライフルで草を押し分ける。指はトリガーにかかったままだ。そこから出てきたのは——身体に無数のダイナマイトがとりつけられた腹巻き（？）を装備した女のコだった。
『えぐえぐ……』
「み……！」
もう思い出したくも無いみさきの最期の姿。だけど、澪ちゃんは私は確認していない。
——生きてた……生きてたっ！
雪見の顔が少しだけ綻ぶ。
だが……
「わ、私を撃ったら爆発するんですよ！　このダイナマイト本物なんです！　う、嘘じゃないですよ。だから、ゆ、許してください〜！」
澪が錯乱したように叫ぶ。
「違……澪ちゃ……」
そこで雪見の表情が再び凍りついた。
澪ちゃんじゃない……だってあのコは……
「こんなのおかしいですよ！　お姉ちゃんも巻きこまれて……一体どうなっちゃったんですか！　みん

な、みんな……」
「お、落ち着いて……」
澪に似ている……ただそれだけだったが、雪見の殺意は薄れていた。
「私はこんなこと好きじゃないんです。だって、殺し合いなんて！　……そんなの、悲しいですよ」
誰だってそうだろう。異常な精神の持ち主でなければ。ややあって、落ち着きを取り戻した少女――名倉由依（六十六番）――は、雪見にそう言った。警戒されていて、表情はこわばったままで、銃口こそ向けられてはいないが、ずっと雪見の手にはライフルが握られていた。
「……」
「それに、私に支給された武器ってコレですよ……死ねって言われてるようなもんですよね」
ダイナマイト付の衣装……
「私にカタパルト弾にでもなれというんでしょうか……神風特攻隊じゃないんですよ」
「そうね……」
笑えない。今、雪見は死へと特攻しているのだから。
「それに、私や郁未さんや晴香さん……なんで狙われなきゃならないんでしょうか……」
「……！」
雪見は思い出す。あの下卑た笑みの下から発せられた放送の言葉を。
――六十六番　名倉由依
由依も言ってからしまったという感じで雪見を見上げた。雪見は物言わず由依を見下ろしている。おさまりかけた殺意の衝動が全身にこみ上げた。
（このコを殺せば……結果的に私の、私の目的が果たしやすくなる……そして、もしかしたらこんな狂気じみたゲームの黒幕をもこの手で……！
「あ、あの……」
由依が恐る恐る口を開く。
「ごめんね、出会ったばかりで悪いけど……さよう

なら……」
　雪見は由依の足を思いきり踏みつけると、ライフルを由依の頭に押し付けた。
「え、そ、そんな…っ！」
　あまりの恐怖と驚愕で、由依は逃げることも、抵抗することも忘れ、呆けていた。
「さようなら、由依ちゃん……」
　引き金を握る指に力が込められた。由依を見る。悲しい顔。そしてあの娘の面影——
『あのね』
『はじめましてなの』
『今日から入部するの』
『よろしくなの』
　出会ってからの毎日が一瞬走馬灯のように駆け抜けた。
「っ————!!」
　そして引き金を引いた。

　由依の真後ろの草むらから硝煙の匂いが立ち昇る。
「……」
（あれ……？）
　生きている。由依の頭の真横にはライフルの銃身。あまりの爆音の衝撃に耳からの情報が何も入ってこない。
「もう、二度と私の前に姿を現さないで」
　そう言うと、雪見は由依を置いてその場を立ち去っていった。

　どうして、殺せなかったんだろう？
　分かりきっていること。
　私にはあの娘は殺せない。
　だって……
「本当に好きだったんだよ」
　物言わぬ後輩を、その頑張っている姿を。

「……」

由依はその場で放心していた。最後にあの人が言った言葉は聞こえなかったけど、その表情がとても悲しく感じられた。

127　永劫回帰

　合流する相手を探して歩いている二人の目に映った黒焦げた二つの物体。数時間前の爆発の結果だと一目でわかる。しかし、少女はそれ以外の物――壊れた先行者に目を止めた。
「これ、中華キャノンのロボット！」
　駆け寄った少女に少年が呼びかける。
「初音ちゃん、それ、どうする気だい？」
「これ、見た事あるんだ。確かここに……ほら、ちゃんとあった。内蔵型修理キット。もしかしたら直せるかと思って」
「へぇ……意外だね。機械いじりが好きなの？」
「うん。……昔から機械の操作とかもしてたしね」
　そう……五百年以上昔から、と心の中で付け足す。
　少女が先行者を分解している姿に少年はふと、
（この娘、もしかしてマッドサイエンティスト？）
　と思ってしまう。
「えーと、ロボットの復元は辛そうだけど、武装の再生くらいなら大丈夫かな？」
　その呟きとほぼ同時に、一人の殺人鬼が隙だらけの少年に向っていた。その女性は少年に向って走り出した。
「お姉ちゃん!?」
　初音は分解された先行者を見たまま言う。その声に、千鶴は動きを止める。その直後に怯えた声で言う。
「どうしてここに初音が？」
　しゃがみこんで先行者の分解をしていた初音に千鶴は気付いていていなかった。
「お姉ちゃん。……また、人を狩るんだね」
　その言葉に千鶴は右手の爪を取り落とす。続けて、

初音が言っているとは思えない冷たい言葉が発せられる。
「本当は、私の方が偽善者なんだよね……」
「はっ……ね？」
「エルクゥを皆殺しにしたのは私……大切だった人を殺され、その人の思いを叶えるために同じくらい大切な人たちを殺シタ」
　初音の様子がおかしい。
「……ダカラ。今回モ『狩猟者』ヲ裁クノ……リズエル！」
　振り向きざまに中華キャノンが火を吹く。しかし、その弾道は逸れ、千鶴の左肩を軽く抉っただけだった。
「千鶴お姉ちゃん、今の私から逃げて！」
　千鶴は力なく左肩を押さえながら、去って行った。
その直後、再び冷たい声で初音は呟く。
「ソシテマタ、ツライ、ヘイワナヒビヲ、ジローエモントスゴスノ……」

128　孤影

「もうっ、やってらんないわよ！　何が『君たちには殺し合いをしてもらう』よっ！」
　理奈は半泣きで毒づいた。
　――冬弥くんが居ない、兄さんも居ない。
　みんな別の場所に運ばれてしまった……。
　私一人放り出されて、どうすればいいっていうの？――
「殺し合うってどういうことよ……」
　理奈はもう一度、力無く毒づいた。
　彼女がいるのはスタート地点から程良く離れた所にある林の中だった。状況が掴めぬままに、とりあえず落ち着けそうなところを探した結果だった。
「きっと、こんなのドッキリに決まってるわ。由綺や兄さん、それに私の同窓生から全く知らないエキストラまで人数集めてくれちゃって。騙そうったっ

て、そうはいかないんだから……そもそも、ドッキリなんて三流の芸能人が出るもので――」
理奈はぶつぶつと呟くように言ったが、自分でその言葉を信じてはいなかった。もし、これが現実だったら、どっきりだと思って無防備でいて、そのまま殺されてしまったら……。そんなことは考えたくはなかったが、あり得ぬことでもなかった。
悲しいほどに今の彼女は無力だった。
何せ、理奈に与えられた武器は、どう見てもハンディーカラオケのマイクにしか見えなかったのだから。
「これで相手を魅了して、見逃してもらえというわけ？　それとも何か非科学的なしくみで音波兵器にでもなっているというの？　ちゃんちゃらおかしわよ……」
これが本当に武器であるというわずかな希望にすがりついてもみたかったが、本当にこれが武器であった場合、下手な取り扱いをすれば自分にも危害が及ぶかも知れない。結局理奈は自分の武器が何であるのかを確認できないでいた。
「……私、どうなっちゃうのかな？　……兄さん、冬弥くん……どこにいるの？　あいたい。逢いたいよ……一人はイヤ……」
理奈は呟きながら、草むらの中にうずくまった。体を小さく丸めながら、これが夢であることを願った。
――明日から次のシングルの収録なんだから。これはその緊張で見てる悪夢に過ぎない。起きたらいつもの自分の部屋で、むずがる兄さんを布団から引きずり出すように起こして……――
「そうよ、そうに決まってるんだから……」
理奈は頬を濡らしながら眠りについた。

129　正義

安らかな寝息を立てて眠る霧島佳乃（三十一番）

の横で、松原葵（八十一番）は周囲を注意深く窺いながらじっと蹲っていた。
　小高い丘にある神社。そこを離れた葵は、途中で夢遊病のように歩いてくる佳乃を発見したのだ。葵がふらふらと歩く佳乃に声をかけると、ぷつん、と操り人形の釣り糸が切れたかのように佳乃は倒れこんだ。慌てて葵が駆け寄ると、佳乃は深い眠りに入っているのか、ぴくりとも動かない。
　とりあえず、この子が起きるまでここにいようと決めた葵は気を張りつつ、佳乃の様子を見守っていた。
「ふぅ。外傷も無いようですし……なんで気絶してるのか不思議です……」
　と、ゆらりと大気の流れが変わった。――誰かが来る。察知した葵は立ちあがると、暗闇に向かって叫んだ。
「誰か、いるんですか？　こっちは戦う意志はありません。お願いです、出てきてください」
　しばしの沈黙の後、一人の少女が姿を表した。
　――太田香奈子（十番）だった。
　その姿に警戒を解いた葵は笑顔で話しかける。
「こんばんわ。お一人ですか？」
「うん」
「こっち、来ませんか？　こんな状況ですし、助け合いましょう」
　そうね、と香奈子はゆっくり葵の方へ歩み寄る。と、横の佳乃の姿を見つけて足を止めた。
「コイツは、何？」
　佳乃の姿に、露骨に顔を歪めて香奈子は葵に問いただす。
「あ、道で倒れてて、介抱してるんです。でも、なかなか目を覚まさなくて……」
「ふぅん……じゃ、殺しちゃおう」
「え？」
　まるで挨拶でもするように、香奈子は殺人の協力を葵に求めた。あまりの事に、葵は開いた口が塞が

らない。
「だから、殺そうって言ったの。……もういい、私一人でやるから」
「ま、待ってくださいっ！」
慌てて葵は香奈子の腕を掴んで制止する。
「どうして、殺そうだなんて考えるんですか。今はみんなで協力し合って、帰る方法を見つけるべきでしょう？」
「こんな時に呑気に寝てるだけのやつなんて、足手まといなだけ。邪魔にならないうちに殺しちゃおうよ」
寝ている佳乃を足蹴にしようとする香奈子を、葵は必死に止める。
「ど、どうしてそんなこと言うんですか!? 誰かが危険なときには助けてあげるのが普通じゃ無いですか。それを、邪魔だなんて……」
「——だって」
ついと香奈子は葵を見つめて言う。
「瑞穂は死んだのよ？ 危険なときに、誰にも助けられずに、たった一人で。それなのに、何でコイツは生きてるの？ 不公平じゃない」
淡々と語る香奈子を、葵は沈痛な面持ちで見つめるだけだった。
「私、死のうと思ってたの。でも、死ねなくて。崖から飛び降りたら死ねるかと思ったけど、怖くて出来なかった」
そこで一旦言葉を区切ると、暗い炎を宿した瞳で、葵をじっ、と見つめる。その狂気を孕んだ視線に、思わず葵は顔を伏せてしまう。
「どうしようもなくなって、途方に暮れていたの。そうしたらある娘がね、どうすれば良いか教えてくれたのよ。役立たずを殺して行こう、って。瑞穂が殺されたように、私が殺してあげなさいって」
「……」
「弱肉強食。簡単な自然の摂理よね」
けらけらと香奈子は笑い出す。

「……わかりました」
葵は、顔を伏せたまま静かに返す。香奈子は笑いをやめた。
「あなたがあの人を殺そうというのなら」
ぐ、と両の拳に力を込めると、すっと流れるような仕草で構えた。
「この私が、お相手します」
顔を上げる。そこには、強い意志が宿っていた。
「……ふ。ふふふふ……」
突如、香奈子は笑い出す。怪訝な顔をしつつも、葵は構えを崩さない。
「？」
「いいわね。あなた、格闘家？　……格闘家の拳って、人を殺せるのかな」
「私は未熟ですから、そこまでの威力はありません。でも、当たると痛いと思いますよ」
やめるなら今のうちだ、と言うニュアンスを込めて言い返すが、それを聞いて香奈子はけらけらと笑うだけだった。
「ふふふ……それじゃ困るわ」
「えっ？」
「殺してって言ってるのよぉ！　コイツをおおおおっ！」
がむしゃらな香奈子の攻撃を、葵はひたすら防御する。
「どうしたの？　相手してくれるんじゃゃ……」
「……ふっ！」
その瞬間、葵の動きがが静から動へと転じる。
剛拳一撃。ずんという鈍い音がして香奈子はよろよろと身を崩す。
「……もう、やめましょう。私たちは助け合わないといけないんです」
「くっ……」
香奈子は苦痛に顔を歪めながら、葵の腕を掴もうとする。それを避けようとした刹那にきらりと何かが光って、葵の腕に鋭い痛みが走った。

「つっ……!?」
「ふふふふ……油断大敵ね、格闘家さん」
「かすっただけです。大した事ありません。残念ですけど、あなたがどんなに頑張っても、この程度の傷をつけるのが精一杯だと思います。……だから、やめましょう？　こんなの、無意味ですよ」
葵は必死で香奈子を諭そうとする。が、香奈子はくっくっと笑うだけだ。
「ふふ。良いこと教えてあげる。これ、毒が塗ってあるの。普通の人は三十分で死ぬんだって」
ぶらぶらと鋏を揺らしながら、香奈子は楽しそうに言う。月に照らされて鈍く光るそれは、香奈子に殺人をほのめかした少女、月島瑠璃子（六十番）からのプレゼントだった。
「さ、コイツを殺そう？　そうすれば解毒剤が貰えるわ、ね？」
顔を真っ青にした葵に、優しく香奈子は言う。少しずつ、葵の腕は感覚が無くなっていく。
「……お断りします。私は、人殺しはしません。みんなで助け合って、この島を脱出しましょう」
それでも、葵の意見は変わらなかった。真っ直ぐな瞳を、香奈子に向ける。
「あ、そう。じゃ、そこで死んでて。私はコイツを殺していくから」
「そうは行きません」
葵はたっ、と瞬時に間合いを詰める。それに反応して、すぐさま身構えて香奈子は鋏を突き刺そうとする。
『葵ちゃんは強いっ！』
ふと、懐かしい声が聞こえた気がして。緊張でがちがちだった自分を勇気付けてくれた、あの声が聞こえた気がして。
『そうだ。先輩に、綾香さんに、みんなに励まされて私は強くなっているんだ。やっぱり、助け合わなきゃ……だめですっ！』
渾身の一撃をカウンターにして香奈子に見舞う。

ぐっと足に力を入れて踏ん張った――葵の必殺技、崩拳。スローモーションのように、香奈子は宙を舞い、そして地面に叩きつけられる。
「……はぁっ」
荒い息を吐いて、葵は座りこむと、制服のポケットに入れていたハンカチで、傷つけられた腕をぎゅっと縛る。これでしばらくは毒が回らないはずだ。ただし、このまま放っておけば腕が壊死する危険もあるが。
葵はもう一度気力を振り絞って立ちあがると、佳乃の方を見てぺこりと頭を下げた。
「ごめんなさい、ここに置いていくことになってしまって。お願いですから、生き延びてくださいね」
そのまま倒れた香奈子の元へ寄ると、鋏を奪い取って、気絶した香奈子に喝を入れ目覚めさせる。まだぼんやりしている香奈子に、葵は荒い息を吐きながらも凛とした表情で言った。
「あなたに、殺人をやろうって言った人のところに案内してください。
――その人は、間違ってます」

130　突き動かす力　2

「……なんだろう？　なにかが……聞こえる」
月代は『なにか』の音を感じ取り、足を止めた。
「……人……じゃないよね」
月代は神経を研ぎ澄ませる。蝉丸や御堂ほどではないが、月代の体内にも仙命樹が息づいているのだ。
(チョロ……チョロチョロ……)
確かに聞こえた。
「……涌き水だ！」
水源は近くにあった。だが、音に気付かなければ通り過ぎていたろう。月代に支給された水は既に底をついていた。彼女にとってはこの清水は嬉しい発見である。
一休みした後、彼女はふと思った。

「そういえば、私の武器って何だろう？」
月代は支給された武器をまだ確認していない。いや、確認したくなかった。理由は簡単である。
（武器だったら嫌だなぁ……）
しかし、彼女の脳裏に『もうひとつの可能性』がよぎった。
（防弾チョッキとかだったらいいなぁ……）
月代は決心した。大きく深呼吸し、支給物資の入っているバッグに手を突っ込んだ。中に入っていたのは拳銃でも、刃物でも、防弾服でもなかった。
「お面……だよね、これ」
もうひとつ、一枚の紙切れがお面に貼りつけてあった。紙には何か書いてあった……
「……い、イイ？」
その刹那！　月代の顔に何かかが覆い被さった。
「(･∀･)ふわっ!?　ちょっ……何これ～」
彼女の顔には間の抜けた顔のお面が吸い付いていた。
「(･∀･)と、取れないよぉ～、歯医者さんくさいよぉ～」
「(･∀･)せみまるぅ～～～、たかこさぁ～～ん……誰でもいいからこれ取って～～～」
彼女は薄れた視界を頼りにおぼつかない足取りで森の奥深くへ消えていった。

131　朝餉

住井護は愛しの澤倉美咲の手を牽きながら、僅かに闇の失せかかっている森の中を全速力で駆けていた。息切れする、もう少し走り込んでおけば良かった。運動嫌いで大酒呑みなんて属性の高校生をやってたツケが回ってきたのだろう、脚がもつれて転びそうになる。愛しの美咲さんが小さな悲鳴をあげる、自分がずっこけたら彼女まで怪我をする、住井は小さく唾を飲みこみ、悲鳴を掻き消し、全力でバランスを立て直す、よし、大丈夫だ、なんとかみっとも

なく転ばずには済んだ。
　早く北川潤を見つけて合流しなければ。住井の心の中はその一色だけに染め上げられていた。
「ま、護くん、速すぎ」
――愛しの美咲さんがそう叫ぶのを聞いて、ようやく住井は自分が夥しい汗を掻いていることに気が付いた。心臓が馬鹿みたいに高鳴る、多分今走ったせいで寿命が三日は縮んだと思う。掌までぐっしょりしていて、女の子である愛しの美咲さんは、きっともっとひどいことになっているだろう。
　住井は足を止める、そして少し申し訳なさそうに振り返ると、謝罪の言葉を吐く。
「ご、ごめん、美咲さん」
　愛しの美咲さんの声を聞くまで、自分の焦りに気付かなかったのか、と思うと、自分はまだまだだな、と思う。そう、焦って走ったところで北川潤を見つけられる訳でもないのだ。
「だ、駄目だな、お、お姫様を疲れさせるような、ま、真似をする、ナイト、なんて」
　冗談めかして言わなければとてもこっ恥ずかしくて言える台詞では無い。自分の台詞に、愛しの美咲さんは顔を赤くして俯く。自分のキザったらしい言い方が聞いてて恥ずかしくなったのに決まっている。
　恥ずかしがってるというのは、脈が多少なりある証拠に決まっている。住井はそういう考え方をする男であった。
　年上の人を口説くには、自分はいっそ道化のように馬鹿な男を演じれば良い。そんな手段がえらく有効なのだと、住井は長年の経験で知っていた。というか、住井はそれ以外に女性の口説き方を知らない。元々恋愛に関しては単純な住井護十七歳だ。
「少し、や、休もうか」
　息切れが止まらないのがもどかしい。掠れた声でそう言って、住井は愛しの美咲さんの手を牽く。
「う、海でも、見に行こう、か、海岸、近いし」
　返事はしなかったが、きっと愛しの美咲さんだっ

て海が見たいに決まっている。住井は相変らず勝手に思う。
森を抜け、傍に広がっていた海に二人は向かう。美咲が乱れた息を整え、自分が服の袖で汗を拭って歩く内に、砂浜は自分らの足元を包んでいた。
闇は殆ど枯れていた。

「良い風だねえ、素敵な海じゃない？　ほら、遠くの空が白んできてる。うっわあ渡り鳥」
住井が指差すのを、美咲は呆然と見る。
自分の吐く息が、まるで目に見えるよう。
朝陽。
「美咲さん、どうしたの？」
と訊ねる住井の言葉も入らない。なんて素敵な風景なのだろう。自分は寝坊屋だから、朝陽がこれほどまでに素敵なことなど知りもしなかった。こんな美しいかけらが、この世界には散りばめられている。
涙が流れるのを止めることが出来なかった。

こんなきれいな風景を、明日は見ることが出来ないのかも知れない。
この美しい世界に留まる事ができる時間はもうないのかも知れない。
誰かと手を繋いでいる時間は、もう私に許されないのかも知れない。

涙を流す自分の顔を見て、住井は戸惑った表情をする。当然だ、住井はガキで、突然泣き出した女性を慰める術など知らないのだから。
けれど、次の瞬間には、
「……泣かないで」
と、住井は微笑んで、濡れた美咲の頬を指で拭っていた。殆どそれは反射的なものだった。
住井は泣いているひとを見るのは苦手なのだ。
本当に不思議な事だけど、美咲は初めて、その少年を、優しい子だと思った。つらそうにある人の、

そのつらさまでも包み込むような優しさだと思った。
涙は止まっていた。優しさと強さをしっかりと持つこの子の傍にいれば、自分はもう一度この景色が見られるかもしれない。
いや、きっと見られるだろう。
自分も、この子がやろうとしていることの力になりたいと思った。
「ありがとう」
と微笑むと、住井は少し赤い顔をして、
「どういたしまして」
と目を逸らす。その鼻を掻く仕草がすごく優しげだと思った。
美咲はその所在なげに身体の横で遊んでいる右手に手を伸ばし、ぎゅっと握り締めた。
住井が慌てたような顔で美咲を見た、

その瞬間だった。

砂を踏む音がした。あまりに堂々とした音だったので、美咲は逆にそれに気付かなかった。しかし住井は神経質なくらい瞬時に振り返り、足音の主を探す。気配がする、間違いなく人の気配で、この近くにいる、
「誰だっ！」
住井は無意識のうちに鞄からマシンガンを取り出す。住井の声と表情で美咲もようやく事態を飲みこみ、住井と同じように視線をさ迷わせる。
美咲は気付いた。住井も一瞬遅れて気付いた。いっそ堂々とこちらに向かってくる、手には何も持たない、薄ら笑いさえ浮かべている。
——美咲の知った顔だった。
白の髪と小さな眼鏡に鋭い眼差し。
大人の男だった。
「——緒方、英二さん」
美咲は、思わず呟いていた。生で見るのは初めてだった。彼もこの島に連れて来られていたのか、美

咲の思考には混乱が巻き起こる。
　住井は、しかし割かし冷静に、まっすぐ、その男を睨みつける。
　彼こそ、世間を賑わす若き天才プロデューサーである——緒方英二（十二番）だった。

132　結界・神奈

「ちょっとそこの人達、助けてちょうだい」
　来栖川綾香はこの数分の展開を、なんとか頭の中で整理しようとした。
　気になる所があるのでついてきてほしい。という姉の提案に従いこの社にやって来た。姉がやってきたこの社はどうやらいろいろな結界の役目を果たしているらしい。そこで、結界を解くというので自分も魔方陣を書いたり儀式の手伝いをしていたのだが、最後に姉が魔方陣の中に入り呪文を唱えていたところで突然の衝撃が起こったのだった。

　ほんの数瞬の後、彼女の目に映ったのは石畳の床ごと破壊された魔方陣とその中に倒れている自分の姉、来栖川芹香だった。わけもわからず、気を失っている自分の姉の怪我を確かめる。
　外傷はないのでひとまずほっとしたが、今度は突然目の前に四人もの人が現れたのだ。
（思わず助けを求めたんだけど正解だったかな？）
　なにせ四人のうち二人は防空頭巾をかぶっているし、そのうち一人は竹やりまでもっていたのだ。
　そして、もう一人の防空頭巾は、
「あれ？　倉田さん？」
「あ〜綾香さんだったんですね〜」
　よかった。この子は信頼できる。
　財界の（面白くもない）パーティーで退屈をしてぶらぶらしていたときに、偶然出会ったこの娘は倉田財閥のご令嬢だったのだ。自分と同じように、こんな堅苦しい席は苦手だと言う彼女と綾香はすぐに打ち解け、その後も時々連絡を取り合っていた。

くだらないデスゲームの中でも平常心を失わない所を見ると顔に似合わず意思の強い女性であったらしい。
「そちらは、以前お話頂いたお姉さまですか？」
「そうなの、この場所にあるっていう結界を解こうとしたらこんな事になって」
「あらあら、大変ですね。ちょっと見せてもらえます？」
「え？」
「私、牧村南と言います。イベントで色々具合が悪くなった人達を見ているので多少は看護が出来ます」
攻撃的な人達ではなかったので綾香は安心した。南は色々倒れている芹香の顔色を見たりしていたがただ気絶しているだけなので大丈夫だと言った。そしてこのやり取りがされている間残りの二人は古びた社をじっと見つめていた。
なんだろう、この社は。
全体に古びてはいるが基礎の部分は割と新しい木材で出来ている。まるでどこか他のところからこの社を移動させてきたようだ。それにこの感じ、
「舞さん、これが結界の基盤ですね」
「はちみつくまさん」
「？」
同意の言葉なのだろうか？　舞は緊張した顔つきにもかかわらず、かわいい言葉を返してきた。結界にはさらに少しヒビが入ってるようだったが、自分ともうひとりで壊す事が出来るだろうか。さっきから悲しい気が充満していることも気になる。
「姉さんなら笑って『大丈夫だよ』っていうだろうけど私には自信ないな」
「……あわせてあげる、お姉さんに」
「舞さん？」
「みんなで帰る。そして、佐祐理と祐一と一緒にお弁当を食べる……リアンやリアンのお姉さんも一緒に。それから、魔法も見たい……お空を飛びたい」

「ええ、一緒に帰りましょう」
少しこの気に圧されて弱気になっていたときに舞の言葉はうれしかった。
「いきます」
と、魔力を引き出そうとしたリアンを突然光の塊が襲った。
「あぶない！」
とっさに舞が体当たりしたことで、直撃は避けられたが、リアンは光の余波だけで多少のダメージを負った。光は『あの』力と同じ悲しみに満ちていた。
光は徐々になにかの形を取ろうとしていた。
「あなた、誰？」
「……我が、名は……かん……な、立ち去……れ」
光が作り出す人の形は少女のものだった。翼を持つ少女の。

133　強さの価値は（前編）

あの、郁未さんと晴香さんを足して二で割ったような人が姿を消して――それでも私、名倉由依は呆けてそこに座り込んだままだった。
「似てたなぁ、あの人」
容姿や物言いだけじゃなくて、その目。強いけど、どこかせっぱ詰まった、余裕のない目。ＦＡＲＧＯで出会った郁未さんと晴香さんも同じような目をしていた。
そして、私は知っている。ああいう目をした人を決して一人にしてはいけないという事を。自分が一人だと思わせてはいけないという事を。
「だけど、どうしよう」
次は殺す。あの人のその言葉にうそはないだろう。あの人にはそういう『強さ』がある。それは、かつて行動を共にした二人の少女が持っていたものと同

じ物だ。そう、同じ『強さ』を持つあの二人ならば……
会いたい。あの二人に会いたかった。
あの人達ほど頼りになる人はいない。
「郁未さんなら木の板でビームを防いだり、相手のはらわたをくわえて、にやりと笑ったりしそうだもん」
まぁ、たまに壁に五千ほどダメージを与えそうな気もするが。
「あ、でも晴香さんはちょっとやだな。なんか、私の事盾にしたり飛び道具にしたりしそう」
なんとなくおかしくなってクスクス笑う。頼りになる仲間の事を考えると、それだけで元気がわいてくる。それが、私の『強さ』なのかもしれない。
『そういうのをただの能天気って言うのよ』
晴香さんあたりにはそう言われそうだが。かまうもんか、元気が一番。
「郁未さんって結構むっつりスケベだから、今ごろ男の人と仲良くやってるかも」
そんな事を大声で言ってみて、景気をつけようとして、
「あの……」
という背後からの郁未さんの声に腰を抜かした。
「い、郁未さん!?」
慌てて振り向いた先にいたのは、しかし郁未さんではなかった。ちょっとお年を召している、でも結構きれいな人。そして、うん、似てる。郁未さんを大人っぽくしたような感じ。って郁未さん十分大人っぽいけど。なんとなくスリーサイズとか身長とかそういうのを思い浮かべる。
「いえ、私は母の未夜子です」
私の方に向かいながらその人は自己紹介した。
って、えぇっ!?　い、い、郁未さんの……
「お母さん!?」
「はい、天沢未夜子と申します」
うわ、似てる。この人の方がちょっと穏やかなよ

うだけど。
「あ、あ、あの、私はゆ、由依です、名倉由依です。ああ、あの郁未さんにはつ、常々……！」
え、ええい、落ち着け私。ああでも緊張しちゃうよぅ。
「落ち着いて、由依ちゃんね」
その人、ええと、未夜子さんは相変わらず穏やかな顔。
「郁未がいつもお世話になっているわ」
「い、いえお世話になっているのは私の方で……！」
って、あれ？　なんで未夜子さん私の事知ってるんだろう？
「それで、由依ちゃん。あなた今一人かしら？」
「あ、はい」
今浮かんだ疑問とか、そういえばこの人の右手はずっと背に回されてるなぁとか、そんなことが頭の中にあったんだけど。私は返答していた。
……ばか正直に。
「そう、じゃ、突然だけど……」
もう既に目の前に来ている未夜子さん、右手があらわになって。ありゃ、手斧――って、嘘？
「さようなら」
耳元を何かかがかすめて、左肩がものすごく熱くなって、視界が、崩れて赤く、黒くなって。そんな中で今度こそ郁未さんの声を聞いた様な気がした。
「おかあさん!?」って。

134　活動再開

「だから甘いんだよ」
マナがその場を去った直後、浩之は目を開き、そうつぶやいた。聖のメスに塗られていた薬は即効性ではあったが絶対量の少なさから浩之を長時間にわたって眠らせるには至らなかった。後ろ手に縛られたロープを木の幹にこすりつけて切断し足のロープ

をほどく。
「武器はあのマナとかいうやつがもっていきやがったのか」
――どこからか調達するしかねえな。
そこまで考えたとき足音が聞こえてきた。仕方なく浩之は近くの茂みに身を隠した。数分後、そこに現れたのは新城沙織（四十九番）だった。日本刀を抱え苦しそうに息をしている。体のあちこちが血にぬれているのは出血のせいだろうか？
――あいつをやろう。
そう思った浩之は石ころを拳に握り込むと沙織の背後にそっと回り込んだ。
「ああこれでこれでたすかるんだかるんだるりこちゃんにこのかたなわたせばしなくてすむんだだだ」
既に出血と全身にまわった毒の影響で沙織の精神は崩壊の一歩手前であった。にもかかわらず彼女が死に至ってないのはその出血により体内の毒が流れ出していたためであった。河島はるかとの乱闘で負った傷が沙織を生きながらえさせる結果となったのは皮肉な結果であった。浩之はそんな彼女の後頭部を石を握り込んだ拳で思い切り殴りつけた。
いたいだれかがなぐった
だだれだれれてるるりこちゃんなぐったのるりこるりこるりこあまたなぐった
なぐたまたまたまたたなぐたいたいいたいいたいいやだいやだしぬのいやいたいやいたいいたい…………
「なに言ってたんだ。こいつ」
そう言って浩之は日本刀を腰のベルトにさすと毒の塗られた鋏を拾い上げた。
「次は銃だな」
浩之は数分前まで沙織であった肉塊には目もくれずその場を後にした。

四十九番　新城沙織　死亡

【残り75人】

135　no pain no gain

牧部なつみ（七十九番）は錆付いた短刀を鞘に収め、呟く。
「何処に罠を仕掛けよう……」
相手を確実に戦闘不能にする。そうでないと罠を仕掛ける意味が無い。誰がどんな武器を所有しているか分からないが、銃器系なら一瞬にして相手を屠る事が可能なのだ。それに……殺すことが最初の目的ではない。
〝贄〟
生き残るため。店長さんの敵を取るため。餌を撒くため。味方につけるため。捨て駒にするため。そして……試喰するため。
それがどれほど人道的でないかは分かっている。分かってはいるが……そもそも、こんなことをする方が人道的でないのだ。
そして……店長さんを殺した人も。

136　新婚さん

普段の日は、この眠りこけている馬鹿は誰よりも早く起きる筈なのだが、今日は長森はなかなか目を覚ます様子がない。寝てばかりいるような気がする。自分がまったく眠らなかったのとは対照的だ。ずっと眠ったまま、目を覚ますことがないかとも思えるほど、その寝顔は静かすぎた。浩平は苦笑する。まあ、今の内に好きなだけ眠っておくといいと思う。
次はオレが寝るからお前が見張りだぞわかってんな一日寝ずに見張りだぞー！　とでも言ってやろうと思う。
七瀬もついに限界が来たのか、二時間ほど前から横で寝息を立てている。浩平は結局一人で、敵が訪れないかを見張っている事になったのだった。
元々、そのつもりだったけれど。

夜は、やがて、駆逐されていく。
——運良く、襲撃者は一度として現れることなく夜は過ぎていった。僅かに白んできた空を、深い森の中で眺めながら、浩平は大きな溜息を吐いた。
鳥の声も聞こえない、静かな明けだった。思索に耽るには十分な余裕があった。
——この殺し合いは、終わるんだろうか。
永遠に終わる気さえしない悪夢のようにも思える。どれだけの数の人間がやる気になっているのか。見当もつかない、百人もの数が、殺され尽くすのに、どれだけの時間がかかるのだろう。あるいは、この島を脱出する手段が見つかるまでにどれだけの時間がかかるというのだ。
あの少女——鹿沼葉子が高槻を殺したなら、そこでゲームは終わるのかも知れない。だが、浩平の胸から、最悪の事態が訪れるかもしれないという悪い予感が消える事はなかった。
考えても考えても袋小路に行き詰まる。自分が何をするべきかはよく分かっている、
この二人を守る事だけを今は考えていればいいのだ。そして、行動に余裕が出来たら、他の皆を救うことをを考えればいいのだ。
繭や茜、深山先輩、詩子、
そして、澪と、みさき先輩のことを思う。
思ってただ心に浮かぶのは、首を絞めるような、罪悪感。彼女達を守れなかった自分は一体なんなのだろう。なんて力が無いのだろう。気に病むなと長森も七瀬も言う。けれど、彼女達を失った苦しみは胸を焼く。オレは死んだらきっと地獄行きだ。
ごめん。許してくれないことは、判っているけど。せめて、他の皆は、守れるだけ守ってみせるから。
もう、涙は流れなかった。
ふと、長森の顔を見る。暢気に眠り呆けるその幼馴染の顔を見て、浩平は少しだけ、微笑った。その

柔らかな唇に触れてみる。湿ったその唇に、己が唇を重ねたい衝動に駆られたが、なんとか堪える。
「にしても、――お前、綺麗になったよな」
と、冗談交じりに呟いてみた。頬をつんつんと突いてみる。ぷにぷにだ。
しかし、今の台詞を聞かれていたらオレはもう恥ずかしくて一週間は近所を歩けないというか、長森と話す時、必ず笑い話の種となってしまうだろう。
「護ってやるからな、必ず」
――それでも、言った。
「一生守ってやるからな、長森」
必ず、この命が終わらせても。
お前がいなかったら、オレは、今こうして、ここにいるなんて、考えられもしなかったんだ。

「こうへい」
と、長森が何やら寝言を言っている。
「ばか、だよ、こうへい」

寝言でも馬鹿にしやがるか、このばかは――
「わたし、なんか」
違った。寝言ではなかった。
崩れ落ちるように、
浩平の胸にもたれ掛かるように。
「ほうっておいても、良かったのに」
ゆっくりと、目を開けて。
真っ赤な目で、自分を見上げる。
「馬鹿だよ、浩平」
「起きてたのか」
「少し前から」
「そうか」
ああ、恥ずかしいものである。七瀬の気持ちが良くわかる、独り言は自粛しようそうしよう。ああ恥ずかしい、こりゃあ一生の笑い種か。やってられんな。ああごめん七瀬笑ってごめん馬鹿にしてごめん。

長森の泣き顔がすぐ傍にある。

「ね、浩平――ぎゅって、して」
「……長森」
――すごく、怯えたまなざしだった。
「嫌だよ。怖いよ。すごく、怖いよ。もう、浩平と一緒に学校にも行けない、浩平と通学路を走れない、もう、一緒にいられない」
「――ばか、絶対、絶対帰れるよ。またお前はオレがメチャクチャなところで寝てるのを必死になって探して、オレが必死で抱える布団を取っ払って、遅刻寸前になって、また遅刻だよ、とか騒いで、」
そう言うと、微笑ったように見えた。
「ずっと一緒にいるんだ」
見えただけだった。一瞬で表情が崩れる。等身大の女の子が感情を爆発させる。
「浩平、好き、大好きだよ。大好きだよ。大好き」
「ばか、」
「浩平、好きって言って欲しいよ。すごく、わがままだけど、言って欲しいよ。そうじゃないと、わたしは、だめだよ、だめなんだよ」
「――好きだよ、ばか。大好きだよ」
そう言って、浩平はその肩を抱きしめた。
強く強く、離さないように。離さないように。
たとえオレが死んでも、お前を、必ず護るから。
長森は浩平の胸に顔を埋めると、腕を浩平の背中に回してくる。暖かなぬくもりを、長森は、浩平に分け与えてくれる。浩平は己が頬にも涙が零(こぼ)れている事を自覚する。
お前がいるから、オレは今、ここにいるんだ。
それは、
――ずっと昔にも感じた、優しいぬくもりで。

起きるに起きられないのである。
(か、勘弁して欲しいわっ)
ぶっちゃけた話をしよう。乙女、七瀬留美、長森瑞佳が目を覚ました頃からずっと目を覚ましていたりしたのである。ちょうど、好き好き大好き！　な

んて言ってる辺りからである。
乙女というのは大変だ。実際の話、ここで、
「わはは！　お早う二人とも！　世界の乙女、七瀬留美のお目覚めよ！　あら、二人ともラブラブね！」
なんていうことが出来たらどれだけ素晴らしいことか。自分はそれほどに恥知らずではないのである。
いや、一瞬甘美な誘惑に誘われた、起きてしまえよ、二人をからかってやれよ。それくらいの権利はあるわよ、乙女の七瀬さん。
冗談ではなかった。
ラブラブな二人の邪魔をするなんて、そんなの乙女がする事じゃないわ！
そのような無意味かつ無駄な葛藤が、二人の涙の抱擁の裏に展開されていたのである。
っていうか、――なんだか、不公平な気がする。
七瀬は思考を無理矢理停止させて思う。
折原はあまりに瑞佳贔屓過ぎない？　いや、別に良いのよ。いや、あたしも抱きしめて欲しいとか、そんな甘ったるいこと言うわけじゃないけど、いや、抱きしめてほしいけどこの際わがままは言わないほうが良いし、って話がずれてるな、とにかく、なんだかあたしがいないみたいに扱われるのはすごく癪ってことなのよ！　ああ、もう、もどかしいな、なんていうか、あたし、すごく可哀想よ、とにかく、ああ、もう、要約するわ！　目を覚ましたいのよ、早く！　くそっ、いつまで抱き合ってるのよあんたら！　あたしが見てると知ったら、こいつらどんな顔するのよ、まったく！
二人はもう、これ以上無い、ってくらい温かな雰囲気で、神様が雷か雪を降らすまではずっと抱き合ってるに違いない、それほど強く抱きしめあっていた。天気は良いし今は夏だ、雷も雪も降らない、つまりそれでは自分は一生起きられない。
「ううぅん」

一計を講じる。自分はもうすぐ起きますよー、そんな風な演技をすればいいのだ。というわけで七瀬はわざと声を出してみた。うう、我ながらなんて姑息な手段なのかしら。だが仕方ないでしょ、こんな雰囲気の中に颯爽と起きることができるもんか！

まったく聞こえないようだった。

——聞こえてないの？　結構大きな声だったのに。くそっ、いつまで抱き合ってるのよまったく。ねえ、あたしの声が届かない世界にいっちゃってるんですか、あんたたち二人。

——か、覚悟を決めて、起きちゃおうかしら。しかし、でも、やっぱり、そう、そうよ、世界一の乙女になるためには……

「——ん。じゃあ、長森、ちょっと、水汲みに行くわ——ちょっと遠いけどさ」

「あ、うん、いってらっしゃい、気を付けてね」

あ、やっと離れやがった。これで起きられるわ。つーか今の台詞、新婚夫婦みたいに聞こえるではないか。まったくなんたることだ。

「ふぁぁぁ、よく寝た。あ、早いのね、二人とも」

ああ、なんて長い朝なのかしら。あたしの気持ちも知らないで長々とお目覚めの挨拶してやがって。

「あ、お早う、七瀬さん」「おう、七瀬」

二人して顔やら目やらを赤くしやがって、あたしはそんなに鈍感じゃないってば。判ってんのかしらこいつら？

——まあ、いいけどね。あんたらがそうやって幸せそうにしてるうちは、きっと大丈夫。あたしも笑っていられるからね。ませいぜいラブラブしてるといいや。

——そんな風な気を遣いながら行動する七瀬は、自分って乙女！　と思いながら満足を覚えると共に、

——やけに虚しくなった。

やってられんわ！

「……でね。今度東京で開かれるイベント、あっ、こみっくパーティー、略してこみパって言うんだけどね？　今度一緒に行こうよ！」
「恐そうです。それに、まだ東京って行ったことないので……」
「大丈夫よ！　いろいろなお店とか～そう、楓ちゃんに似合いそうな服とか……だけど、これは自前のほうがいいわね～。うん、私も手伝ってあげるから自分で作っちゃいなよ☆」
「え、えと……はい……」
よく喋る玲子の勢いに、楓は半ば強制的にうなずいてしまう。
「大丈夫、楓ちゃん素質あるよ！　こみパにだってす～ぐになじめちゃうって」
玲子の話はまだ終わらない。まだ二人は血生ぐさい争いとは無縁の処にいた。偶然……そういってしまえばそれまでだ。だが、楓は常に勘を働かせながら安全なほう安全なほうへと玲子を導いていた。

137　黒い予感

「やっぱり翔様×いおりゅんが一番よ！」
場の雰囲気に合わないくらい明るい声が響く。
「そうでしょうか、私はいおりゅん×翔さんのほうがスキです」
「くぅっ！　やるわね、だけどそれは間違いよ」
険悪な空気が二人を包みこむ。決して相容れぬ存在。二人の間には見えない大きな溝があった……。
「見かけより強情なコね～。……ま、いいわ。その勝負はお預けといきましょう！　それよりもさぁ……」
※オタクはよく喋ります、しばらくお待ち下さい。

・　・　・　・

もちろん、エルクゥの――鬼の力ではない。長年の（前世の記憶からの）生き残るための勘。ただの勘だが、姉妹達からよく『楓の勘は当たるからな～』と言われるほど鋭敏だ。
だが、それも限界に近づいていた。
黒い感触。
もう……この島には安全な場所は皆無ということなのだろうか。
（お姉ちゃん……初音……耕一さん……！）
楓はブルッと身を震わせた。まだ彼女は千鶴や梓、初音……そして耕一の身に何が起きているのか全然知らない。
「でね…………――――――――――♪」
玲子の話はまだ、終わらない。

138　綺麗事

「……不毛ね」
先に視線を逸らしたのはきよみの方だった。
「で？　一体何がしたいの？　あたしを殺す？」
「はぁ？」
マナは一瞬、面食らったが、きよみの視線が腰に提げていたナイフにチラチラと注がれているのにすぐ気がついた。
確かに、こんなものをぶら提げていてはそう思われても不思議ではない。小さく苦笑した。
「あなた、バカ？」
「……なによ」
「あなたが私を狙ってるとかならともかく、なんでガキ呼ばわりされたぐらいで殺さなきゃいけないのよ。そんなことでいちいち殺し合いなんかしてたら命なんていくつあっても足りないわ。もし本気でそんなこと考えてるんだったら、ハッキリ言ってそれ、キチガイよ」
「そうじゃなくって」
きよみは苛立たしげに言った。

「今、自分がどういう状態に置かれてるかわかってるの？　今度会う時にあたしがあなたを殺さない保証は何もないのよ？」
「死にたいの？」
その瞬間、きよみにはマナの目が強い光を帯びたように見えた。
小さいはずのマナが、なぜだか自分より大きく見える。マナはギュッと拳を握り締め、続けた。
「ビョーキね、それ。そんなに被害妄想撒き散らして楽しいわけ？　後で殺しに来るなら来ればいいじゃない。拳銃でも突きつけてくれたらあなたの望むようにしてあげるわよ」
一息にまくしたてると、マナはフーッと大きく息をついた。
頭で考えるよりも先に口からポンポンと言葉が出てくる。きよみの言動はなぜだか妙に引っかかった。
「そんな……そんな甘いこと言ってて、他の人に通用するとでも思ってるの？」
「キレイ事かもしれないけど、疑って人殺しになるくらいなら疑われて殺された方が百倍マシだわ」
マナはそれだけ淡々と言うと、きよみに背を向けた。
「じゃ。お望み通り、もう行くわ」
これ以上きよみと会話するつもりはなかった。
いきなり歩き始めるマナに、きよみは慌てて声をかける。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ」
「まだ何か――」
不機嫌そうにマナが振り返るのと、向かいの森の木々の合間から人影が姿を見せたのが同時だった。

139　往人出立

国崎往人（三十三番）は氷上シュンの亡骸を抱きかかえながらみちるをあずけた店の前に来て愕然とした。入口は無惨に破壊され、建物は今にも崩れ落

「あら、国崎さんお帰りなさい」
左手を頬に添えながら、月明かりに照らされたその人は、まぶしくも美しかった。
「でもね往人さん、いくら能力を制御されているからといっても、一度会った人の気配くらい、ちゃんと察せないようでは生き残るのは大変ですよ」
「お母さん！」
今までカウンターの後ろでブルブル震えていた水瀬名雪（九十一番）は、やっと帰ってきた母の元へ一気に駆け出した。
「お母さん、お母さん、お母さん――」
泣きじゃくりながら現れた人に抱きつく名雪の頭を優しそうに撫でるその人の表情を見た時、往人はなぜかこの人にはどうやってもかなわないと感じていた。
――水瀬秋子
前々回大会の生き残りと言われている彼女は、ただ穏やかに微笑んでいた。この殺戮の宴の中でさえ

ちそうだ。
「みちる！」
往人は氷上の亡骸を地面に置くと大急ぎで店の中に走り込んだ。
「みちる！　いるなら返事しろ。みちる！！」
カウンターの影からゴキブリの触覚のようなものがニョキッと生える。
「ね、国崎往人だったでしょ」
「そうですね。微弱ながら普通でない気配を感じましたし」
姫宮琴音もカウンターからひょっこりと顔を出す。
往人は思いっきり走り込んでみちるを抱きしめる。
「国崎往人。いたいいたい」
みちるはそう言いながらも嬉しそうに頭突きを決めようと隙をうかがっている。そのチャンスを物にしようとした瞬間、玄関に人の気配がした。
往人はみちるを庇うように振り返る。
「だれだ！」

変わらぬ微笑みを――
「往人さん。高槻という人の後ろには、とある人がいるのよ。私はその人達と争いたくないから、最後はこの子を生き残らせるために辛い選択をする時が来るとおもうの」
秋子は往人に優しく語り続ける。
「今、昔の友人達が高槻をどうにかしようと必死で動き回っているわ。もし、あのアナウンスにあった五人に会ったら、秋子の名前を言って助けてあげなさい。本当は私が行ってあげるのがいいのだけど、私か祐一さんでないとこの子が落ち着かないから」
名雪の頭を撫でながら、秋子は往人に微笑みかける。
「さぁ、往人さん。あなたが仕留め損なった人の側に行きなさい。私と名雪にはいらないこれをあなたに差し上げます」
そういって、秋子は携帯電話を往人に差し出した。
「この携帯電話は電話ではなくて、人物探知機です。名雪への支給品だったのですが、この子が持っていても宝の持ち腐れだから。番号を指定すれば、その人がどの人だか解るから便利よ。ちなみに、私の番号は九十番みたい。さっき調べたらそうだったから」
「良いのか？　こんな大事な物を俺に渡してしまって？」
「構わないわ、私はそれが無くても困りませんから。自分の力が足りないと思ったらここに帰っていらっしゃい。――それと、ここでみちるちゃんと約束しなさい」
往人は秋子にうなずいた後、みちるの前でかがみ込んだ。
「みちる。このお姉さん方と一緒にいるんだぞ。俺はちょっと出かけてくるけど、必ず帰ってくるから」
「帰ってくるって約束だぞ、国崎往人！」
そう言ってみちるは右手の小指を差し出した。往

人はその小指に自分の小指を絡め三度手を軽く振る。
「指切った、な。約束だ」
「おぅ、国崎往人。美凪をつれてきてくれよな」
「わかった。約束だ」
往人は、そう言って月光が照らす夜道を見る。
「行ってきます」
そう言って、往人は走り出した。

140　走る！　少女

日が昇る。朝日が昇り、また一日が始まる。
つらく、苦しい、とても長い一日が。
少年（四十三番）はなぜか岸壁の淵にいた。
「誤算……だったかなぁ」
遥か下で音を立てて波打つ海を尻目に、ぼそっとつぶやいた。海岸線に沿うように移動していたはずだったのだが、どんどん道が高くなっていってしまったのだ。二、三十メートルは確実にある。落ちたら死ぬことは必至だ。
「……う〜ん」
少し困ったようにうめく。
「よし」
少年はくるっと向き直る。
「もう少し内陸の道に戻ることにしよう」
彼はそういって岸壁の淵を後にした。夜の時間、自分は無心で歩き続けていたか、と言えば、いささか嘘が混じっているかもしれない。
いろんなことを考えた。
ゲームのこと、高槻のこと、死んだ女の子のこと、そして彼女を殺した男のこと、そして自分と同じように高槻を討つために動いている――あるいは、同志と呼べたかもしれない――人たちのこと。
そして……自分のこと。
「僕が、人並みの感情を持つなんていうのは、きっとおこがましい事なんだろうな」
所詮、自分は楔でしかない。『力』を発現させる

ための道具だ。そして道具には感情なんて必要ない。ただ、機能すればそれでいいのだ。最初からそのつもりだった。たとえこのゲームに巻き込まれなかったとしても、自分がやっていくことは変わらないはずだった。

心の隙間を穿つ……

その行為の咎を誰が受けるというのか？

自分か？

それともＦＡＲＧＯか？

……今まで、興味も無かったことだった。

よく、感情の起伏の少ない人間を人間らしくない、といったものだ。特にＦＡＲＧＯでは、精錬やら修行だとかと騙って、さまざまな女性をそのような状態に壊していった。あれは今思えば酷いものだった。無理やりにも……たとえ崩壊し、ロスト体を生む危険性を冒すことになっても、力を見出そうとする。そもそも、この『不可視の力』は、人間という器に収まりきるものじゃない。完成した個体に侵入したいわば『異物』だ。これは人間に人間以上のものを求める。たとえ制御できたとしても、その存在が、水面に浮かぶ枯葉のように危ういものであることに変わりは無い……。

少年は、近くにあった中くらいの岩に目をとめた。さっと手をかざし、凍るように冷たい視線をそれに向ける。

「……割れろ」

一言、そうつぶやく。だがその岩が割れることは無かった。彼はそれに接近して表面を撫でてみた。中心に近い部分に、目新しい小さなひびが見受けられた。

「分かっていたことだけど……やっぱりダメか」

力の『祖』たる自分がこうなのだから、完全に力を制御しているとはいえ、郁未や葉子も同じ状況にあって当然なのだろう。高槻にこんな技術があったとは思えないが、現状は完全に近いほど力を封じられている。たとえ『月』がこの場に在ったとしても、

この縛鎖を破れるとは思えなかった。
「……とすると、ＦＡＲＧＯの技術では無い、ということか」
高槻に程近い位置にいた自分や良祐でも、奴に力を貸しているらしき存在の正体は掴めなかった。そもそも奴程度の小者に従う羽目になった強制力、それ自体が謎だった。
――こちらに切り札があるのと同様に、奴にもまだ見せていない手札がある、ということか。
この状況において、恐いのは不測の事態、いわゆる未知の恐怖だ。それは敵の予想外の強さや人数だったり、突然の奇襲だったり、また知り合った人間の裏切りだったりする。焦る……でも事は慎重に運ばなくてはいけない。失敗は即ち死につながるのだから。
もう一つ思うこと……それが殺意。
いろいろなそれを見てきた僕にとって、あまりにもそれが不毛なものであることは分かっていた。憎しみは憎しみを呼ぶ。誰かにぶつければ、それはいずれ自分に返ってくる。でも、僕はその感情を覚えた……。自分以外の誰かが傷つけられたという事実……ＦＡＲＧＯでは当たり前だった筈のそれが今は重くのしかかる。
心無い戦いに救いなんて無い。それはかつての僕と同じ、機械が殺しあっているようなものだから。
だけど、もっと大きな目的のためでもなく、原始的な生き残るというためでもなく、ただ一人のためにただ一人を討とうとすること。それは果たして尊いものと言えるのだろうか。たとえ、表面的に悲しみを語っていても、結局やることは同じだというのに……。
グァシャッッ！
少年は目の前の岩を正面から殴りつけた。少しのひびしか入っていなかったはずの岩は、その一撃で、中心に大きな穴が穿たれていた。
ずいぶんと人間らしい考えを持つ様になったな、

と少年は自嘲した。
——高槻を下衆と罵るなら、自分は人間ですらないというのに。
がささっ。
「あ……」
近くの茂みから声が聞こえた。思わず、少年は拳を岩に打ちつけた状態で固まる。
「はは……あはは……」
ちょうどそこから姿を現したのは女の子だった。なぜか微妙にひきつり笑いを浮かべているが。
「さっ、さよなら！」
ダダダダダダッ！
ダッシュで僕を避けて走り去る彼女……
ずいぶん足が速いなぁ。
「……僕、何かまずいことした？」
思わずつぶやいてみたりしてしまった。
……、
あ、そうか。

素手で岩砕いちゃったら普通は恐がるか。
合点がいったのもつかの間。
「あの方向は……」
少女が走っていった方向に目をやる。それは丁度少年が迂回して戻ってきた岸壁の淵へと向かっていた。
「あの速度で走っていったら……」
まさか落ちるなんてことは無いだろう、と思いつつもそのまさかがありえたら恐いので、少年は彼女を追いかけてみた。
たったたったたったたっ……
「健足だぁ、これはまずいかな……」
思わぬ少女の足の速さに驚く少年。一応背中は捉えたものの、この分だと崖に行き着くまでに彼女を止められそうに無い。
少年は大声で呼びかけてみた。
「おーーい！　そっちはがけだよぉー！」
だが、高速で走っていると人の声など耳に入らな

いもので……
「な…、な…、何で追っかけてくるのよぉ〜⁉」
彼女は思いっきり狼狽していた。
「折角逃げられたと思ったのにぃ〜、いやーたすけてー犯されるー！」
「おーい！　だからそっちは崖なんだってー！　頼むから聞いてくれ〜〜！」
なかなか彼女との距離はつまらない。だがこのまま行けば……
くそっ、どうしようもないのか？
一向に少女は止まる気配を見せない。
「こっ、こっ、こんなことなら通信教育の合気道習っておけばよかったぁ。あー、もー来ないでよぉ〜！」
……さらにスピードアップ。
どうする……どうする……？
だが、もう悩んでいる時間は無かった。こちら側からでは、あそこから道が途切れていることが分からない。おそらく彼女が自分で止まることは……無い。
「止まれ――――――！」
最後の呼びかけ。正に絶叫といって差し支えないほどの。しかしそれすらも今の彼女には届かない。
「な、なんか叫んでるよぉ。そんなに私のことが欲しいのぉ⁉」
……かなり暴走気味の思考だった。全力疾走と追跡されているという思い込みは、十分彼女をハイ・テンションにさせていた。
そして――――
「え……」
十分な助走を得て、高々と空中にダイブした。
転瞬。
少年も彼女を追うようにジャンプした。無駄に速く走ってくれたおかげで、滞空時間が長くなってくれている。
間に合う、絶対に間に合う！

自分にそう言い聞かせた。
ぱしっ。
彼女の右腕を掴む！
だが、このままでは二人とも落ちるだけだ。なんとしてでもひっかからなければ。
「グ……、オオオオオオオォ！」
ヴン！
全身のばねを総動員させ、空中でもう一度飛び上がる！　本来なら、それで崖の上に戻ってこれたのだろう。しかし、彼の卓越した運動能力をもってしても、三人分の荷物と二人分の重さを押し上げることはできなかった。
だが、それでも彼は左腕一本で岸壁にしがみついた。高空の強い横風が、彼らを岸壁に押し付けたのだ。状況はかなりきつい。だが、自分と彼女の命をつなぐことができたことに少年は安堵していた。一方少女は、落下のショックで軽く気を失っていた。
「た、頼むから早く起きてくれ……」
少し苦しい口調で、彼は言った。
「ん、……ううん」
彼女もすぐに目を覚ました。
「あ……あれ、私……って、きゃあーー！」
意識を取り戻してすぐ突きつけられた状況に、少女はやはり絶叫した。
「お、落ちるーーー!?」
「い……いいから、とりあえず僕の腰辺りにしがみついてくれないかな……？　このまま左一本だと……ほんとに落ちちゃう」
「あ……うん」
彼女は素直に従い、少年の体にしがみついた。両腕が開いた少年は、そのまま岸壁をロッククライミングした。両腕が使えるおかげで、何とかその重さをフォローすることができた。
「くっ……、くっ」
少し苦しそうに、でも確実に岸壁を登っていく少年。そしてその姿を背中から見つめる少女。その瞳

は、既に何か恐ろしいものを見るような……そのようなものでなくなっていた。
「ん……、はぁっ」
崖の先までとうとう登り切った少年は、そのままはいずるように地面にうつ伏せになった。
彼につかまっていた少女も、一緒にそこに寝転んでいた。
「ねぇ……」
「はぁ、はぁ……なんだい？」
「どうして助けてくれたの？」
「それは、落ちるところだったからね」
「なんで？　私を狙ってたんじゃないの？」
「そんなことは無いさ」
「だって絶叫しながら追っかけてきたじゃない。私、あれすごく恐かったんだけど」
「君がいきなり走り去るからだよ……それに僕が叫んでたのは、そっちは道が途切れてるよって教えるためだったんだけどなぁ」
「そ、そうだったんだ……。だって、森を出たら人がいて、見てたらいきなり岩をぶん殴って割っちゃうんだもん。恐くなっちゃって……」
「ああ、やっぱり……」
ほんの少しの沈黙。
「あの……さあ？」
「なんだい？」
「助けてくれて、ありがとね」
「どういたしまして。助かってよかったよ」
少年はふっと笑った。少女もそれにつられる様に笑った。
「私の名前は柚木詩子。あなたは？」
初めて少女——柚木詩子（九十九番）が名乗った。
少年はその問いに少し複雑そうな表情を浮かべ、
「名無しでいいよ」
とだけ答えた。
「え〜っ、なんでぇ？　私には名前も教えられないって言うの？」

「いろいろあるのさ」
不満げな詩子の横で、少年は意味ありげに笑っていた。一日の始まりにしては、なかなかハードだな。少年は苦笑した。

141　作戦

「……（うぅん）」
「あ、姉さん、気がついたのね」
来栖川芹香が目を覚まして最初に見たものは自分を介抱する妹と見知らぬ二人の女性だった。
「……」
「あ、この二人は　倉田佐祐理さんと牧村南さん、味方よ。倉田さんのほうは前に話した事があったわよね」
綾香が手短に事情を話してくれる。どうやら儀式を邪魔されて気絶していたらしい。多少結界にダメージを与える事は出来たが、まだ魔力は回復していないのは残念だった。この二人にも敵意はないようだ、綾香が味方だというのなら間違いはない。
「……」
「そうよ、姉さん。この二人も同行者が魔力を感知できるのでここに来たってわけ」
「……」
「あ、その二人はね……」
『あぶない！』
二人の会話はそこで中断させられた、社から飛び出した光の塊が社を見ていた青い髪の少女を襲ったのだった。幸い、もう一人社に注意を向けていた黒髪の少女に突き飛ばされたおかげで直撃を免れたようだがどこかにダメージを負ったのか、すぐに立ちあがれないようだった。
芹香は無言で立ちあがろうとしたが、よろけて綾香にすがるような格好になってしまった。光はなおも二人に襲い掛かるかのように不気味に動きつづけている。

「……」
「姉さん、無茶よ。姉さんだって見た目は平気そうだけど結構なダメージを受けているはずよ。足が震えているじゃない」
「……」
「『私だけじっとしているわけにはいかない』って？　そんな体で満足に戦えるの？」
「……！」
「……昔から姉さんは結構頑固なところがあったわね、でもそんな姉さんが好きだったわ」
「……」
「姉がピンチのときに助けてやらない妹がどこにいるっていうの？　私もサポートするわよ」
「あ、あれは！」
佐祐理がそう言って指差した先の光はもはやただの球状ではなく少女の形を取っていた。背中から生える翼は幼さの残る少女の顔を照らす太陽のように左右に大きく広げられていた。
「姉さん、あれは何なの？」
「……」
「そう、あれが結界の守護者なのね」
先ほど青い髪の少女リアンを突き飛ばした黒髪の少女、川澄舞が少女に何か尋ねていた。
「あなた、誰？」
「……我が、名は……かん……な、立ち去……れ」
「だめ、私はみんなと一緒に帰る。絶対に逃げない」
「……さも、ないと」
「さもないと？」
「排除……する」
その言葉が終わらないうちに翼を持つ少女、神奈のまわりに現れた光の塊が舞を襲う。
「！」
舞の卓越した運動神経にとって、光の塊の速度は脅威ではなかったが、当たればどうなるかわからないという恐怖は大きなものだった。

「……立ち去、れ」
先ほどと同じ言葉を繰り返す神奈に対して舞は無言で手にした竹槍を向けた。
「え、姉さん、何？」
「……」
「ちょっと、舞さん聞いて！　その子はとっても苦しんでるって！」
「……」
「何かに操られているだけ、その子はほんとは悪くないって！」
綾香の言葉を聞いた舞はほんの一瞬躊躇した、確かに力には悲しみが感じられたからだ。その刹那、また別の塊が舞を襲う。
「!!」
少し掠っただけだが体の内側を少しもっていかれたような奇妙な感触、よろける舞に新しい別の塊が襲いかかる。
「バリアー！」
舞の前に立ちはだかったリアンは両手を前に突き出した、手のひらに淡い光の膜が広がる。薄い氷同士がぶつかり合うような音がして舞に襲いかかった光の塊ははじけ飛んだ。
「やっぱり結界の力が少し弱ってる、今ならあれが出来るかも」
「何をするの？」
「舞さん、私を守ってください」
「？」
「今からあの女の子の心と接触します。説得してみようと思いますが、その間無防備になるので、私を守って頂けませんか？」
「……」
「姉さんもやる気よ、もちろん私もだけどね。その案に乗るわ」
近づいてきたうりふたつな少女達はリアンに向かってそう言った。どうやら先ほど倒れていた三角帽子の女性は無事だったようだ、静かだが深い海のよ

うな魔力を感じる。
「佐祐理と南さんは危ないから離れていて」
「わかりました……いっしょに帰ろうね、舞」
　舞、綾香、芹香はリアンを囲むように正三角形の位置に身を置いた。舞の竹槍と綾香のグローブには青白い光がともる。
「……」
「わかったわ、姉さん。これでさっきのバリアと同じことが出来るのね」
「（こくん）」
「ではいきます！」

142　強さの価値は（後編）

　わからない、なにがおこっているのかわからない。
「おかあさん……」
　今の声は私が発したもの？
「お、おかあさんって！　どういうことなんだ!?」
　隣の男とこの人の声が良く聞き取れない。だけど、
「久しぶりね、郁未。やだ、何その格好？」
　その声は記憶にある通りで。なんどもなんども聞いた声で。そう、私はこの格好を何とかしたいからって町に向かおうとして。
「郁未は進んでる子だと思ってたけど、もう少し方向性は考えたほうがいいんじゃない？」
　その声は相変わらず穏やかなものだったから。お母さんの下にうずくまっているものだけが違う世界にあるようで。だけど、それはそこに間違いなくあって。
「あ、あああああああああああ!!」
　どこかで誰かが叫んでいて、うるさいなぁって、あ、いやわたししか。
「どうしたの郁未？　あなたもっと強い子でしょう？」
　そんな事を言いながらお母さんはかすめただけの手斧を振り上げて——気絶した由依がその下にいる。

ああ、お母さん、それはちょっと悪趣味なんじゃないかな、なんてぼんやりとそれをみていると。
「っつ、やめろ！」
隣にいた耕一さんが前に駆け出した。お母さんは、耕一さんのスピードにちょっと驚いた顔で、後ろに飛ぶ。うん、お母さん気を付けたほうがいいよ。その人ちょっと普通じゃないから。なんかその人、鬼らしい。力は制限されてるって言ってたけどね。でも、普通じゃないのはお母さんもそうで、耕一さんの突進に合わせて手斧を横に振る。
「……！　このっ！」
耕一さんは間一髪でその手斧をかわすと、その重さをもてあましぎみなお母さんの隙を突いて、
「はっ！」
気合の声とともにお母さんの右手を蹴り飛ばした。
耕一さん、キックは使わない方がいいと思うけどね。まぁ、とにかく手斧はお母さんの手から離れて、これで耕一さん有利かなっておもったんだけど。
「まいったわね、不可視の力だけで十分だと思ったのに」
母さんは余裕たっぷりで、懐から何か茶色いものが飛び出して、耕一さんをぶっ飛ばした。
「ぐぅ……なんだよ、そりゃ」
「ああ、これ？　プチ主よ」
お母さんの肩に乗ったそれはハムスターみたい。
「ＦＡＲＧＯの地下迷宮に生息している生物でね、今回特別に貸してもらえたの」
「ＦＡＲＧＯって⁉　どういうことだ！」
「つまりね」
お母さんは、聞き分けのない子にいいきかせるように。
「私はジョーカーなの」
「ジョーカーだと？」
「そう。なるべく殺し合いが加速するように主催者側から仕組まれた何枚かのカード」
だからなにを言っているのか分からないよ。

「なんだってあなたが！　郁未ちゃんのお母さんが！」
「強さが欲しいから……いいかげん叫ぶのを止めなさい、郁未‼」
怒鳴りつけられてわたしは叫ぶのをやめた。
「そう、あなたはもっと強い子でしょう？　私があこがれる冷淡な強さ。不可視の力を制御するための、強さ。それをあなたは持っている」
分からない、お母さん、分からないよ。
「この大会で私が生き残れば、私もきっとそれを手に入れられる。そう、傷つけても傷つけられても、それら全てを克服する強さが。この大会の優勝者はね、郁未。みんなそんな強さを手に入れて、そしてそれにふさわしい地位を手に入れるわ。例外なんて、水瀬秋子ぐらいよ。もったいない事ね」
よくしゃべるなぁ、お母さん。
分からない事をべらべらと。
でも、分かった事もあるよ、お母さん。
例えば、お父さんと別れた時の泣いていたお母さんのこと。
その傷がお母さんを弱くしてしまった事。
目の前に由依と、耕一さんが倒れている事。
それと、これが一番大切なんだけど……
私は強い子なんだって事。
私は全身にばねをためると、前に駆け出した。
不可視の力を使ったその速さは、それなりに速いんだろうけど、
「……そうね、来なさい郁未」
冗談じゃない。この程度の力でプチ主と戦うほど私は馬鹿じゃない。私は、お母さんの方には向かわずに由依の方に向かった。そして、
「下がってお母さん。由依のダイナマイトを起爆させるわ」
由依の胸に手を当てて静かに告げた。
「な、郁未ちゃん！」
耕一さんは驚きの声を上げるが、私はそれを無視

する。
「今の私の力でも起爆ぐらいは出来るわよ」
声は、震えなかったと思う。体は知らないが。
「郁未にそれが出来るかしら？」
「当然でしょ、お母さん。あなたの娘は――」
そう、お母さんがそう言うのならば。
「とても、強い子よ」
「……本気なの？」
「お母さんに今殺されるわけにはいかない。お母さんを止める人がいなくなるから。お母さんに殺されるぐらいなら、今ここで一緒に死んでもらうわ。手詰まりよお母さん、さっさと目の前から消えて」
しばしの沈黙の後、おかあさんはふぅ、とため息を吐いて、
「そのようね、ここは引き下がるわ」
そういってその場から立ち去った。
「郁未ちゃん……」
耕一さんはよろけながらこっちにやってくる。その声に含まれた気遣いは今の私には不快なものだ。
「町に降りよう、耕一さん。由依の手当てをしないと」
だから、私はそっけなくそういった。
なんでこんなに私は平静なんだろう。
この平静はいつまで続くのだろう。
この次の一瞬まで？　それとも一生？
どっちだっていい。
大事なのは今平静でいられるという事。
だから、私はお母さんが残した、
いくつかのキーワードの意味を考える。
何人か居るというジョーカー。
そして、大会の生き残りという水瀬秋子。
そして、この大会の黒幕。
今は、考えなくてはいけない事が多すぎるのだ。

143　対峙

暗闇に包まれた森の中を、江藤結花（九番）と長谷部彩（七十一番）はお互いについての話をしながら歩いていた。お互いの境遇、思いを寄せていた人の生死、そしてこれからの事。
「彩さん、そのペン……」
結花は彩の持っていたGペンを手に取ると、夜空にかざした。僅かに差す月の光に、ペン先が鋭く光る。
「これって、ただのペンじゃない……ナイフみたいね」
「そうなんですか……そこまで気が付きませんでした」
「うん。これって意外に使え……って、遠くから銃で狙われたらひとたまりもないけど」
どれくらい歩いただろうか。果てしなく続くと思われた森の中から、水の流れる音が聞こえてきた。
「あ……」
「川？」
二人は、重くなりつつあった脚を励まし、その音の方に向かった。
ガリッ、ガリッ……
あれから川沿いの河原にたどり着いた二人は、川の水で喉を潤した後、河原に沿って歩き続けていた。両岸は次第に高くそびえ立ち、小一時間も歩いた頃には、もはや谷間としかいえない状態になっていた。
「結花さん、あれ……」
彩に指摘されて結花が崖を見ると、何かが崖に沿って垂れ下がっていた。おもむろに崖に近づく。
「橋ね……吊り橋かしら」
古ぼけたロープ、黒光りする木の板、それは紛れもなく吊り橋であった。振り返れば、反対側の崖にも同じような吊り橋の残骸が見える。

再び歩き出そうと向き直って、結花は視線の先に、何か黒光りする物を見つけた。吊り橋の木の板と違って、金属質の鋭い光り方だ。よく目を凝らすと、どうやら銃のようだ。
「彩さん、ここで待ってて。ちょっとあっちの方見てくるから」
　彩にその場にとどまるよう告げると、結花はその光の方へ歩き出した。踏み出してから数歩進んだとき、向こうから不意に声が響いた。
「止まりなさい！」

　ちょうどその頃河原では、深山雪見（九十六番）が休んでいた。少し前の銃撃戦で受けた衝撃で、胸が痛い。さっき名倉由依を撃てなかったのはそのせい？　それとも……
　雪見は、弾切れしたライフルのマガジンを換えようとしていた。だがいかんせん銃には素人、マガジンの外しかたがわからない。仕方なく周囲の枯れ草をかき集め、百円ライターで少しばかりの火を灯した。その明かりを頼りに、どうにかマガジンを外す。そして鞄の中をまさぐり、新しいマガジンを取り出そうとしたその刹那……
　近くに人の気配を感じた。
　雪見は咄嗟にサバイバルナイフを手に取り身構える。何メートル先だろうか、人影が見えた。
　雪見は思わず口走った。

「止まりなさい！」
　いきなり聞こえた声に、結花は身をすくめた。視線を左に向けると、人影が見えた。脇に灯されていた小さなたき火で縁取られている。女性？　結花も、出刃包丁を持つ手に力を入れる。
「あなた、誰？」
「そんな事どうでもいいわ」
　雪見は一歩づつ結花に歩み寄る。
「私を邪魔する人は、許さない……」

その場の勢いに押された結花は、一歩も動けない。
「待って！　私の話も聞いて！」
「許さない……」
二人の間隔は、少しずつ狭まっていく。もう少しで相手に手が届くという間合いまで来たその時、
ヒュン！
雪見の脇を何かが駆け抜けた。
結花の身に危険が迫ったことを察知した彩が、自らの武器であるＧペンを投げたのだ。しかし、ペンは雪見の脇十数センチをかすめ、奥の方に消えていった。
「……！」
雪見は立ち止まった。
「他に誰かいるの？」
彩は彩で、二人の対峙を目の前にして何もしゃべれずにいた。ほんの数秒、時間が止まったような感じがした。しかし、揮発油のにおいがその場を崩す。
そしてその直後、
ボウッ！
すぐ後方で火の手が上がった。
彩が放ったペンの先は、雪見が河原においていた荷物の一つ、ジッポオイル入り水風船を突き破った。そして流れ出したオイルが、明かり取りの火に引火したのだ。
「……！」
雪見は咄嗟にきびすを返し、火の方へ駆けだした。結花は一瞬たじろいていたが、遅れて後を追う。ようやく荷物のある所まできた雪見は、置いてあったライフルを取り、銃口を結花に向けた。
「来ないで！」
(本当ならこのまま引き金を引いてしまいたい。でも、今このライフルには弾が入っていない。相手を脅すくらいなら……)
雪見はそんな気持ちで、銃口を結花に向けていた。そして銃口を向けたまま、散らばっていた荷物をかき集め終わると、

「いつか、いつか必ず……」
そう口走りつつ、川上に向かって走り出した。
全てが終わった……
足音が聞こえなくなってから、張りつめていた緊張の糸が切れたかのように、結花はその場に座り込んだ。
「結花さん……！」
ようやく状況を理解したのか、彩が結花の元へ駆け寄る。
「あ、彩さん、だめじゃない……じっとしてて、って言ったのに」
「ごめんなさい……」
彩の声も、心なしか震えていた。
「でも、私に出来るのは、これくらいしか……」
「あ……でも、ありがとう」
「こちらこそ……」
「ところで彩さん、その手に持ってる銃、どこで手に入れたの？」
「そこの河原に落ちてました……」
「あっ、そうなんだ……」
結花は、ようやく本来の目的を思い出した。
「ペン、投げちゃったんでしょ？　それ使ったら？」
「あの……私、銃なんて使ったことないんですけど……」
「私もよ。よかった、これで何とかなりそうね」
「結花さん、怪我はないですか？」
「大丈夫。でも、ちょっと緊張したわ」
オイルの炎が少しずつ静まり、辺りはまた暗くなった。

144　人間

終わらない夜は無い筈だ。だけど、この島には本当の朝は来ないのかもしれない。
「……ん」

射し込んでくる眩しい朝陽を目に受け、長瀬祐介は瞼を開く。
「……あれ、寝ちゃってたのか……」
ごしごしと目を擦り、脳が働き出すと、祐介は何かが足りない事に気がついた。
「……天野さん？」
自分を信用して、無防備にも肩を寄せてくれた少女——天野美汐の姿が無いのだ。慌てて荷物を纏めると、祐介は木の洞から飛び出した。
「……おはようございます」
朝陽の中に、彼女はいた。何処かで見たような、そして誰かが何処かで失ってしまったような、優しい笑みを浮かべて。無事を確認し、ほっと胸を撫で下ろす祐介。
「あ、ゴメン。僕も寝ちゃってたみたいで」
それだけの言葉なのに、なんだか照れ臭くて、祐介は思わず視線を逸らした。美汐は一瞬破顔したが、すぐにまたくすっ、と笑う。
「いいんですよ。長瀬さんも疲れていたのでしょう？　それに……一緒に眠る事が出来たと言うのは、お互いがお互いを信頼している証にもなります」
凄く嬉しい事を言ってもらった筈なのだが、「一緒に眠る」と言う台詞に、多少なりとも悶々としたものを感じてしまった自分が恥ずかしくなって、祐介は顔を伏せた。
（……最低だ、僕）
「それじゃあ、行こうか」
「はい」
それぞれ、自分の荷物を背負い込み、出発しようとしたその時。
「ぴこ？」
ポテト（祐介達は「ぴこ」と呼んでいるが）が、何かに気付いた。
緊張が走る。
「ぴこ、誰かいるのかい？」

木の洞に戻り、息を潜めて、祐介は話し掛ける。
「ぴこ、ぴこぴこぴこっ」
「……誰かが、いるんですね」
美汐の顔が僅かに強張る。
（話の通じる相手ならいいけど……僕に、殺せるのか……？）
その言葉を口に出しかけて、祐介は我慢した。それを口にしたが最後、自分の覚悟が全て崩壊してしまいそうだったから。
殺すしかない場合は、躊躇無く、殺す。
そう決めた筈だ。
それを守れないようでは、自分を信用してくれた美汐にも申し訳が立たない。胸のピアノ線を手袋越しに指でなぞる。そしてそれを、戸惑う事無くぎゅっと掴むと祐介は、
「覚悟は出来たかい？」
と、美汐に問うた。
「一度は死んだようなものです……覚悟は出来ていますよ」
デリンジャーを握り締め、美汐は笑った。
「せーの、で行くよ」
洞穴のような形になっているここは防衛戦に適している様に見えるが、反面手榴弾など、範囲が広域に渡る武器には滅法弱い。だから、多少危険を犯してでも、二人は森で戦う事に決めた。
「君も上手く逃げるんだよ」
祐介は優しく、ポテトの頭を撫でた。
息を殺す。
足音が近づいてくる。
（…………いくよ）
（……はい）
「せーのっ！」
それを合図に、飛び出し、散る。
視界の隅には、二人のニンゲンの姿。
男と女。一人ずつだ。
（話し合いは……）

出来るか？　と思考しかけた祐介だったが、それは中断される。というより、無理と悟ったのだ。何故なら、
——プラスチック爆弾が、こっちの方向へ飛んできたからだ。
「くっ！」
紙一重で、それを交わす。
背後から轟音。
祐介は身を隠しつつも、ぞっとした。
もし、あのまま木の洞に居たら……
「くそッ！」
橘敬介は、交渉のチャンスを自ら潰してしまった事に歯噛みした。迂闊だった。突然飛び出して来た二つの人影に動転して、思わずプラスチック爆弾を投げてしまうとは……自分の後ろでは、声も出せずに怯える一人の少女が居る。
仕方ない、か——
敬介は茂みの中に身を隠し、少女——桜井あさひの方に向き直る。そして、強く見つめて、ただ一言言った。
「君は逃げるんだ。ここは僕が食い止める」
「でも……でも……」
あさひはただ、うろたえるばかりだ。敬介は堪え切れず、声を張り上げた。
「死にたいのかッ！　こうしている間にも敵は近づいてきてるんだ！　早く行けッ！」
「ひッ……！」
あさひが怯えた表情で敬介を仰ぎ見る。敬介はもう、あさひとは視線を合わせない。だが、最後に、今度は優しい口調で言った。
「……さぁ、行くんだ。それと、もし神尾晴子って人物に会ったら、こう伝えて欲しい。『すまなかった』って」
その言葉を聞いて、あさひはよろよろと、歩き出す。

「そうだ……早く逃げろよ」
敬介の頭上を、弾丸が掠めていった。
（これで、あのあさひって子を巻き込んだ責任は取れたかな…？　いや、結局彼女をまた一人にしてしまった……全然ダメだな……。全く、どうして僕はこうも……）
敬介は薄く自嘲気味の笑いを浮かべると、バッグからもうひとつプラスチック爆弾を取り出して、投げた。
その瞬間。
目の前が、カッ、と明るくなった。
美汐の撃ったデリンジャーの弾丸が、プラスチック爆弾に当たったのだ。膨大な熱量を浴び、最後の一言を発する事も出来ず、敬介は絶命した。
死体は、すでに原型を留めてはいない。今となっては誰だったかも分からないモノを見つめて、美汐が呟く。
「……私が、殺したん……ですね」
「……仕方ないさ……殺さなきゃ……僕らが……」
祐介は、その言葉だけ押し出して、天を仰いだ。
「……所詮、ヒトなんて、弱い生き物なんですね」
美汐の呟きは、誰に向けられたものだったか。
「……そうさ……だから僕らは、殺すんだ」
祐介も、誰にともなく言った。

五十七番　橘敬介　死亡
【残り74人】

145　第三回定時発表

おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな？
この時間までの死者を発表するぞ。

七番　　猪名川由宇
二十六番　河島はるか

三十二番　霧島聖
四十九番　新城沙織
五十四番　高倉みどり
五十七番　橘敬介
五十九番　月島拓也
七十二番　氷上シュン

前回より増えたとはいえ、たった七人だ。こんなペースじゃ企画側の予定が狂うんだ。
核ミサイルで島ごと焼き払うのも、爆弾を爆発させるのも簡単だが、それでは俺様が面白くないんだなぁ。俺様はおまえらが殺し合う姿をみて楽しみたいんだ。
俺様は我慢強い、だが忍耐も今日限りだ。もし明日もこんな数の死者なら文字通りの爆弾発表をせざるをえない。だが慈悲深い俺様はそんなことは言いたくないんだ、わかるなハハハハ。
では諸君。俺様にそんなことを言わせなくても済むよう頑張って殺しあってくれたまえ。ハハハハ

146　紹介

お待たせしてごめんなさいね。秋子はそう言って、外で待たせていた人を喫茶店に招き入れる。
「えっと、急いでいたものでお名前も聞かずに失礼いたしました。私は水瀬秋子と申します。この子は私の子で名雪と言います」
そういって、秋子に抱きかかえられている名雪が会釈をする。
「あっちのちっちゃな子がみちるちゃんで、もうひとりの物静かな子が姫川琴音さん」
秋子に紹介されてみちると琴音は頭を下げる。
「うにょ。みちるだよ〜〜〜」
「はじめまして。姫川といいます」
弥生はこの殺伐とした状況のなかでの、あまりにアットホームさに面食らってしまい――

「はじめまして。篠塚弥生です」
そう答えるのが精一杯だった。
「それでは自己紹介も済んだ事ですし、名雪達は一度寝ておきなさい。明日もあるんだから」
「くーーー」
「うにゅ。みちるねむぃ――」
既に寝入っている名雪と寝る場所を探しているみちるに、喫茶店の奥にしまってあった毛布を出し二人を寝かせ付ける
「琴音さんはどうしますか？」
秋子は、いまだ寝ようとしないでいる琴音に問いかける。
「私も弥生さんのお話をお聞かせ頂けませんか？」
「弥生さん――よろしいですか？」
秋子は左手を頬に当て、弥生に微笑みかける。弥生は、秋子に探している人物――森川由綺の情報を聞き出そうとしはじめた。
心の思いを悟られないようにして――――

147　高槻の電話　3

ええ、やはり展開が遅いと
……まあ、そうでしょうね。
え、ヤケに余裕じゃないかって？
まあ、いくつかのカードも切ってありますから。
あいつらは狡猾ですよ。
未だに皮を被った奴らもいますし。
まあ、そこら辺はどうでもいいんですよ。
堪えられますかねぇ、彼等は。
……そりゃあもちろん精神ですよ。
あるものは肉親、あるものは親友、
そして信頼できる志を持った仲間。
いつどこからでもやってくる、
恐怖、裏切り、別離、殺害……
人間なんてそんなもんですよ。
いつしか残り少ないエサを奪い合う……

――狂気はね……伝染するんですよ。

148　手のひらの円舞曲

三回目の放送後、海底へ潜航中の潜水艦「ＥＬＰＯＤ」艦内。モニター越しに、結界を壊そうとする面々を見ながら。

あの結界を壊そうとしているのか、無駄なあがきを……結界の核である刀はミサイルで島が消えても無くならんよ。

その刀をもって切った傷はふさがることなく、前回それを持った者は全体の四割方を殺して勝者となったが、そいつは刀に体をボロボロにされて死んださ。何故、刀から悲しみとかいう思念が出るのかは解からずじまいだったがな。

ピーピー

「どうした？」

ケッカイホウメンへ　サラニ１メイ　セッキンシテイマス

「誰だ？」

四十三番サトムラアカネ　デス

ふっ、面白くなりそうだな。

149　Double Cast

太田香奈子と松原葵の激突。時間はそんなところまで遡る。

「……」

（人が――歩いてるね）

月島瑠璃子（六十番）が視線を向けた先に、一人夢遊病者のようにさまよう少女がいた。

（確か……美凪ちゃんだったっけな？）

遠野美凪（六十二番）、あれからどれだけたったのか分からない。

傷口、けっこう痛いんだ。

舐めてくれたら、痛くなくなるかも。
ん
……痛くなくなってきたよ
河島、さん？

ほんのわずかな間行動を共にした人。その人はまるで眠っているようだった。
(私もまた、夢を見ているんですか？　まだ覚めない……夢)
景色が上下に揺れる。夢、美凪の夢。どうしようもなく悲しい夢。
(みちる……)
あどけない少女の顔が脳裏に浮かぶ。その笑い声が彼女の胸に深く突きささる。
瑠璃子は物陰(といってもあたりは雑木林だったので、身を隠すには困らなかった)から彼女を観察しつづけた。

今、瑠璃子の手元には凶器である鋏はない。生きていれば、恐らく新城沙織と太田香奈子が持っているはずだ。だが暫くして、躊躇せずに瑠璃子が歩を進める。
(次の…ターゲットは…あのコだね)
瑠璃子の口元だけが笑った。

「あの……」
少女の背後から声。
「……」
返事はない。だがややあってゆっくりと振り向く。
「今一人だよね……？　よかったら、私とお話しないかな？」
「そう…大変だったんだね」
瑠璃子が美凪の背中をそっと撫でて励ます。瑠璃子が刀に布を通す。丹念に刀身に刷り込むように走らせる。

「刀……綺麗だよね」
「刀フェチ…？」
美凪らしい台詞。だが、彼女を知っているものが見たら、それはただの違和感としか感じられないほどくぐもった低い声。
「うーん、違うと思うよ。多分、この光が好きなんだよ」
「光……」
鈍い光が強さを増す。瑠璃子の人形のような瞳に光沢が映し出される。
――鋏はしょせん付属品に過ぎない。最初はただの鋏だったんだから。この毒の染み込んだ布こそが瑠璃子に支給された本当の武器であった。この布に毒がしこまれてるなんて誰が想像できようか。警戒心が強い人には怪しまれるかもしれないが。すでに殺戮者として動いている人には怪しまれるどころか有無を言わせず殺されてしまうかもしれない。
だから、瑠璃子にとってもまた他人とのコミュニケーションは命をさらす危険な賭け。
「たぶん……私は人を探してるんだと思います」
刀を手に、瑠璃子は耳を傾ける。
「危険だよ――」
刀から視線を外し、瑠璃子が驚いたように口をはさむ。
「ダメだよ。そんな、命を粗末にするような……」
「ただ……みちるに会いたい……」
瑠璃子の声はかき消された。小さい、だけど凛とした意思のこもる声。そこだけ、美凪が美凪らしく言えた久しぶりの言葉。
「……みち……る？」
「……知ってるんですか？」
「うん……」
瑠璃子の反応に美凪の感情がさらにこもった。
瑠璃子もまたゲームの参加者。今の詳しい状況は何も分からない。だが一つの例外。それだけに関し

ては瑠璃子の耳に常に入ってくる。それだけに関してはその人の一挙一動、すべてを手に取るように。

(一緒に行動してた罪だね……ここでは、強いものに巻かれては生きてはいけないんだよ)

——水瀬　秋子。

頭の中でその言葉を反芻させる。

(その人は、笑って人を殺せるんだよ……恐いんだ、本当に……)

瑠璃子さんの悲しそうな、そして恐怖した声。

(私も本当は行きたい。だけど、香奈子ちゃんや沙織ちゃん、友達が帰ってくるから、私には行けない……)

その気持ちだけで充分。待っててくれる人。それが力になるから。

(今はなにもできないけど……このあなたの刀。無事に帰って来れるようにおまじない)

瑠璃子さんが心配そうに、だけど強くそう言ってくれた。

(ちょっと恐怖……でも大丈夫)

少し朦朧とする意識を震わせるように小さくガッツポーズ。瑠璃子さんの思いがこもった刀と私の勇気。そして見てて下さいね、河島さん——

まっててね、みちる。

その人を倒して、一緒に帰ろう?

美凪の靴下に赤い染みが広がっていた。

ふくらはぎのあたりの小さな刀傷。

美凪が気付かないほど薄く、浅い傷だった。

150　いんたーみっしょん

監視役側の兵を屠った後、晴香たちは再び森の中に身を隠した。

「……結局、これだけ苦労したのに。何の手がかりも無し……ね」

自嘲ともとれる言葉を吐く。
……何が『不可視の力』よ。肝心な時にまるで役に立たない。高槻の居場所はつかめないまま。そして私達を襲った少年も取り逃がした……。
……そういえば。
「智子。あなた、あの男と知り合いなの？」
「……男って、だれや……」
膝を抱え、うずくまったままの智子。
「あなたを拳銃で襲った奴よ。あなたを委員長って呼んでた」
「……っつ！」
智子、そしてあかりが表情を曇らす。
「……ああ、あいつね。あいつは昔、神戸におった頃のクラスメイトなんや」
「そう。元クラスメイトに狙われるなんて、智子って、よっぽどのワルだったんだ」
「んなわけないやろ」
つっこむ仕草には、いつもの覇気はなかった。そんな智子をじっとみつめているあかり。その視線に智子も気づき、瞬間、目が合ったが……つい、とそらしてしまった。
……ダメや。いまは神岸さんの顔なんてよう見れん。
「……あのー。皆さん無視しないでくださいー」
あら、いたんだ。ってな風で二人が振り向く。
「ねえ、こいつ、誰？」
「ああ。この子、うちらのクラスのメイドロボなんや」
窮地を救われていながらひどい言い草だ。
「メイドロボ……これが？」
「はいっ。はじめまして、わたくし、マルチと申します。今後とも、よろしくお願いします」
……メイドロボっていうのは、もっと怜悧で有能そうな外見をしているものと思ってたけど……
今一つ納得のいかない晴香。
「…………」

むにーっと、ほっぺたを引っ張ってみる。
「はうー、いらいれすー」
今度は、スカートを『ぴらっ』ってな感じでめくってみる。
「そこはダメですぅ」
ほっぺたを赤く染めたりしながら恥じらったりしている。
「……智子、これって役に立つの？」
……これ、なんて言うのはひどいですー――とかなんとか言っているのは無視する。
「うーん。保証はできへんなぁ」
……あうーっ――という感じでうなだれる。が、これも無視。
「あんた、何か役に立ちそうな特技はないの？」
ちょっと頭に「？」を浮かべながら考えている。
数瞬して、「ああっ」てな感じてポンッと手をたたく。
「じつはわたし、すごい力をもってるんです」

……こんな奴でもロボットの端くれだ。最先端の科学兵器がつまっていてもおかしくはない。
「……見せてくれる？」
つい、期待に胸を膨らませてしまう晴香。
「はい。これはですね、犬さん召喚っていう魔術なんです」
……召喚？　犬？
今、なにかとても非科学的な言葉を聞いた気がする。
「それでは、披露します」
えっへん、とでもいうかのように（ぺったんこな）胸をそらし、スカートのポケットの中から、ごそごそと何やら取り出した。
「……ただの紙と鉛筆やないか」
ノンノンノンと、指をふってみせた後、（ってゆうか、そんな仕種どこで覚えたんや……）おもむろに地べたに座り込み、なにやら紙に書き始めた。
「うらぁ、とりゃぁ」

……なにやら気合いを入れる必要があるらしい。
「……うまく書けましたー」
そう言うなり、すっくと立ちあがった。晴香に手のひらを見せる。
「……何？」
「十円玉貸してもらえませんか？」
どげしっ！
「それはコックリさんやないかー！」
晴香よりも先に、智子のするどいツッコミ（&張り手）がとんだ。
「あうーひどいですー」
頭をさすりながら、智子に非難の涙目を向ける。
「ここからがいいところなんですよぅ」
しょうがないので、晴香が十円玉を渡す。その十円玉をポケットに入れ、両手を合わせてこう唱えた。
「なうまくさんまん、ばさらだんかん」
ぱこーん！
「流儀が違うわ！」
意外と濃ゆい知識を持っていた晴香が張り倒す。
……だめだ、役立たずだ、こりゃ。
ってな感じで晴香と智子は目を合わせ、「はぁーっ」とため息をつく。
笑い声。
「ふふふっ。ふふふふふっ」
見ると、あかりが涙を流しながら笑っていた。ツボにはまったのだろう。
「あははっ、おかしい。おなかが痛いよ。あははっ」
再び見つめあい、智子がつぶやく。
「……お姫様を笑わせたんや。こりゃ、連れてくしかないな」
「そうね」
……はぁ、と二人もう一度ため息をついた。

151　エンカウント

「こんな島に、なんでこんな施設があるのかしら」
桑嶋高子（三十八番）はひとりごちた。
歩いているうちに、気がつくとキャンプ場のような施設に辿り着いていた。
横目に無人のテニスコートを見ながら、高子はふぅっと肩を落とした。
（蝉丸さん、それに月代ちゃん、無事かしら……夕霧ちゃん、本当に死んじゃったの……？）
快晴。
冴え渡った空から降ってくる爽やかな日差しも、高子にはまるで自分をせせら笑っているように思えた。
（ダメね、こんなことじゃ。さぁ、シャキッとして、皆さんを探さないと……）
気合を入れるため、高子は手にした木刀を強く地面に突き立てた。
武器として支給されたものだったが、高子はこれを杖として以外に使うつもりはなかった。
（誰が考えたのかわからないけど、こんなのって絶対間違ってると思うわ……私に、乗り気になってる人たちを説得する力でもあればいいんだけど）
そんなことを考えながらテニスコートの角を曲がると、炊事施設のある、やや広い場所に出た。
そして、そこには人がいた。
（あら、何かあったみたいね……でも、お邪魔……なのかしら）
高子から見えたのは三人。背中から血を流し、うつ伏せに倒れている少年。
そして、地面に座り込んだ男女はまさに熱烈に口付けを交わしている最中だった。
（覗くのも悪趣味だし、戻りましょうか。……それにしても、妬けるわね）
高子はこの状況でそんな冗談が出てくる自分をお

かしく思い、クスクスと笑う。
が、それがいけなかった。
視線を戻した時、笑い声に気がついたのだろうか、女の方が驚きの視線で高子を見ていた。
「誰……誰なのッ!?」

152　（無題）

空気のような存在――
咄嗟に形容を求められたら、そうとしか言えない人物だった。
「にゃあ、お人形さんみたいな人ですね」
千紗ちゃんが、悪意無しに言う。
「初めまして、だね」
その少女は、その瑠璃色の瞳をこちらに向けて微笑んだ。
「月島瑠璃子っていうの」
唐突な自己紹介に、私は慌てて答えた。
「あ、私は雛山理緒って言います」
「私は塚本千紗と申しますです」
少女は、静かで乱れの無い空気を漂わせていた。
そう、能動的な意志がゼロとでもいうか――何か、ロボットのような感触だ。
「理緒ちゃんに、千紗ちゃんだね」
言葉にも、感情が無い。いや、無いと言うより、見えない。私は、何ともいえず嫌な感じがした。
「じゃ、私たち、行くね」
そう言って、千紗ちゃんの手を引いて、さっさと瑠璃子さんの横を通り過ぎた。
「にゃ、理緒ちゃん？」
千紗ちゃんが驚いたような声をあげるが、関係ない。
「……理緒ちゃん、殺した」
「!?」
私は、胸を撃ち抜かれた。なぜ、それを――
「理緒ちゃん、人を殺したね。心が、返り血で濡れ

てる」
　そう言って、くすくす笑う。
「にゃ、にゃあ……理緒ちゃん？」
　千紗ちゃんが怯えたように、私の手から離れる。
　私は、殺人の事実を千紗ちゃんに伝えていない。恐らく千紗ちゃんは、私が隠していたと受け取ったのだろう。怯えた目線が、私を刺す。
「ち、千紗の事も、殺すつもりだったですか……？」
「そ、そんな訳――」
　千紗ちゃんが、一歩ずつ遠ざかっていく。私の視線に耐えかねたのか、そっと瑠璃子さんの方を向いた。
「……！」
　私は、心底ぞっとした。
　瑠璃子さんの目が、恐ろしいほど安らぎに満ちていたからだ。安堵を引きずりだす、母性を超越した何かが滲み出ていた。見ているだけで、全てを委ねたくなるほどに。
「にゃ、にゃあ、瑠璃子さん……」
　千紗ちゃんが、すがるような声を出して瑠璃子さんにすり寄る。
「いい子、だね」
　そう言って、千紗ちゃんの頭をなでる。私はどうする事もできず、ただ見ていた。
　が――
「にゃ……！」
　千紗ちゃんが急に悲鳴をあげ、くずおれた。
「千紗ちゃん!?」
「来ない方がいいよ」
　瑠璃子が、冷静な口調で理緒を制した。手に握られた、小さなコンパス。その針の先が、わずかに赤く染まっていた。
「遅効性の猛毒だからね。変に刺激したり介抱したりすると、却って死ぬのが早くなっちゃう」
「そ、そのコンパスで刺したの……？　毒を塗って

「……」
「そうだよ。お薬があるんだけどね」
「早く千紗ちゃんを助けてあげてッ！」
理緒が、激昂して叫んだ。
「条件、あるけどね。いい？」
瑠璃子が、くすくす笑った。
「人を、殺して。誰でもいいよ」
「ふざけないでッ！」
「ふざけてなんかないよ」
理緒は、唇を噛んで怒りに震えた。そして、ふと感情を整えるように息を吐いた。
少しでも優位に立つように、薄笑いを浮かべて、
「も、もし私が千紗ちゃんを見捨てて、あなたを殺すと言ったらどうする？」
瑠璃子は、少しも動じなかった。そっと膝をついて、千紗に話しかける。
「千紗ちゃん。理緒ちゃんは、あなたの事を見捨てるって」
千紗の頭をそっと抱いて、顔を理緒の方へ向ける。
「り、理緒ちゃん……千紗なら構いません。死にたくないけど、理緒ちゃんにそんな事させられませんです。私の事なんか放っておいて、に、逃げて下さい……」
「……！」
理緒の中で、相反する感情が同時に沸騰する。
健気すぎる千紗。非道きわまりない瑠璃子。両者に対する感情が、猛烈に渦巻いた。
「や、やればいいんでしょ……」
理緒が、うなだれた姿勢から瑠璃子をにらみつけて呻いた。
「絶対に千紗ちゃんを助けてよ！　殺してくるから！」
倫理観だとか、そんなものは消えていた。千紗の命と引き替えに殺される人間の事など、もはや念頭に無い。
勢い良く反転し、理緒は猛然と走り出した。

「だ、ダメです！　理緒ちゃん――」
そんな声が聞こえたが、理緒は止まらなかった。

153　失楽園

由綺は幸せだった。
こうして今、冬弥の体温を感じていられることがたまらなく幸せだった。
彼が側にいてくれれば、彼が包んでいてくれれば、彼を感じていられれば、それだけで他に何も必要なかった。
だから、とうとう出会えた冬弥の唇を積極的に求めたのは、ごく自然なことだった。そして、冬弥もそれに応えてくれた。
それ故に、ふと目を開けた時、物陰に隠れるようにして立っていた女を発見すると、激しい怒りが込み上げてきた。
二人の時間を邪魔されたことに対する怒り。
極限状態における、恋人との甘すぎるひとときは、由綺の中の何かを確実に変えていた。
――身体が、熱い。
「誰……誰なのッ⁉」
由綺が突然発した声に驚き、冬弥も由綺の視線の先を振り返る。そして、そこに居たのが女性だと判ると、先程まで二人で耽っていた行為を思い出して顔を赤くした。
「す、すいません……お邪魔するつもりはなかったのですが」
高子がおずおずと、申し訳なさそうに姿を現した。だがこの時、高子は自分がどういういでたちをしているのかをすっかり失念していた。
フェンスの陰に隠れていた半身が現れ、由綺の位置からも右手に握られていた木刀が見えた。
「……！」
由綺は素早くニードルガンの照準を高子に合わせる。

「よ、寄らないで！　冬弥くんに近づかないで……！」
由綺は目の前が真っ白になった。高子が木刀を振りかざし、冬弥に襲い掛かるヴィジョンが頭の中を駆け巡る。
ようやく自分の失敗に気づいた高子は、慌てて木刀を投げ捨てた。
「ご、ごめんなさい！　お、驚かそうと思ったわけではありませんので……あの、お邪魔ならすぐに退散しますので……もしよかったらお話、しませんか？」
「構いませんよ。そこ、座りましょうか。ほら、由綺」
冬弥は最後の言葉に続け、ありがと、と由綺の耳に囁いて、それから二人を側のベンチに促した。
確かに由綺の反応は行き過ぎだったが、それも冬弥を心配してのことだ。特に、こういう状況では無理もないことかもしれない。
(前から思ってたことだけど、由綺は俺の彼女にはもったいないくらいの女性だよな……)
冬弥は苦笑すると、まだ強張った表情で武器を向けたままの由綺にウインクしてみせる。
由綺はハッとしたように銃を下ろすと、うんっ、と頷き、高子に詫びるために一歩踏み出した。
その時、冬弥の横を通り過ぎようとしている高子の手に、何かキラリと光るものが見えた、気がした。
実際、それは気のせいでしかなかったのだが、一度入りかけた由綺のスイッチを入れ直すにはそれで十分だった。
躊躇なくニードルガンを構え直し、トリガーを引く。
ジャッ！
高圧力で放たれた細かい何万本もの針が高子の上半身左半分を吹き飛ばし、高子は由綺の方に視線を動かして――
――倒れた。

「ゆ……き……？」
「私ね」
由綺は頬を紅潮させながら、言った。
「私、強くなるよ。誰にも負けないくらい強引に、わがままに、乱暴に、冬弥くんを護るよ」
「由綺……由綺ッ！」
無邪気に微笑んで、歌うように言う由綺の肩を掴んで、揺さぶる。
由綺は待ち構えていたように冬弥の背にしがみつき、抱きしめた。
「冬弥くんが何て言ったって、私、やっちゃうんだから……」
楽園の向こう側と、こちら側と。
ブラウン管を隔てた世界よりもさらに遠い場所に、由綺はいた。

三十八番　桑嶋高子　死亡
【残り73人】

154　戦闘準備

「……あった」
浩之は住宅地の一角にある資材置き場から武器になる物を見つけだした。
ダイナマイトが二十本。本当は銃器の類が欲しいところだったがここに来るまでの間に銃をもった者と遭遇することはなかった（代わりに雅史の死体からドラッグを入手していた）。
（誰から殺すべきか）
そう浩之は考えて何人かの知り合いの顔を脳裏に浮かべた。
（委員長は銃を持っていたな。だがあの知らない女と二人掛かりでこられると厄介だ。さっきの放送でもあかりの名前はなかった。今の武器で抵抗なく殺れるのはあかりかあるいは、理緒ちゃんかだな）
浩之は殺し合いというこの状況下で誰をどう切り

捨てるかを単純かつ冷静に分析していた。
普段の俺が今の俺を見たらなんと言うだろうか？
そんなことを考えながら浩之は他の工具箱を漁っていた。
「これ、使えるな」
そう言って浩之は電動釘打ち器と大量の五寸釘を取り出した。
使えそうなのはこれぐらいか。
そう思って資材置き場を出ようとした浩之は人の来る気配を感じて再び身を隠した。其処にやってきたのは標的の一人、雛山理緒だった。
銃を手に誰かをさがすようなそぶりをしている。
好機とみた浩之は理緒の頭に向けて死角から電動釘打ち器を構えそして発射した。

155　おすそわけ

「はい、これ。おじさんにもあげる」
そう言って差し出されたあゆの右手の上の物体を見て、御堂は眉を寄せた。
「ああ？　なんなんだ、コイツは」
御堂は、あゆの手のひらの上に鎮座する魚型の物体を訝しげに睨み付けた。魚型の物体は、そのつぶらな瞳で御堂を見つめ返している。
「たいやきだよっ。ずっとポケットに入れたまんまだったから、冷たくなっちゃったけど……」
にっこり笑って、御堂に物体を手渡す。
「朝ご飯、いっしょに食べよ」
「……食いモン……なのか？」
「しっぽまでアンコがいっぱいだよ」
それを聞いた途端、御堂は手の中の物体を脇に放り投げた。
「わっ、わっ、捨てちゃうダメ～」
慌ててあゆが拾い上げるが、たいやきの右半身に砂がついてしまっていた。
「うぐぅ……食べ物を粗末にしちゃダメだよ……」

表情を曇らせながらも、懸命に砂のついた面を削り取るあゆ。
「俺は甘いモンは嫌いなんだよ」
御堂は、そんなあゆにはまるで頓着する様子もなく、面倒くさそうに仰向けに寝転がった。
やがて、あゆも作業を終えると、
「はい。今度はちゃんと食べてね」
と、アンバランスな面持ちになったたいやきを紙袋の上に置いて、立ち上がった。そのまま立ち去っていくあゆを、片目で追っていた御堂は、少し離れたところから、
「はい、キミにもあげるね」
「にゃ～」
というやり取りが聞こえてくるのを確認した後、上体を起こした。
「……よくよく考えてみりゃあ、コレでも一応、非常食だしな」
戦場では、食えるときに食っておくのが鉄則だ。非常時に食い物の好き嫌いを語る兵士なんざ、家に帰ってママのオッパイでも吸ってる方がお似合いだ。
不細工な魚型の物体を眺めていた御堂の目前に、ぽん、とあゆの笑顔が浮かび上がった。慌てて首を振る。
「けっ……馬鹿馬鹿しい。なんだってあんなガキなんか……いいか、俺はあんなクソガキのためにコイツを食うんじゃねえんだ。ただ……ただ、プロとして必要時の栄養価の摂取を行うだけだからな」
誰かに言い訳するように独り呟いた後、魚型物体を口に放り込み、ゆっくりと咀嚼し——
「おっ、うめえ」
思わず本音が出た。

156　美凪とみちる

歩いて、歩いて、歩いた。
ただ、みちると帰りたかった。

国崎さんも、一緒に。
また、三人で、変わらぬ時を過ごしたかった。
体中の力が抜ける。
もう、歩けない。
瑠璃子さんと別れてから、体の調子が悪かった。
なんだろ、どうしちゃったんだろ。
——倒れる
目が見えない。
もう朝のはずなのに、まっくら。
——死んじゃうのかな。
みちると出会った日を、思い出す。
みちると過ごした日々を思い出す。
妹と同じ名前を持った女の子。
私の救い。私の拠り所。私の夢のかけら。
——私の、おともだち。
また、シャボン玉飛ばしたかったな。
くるくる、くるくる。
「わぷっ」

ふふ、声が聞こえるよ。
「みちる——」

「あっ……」
半壊している喫茶店。
名雪と琴音と喋っていたみちるは、突然悲しい声を上げた。
「みちるさん、どうしたんですか？」
不思議に思い、琴音が尋ねる。
「うに……もう、行かなきゃ」
「みちるちゃん？　どこへ行くの？」
カウンターの秋子も、みちるの様子がおかしいことに気付いた。
「みちるは美凪の夢なんだよ。だから、美凪がいなくなったら、みちるも消えるの。悲しいけど、残念だけど」
「みちるちゃん、どういう意味？」
秋子の問いかけに、みちるは答えない。

「国崎往人に会ったら、ありがとうって。美凪もみちるも、楽しかったって。おねえちゃん達も、ありがとう。ぽちをよろしくね……ばいばい」
「みちるちゃん！」
名雪が叫ぶ。その声は届かない。
「消え……た……？」
後には、ぽちと名付けられた白ヘビが残るだけだった。

ありがとう、美凪
どうしたの？　みちる
美凪が美凪だったから、みちるはみちるだった
私もよ
みちる、楽しかったよ
うん
美凪も、楽しかったよね？
……うん
にゃはは、よかった
国崎さんにお礼を言わないとね
にゃはは、そうだね

——ありがとう

六十二番　遠野美凪　死亡
八十七番　みちる　消失
【残り71人】

157　殺戮の序章

バスバスッ！　という音と共に背中に強い痛みを感じた理緒はもんどり打って倒れた。
「う……な、何……」
何が起こったの？　と言葉にする前に再びバスバスッと言う音と共に五寸釘が飛んでくる。何とか飛んできた釘を避けた理緒は体勢を立て直し釘の飛んできた方向に向けて大口径マグナムを発砲した。し

かし、浩之は建築資材を盾に理緒の背後に回り込んだあとであった。そして再び電動釘打ち器のトリガーを引く。
バスッ！
「うあっ！」
再び背中に激しい痛みが走り理緒はその場にしゃがみ込む。
早く誰かを殺して戻らないと千紗ちゃんが死んでしまうのに。こんな所で死ねないのに。その気持ちが焦りを生み、その焦りがマグナムの照準を狂わせる。
バスバスバスッ
「ううあああぁっ！！」
非情にも飛んできた三本の五寸釘は側面から理緒の右腕を貫いた。
「あ、あ、あ、ああああ……」
右腕をみた理緒は言葉がなくなった。五寸釘が刺さった時に動脈を切断したのだろう傷口から大量の鮮血が吹き出している。
脈打つ度にビューッと吹き出す血を目にした理緒は完全にパニック状態になって五寸釘を引き抜こうとした。もはやマグナムは手放していた。
「はっ、は、は、早く抜かないと、し、し、死んじゃう、千紗ちゃんも私もしんじゃうよおお!!」
「ちさちゃん？　何言ってるんだ？」
その様子を見て笑うでもなく浩之は背後から心臓めがけて釘を四発発射した。
バスバスバスバスッ！！！
「あがぁっ！！！」
四本の五寸釘が次々と心臓に突き刺さったその直後、理緒は口から大量の鮮血を吐き出しうつぶせに地面に倒れた。
「悪く思うなよ。こっちは見つけたらすぐに殺すつもりだったんだ」
理緒の大口径マグナムと予備の弾丸を回収しながら浩之は理緒の死体にむかってつぶやいたが、そこ

に死者を悼むあたたかみはなかった。
建築資材置き場のコンテナに理緒の死体を放り込むと浩之は次の獲物を求めてその場を後にした。殺戮はまだ始まりにすぎない。

七十三番　雛山理緒　死亡
【残り70人】

158　この孤島、脱出不可能

もうすぐ夜が明ける……
「うーん、だ〜めだぁ、ここもコンクリで固定されちゃってるよ……」
芳賀玲子が地面に身体を擦りつけながらぼやく。
「みたいですね」
誰も通らないような細い路地。アスファルト舗装された地面のマンホールを見つけては、それを開封しようと奔走していた。
柏木楓があきらめたように息を吐き出す。
「別の方法を考えたほうがよさそうですね」
「うーん、地下道からなら脱出経路が確保できると思ったんだけどなぁ〜」
「仕方ないです。目の付け所は悪くないと思いますし」
「え、そぉ？　照れるわよ、にゃはは」
得意げに玲子。
「伊達に滋養強壮漫画は読んでないわよ☆」
(どんなマンガですか…)
「そうだ、漫画といえば……本よ！　楓ちゃん、さっきの本、見せてくれない？」
「本……武器支給のですか？　……民明書房ですよ？」
「いや、ほら、もしかしたらどこかにアンダーラインとか引っ張られてたり……」
「……？」
「あー、だからぁ、何の意味も無いような本にあえ

て何かのヒントが隠されてたりするかもしれないでしょ？　もしかしたらあいつらがわざと何かを仕込んでるかもしれないし！」
「なるほど、そういうことなら……」
ガサゴソ……かばんの中身を漁りはじめる。
「ありました」
楓からその本を受け取ると、適当にページを開いて目を通す。
「暗くて読みにくいわ……えーと、なになに……？
……撲針具……」
玲子は真剣に内容と睨めっこしはじめる。
（……私、忘れられてませんか？）
朝日が昇り始めるまで、玲子は本を読むことをやめることはなかった。

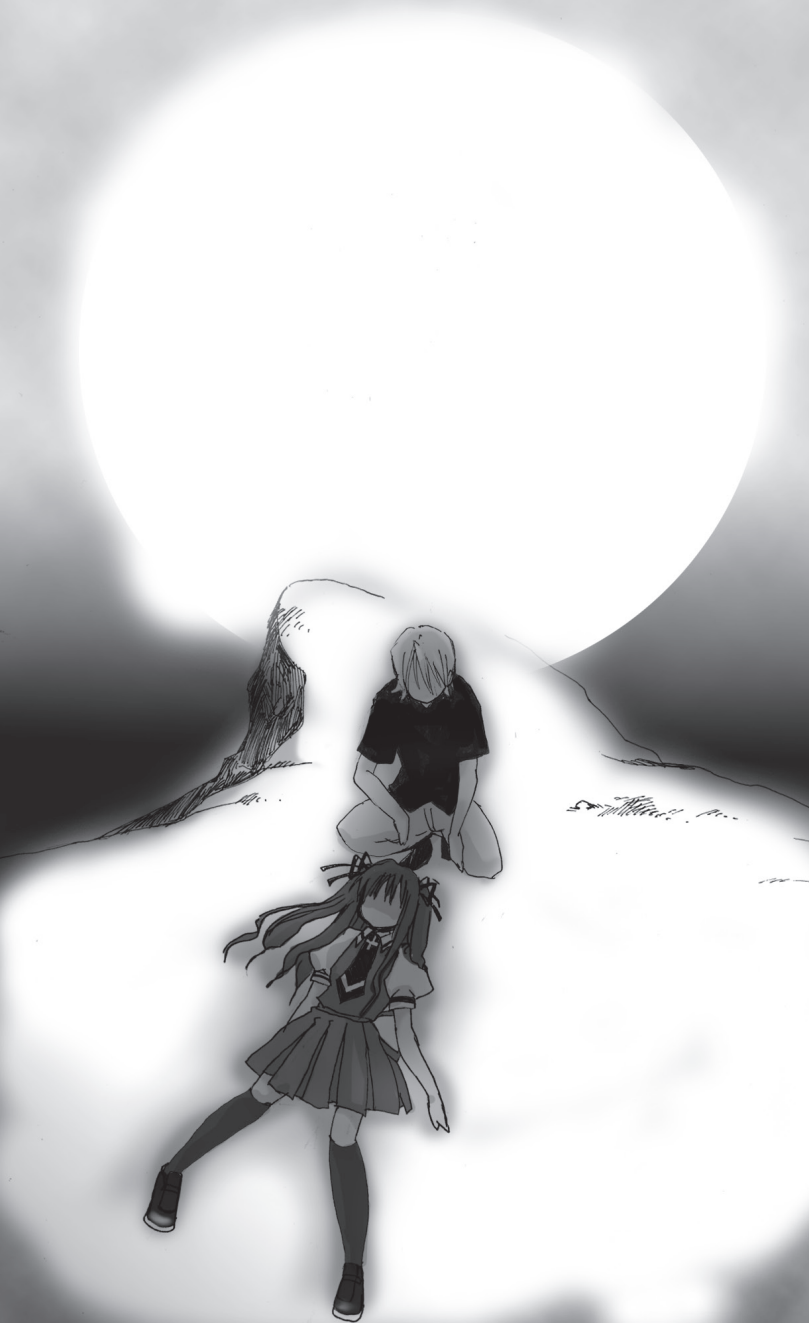
159　君の知らない出来事

「くすくす……ダメだったね」
既に肉片となった理緒の傍らで、瑠璃子は微笑んだ。その微笑みは、どこまでも残酷に穏やかで。このゲームを司る、滅びの聖女のようだった。
もしくは、残酷な天使――
「もっとも、手後れだったんだけどね。千紗ちゃん、殺しちゃったから」
くすくす……と笑う。
それから理緒の鞄を漁り、あるものを取り出した。
「沙織ちゃんのと合わせて、これでＣＤ二枚だね。残る二枚、誰が持ってるんだろう」
もう一度くすくすと笑い、歩いてゆく。
死者はすでに物でしかなく、手向けなぞ必要はなかった。

五十八番　塚本千紗　死亡
【残り69人】

160　幕間

小鳥のさえずる声がする。
坂神蝉丸は軽く息をついて立ち止まった。
朝が来てしまったのだ。
昨晩までに、かなりの距離をきよみや月代を探して歩いていた。何度か近くに人や動物の気配を感じはしたが、見知ったものの気配には出会えなかった。
できれば、まだ感覚の鋭い夜のうちに見つけたかったのだが――
先刻の放送は、高子の名を告げていた。
――間に合わなかったのだ。
「…………」
無念の思いが浮かぶ。
聡明で優しい娘だったのだが……
月代と、きよみの顔を思い出す。
次が彼女達でないという保証はどこにもないのだ。
誰が夕霧や高子を殺したかは分からないが、自らが少しでも生き残るためならば、か弱い婦女子の殺害すら辞さぬ者がこの島には確実にいる。さしたる戦闘能力を持たない月代やきよみ達の命は、まさに風前の灯火だといえた。
夕霧に続き、高子までもが殺されたことで、月代などは悲嘆の余り平常心を失うかもしれない。そんなことになれば、ますます危険な者に見つかる可能性が増えてしまう。
急がねばならない。
本来の蝉丸なら月代達を見つけるのもさして難しくはなかっただろう。しかし、この島に来てから力の大半を封じられているうえに、只でさえ彼の血に潜む仙命樹どもは日の光を嫌う。夜の間はまだ多少感じられたその息吹も、日が昇った今となっては殆ど消えてしまっていた。このまま手をこまねいていても、衰えた今の感覚では彼女達を見つけられまい。

今までよりもっと広い範囲を探す必要がある。
昨夜、銃声や多くの気配を感じた方向に向かってみることにした。危険ではあるが、元々強化兵となる以前より影花藤幻流の剣士として心眼の修行を積んできた身である。異能を抜きにしてなお、参加者の大多数より遥かに優れた能力と経験を蝉丸は有していた。油断さえしなければ大丈夫のはずだ。
（……!?）
視界にかすかに人影のようなものが写った。地面に倒れている。周囲に注意しながら、慎重に近づく。
――倒れていたのはまだ年端もいかぬ娘だった。
月代よりはいくらか年上だろうか。
特に外傷は見あたらないが、これは――
（……事切れているな……）
――――。
既に躯は冷たくなり始めていた。見ると、ふくらはぎのあたりに小さな傷口がある。傷口の周囲が変色しているところをみると……。
「毒か……」
改めて静かな怒りが、蝉丸の中で燃え上がっていく。涙の後がかすかに残る娘の瞳を閉じ、近くの木陰に横たえさせる。残念だが、今の状況では弔っている時間はない。
「……すまん、許せ」
戦場で失った戦友達のことを思い出した。死そのものは今まで何度となく見てきた光景だが、このような若い娘となると、何か苦いものを感じる。
そしてこの『げーむ』に参加させられている者の多くは、同じような若き少女なのだ。
蝉丸は娘が大事そうに抱えていた刀を手に取った。慎重に鞘から引き抜く。愛刀である跋扈の剣ほどではないにしろ、かなりの業物だ。得物としては非常に心強い。――だが。
「……む？」
――普通の人間には分からぬ程の、かすかな異臭。

蝉丸は顔をしかめた。
光岡との最後の戦いが脳裏をよぎったのだ。
――だが、きよみを助けるためにも、力は必要だ。殺したくない相手ならば峰打ちですますという手もある。雑念を振り払って刀を背負い、蝉丸は進み始めた。
その先に待っているものを、まだ彼は知らない。

161　喫茶店で

「森川由綺という少女を捜しています。あの子は普通の娘なんです。だから誰かが守ってあげないと――」
弥生は目の前にいる女性――水瀬秋子を仲間にしようと必死に哀願していた。
「そう言われても――私はここから動く意志は残念ながら無いのよ」
秋子にしては珍しく頼まれごとに了承と即答しなかった。
「私は、見ず知らずのあなたよりも、ここにいる娘達のほうが大切なんです。これが、普通に生活している時だったら、いくらでも協力するのですけど。けれど、今、私達がいるのは殺し合いの舞台。私はここで狂気に取り憑かれた人を何人も見てきました。だから、私はこの娘達を守らなければいけない、ここから離れるわけにはいけないのです」
秋子の意見は当然の正論だった。弥生も秋子の言葉に異を唱えることなど出来なかった。
自分の大切な人を守りたいから私はこの人に手伝ってもらいたい。でも、この人は大切な人を守るために動けないと言っている。
どちらも同じ思いである、弥生は説得することを諦めた。
「分かりました。では、もし森川由綺という少女が現れたら保護していただけませんか？」
「えぇ、それは分かりましたわ。でも、その際に大

人数であったときまでは保証できません。私にも限界は有りますから」
「分かりました。その際は連絡を――」
と、携帯電話の番号を書こうとして思いとどまった。それがこの島で使えないのは彼女自身確認済みのことだった。
「ふふふ、そうですね。そういう物が使えるはずがありませんでした」
「――私が一緒に行きます。そうすれば私の力で秋子さんに連絡できると思います」
いままで黙っていた琴音が、それが当然であるかのごとく発言した。
「だめよ琴音ちゃん。あなたは今、能力を無理矢理押さえ込まれているの。普段はその能力を定期的に発散する事で暴発を押さえているのに、今はそれが出来ていないのだから、弥生さんにいつ迷惑かけるかも分からないでしょう？　あらあら、琴音ちゃんったらそんな『なんで知っているの』って顔をしないの」
秋子は左手を頬に当てながら微笑を浮かべている。琴音は、浩之と雅史しか知らないはずの秘密をなんで秋子さんが知っているのかと、自分の耳を疑った。
「弥生さん。あなたの大切な人はどこかの建物に向かっています……一人では無いようです。あと、『Ⅲ』という文字が見えました。能力を制御されている今はこれが精一杯です。お役に立てなくてごめんなさいね」
秋子は弥生に深々と頭を下げた。
「それで十分です。いえ、十分すぎます。由綺さんが誰かに守られているとしたら、それに越したことは無いですから。私もすぐに向かわないと――」
「それと、今のあなたが主宰の高槻さんに挑むのはやめたほうがいいですよ、あの人は本当に危険ですから」
弥生は秋子に言われた事を心に刻み、壊れた扉の方へ向かった。

「水瀬さん、本当にありがとう」
弥生はそう言うと荷物を持って走り出した。
「さてさて、これで高槻さんに私の居場所がバレてしまいました……これから大変になりそうね」
秋子はそう言って席を立ち、散らかった喫茶店を片付け始めた。琴音もそれを見て秋子の手伝いをするべく椅子や机を元通りの位置に戻していく。
一通りそれがすんで、カウンターの内側でコーヒーを入れる秋子に、琴音はさっき飲み込んだ言葉をもう一度言うことにした。
「秋子さん、どうして私の力のこと知っているのですか？」
秋子は煎れたコーヒーを琴音に渡すと、もう一杯煎れ始める。
「あら、そのこと？　私は、私の側にいる人のプロフィールがおぼろげながら分かるの。どういう物を持っていて、どういう風に行動をするかが見えるの。でもその能力も押さえられているから、見える範囲と見える内容はあくまで微弱な物だけど。ほら、琴音ちゃんとは長く一緒にいたから少しずつ流れ込んで来たのよ」
琴音は秋子の言葉にコクンと頷いた。
秋子はコーヒーをすすりながらさらに琴音へ語り始める。
「良くわからない力に能力を押さえ込まれているから、能力者はみんな苦労しているみたいね。もっとも、そうで無ければ、今頃高槻さん達は皆殺しにされてると思いますけど」
「ここから生きて帰るには、どれだけ能力を封印されている人が結界が解放されるまでに亡くなっているか、そして能力者がVS高槻に意思を統一できるかが重要です。逆に能力保有者がいなくなる、もしくは味方に付けることが高槻さん側の勝利条件ね」
秋子はコーヒーを一口すすって、琴音に微笑みかける。
「私は当分ここから動かずに、能力が解放されるま

で待つ事にしました。能力が解放されれば、あなたに名雪を任せて、私は名雪を生きて帰すための行動に出られますから」
「今、結界には魔力的な物を持っている能力者が数人で当たっています。その結界を解いた際にでる影響を彼女達は知らないみたいですけど」
秋子はサラッと言った事は、これから起きるかもしれない環境変化において極めて重要な事柄だった。琴音はただでさえ悪い顔色を青ざめさせ、秋子に問いかけた。
「その封印が解かれると、どれくらいの能力者が覚醒し始めるのですか？」
「だいたい三分の一くらいかしら。そのなかには琴音ちゃんも入っているわ」
秋子はそう言って、琴音の手を握りしめた。
「往人さん、間に合うかしら？　あの娘、封印を解かれたら生きて居られないでしょうに――」
「あの子って、みちるちゃんが捜していた人ですか？」
秋子は首を横に振った。
「美凪さんを見つけても、往人さんはここを教えるだけだと思うわ。彼が探しているのは観鈴っていう娘。結界に封印されている力は、その娘を母体としているの。だけど、その力は強大すぎて人の器で全ては受けきれない。だから、母体となる運命を背負った魂は延々と輪廻し続ける……それが、観鈴っていう娘なの。往人さんの宿命は、その娘を見つけて導くこと。だけど、封印が解かれればその娘の命はないでしょう。往人さんがそのことに気づいたら、今結界を解こうとしている人達を必死で止めようとするはずよ。でも、私やあなたの様な能力者にとっては、往人さんが止めないでくれる方が助かるの……」
「もし、結界が解かれれば殺人鬼が二、三人増えるかもしれないけど、往人さんがそうならないことを、祈りましょうね。もしそうなれば……私は往人さん

「あらあら、動揺したのがバレちゃいましたね。琴音ちゃんさすがね」
それを察知出来なければ良かったと琴音は正直の思い返した。そして、禁断の扉を開けてしまったことを琴音はここで判断した。
「それは、あのとき私は主催者側に付いたからです。あのときの大会は、主催者の言いなりになった人達だけが最後まで生き残って、主宰者が最後の一人を決めるアナウンスをしようとした際、私達は提案したの。『ここにいる人全員生きて帰さないと、後であなた方全員が死ぬことになるわよ』ってね」
秋子の表情がだんだん暗い物に変わっていき、それにつれ声のトーンも徐々に低くなっていった。琴音はそれを見ないように顔をうつむけたが、恐怖はどんどん増すばかりだ。
「あのとき主催側に付いた人は、柏木耕一さんのお父様だったり、遠野家の御当主だったりと、明らかに人外という方々ばかりでしたわ。まぁ、相手も確実に殺さなければならなくなりますから」
「高槻さんは今回能力保持者を集めすぎたわ。そして、その殆どの人はこの馬鹿げた殺し合いにピリオドをうちたがってる。今回はゲームに乗ってしまった人が少なすぎて、彼らも必死ね」
琴音は、秋子の話したことは全然理解出来なかった。だけど、封印されている超能力が使えるようになるかもしれないという事と、それによって回りに多大な影響が出そうだと言うことは理解できた。
「秋子さん。質問いいですか？」
琴音は今にも震えそうな声をどうにか平静に保ちながら語りかける。秋子はいつもの微笑を絶やさない。
「前回秋子さんが生き残った方法って、何なのですか？」
秋子の表情が一瞬だけ固まった。琴音はそれを見ていぶかしんだ表情を出してしまった。秋子はそんな琴音を見やり、微笑を浮かべながら語りはじめた。

「高槻さんも粋な計らいをしてくださる物ね。私に鞘の付いている長刀を渡して下さるのだから——」
秋子の言葉を耳にしながら琴音はその場で失神してしまった。

162 （無題）

御堂（と、あゆとぴろ）は、湖を発見した。
一般人ならまずこう考えるだろう「水を飲もう」と。
だが、御堂は警戒していた。
死亡者の発表で、確かに（八番）岩切花枝の名が呼ばれていた……戦場では情報の錯乱はよくあることだ。もし、あの放送が嘘……あるいは誤報であったとしたら……
「おじさん、湖だよ……水浴びしてきていいかな？」

かに人外が数人居ましたけど」
淡々と語る秋子から琴音は完全に視線を逸らし、震える足をどうにか押さえ込む。
（ここで震えちゃだめ、震えちゃだめ。恐怖に負けたら生き残れない——）
「大丈夫よ琴音ちゃん。私を裏切っても、名雪を裏切らない限り、あなたは私が守るから。そのかわり——」
秋子がいままで押し殺していた殺気をいきなり解放する。琴音は無理矢理押さえていた震えを止めるどころか、椅子から落ちて腰を抜かしてしまった。失禁しなかったのは、琴音の恐怖感が麻痺寸前だったからであろう。
「名雪を手に掛けたときは、本当の恐怖を教えてあげます」
琴音は秋子の言葉にただ頷くことしか出来なかった。秋子はすでに殺気を押さえて、いつもの平静さといつもの表情に戻っている。

「駄目だ」
「え？　だって……」
「駄目だって言ってんだろ！」
「うぐぅ……ひどいよぉ……」
　御堂は湖畔をつたって迂回することにした。

「おい、ガキ」
「うぐぅ……ガキじゃないもん、あゆだもん」
「……ったく、あゆ」
「なに？」
「水浴び……してきてもいいぞ」
「えっ、ホントに？」
　あゆの顔に華が咲く。
「あぁ、その邪魔くさい猫も連れて行け、のどが渇いてるみたいだからな」
「うん！」
　何故、御堂はあゆが水辺に近付くことを許したのか。それは、あの放送が真実であるという『確証』が得られたからである。
「岩切……」
　御堂は正直驚いていた。
『一体、どんなバケモンがいやがるんだ？』
　水中では鬼神の如き強さを誇る岩切が……湖から引きずり出され、殺された。信じ難い事実であった。彼女は、肋骨を数本折られ、首を折られて絶命していた。顔は恐怖で目をカッと見開いていた。
　御堂は亡骸を埋葬し、黙とうを捧げた。
「……同じ時代を生きてきた奴が、また一人減ったな……」
　その言葉は、彼の孤独感を現していた。
　御堂は何者かが近づいてくる気配を感じていた。
『殺気はない……この気配……強化兵か!?』
　彼の身が震えた、武者震いだ。
　――――坂神!!
「残念ね、坂神蝉丸じゃなくって」
　声の主は（六番）石原麗子だった。

「貴様は、安宅みや！」
「誰なの？　私はそんな名前じゃないわよ」
御堂は一度、彼女と一戦交えた事があった。結果は惨敗。手も足も出ず、片腕を切り落とされた。
「俺を殺すのか？」
「あなたには興味無いわ、あなたが私の邪魔さえしなければ見逃してあげる」
「このアマ〜、ふざけるな！　何が目的だ！」
「そうね……私の目的は主催者を殺し、この島から脱出すること。あなたは？」
「俺か？　俺は坂神蝉丸を消す、これが最大の目標だ」
麗子が素直に問に答えたので、彼もめずらしく正直に答えた。
「ふふっ、あなた、坂神蝉丸を殺してどうするの？」
「完全体と崇められてきたあいつを殺し、俺こそが完全体であることを証明してやるのさ」
「へぇ、誰に証明するの？」
「俺を、不要だと言いやがった奴らにだ！」
ややあって、麗子は……ふぅ、とため息をついて言った。
「軍部は滅んだわ、そんなことしても誰もあなたを評価しないわよ？」
「うるさいっ！　黙れ！」
御堂は銃を麗子へ突きつけた。……が、麗子は眉ひとつ動かさない。
「軍部はあなたを必要としなかった……でも今はあなたを必要としてくれる人がいるじゃない」
そう言い残すと、彼女は御堂の前から立ち去った。
「俺を必要としてくれる人？　……誰だ？」
御堂は先程の麗子の言葉の意味がよく分からなかった。
彼はあゆが水浴びをしている方へ歩み寄った。
「おい、あゆ！　水浴びはもうお終いだ！」
「おじさん、のぞかないでよぉ！」

「わっ！　こ、こら！　水はやめろ！」
「あ、あとね、こんなの拾ったんだよ」
「……な、何を拾ったんだ？」
「だから見ちゃ駄目だよぉ！」
「わわっ！　見なけりゃ確認できねぇだろ⁉」
あゆの『女性らしい』一面を見てしまい、動揺を隠せない御堂であった。

163　そして死闘のはじまり

——私は、見知らぬあなたより、ここにいる我が子のほうが大切なの……
水瀬秋子という女を思い出す。
当然のことだ。私も見ず知らずの誰かなんて知ったことじゃない。
「あの人は由綺さんを護ると言ってくれましたが……」
ゲームの終わりは見えない……由綺さんの生をおびやかす敵である限り、いずれ闘うことになるのだろうか。
先の放送でも由綺さんの名前はみられなかった。あの時、もし由綺さんの名前が出ていたら私はどうしたのだろう。
——決まっている、皆殺し。命尽きるまで。
それこそ私がボロクズのように殺したあの男のように。由綺さんは私の生きがい。由綺さんこそが私のすべて。
「嫌ですわ。そんなこと……」
必ず由綺さんを保護する、その時からが私の戦いの始まりだから。
調子が出ないわね……まだ一人も殺していない。相手を追い詰める。そこからが上手く進まない。このボウガンが狂ってるのかしら？　……そんなことは無い。明らかに腕がなまっている。こんなんじゃいつ殺されてもしかたないわね……。

御堂を見逃したのは失敗だったかしら……あの距離なら仕留められたのに。
そろそろ次の目標といきたいところね。まだ充分人数は残ってるのだから。

私の敵……弓……あるいはボウガンを持つ奴……。情報量は決して多くない。だけど、こうして一人ずつ追い詰めていけばいつか必ず会えるはずよ。
もしそいつが既に別の奴に殺られていたら――どうするのかしら。
その時は潔く私も死ねばいい。
……私は嘘を言ってるわね。私もしょせん人殺し。この憎悪と、私の罪は消えることは無い。だって私はこのゲームにもう乗ってしまったのだから……。
濡れた朝露が弥生の靴を濡らす。
うっそうと茂る森の中はどこか気味悪く感じられる。

「由綺さんにはこのような所を歩いて欲しくはないものですね」
さらに奥に進む。

まだ暗い森を、すべるように進む。その動きに無駄は感じられない。石原麗子は、暗殺者さながらの今の境遇を楽しんでいた。
(この辺で一人殺しておかないとシャクね……)
眼鏡の奥がキラリと光る。だが、麗子は油断していた。とりもどせない勘のせいかもしれない。肉眼で確認できるまで、目標達の気配を感じとれなかったのだから。

チャキッ……
雪見は常にライフルを構え、臨戦体勢を整えながら森の中を進んでいく。
「さっきから登ったり降りたりばっかりね……」
うんざりしたように雪見がひとりごちる。平坦な

森の中、だが、いつしか急な斜面を登らされるはめになっていた。今更引き返すのもばかばかしい。
「先に進むわよ」
額の汗を拭う。弱音なんて吐いてはいられない状況だ。

少しだけ斜面がなだらかになった森……いや、山の中腹。そこへ自然と足が運ぶのは偶然でなく、人間の本能としてはそれほどめずらしくはなかったのかもしれない。
一瞬の時が流れた。
「――――!」
「――――!」
「………!?」
二人、同時に口を開く。
「まさか、ここまで気付かないとは……ダメね」
「見つけた……ボウガン……あなたが……」
ジリッ……地面をする音。
（……ここでやる気――!?）
わずかに遅れて弥生。その場の空気が変わるまでそれほど時間はかからなかった。
武器を持つ手はまだあがらない。それぞれ距離は七、八メートル……正三角形型にお互いの位置。同時に二人を相手にするには誰もが厳しすぎた。
バッ!!
なにがきっかけだったのだろうか。恐怖がのそりと首をもたげた。刹那、三人はほぼ同時に三方向へと散った。お互いの姿が木々の裏にかすむ。
そして銃声。風を切る音。
硝煙の匂いが戦いの始まりの合図だった。

164　似たもの同士？

「……」
「……」
「……」

その人影は青年だった。顔は憔悴しきっていたが、瞳には明らかな意志を持っていた。そして、右手には……水鉄砲？
「誰、あなた。取込み中なんだけど？」
突然の闖入者にマナは冷たく言い放った。
「すまない。三つ編みで大人しそうな女の子を探している。姿、見かけなかったか？」
「随分と礼儀がなってないじゃない。ともかく見かけなかったわよ。あなたは？」
きよみに向かい、話を振った。
「知らないわ。あなたの女？」
こちらもさらっと言い捨てる。
「いや……ありがとう、邪魔したな」
青年――祐一はそれだけ確認すると、二人の前からすぐに姿を消した。
しばしの沈黙。
『何、今の』
二人同時に口を開いた。
「……」
「……」
『ふぅ』
溜息まで同時だった。
「……」
「……」
「変なの」
先にマナが口を開く。その顔には微笑みが浮かんでいた。
「そうね……」
きよみもつられて表情を崩す。
「私はもう行くわ。せいぜい死なないように気をつけるのね」
マナは振り返り歩き出した。
「あなたもね」
きよみは逆の方向へ。始めはいがみ合っていたのに、今はもう悪い気はしなかった。

165　朝陽

「な、何なんだよ、てめえ」
　住井は突然の、男――緒方英二の登場に戸惑いを隠せないまま、右手のマシンガンを向ける。しかし銃口が震えていては、向けられた側だって恐ろしくも何ともないに決まっている。それでも住井はそうせずにはいられなかった。それが意地と呼ぶべきものだとは、住井だって解っている。
　美咲さんは、こいつのことを知っている。
　そのことが、何故かたまらなく悔しく感じられる。自分が知らない場所で笑っている美咲さんを想像する。知らない男と、知らない友達と、知らない場所で。
　そんなモヤモヤが銃となり、弾丸となる。
　男、緒方英二は、そんな住井の表情には勿論見向きもせず、その横で呆然としている美咲を見て、無表情のままに、機械が糸を紡ぐような適当さで、
「確認する。君は澤倉美咲さんだね」
「あ、――は、はい」
　そんな風に言う。突然質問をされて、美咲は訳が判らない。結局ただ意味も意図も意志もない空の返事をしただけだが、しかし英二にとってはそれだけで充分だった。確認作業なのであるから。
「――ここ、島の端から丁度反対側の方の丘にあるマンション群で、知り合い数人を集めて行動している。藤井冬弥君、七瀬彰君、森川由綺、河島はるかさん、――それに、俺と緒方理奈、篠塚弥生さんといった、まあ、ある程度面識がある人間でね」
　何とかこのゲームを乗り切るために、な。
　住井の、美咲の、突き刺すような直視をかわしながら、英二は真っ直ぐにそう言った。美咲の盾はそれだけで貫かれたし、住井には英二の言葉に現れた名前に、ただ苛立たしげにいるばかり。
「皆心配している。理奈と君だけが未だに集まって

いなかったからな。だがまあ、これで後はうちの妹だけだ」
英二は笑いながらそう言う。小憎らしいくらいに落ち着いた物腰が、ひたすらに住井を苛立たせる。
理奈と君だけが。
その言葉に、確かにびくりと美咲が震えるのが住井の目には見えた。そして当然それは錯覚でもなんでもない。美咲の心の中には迷いと安堵と解放、様々なものがひしめいていた。坩堝のように混ざり合ったそれは、しかし太陽の光より遥かに眩いものだった。自分以外はいるのだ。藤井冬弥も、森川由綺も、河島はるかも、七瀬彰も。
住井は唖然として、そんな美咲の様子と緒方英二の表情とを見つめていたが、やがて事態の向いている地平に気づく。自分が完全に蚊帳の外に追いやられ、今の自分の心の平衡を保つ唯一の存在である美咲が遠くにしか見えなくなる地平に、今は事態が向いている。
「ふ、ふざけんなっ！　何言ってんだ、てめえっ」
声を荒げる。血に飢えた狼のように、こちらに意識を向けろ、と吠える。しかし、そうするまで、緒方英二は自分の存在に気付いていなかったかのようにさえ見えた。
英二はゆっくりと住井に視線を遣る。その鋭い眼差しは、住井の攻撃を挫くのに充分な効果を発揮する。止めは、無関心な言葉一つ。
「——君は誰だ？　少年」
この澤倉美咲さんの恋人か？　含み笑いを浮かべながらそう続ける。本心から言っている訳ではない、ただからかう為にそう言ってるに決まっている。そのこちらを見遣る視線には、不快感しか感じない。
その不快感に抗うように、
「……ふざけんな」
かちゃり、と、もう一度銃口を男の顔面に向けた。それでも、腕の震えは隠せなかった。だからこそ住井は全力で虚勢を張る。未だ薄ら笑いを浮かべる緒

方英二、そして、自分の横で、自分のやっている事が信じられない、とばかりに大きく目を見開いている澤倉美咲。
「オレが、この人を護るんだよ。大体、いきなりこんな、しゃしゃり出てきて、どこそこに人が集まっている、なんて信じられるかよ！　あんたが敵じゃないなんて言い切れない。その余裕かまして突っ込んだポケットん中に、あんたが武器を持ってないとはいえねえだろうが！」
苛立ちのままそう言い放つ。
美咲は呆然と、そう言い放った少年の顔を眺めることしか出来ない。彼の決意の質量が、ここまで大きなものだとは思っていなかったのだ。美咲は自分の手を引いて歩いていたこの陽気な少年が、いかに大きな重圧に潰されそうだったか、それを、ここにきてようやく理解するに至った。
それでも英二はくつくつと笑う。
「若いな、少年」
苛立たしい。住井は深層からの叫びを声にする。
「バカにするなっ！　もう一回言うぞ、――オレは、あんたが、信頼できないんだよっ！」
「なら、これでどうだ？」
住井の言葉で、英二から笑みが消えた。
住井の虚勢はそれで、やっとすべて砕かれた。
自分とこの男の歳の差は、恐らく十くらいなのだと思う。その十が圧倒的な差なのだ。住井は己が手の震えをようやく受け入れ、ぎゅう、とそれを握り潰す。
英二が上着のポケットから手を出すと、そこには小さな刃のナイフがあった。あれが英二の支給品なのだろうか、それともあれは単なる私物か、
どちらでも関係がない。
緒方英二はとにかく、壊れた玩具を捨てるようにその武器を海に放った。
何をやったかよく解らなかった。
「何、考えてんだ、あんた」

住井は、唖然とした目で、その金属の刃物がぽちゃり、と音を立てて、海深くに沈んでいくのを追った。美咲も同じように追う、ただナイフを放った英二だけが遠くを見ている。
「これで、信じてもらえるか？」
にこりと笑う。けれど、目は欠片ほども笑っていない。真剣そのものの眼差しで住井の心のバランスを崩す。もう一突きすればきっと彼は落ちていくだろう。
「——そんな事で、信じられるかっ！　まだ、他に、武器を持ってないとは限らないだろうが！」
住井は崩れたバランスで、それでも必死に反論する。けれど明らかに語調は弱くなっていた。英二は真っ直ぐに朝陽を見ている。
住井の負けだった。
負け犬が言葉を吐く。
「——たとえ、あんたが敵じゃないとしてもだ。今、武器、捨てたんだろう？　武器も無しに、美咲さんを護る事は出来ないだろうが」
住井は、少し開き直った目をしてそう言う。全く矛盾した発言だと自分でも気づいている、けれども虚勢とはそういうものだろう、住井は思う。
そうさ、オレが美咲さんを護るんだ。考えなしに武器を放るような奴に美咲さんを預けられるものか。
「君はいったいオレがどうしたら満足なのかな？」
英二は苦笑する。しかし、苦笑しながら。歯を食いしばって見つめてくる住井の視線に対し、真剣な顔をする。それは男が男を見るときの顔だった。必死になった男を、必死になっている男が、真っ向から認めたということなのだろう。
「良い顔だ。良い目をしているな、少年」
英二は、子供を諭すように、あるいは、一国の王様を説得するかのように、ぽつぽつと話し出す。
「——だが、一つ聞きたい。君にも訊きたい。こうやって彼女を連れ回している事が、彼女にとって本当に安全と言えるのか？　二人で行動していても目

は四つしかない。背後から、あるいは側方から攻撃があって、それに咄嗟に反応できるか？　たかだかマシンガン一丁で、彼女が絶対に傷つかないと言えるのか？」
英二から住井への、実質初めての言葉は、だからひどくずしりと腹に沈む。
――それは、そうなのだ。
絶対に守り切れる保証はない。美咲さんを傷つけないために、自分が全力を尽くしても、高々十七のガキである自分が全力を尽くしても。
彼女は傷ついてしまうかもしれない。
彼女は死んでしまうのかもしれない。
彼女を死なせてしまうかもしれない。
だけど、それでも、
「それは、あんただって、一緒だろう」
一緒な訳がない。住井にだって解る。自分は無力で、きっと緒方英二はマシンガンを持つ自分よりずっとずっと賢くて、強い。賢さはそれだけで武器だ、判断力はそれだけで盾だ。
「その問いに答えようか？　多人数で行動すれば、間違いなく、二人で行動するよりは安全だ。更に言えば、集合場所には他に多く武器がある」
一つの言葉だって返せなかった。
「別に君に単独行動をしろと言っているんじゃない。君もなかなか勇敢そうで、見どころがある少年だ。良ければ一緒に行動しようとも思う」
一つの言葉だって返せない住井は、それでも目を閉じながら必死に反論を考える。しかし、その必死の思考はやがて諦めに変わっていく。
判ってる、判ってるんだ。
美咲さんの安全を考えるなら、そうして多くの人間で行動した方がいいんだってことくらい。そうさ。二人っきりで行動しようなんて言うのはエゴじゃないか。二人きりでいる意味なんて、俺が彼女を口説くため、それ以外にないだろう？
しかし、それでも住井の意地は、

「その瞬間」まで、
けして美咲を離そうとしなかったのだと思う。
「自分の知らないところにいた」美咲さんの姿なんて、自分は見たくなかったのだから。
けれど、その瞬間は来た。
——住井はふと、横目で、美咲を見た。
美咲はどんな顔をしているだろう、こうやって言葉を交し合うオレと緒方英二の姿をどんな顔をしてみつめているだろう。
ああ、見なければ良かった。
美咲さんがまた泣いている顔が見えた。
決まった。
美咲さん。——住井は、そう呟いた。

「——判ったよ」
「護君？」
「うん。この人と行動しよう。本当に信頼できるかは、オレには判らないけどさ」
住井は笑う。腹痛を抱えているかのように、怪我の痛みを我慢しているかのように、上級生に苛められても負けない男の子のように。
それは比喩でもなんでもなく、悲しい事を我慢する、強い子供の笑顔だった。
「そう、ね」
思う。意地っ張りで無鉄砲な彼がこのような判断を下すのは、きっとすごくつらいだったろう、と。
自分を守ると呟いて、必死に自分の手を引いて走ってきた彼が、大人の圧力に負けたくないと、そう強く願っていた彼が。
頬が濡れていた。自分はいつから泣いていたのだろう。濡れた自分の頬を拭う。多分真っ赤になっている目もごしごしと拭うと、住井に優しく微笑みかけ、頷いた。住井はもう一度笑う。
英二はそんな自分たちの様子を満足そうに見ながら小さく溜息を吐いている。

住井は思う。この人も自分と同じように、必死だったに決まっているのだ。こんな大人だって死にたくないに決まっていて、自分が向けた銃口に小便を漏らすほどビビっていた筈なのに、それでも生き残りたくて、だから武器を捨て、白旗をあげた。プライドなど何の足しにもならない。泥にまみれた必死の説得こそが、高々高校生のガキと同じ高さまで目線を落として、ガキを諭すことこそが、この島で生き残るための一番の手段だと認めて。
本当に強いというのはこういうことなのだろう。
英二が明るい声で言う。
「よし、なら決まりだ。早速行こう、皆待ってる」
美咲は頷いて英二の方を向く。英二も森の側を向き、隠れ家のある方に向けて歩き出す。
けれど、
「オレは行かないよ」
住井は砂浜の上に凛と立ち、殆ど堂々と、そう言った。英二は住井を見る。何も言わない。何も言うつもりが無いのかもしれない。自分の迷いの無い目を見れば、聡明な英二のことだ、事情を知らなくたって解ってくれるだろう。
だから疑問の声を投げかけたのは美咲さんだった。
「護、君？」
「正確には、後から行く、か」
住井は黙りこくった美咲を尻目に話を続ける。真っ直ぐ、緒方英二に向けて。
「――オレの知り合いに、北川潤っていうのがいる。そいつはコンピューターをかなり触れるんだ。で、実はオレは、違法の携帯電話を持ってる。衛星経由の電話で、こんな島でも使えるような、改造型のね。そして、この鞄の中には美咲さんの支給品のノーパソが入ってる。なあ、緒方さん。解るよな？」
「ああ、解る」
「上手くすれば、――この島の脱出のための切り札になるかもしれないんだ。だから、オレはそいつを探して、連れてくる」

意地ではなかった。
生き残る為に。彼らと、美咲さんと生き残って、平和な場所で一緒に手を繋いで歩くために。
これが、
住井護という十七のガキに出来る最善なのだ。
そう認めて。

美咲は何も言わない。言えなかった。住井はわがままでそういう事を言っているんじゃないと解っているからだ。
美咲の代わりに、英二はゆっくりと頷く。
「判った。——君はマシンガンも持ってるし、大丈夫だろう。この娘は俺が責任もって連れて行く」
その言葉に美咲は慌てる、住井は直情的な性格だ、無茶をして怪我をしてしまうかも。こうと決めたら真っ直ぐ突き進んでしまう、その性質は、場合によっては貴重かも知れないが、今は危険なだけだった。
「待って、それならわたしも護君に付いて——」

だから美咲は言おうとした、自分も付いていくと。
——が、住井はその言葉を遮って。
「大丈夫だよ美咲さん。どうせすぐ逢えるんだからさ。そいつは、正直まだ完全には信頼できないけど、きっと美咲さん一人くらい守れるだろうと思うよ。その隠れ家は、きっと今よりずっと安全な筈だし」
「護君、そうじゃなくて、わたしは」
住井は美咲の意図を理解したのだろう。薄く微笑んで、美咲の不安げな眼差しを受け止める。
「大丈夫だって。オレにはマシンガンがあるんだ」
「でも」
「大丈夫だよ」
住井は笑って、もう一度言った。
大丈夫だよ。
美咲は、今度こそ何も言えなくなってしまった。
「それじゃあ隠れ家の場所は判ったな、少年」
英二の説明を受けて、大体の位置を頭に叩き込ん

だ住井は頷く。森の中を突っ切っていっても外回りで行っても、意外とすぐに到達できる距離だった。
「責任もって送り届けるから、君も気をつけてな」
「ああ」
住井はぶっきらぼうに答え、英二はそれに笑顔で返す。すらりと自分の前に差し出された英二の右手を、しかし住井は笑って無視、代わりに小さな声で、頼むぜ、そう言った。
「任せろ、少年」
住井は満足そうに頷く。
どうせすぐ逢えるのだ。今生の別れというわけでもないのだから、何を大袈裟にやる必要があろう。住井が潔く背を向けて、歩き出そうとした、
その時。
「護君」
砂の上、歩み寄る音が聞こえる。
「え？」
――その瞬間、頬に、柔らかなものが触れた。甘い匂いが、住井の鼻腔を衝いた。柔らかな髪が頬に触れる。今、自分と美咲さんの距離は無い。世界中の誰よりも近いところにある。
それは、自分にとってあまりに新鮮な感覚だった。実は住井護十七歳、生まれて初めてのキスである。
瞬間的なキスで、時間にしても一秒にも満たなかっただろう。それでもその柔らかさはきっと、住井の一生の誇りとなるに違いない。
頬から顔を離した美咲は、可哀想な位真っ赤な顔をしていた。真っ赤な顔から声が出る。
ささやかな、
ひどくささやかな、言葉だった。
「また、朝陽、一緒に見ようね。約束だよ」
ささやかすぎて、笑いが零(こぼ)れた。
そんなの、幾らでも見られるに決まっているのに。
朝なんて毎日やってくるのに。
「わたしも、あなたの力になるから」
だけど、

すごく、嬉しかった。
――勇気出たよ。
住井は小さくガッツポーズを作り、こちらもまた死にそうなくらい真っ赤な顔をして、
「おう！」
と返事をする。
二人はまったくの正反対に歩みを進め始める。距離が離れてゆく。それが僅かに名残惜しい。

森の中を英二と二人で歩きながら、美咲は先程の行為を思い出した。勢いに乗っていたとはいえ、恥ずかしいことをしてしまったなあ、という、そんな思いでいっぱいだった。本当に、僅か数時間しか一緒に行動していないのだけど――自分は、あの少年に少し惹かれているのかも知れない、と思う。
放っておけない弟のよう。彼を思うと少し胸が締め付けられるような気がする。藤井冬弥や七瀬彰に向ける感情とは違う、優しい気持ちが胸に溢れている。
「なかなか大胆なことをやる子だね、君も。人前で」
自分の前を歩く緒方英二は、笑いながらそう言った。美咲は顔を赤くするしかできない。
森の中は薄暗く、多少歩きにくかったものの、それでも足元が見えるくらいには光が空から降ってきている。殆ど会話はない。藤井君や由綺ちゃんがどうしているか訊きたかったが、まあもう少しの辛抱だ、我慢しよう。
そうして結構な距離を歩いた。目的のマンション群まではあと一キロといったところだろうか。森の中は案外安全で、ここまで誰にも出会わないで来る事が出来た。きっとこのまま抜けることが出来るだろうと思う。住井に持たされたバタフライナイフも、多分使うことはないだろう。
ふと視界に光の道が開けた。もうすぐだろう。

薄暗い森の中、自分の姿さえも見えない。今の放送は何だったのだろう、一体、何だったのだろう？
　意味が浸透するまでに、相当の時間が必要だった。
　まさか、間違いのわけがないだろう。
　だとしたら、
「はるか、ちゃん？」
　——後輩。いつものんびり屋で、どこか不安定だったけれど、いつも自分のことを慕ってくれた、可愛い後輩の名前が、今、確かに、呼ばれた。
　この時間までの、死者。
「嘘、でしょ？」
　嘘だ。嘘だ、はるかちゃんが。はるかちゃんが、どうして——皆で集まっていたんじゃなかったの？　解らない、今自分の目の前を歩くひとは、嘘を吐いたのか？
　英二は振り返らない。腹から搾り出すような声で、どうしようもない絶望に満ちた声で、そう言った。
　美咲にはそれでもまだ解らない。

——その時だった。
　確かに運命が壊れる音がした。

　北川を捜しながら島を外回りに歩いていた住井は、その音を市街地が見えかかったところで聞いた。
　そこは不運な事に、マンション群から一番遠く離れた場所であるといって良かった。
　つまり、美咲と一番離れたトコロにいた。

「おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな。この時間までの死者を発表するぞ。二十六番河島はるか、五十四番高倉みどり、七十二番氷上シュン、三十二番霧島聖、五十九番月島拓也、七番猪名川由宇、四十九番新城沙織——」
　ごくり、と唾を飲む音が、前を歩く英二の方から聞こえたような気がした。美咲は状況がわからない。

「——すまない。俺は、少し嘘を吐いていた。まだ、マンションには全員集まっていなかった」
美咲は、振り返った英二の、あまりにも悲痛そうな顔を見た。こんな筈じゃなかったのだという、冷静な仮面の下に隠れた、ただの必死な一人の男の顔が、そこにあった。
「——ずっと、彼女のことも捜していた。だが、全然見つからなかったんだ。藤井君と由綺ちゃんはいる、それは本当だ。だけど、他の皆が見つからなかった。——そんな中で君を見つけたんだ。君を安心させるために、ああ言うしかなかったんだ——」
歯を食いしばるような音が聞こえたような気がする。眩暈がした。倒れこみそうになるのに必死に耐える。解っている、彼だって嘘など吐きたくはなかったのだろう。
だが、それとこれとは話が別だ！
「どうして！　どうして……皆、元気なんじゃなかったの？　どうして嘘なんてっ！」
疑惑が胸を支配する。黒い感情は美咲の不安を完全に塗りつぶした。不安は黒の排他へと変わる。
実は誰もいないんじゃないか？　誰も。もともと隠れ家なんてなくて、わたしはあなたに騙されて、それで誘き出されて殺されれ
重い音が聞こえた。腹の底から湧き上がる、狂気の声だった。
足は止まらない。
北川を捜し続けながら、しかし重たいものが住井の頭をもたげる。今の放送を聞いた住井の胸で、何か黒いものが暴れ狂う。
何だ、この胸を焼く不安は。冷たい汗が全身から溢れる。何か取り返しのつかないものが胸へ向けて垂れ落ちていく。
今の死者発表に、何か問題があったのか？
歩みを止めないまま、住井は考える。

思い至る。
河島、はるか？

赤が弾けた。
美咲の胸の辺りから、真っ赤なものが弾ける。騙されたことからきた怒りと眩暈は一瞬で消えた。代わりに、無力感が全身を包む。立っていられなかった。肌の感覚だけが敏感で、それ以外の器官はすべて壊れてしまったかのようだった。
ゆっくりと、ゆっくりと、
前のめりに、美咲は倒れた。
拳銃で撃たれた。赤くなった思考がそう無理やり理解させる。
——やっぱり、わたしは、騙されてたんだ。
美咲の、痛みでおかしくなった思考の中で、その理解だけが燦燦と眩しかった。他にはもう、何も考えられなかった。胸から溢れる熱が自分の体温で、どろりとした感覚で零（こぼ）れ出すものが自分の血液で、頬をぐちゃぐちゃ濡らしているのは、自分の涙で。
誰かと、緒方英二は手を組んで、わたしたちを、殺そうと、してたんだ。
ああ、わたしは、すごく、馬鹿だった。護君、わたしたち、馬鹿だったね。
ずっと、手をつないで、一緒にいれば良かったね。
「だ、誰だ、貴様っ！　やめろっ！」
いいよ、緒方さん、もう、そんな演技しなくても。
わたしは、騙されたんだ。もう、判ってる。
突然の襲撃者に驚く、そんな演技なんて、いらないです。無様な、だけです。
耳の遠くでもう一度音が聞こえた。腹の底から焼き尽くされるような燻った煙の匂いがした。
「くっ！　貴様っ」
美咲は重い頭を上げて、英二の方を見た。
たぶんそれが最後の力だった。
英二は足から血を流している。なんて痛そうなんだろう。苦痛に顔を歪め、自分が見えない場所をあ

の強い眼差しで睨み付ける。
おかしなことに、演技には見えなかった。
ああ、本当に、誰かに襲撃されたのかも、そうだとしたら、自分は、なんて、運が悪いのだろう。
緒方英二は足を引きずりながら、血を流しながら、倒れるように森の影に消える。
ああ。
わたしは、置いて行かれた。

そうだ、
住井はようやく思い至る。自分が抱いた違和感の正体はその名前だ。
確か河島はるかという人は、緒方英二らと共に行動しているはずではなかったか？　そう、確かに緒方英二はそう言った筈だ。なのに、河島はるかは今、確かに死んだと宣告された。
ならば、そもそもの前提が崩れ去る。
隠れ家などないのかも知れない。

「――ッ！」
住井の心は破裂しそうになる。自分は今最悪の手を打ってしまったのかも知れない。大逆転に至るまでは死んでも悪手は打てなかったのに。
騙されたかも知れない。
あの男の懸命の演技に自分はあっさりと心を許して、結果として、敵であるあいつに、美咲さんの身を委ねてしまったのかも知れない。

男――巳間良祐（九十三番）は、苦虫を潰したような顔をして、目の前の娘を見た。だが、潰したものは苦虫どころではない。口の中に酸っぱい罪悪感が広がる。俺は、この娘の心臓を打ち抜いて、そう、殺してしまった。
殺さなければ殺されるのだ。そう言い聞かせても、罪悪感は消える様子はまるでない。これほどまでに酷いとは思わなかった。
あの最初の放送で、高槻の声により、殺すべき五

人の名前が呼ばれた。そして、自分もまたその中に入っていた。自分には他の四人と違い、特別な力など無い。ただ、与えられたこの銃だけが命綱なのだ。自分の命を狙う人間は少なからずいる筈だ、そう、殺さなければ自分たちは脱出も何も無く殺される、そう思っている人間は多くいるに決まっているのだから。更に自分は弱い。他の四人に比べて圧倒的に。
だから今、下手をしたら、自分こそが島の中で最も狙われるべき存在なのだ。
俺は、誰かを殺して生き残らなければならないのだ。この銃で、容赦なく、無慈悲に。こんなところで死にたくはない。
だからといって、こんな小さなナイフしか持たなかった女を殺すなど、それこそ狂気の沙汰だった。
高槻。――お前は、俺を狂わせたいのか。
何故こんなことをさせるんだ！
俺は、このような女を――妹と然程変わらない年齢の女を殺したのだ。ぼんやりとした思考のままに近付いて顔を覗く、本当にまだ若い娘だった。胸から夥しい血を流し、殆ど即死だろう。
ああ、罪悪感で、胸が、壊れる。
畜生――高槻、これ以上俺を狂わせるな！
必ず、貴様を殺してやる！
「ぁ…、ひ、………った、ね」
声が、した。焼けるような罪悪感の地獄の釜で震える良祐をこちらに引き戻したのは、女の、蚊が飛ぶような掠れ声だった。
彼女はまだ死んでいなかった。
何事か、言葉にならない言葉を発している。良祐の耳にはそれが意味をなした言葉には聞こえない。苦しんでいる。本気で、多分彼女の人生の中で一番の苦しみに違いなかった。
思う、自分のせいで苦しんでいる。自分が彼女の脳髄を撃ち抜かなかったせいで。急所を撃ち抜いてやれなかったせいで。
――せめて、楽にしてやらなければ。

良祐の狂気は僅かに加速し始める。
先からの手の震えは止まり、照準が安定する。
良祐はもう一度、引き金を引いた。
もう一度、その白い肌に弾丸を撃ち込んだ。
身体が波打って、女は今度こそ完全に弾けた。

考えろ考えろ考えろ！　住井の足は完全に止まり、本当なら今頃対岸のマンションに到着していた筈の美咲を思う。だが、事態はそんなに悠長な訳が無い。
最悪の場合。それはあの緒方英二という男が、知り合いを一人一人おびき寄せて、殺している、という場合。
まともなように見えた彼の神経はいかれていて、緒方英二は隠れ家という名目で女を誘き出し、二人きりになったところを犯して殺す、そんな殺人鬼で、河島はるか、という女性も、同じように彼におびき寄せられて殺されたのだとしたら。
それならば、美咲は、

それ以上は考えられなかった。
「畜生っ！　オレはバカかっ？」
止まっていた足は、今まで向かっていたのと全く違う方向を向く。住井は反転し、森の中に身体を投げつける。転びそうになりながら、倒れそうになりながら、それでも駆ける。走りながら思考、思考というよりはただ思念。
美咲さん、無事でいてっ！

意識が朦朧としてきているのに、こころで言葉だけが紡がれる。
それが、死ぬっていうことなんだろうな。
死ぬんだな、もう。
結構、あっさり、やってくるんだな。
藤井君や七瀬君、由綺ちゃんに、もう一度逢いたかったな、
残念だったけど、
だけど、

色々あったな、
二十年しか生きてないけど、
忘れられないことばかりだった、
忘れられないことばかりだった。
家族にも、逢えなかったな、
ごめんね、お父さん、お母さん、
死んでしまって、ごめんね。
ああ、
もう一度、逢えたら、よかったな、
――護くん。
もう一度。
もう一度、逢いたかった。
逢いたかった。
ああ、涙が、こぼれている。
「あ…、ひ、………った、ね」
言葉にならない。かすれた声。
あいたかったね。
そういう意味ではなかった。

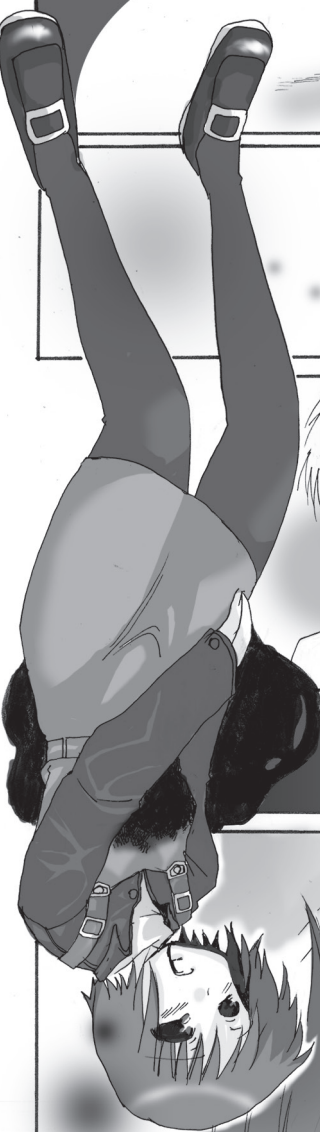
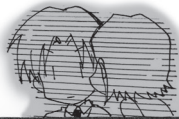
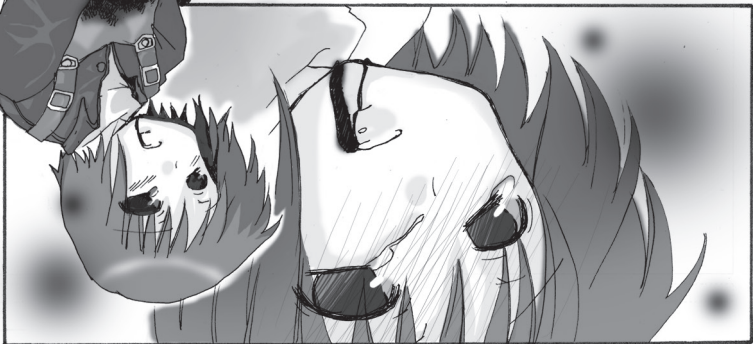
そんな言葉を口にしたいんじゃなかった。
もう一度力を振り絞って、美咲は呟いた。
――朝陽、もう一度、見たかったね。
そう呟いた声は、
どうしようもない大きな音で掻き消され、
澤倉美咲は今度こそ途切れた。

森の中を駆ける。思念はようやく思考になる。そうだ、最悪の事態が起こったという訳ではないのかもしれない。隠れ家は本当にあるけれど、しかし河島はるかだけが死んでしまうような事態が起こって。
どんな事態だ、そんな事態が起こる訳がないだろう。美咲さんはお前のドジのせいでもう死んだよ。
幾らだって考えられるさ、河島さんが情緒不安定になって、他のメンツを殺そうとして返り討ちにあったとか、敵が来襲してきて河島さんだけがやられたが他のメンツはなんとか生き残ったとか、
本当にそう思うのかよ。

当たり前だ、そうに決まってるんだ。
心からの不安が苛む声は押し潰した。当たり前だ、美咲さんが死んでいてたまるか。
――本当にそんな状況が起こっているとは住井だって心から信じているわけではない。ポジティブな思考を抱いていなければ、とても耐えられる状況ではなかったのだ。
しかし、思考は再び思念になる。
約束したんだ、
もう一度美咲さんと逢うんだって。
朝陽を見るんだって！
必ず守るんだって！
島の反対側への最短距離を、真っ暗な森の中を、住井は駆けた。
住井の耳には何も聞こえない。美咲を殺した銃声も、勿論その音でかき消された美咲の最期の言葉がどんなものだったのかも。あまりに二人の距離は離れすぎていた。あの時はあんなに近くにいたのに。
煙草一本分の距離も無いところにいたのに。
ずっと、距離の無い世界にいればよかったんだ。
間に合うわけがなかった。

四十四番　澤倉美咲　死亡

【残り68人】

《葉鍵ロワイアル　第一巻　了》

「また、朝陽、一緒に見ようね」

端書

私が葉鍵ロワイアル（以下ハカロワ）のことを知ったのは二〇〇一年の春のことでした。きっかけはもうあまり思い出せませんが、それはどこかの日記サイトか何かでした。今でもはっきりと思い出せることは、ハカロワを読み始めてから二日間ぶっつづけでディスプレイの前に座りつづけたこと。私は百人を超える登場人物たちが織り成す壮大な物語にすっかり虜になってしまいました。

私はハカロワのおもしろさを人と共感したいと思い、幾人かの友人にハカロワを読むことを薦めました。この作品はおもしろい、是非読んでみてくれと。ですが、反応は芳しくないものでした。それは、ハカロワがあまりに長編であったため。原稿用紙にして三千枚を超える量があるハカロワをパソコンのディスプレイで読み続けるのは結構骨が折れることであり、その長さを前にして読むのを断念してしまう人が多かったのです。読んだ人からの反応はわたしの期待したどおりのものだったため、ハカロワが読まれないことに対する残念感はいっそう強いものでした。

そんなある日のこと。ふと立ち寄った街の同人誌ショップにて、本格的な装丁の小説が委託販売されているのを見かけました。それを見たとき「これだっ！」と思ったのがすべての始まりです。こんな風にハカロ

ワを出版できないかな、そして今までハカロワの面白さを知らなかった人達にハカロワのことを知ってもらうことはできないかな、そう考えて当時の「ハカロワを懐かしむスレ」に書きこみをしたのが今年の夏。

それからもう三ヶ月が経ちました。いろいろ紆余曲折があったりしたものの、セルゲイ氏、三浦氏をはじめとする多数の協力者に恵まれたことや、この企画を応援してくださった方々のおかげでこうして無事第一巻目を発刊することができました。皆様にはいくら感謝してもし足りません。ほんとうにありがとうございます。

最後に、この本を手に取りご購入したいただいた皆様にお礼申し上げます。無事完結した原作のハカロワとは異なり、この紙媒体化の企画は始まったばかりですが、これからもご応援いただければ幸いです。

平成十四年十一月某日
瀬戸こうへい

電子書籍化に添えて

思い返せばハカロワに出会ったのは二十年も前のこと――というのは、端書に書かれている通りです。当時はＷＥＢ小説の書籍化というのは殆どありませんでした。なにせ、ＳＡＯも発表されてない頃です。そんな中、二〇〇一年の冬コミに竹箒さんから出たのが空の境界の同人書籍版。それを読んで、ハカロワもこんな風に紙の本で読んでみたいと思ったことが全ての始まりでした。

思いつきから始まったこの企画は、私の無計画さで開始早々に空中分解しそうになりますが、それを支えてくれたのがセルゲイ氏と三浦氏を始めとした当時のハカロワを支えてこられた方々でした。皆様方の協力を仰ぐことができて、なんとかハカロワ出版企画として軌道に乗ることができ、二〇〇二年一二月三〇日に第一巻を発行。そして、二〇〇四年八月一五日に最終巻である七巻の発行で書籍版が完結しました。

今ではネット小説の書籍化は普通のことになりました。小説家になろう（私も作品を置かせていただいてます）からは、毎月のように書籍化された作品が本棚の少なくないスペースを占有しています。アニメ化ですら珍しい事ではなくなりました。ハカロワ出版企画はＷＥＢ小説書籍化の歴史にも残らないくらいの小さな活動でしたが、ハカロワを書籍で残せて一人でも多くの人にハカロワの魅力を伝えることができたことは、私の中で大きな喜びとなりました。今でもときどきＴｗｉｔｔｅｒでハカロワを懐かしむつぶやきを見るとハカロワのいちファンとして嬉しくなります。ですが、その中でハカロワを読み返したいけど難しいという

声も見られました。出版から二十年近く経ち、書籍を手に入れるのは難しくなっています。本編のまとめサイトは残していただいていますが、これだけの分量をＷＥＢで読むのが大変なのは端書にも書いた通りです。
そこでこの度、ハカロワ出版企画最後の活動として電子書籍版を無償配布する事にしました。昨今『かぎなど』が新規アニメ化されたり『ＯＮＥ』がリニューアル告知されたりと新しい供給によって往年の葉鍵ファンが盛り上がっているように思います。今回のハカロワの電子書籍化がその盛り上がりの一助になれば嬉しいです。
最後に、ハカロワ関係者の皆様方、そしてこの本をダウンロードして下さったあなたに感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

令和四年七月某日
瀬戸こうへい

葉鍵ロワイアル　第一巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に

この場を借りて、お礼を申し上げます。

No.	タイトル	著者
000	ゲームスタート	L.A.R. さん
001	開戦前夜	zin さん
002	冷たい雨の少女（１）	L.A.R. さん
003	冷たい雨の少女（２）	L.A.R. さん
004	閉ざされた教室	ナナツさんだよもんさん
005	封印	名無しさん
006	親子	名無しさん
007	別地点での始まり	。さん
008	（無題）	シイ原さん
009	母と娘と	L.A.R. さん
010	つかのまの、やみ	ナナツさんだよもんさん
011	やみを追いながら	ナナツさんだよもんさん
012	風にさらわれて	L.A.R. さん
013	血	。さん
014	（無題）	シイ原さん
015	選択	真空パックさん
016	出会いと別れの一幕	L.A.R. さん
017	（無題）	名無しさん
018	覚醒	quit さん
019	音	L.A.R. さん
020	黒の交差	111 さん
021	残酷 your way	L.A.R. さん
022	（無題）	名無しさん
023	誰も死にません	。さん
024	奇妙なコンビ	いつかの書き手さん
025	刹那	L.A.R. さん
026	交叉	。さん
027	なにがなんだか	真空パックさん
028	（無題）	シイ原さん
029	（無題）	名無しさん
030	（無題）	訳あり名無しさんだよもんさん
031	（無題）	命さん
032	天沢郁未包囲網	名無しさん
033	守ることと、殺すこと	L.A.R. さん
034	（無題）	名無しさん
035	決別	名無しさん
036	（無題）	命さん
037	１／５の脅威	L.A.R. さん
038	森の出会い	111 さん
039	転機	111 さん
040	（無題）	シイ原さん
041	（無題）	名無しさん
042	休息	命さん
043	「舞と……」	名無しさん
044	姉妹	いつかの書き手さん
045	僕たちの失敗	YELLOW さん
046	妹のココロ――置き去りの選択――	L.A.R. さん
047	Only One	ナナツさんだよもんさん
048	涙	命さん
049	姉のキモチ――あやまちの選択――	L.A.R. さん

◎制作者一覧
制作協力：
Alfo、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、いつかの書き手、
独活大樹、静かなる中条、真空パック、駄っ文だ、ないしょ、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、ナナツさんだよもん、
観月、『 。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
111、５、Kyaz、MIU、NBC、命、感想スレ R の 142、
葵原てぃー、久々野　彰、シイ原、名無し達の挽歌、
遥か昔の書き手、七連装ビッグマグナム、暇人、日向葵、
箕崎、祐一＆浩平、林檎、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、彗夜、
ダンディ、名無し cd、名無しさんなんだよ、
にいむらたくみ、花と名無したん、ヘタ霊、赤目、
名剣らっちー、訳あり名無しさんだよもん、
旧データサイト管理人各氏、
　　そして全ての名無しさんと読者の皆様

（アルファベット〜アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（１）
二〇〇二年　一二月三〇日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：秋★枝
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

巻末付録
登場人物紹介

掲載した紹介文の内容は、原典にあたるゲームにおいてのものです

ＭＯＯＮ.

三番　天沢　郁未：主人公。常に冷静沈着。謎の死を遂げた母の真相を探るため宗教団体ＦＡＲＧＯに潜入する。

九十二番　巳間　晴香：施設に潜入した時、郁未と出会う。冷静ではっきりした性格だが、時として感情的になることも。

六十六番　名倉　由依：姉の消息を追って施設に潜入し、郁未たちと出会う。まだ幼さも残るが強い意志を秘めた少女。

二十二番　鹿沼　葉子：敬虔なＦＡＲＧＯ信者。長期間施設にいるので世間の事情にとことん疎い。

六十七番　名倉　友里：由依の姉。不可視の力を手に入れるためＦＡＲＧＯに入信した。

四番　天沢　未夜子：郁未の実母。ＦＡＲＧＯに入信していた。娘を想い施設から帰ってくるが謎の死を遂げる。

九十三番　巳間　良祐：晴香の兄。頑なな性格で自分の信じている道を突き進む。晴香の安否を気遣うなど妹想いの性格。

四十三番　少年：名も無き少年。いつも飄々としていて、時折人を見透かした言動をすることがある。不可視の力に関係している。

高槻
ＦＡＲＧＯ研究員。しかし信仰心は皆無である。人道に外れた行為でも平気で行なえる外道者。

ＯＮＥ～輝く季節へ～

十四番　折原　浩平：主人公。くだらないことに一生懸命になる性格。幼い日の盟約から永遠の世界の扉を開く。

六十五番　長森　瑞佳：浩平の幼馴染。妹を亡くし心を閉ざしていた彼を救う。お節介焼きでいつも浩平のことを心配している。

六十九番　七瀬　留美：『乙女』を目指すことを決意した少女。だが、浩平の前ではつい地が出てしまいその道は前途多難。

四十六番　椎名　繭：年の割に幼い。何かあると死んだフェレットの名前である「みゅー」と言いながら泣いてしまう。

二十八番　川名　みさき：盲目だが、それを感じさせない明るさを持つ先輩。その笑顔の裏には悲しみを乗り越えた強さがある。

三十九番　上月　澪：言葉の喋れない少女。スケッチブックに文字を書いて会話する。健気な性格で少々ドジなところも。

四十三番　里村　茜：浩平のクラスメート。過去に幼馴染が永遠の世界に行って以来、雨の日の公園で彼を待ち続ける。

九十九番　柚木　詩子：活発な性格で、初対面の相手でも物怖じしない。時々奇抜な行動に走る時がある。茜の親友。

七十五番　広瀬　真希：転校してきた七瀬が猫を被りつづけることに苛立ちを覚え、いじめの対象にする。

九十六番　深山　雪見：しっかりした性格で、親友であるみさきをいつもフォローをしている。澪が所属する演劇部の部長。

五十一番　住井　護：浩平の同級生で悪友。非常にノリの良い性格で、よく浩平とつるんでくだらないことをする。

七十二番　氷上　シュン：浩平と同じく永遠の世界に囚われている少年。軽音部の部室で浩平と出会い興味を持つ。

Ｋａｎｏｎ

一番　相沢　祐一：主人公。７年前に訪れたきりだった雪の町に転校してきたことにより、様々な出会いを経験する。水瀬家に居候中。

六十一番　月宮　あゆ：７年前に祐一が街角で出会った少女。たいやきを食い逃げしていたところ、偶然祐一と再会する。

九十一番　水瀬　名雪：祐一のいとこ。７年ぶりに祐一と再会する。いつでも眠たそうにしているマイペースな性格。

四十五番　沢渡　真琴：街でいきなり祐一に襲い掛かってきた記憶喪失の少女。祐一に嫌がらせをすることを日課としている。

八十六番　美坂　栞：原因不明の病気で、長期間学校を病欠している少女。無邪気な性格だが、その笑顔はどこか儚い。

二十七番　川澄　舞：夜の学校で『まもの』と呼ばれる存在を退治する少女。無口な性格で人に誤解されやすい。

三十五番　倉田　佐祐理：舞のことを何よりも大切に思っている少女。誰に対しても笑顔で接する。倉田財閥の令嬢。

九十番　水瀬　秋子：名雪の母で祐一のおばさん。寛容な性格で殆ど怒ったりしない。水瀬家を支える人物である。

八十五番　美坂　香里：栞の姉。はっきりした性格で少々キツい所もある。名雪とは無二の親友。

五番　天野　美汐：過去に辛い別れを経験した少女。真琴のことを大切に思う。寡黙な性格で少々おばさんくさい。

二十九番　北川　潤：祐一のクラスメート。いつも祐一とふざけたことばかりしているが、どこか憎めない性格をしている。

ＡＩＲ

三十三番　国崎　往人：主人公。ある夏の日に観鈴と出会い、彼女の家に居候することになる。人形を動かすことしかできない法術を使う。

二十四番　神尾　観鈴：往人が旅の途中に出会った少女。人と仲良くなると突然ひきつけを起こしてしまうため、友達を作ることができない。

三十一番　霧島　佳乃：いつも無邪気な少女。腕のバンダナを外すと魔法を使えると信じている。謎の夢遊病の症状を持つ。

六十二番　遠野　美凪：温和で内に深い母性を湛えた少女。みちるとはいつも一緒で、実の妹のように接する。

二十三番　神尾　晴子：観鈴の義母。いつか来る別れを恐れるあまり、観鈴との距離を置いていた。不器用な性格。

三十二番　霧島　聖：佳乃の姉。いつも冷静な医者だが、妹のことになると見境がなくなりとっぴな行動に出ることがある。

八十七番　みちる：いつも美凪と一緒にいる。無邪気な性格ですぐ国崎を蹴ったりする。シャボン玉を飛ばすことが好き。

五十七番　橘　敬介：観鈴の実父。晴子は妻の妹に当たる。誠実な性格だが、とある理由で観鈴を預かってもらっている。

雫 -しずく-

六十四番　長瀬　祐介：主人公。自らの世界に引きこもりがちな少年。瑠璃子と出会ったことにより毒電波の存在を知る。

六十番　月島　瑠璃子：実兄の凶状に依って狂気の世界への扉を開いた美少女。不思議な言動によって祐介を困惑させる。

四十九番　新城　沙織：祐介の同級生。非常に活発で行動的な少女で、表情が猫の目のようにくるくると変わる。バレー部所属。

二番　藍原　瑞穂：香奈子の親友で、彼女のためならどんなことでもする。内気で控えめな性格。生徒会所属。

十番　太田　香奈子：生徒会長の月島に想いを寄せるものの、彼の毒電波によって発狂させられる。生徒会所属。

五十九番　月島　拓也：毒電波に囚われた少年。祐介の学校の生徒会長。瑠璃子に対して兄妹を超えた愛情を抱く。

痕 -きずあと-

十九番　柏木　耕一：主人公。一見ぐうたらな大学生だが、いざという時には頼りになる存在。鬼の血を引く。

二十番　柏木　千鶴：四姉妹の長女。大切なものを守るためなら、他の全てのものを切る冷徹な判断力を持つ。家事が苦手。

十七番　柏木　梓：次女。男勝りの性格だが、その実、姉妹の中で一番家庭的でもある。考えるより先に行動するタイプ。

十八番　柏木　楓：三女。大人しい性格であまり言葉を喋らず、人との交流を持とうとしない。前世の記憶を持つ。

二十一番　柏木　初音：四女。控えめで優しい性格。甘えん坊だがしっかりしている。耕一をお兄ちゃんと呼んで慕う。

九十八番　柳川　祐也：県警の刑事。鬼の力を引いており、その狩猟者としての本能に身を任せる。

ToHeart

七十七番　藤田　浩之：主人公。めんどくさがりでぶっきらぼうな性格だが、何事もやれば出来るという才能を持つ。

二十五番　神岸　あかり：浩之の幼馴染。幼いころから浩之に想いを寄せている。何事にも控えめな性格である。

六十三番　長岡　志保：おしゃべりかつ行動的で、常に誰かのゴシップ情報を握っているが、大概はデマというお騒がせ娘。

七十八番　保科　智子：浩之のクラスの委員長。関西からの転校生。新しい環境に馴染めずクラスに溶け込めないでいた。

三十七番　来栖川　芹香：来栖川グループの令嬢で、趣味はオカルト研究。おそろしく無口で、独特の雰囲気を持つ。

三十六番　来栖川　綾香：芹香の妹。姉とは対照的に、活発でさっぱりした性格。異種格闘技のチャンピオン。

七十四番　姫川　琴音：超能力者。自分の能力は不幸を呼ぶものと信じていたため、周りから疎外されていた。内気な性格。

九十四番　宮内　レミィ：日系ハーフ。天真爛漫でハイテンションの持ち主。弓矢を持つと人が変わる。

八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ：メイドロボ。可能な限り人間に近いように、と作られ、ロボットなのにおっちょこちょいである。

五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ：マルチと同時期に開発された。サテライトシステム等も備え、純粋なメイドロボとしての性能は最高。

四十二番　佐藤　雅史：浩之とあかりの幼馴染。サッカー部のエースで、女生徒からの人気は高い。

八十一番　松原　葵：綾香に憧れ修行する格闘家。何事にも一生懸命な性格で、常に努力を惜しまない。

七十三番　雛山　理緒：いつも一生懸命だが、大抵は失敗してしまう。家の都合のためバイトをして家計を支えている。

WHITE ALBUM

七十六番　藤井　冬弥：主人公。夕凪大学在籍の普通な学生。由綺と高校（蛍ヶ崎学園）時代から付き合っている。

九十七番　森川　由綺：新鋭人気アイドル。街中で会っても判らないくらいの普通の少女だが、その庶民的な感じが受けている。

十三番　緒方　理奈：実力と実績のあるトップアイドル。だが、その人気を鼻にかける風でもないさっぱりとした性格。

四十四番　澤倉　美咲：冬弥の先輩。控えめな性格で、皆の優しいお姉さん的な存在である。読書をするのが趣味。

二十六番　河島　はるか：きまぐれな性格。冬弥とは幼稚園以来の仲。アウトドア派だが、兄の死以来テニスをやめている。

八十八番　観月　マナ：冬弥が家庭教師のバイトで出会った少女。攻撃的で生意気な性格だが、寂しがりや。蛍ヶ崎学園在籍。

四十七番　篠塚　弥生：由綺のマネージャー。冷徹な性格で、恐ろしく正確な仕事ぶりである。常に由綺のことを気遣う。

十二番　緒方　英二：理奈の兄。敏腕プロデューサー。いわゆる天才で、掴み所のない性格をしている。

六十八番　七瀬　彰：冬弥の友達。のんびりした性格で、恋愛も少々奥手。美咲にあこがれている。

こみっくパーティー

五十三番　千堂　和樹：主人公。第一志望の美大に落ち無気力になっていたところ、こみパに出会い同人活動を始める。

五十五番　高瀬　瑞希：和樹とは高校からの付き合いで、言わば親友。腐れ縁と言いつつもなにかとお節介を焼きたがる。

十一番　大庭　詠美：同人界きっての大手作家。ものすごい自信家。でも漫画以外のこととなると全くダメな高校生。

七番　猪名川　由宇：関西出身の同人漫画家。詠美とはいつも衝突している犬猿の仲。人情派。実家は温泉旅館。

八十番　牧村　南：心優しいお姉さん的な性格。こみっくパーティーのスタッフで、ルール違反にはとても厳しい。

七十一番　長谷部　彩：とても物静かな性格。漫画自体は上手いが、テーマがマイナーなため売り上げは良くない。

七十番　芳賀　玲子：とても元気な性格の女子高生。大の格ゲー好きで、即売会では友人達とコスプレをしている。

五十八番　塚本　千紗：印刷所の娘。明るく元気な性格。あわてん坊でよくドジをする。両親の事をとても大切にしている。

五十六番　立川　郁美：自分の正体を隠して和樹を応援していた少女。和樹の絵に才能を見出す。重い心臓病を患っている。

四十一番　桜井　あさひ：今をときめく人気声優。だが、本当の彼女はものすごい上がり症で、台本のままに自分を演じている。

八十四番　御影　すばる：和樹と同時期に同人活動を始める。「正義

の味方」が自己の理想の姿。大影流合気術免許皆伝の腕前。

三十四番　九品仏　大志：和樹を同人誌の世界に引きずりこんだ悪友。名前の通りの志とそれを実現するための行動力を持つ。

まじかる☆アンティーク

九十五番　宮田　健太郎：主人公。突然海外に放浪の旅に出た両親の代わりに、家業の骨董屋を経営することになる。

五十番　スフィー：魔法の国グエンディーナからやってきた女性。魔力を消耗すると体が小さくなる。マイペース。

百番　リアン：スフィーの妹。姉を追ってグエンディーナからやってきた。姉と違い落ち着いた性格。メガネっ娘。

九番　江藤　結花：健太郎とは古くからの幼馴染。実家の喫茶店の手伝いをする。さっぱりとした性格。

五十四番　高倉　みどり：骨董に興味を持つ、健太郎の店のお得意様。控えめでおしとやかな性格のお嬢様。

七十九番　牧部　なつみ：あまり感情を顔に出さない、不思議な性格。魔女のハーフで「ココロ」という人格を所有している。

誰彼

四十番　坂神　蝉丸：旧日本軍の強化兵。五十年の時を経て目覚めた。寡黙で淡白な性格。身体に「仙命樹」を宿す。

八十三番　三井寺　月代：天真爛漫な性格。夏の日に海の洞窟で蝉丸と出会う。若干ながら仙命樹を保持する。

三十番　砧　夕霧：変わり者の少女。妙な嗜好の持ち主で南米ツノガエルがお気に入り。月代は昔からの遊び友達。

三十八番　桑嶋　高子：利発で物静かな性格。麗子の診療所で看護婦見習をしつつ、月代の家に泊り込みで家事を引き受けている。

六番　石原　麗子：診療所の女医。外見年齢の割に博識で、常に落ち着いている。謎めいた過去を持つ。

十五番　杜若　きよみ〈原身〉：五十年の間植物状態で眠り続けてきた少女。そのためか、どこか現実離れした印象を受ける。

十六番　杜若　きよみ〈複製身〉：きよみのクローンとして造られた。代替品としての自分に疑問を抱き、自己の存在意義に執着する。

八番　岩切　花枝：強化兵の一人。他の強化兵と違って水中での戦闘に特化している。御堂と共に蝉丸を襲う。

八十九番　御堂：強化兵。より完全体に近いとされる蝉丸に劣等感を持ち、自らの価値を証明しようと蝉丸を付け狙う。

9784193453045

1920031841813

ISBN4-07415-340-3

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅰ

もし、〇〇がバトルロワイアルの様な状況に追い込まれたなら……？

『あの作品』が一世を風靡したとき、
幾多の人間が様々に、そのシチュエーションを想像した。
しかし、その大半は定まった形を得ぬままに消えていった。
本作はその中でも、無事完結を見ることのできた奇跡的な例の一つである。

ゲームに巻き込まれるのは、Leaf&KEYの作品に登場する人物達。
その参加者数は本家バトルロワイアルの2.5倍、実に100人以上。
生き残るにはお互い殺し合わなければならないという絶望的な状況の中、
ゲームの参加者達は様々な思いを胸に、一人また一人と倒れていく……。

果たして、あなたはこの物語を最後まで見届けることができるか？

ネット上で多大なる反響を呼んだあのリレー小説が、
満を持してついに発刊！！

『これからお前達には、殺し合いをしてもらう――』